養老町埋蔵文化財調査報告書　第４集

養老町遺跡詳細分布調査報告書

養老町教育委員会
２００７年３月

巻頭図版１　上空から見た養老

序

養老町は岐阜県の南西部に位置し、養老山脈に沿って南北に12km、東は揖斐川に至るまで東西約10km の比較的平坦部の多い地域で、豊かな自然と多くの文化遺産が残る美しい町です。

特に平成８年度から平成10年度にわたって発掘調査を実施した象鼻山１号古墳は岐阜県内でも最古級の前方後方墳であることが明らかになり、東海地方の古墳の意義や広く日本の古墳時代の始まりを考えるための重要な情報を提供しています。

しかし一方で、生活の豊かさ、利便性を求めて開発が進められる中で、これらの貴重な文化遺産の保護のための営みが重要となってきております。

養老町教育委員会といたしましても、文化遺産保護のため、町内全域の詳細分布調査を実施し、遺跡地図を作成することにいたしました。文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することは、真の地域社会の発展につながるものであると考えます。

本書は平成14年度から平成18年度まで継続して実施してきた養老町遺跡詳細分布調査事業の報告書です。この報告書がより多くの方々に利用され、文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに、調査の実施及び報告書の作成にあたり、ご協力いただきました地元の方々、またご指導いただきました岐阜県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成19年３月

養老町教育委員会

教育長　**野村 浩太郎**

例　　言

1　本書は養老町教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の報告書である。

2　調査にあたっては、岐阜県教育委員会の指導のもと、後記の調査団を編成してこれを実施した。

3　本書の執筆は中島和哉（養老町教育委員会生涯学習課学芸員）、竹谷充生（養老町日々雇用職員）が行い、その分担は目次に記した。

4　遺物写真の撮影は㈱イビソクに委託した。

5　遺物整理及び本書の作成においては以下の方々にご協力を得た。

近藤景子・志知識子・竹谷充生・棚橋宏昭（敬称略）

6　本書の作成にあたっては以下の方々にご指導を賜わった。

赤塚次郎・宇野隆夫・大岡明臣・小野木学・川瀬芳廣・川地敏郎・川地三好・鬼頭　剛・笹栗　拓・田中　通・中井正幸・中島邦彦・中谷正和・長屋幸二・野村辰夫・藤田　薫・古市哲朗・細川保則・松井政信・三浦知徳・山田　清（敬称略）

7　調査記録・採集遺物は養老町教育委員会にて保管している。

8　編集は中島和哉が担当した。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は海抜高である。

2　本書掲載の遺物実測図の縮尺については明記してあるが、主なものについて一部例外はあるものの、土器・陶磁器を４分の１、石器を２分の１として統一した。

3　本書の地形分類は国土地理院1996「津島」『都市圏活断層図』に基づいて分類した。これによると上位段丘面とは海または河川の作用で形成された平坦地が約数十万年前に陸化した台地面、中位段丘面とは海または河川の作用で形成された平坦地が約十万年前～数万年前に陸化した台地面、下位段丘面とは海または河川の作用で形成された平坦地が約数万年前～数千年前に陸化した台地面、沖積低地とは数千年前から歴史時代にかけて海または河川の作用で形成された平坦地、扇状地とは河川によって形成された谷口を頂点とし平地に向かって扇状に開く半円錐の地形と定義されている。

　これに加え、養老町には山地、河川が存在するが、このうち山地に分類された地形について規模の小さいものを丘陵として区別した。本書の中では象鼻山がこれにあたる。

4　本書に用いた遺跡・遺物の時期区分については、一般的な政治史区分に準拠したが、古墳時代は７世紀前半まで、古代は７世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀後半を指している。なお、弥生時代・古墳時代の時期区分については廻間様式の成立を指標とした。おおよそ２世紀中頃であろう。

5　本書に用いた中世陶器の名称のうち、古瀬戸、瀬戸美濃、山茶碗は瓷器系陶器に包括されるものであるが、ここでは別に分類した。

6　本書の古瀬戸・瀬戸美濃・山茶碗の分類と年代観について、特に断りのないものについては藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号三重県埋蔵文化財センター、藤澤良祐2005「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』に従っている。

目　　次

第１章　はじめに　（中島和哉）

1　調査の目的 …… 1
2　調査の経過 …… 2
3　養老町の地勢と自然環境 …… 4
4　調査の方法と地区割りについて …… 5

第２章　分布調査の成果　（中島和哉）

1　日吉・室原・小畑・多芸東部地区
（1）　調査地区について …… 7
（2）　遺跡と採集遺物 …… 8
1. 象鼻山古墳群　2. 栗原九十九坊跡　3. 栗原天待遺跡　4. 日吉遺跡　5. 宇田城跡
6. 日吉西遺跡　7. 郷勺遺跡　8. 六反田遺跡　9. 室原遺跡　10. 室原東遺跡　11. 井ノ下遺跡　12. 蛇持経塚跡
（3）　遺物の散布状態とその立地
1. 日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古墳時代土師器の散布状態 …… 29
2. 日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古墳時代須恵器の散布状態 …… 30
3. 日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古代須恵器の散布状態 …… 31
4. 日吉・室原・小畑・多芸東部地区の灰釉陶器の散布状態 …… 32
5. 日吉・室原・小畑・多芸東部地区の山茶碗の散布状態 …… 32
6. 日吉・室原・小畑・多芸東部地区の瓷器系陶器の散布状態 …… 33
7. その他の遺物の散布状態 …… 33
（4）小結 …… 34

2　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区
（1）　調査地区について …… 35
（2）　遺跡と採集遺物 …… 37
1. 大墳城跡　2. 高田遺跡　3. 押越遺跡　4. 江東遺跡　5. 飯ノ木遺跡　6. 大跡遺跡
7. 仲田遺跡　8. 上之郷遺跡　9. 和田遺跡　10. 下笠遺跡
（3）　遺物の散布状態とその立地
1. 多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の古代須恵器の散布状態 …… 45
2. 多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の灰釉陶器の散布状態 …… 46
3. 多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の中世土師器の散布状態 …… 47
4. 多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の山茶碗の散布状態 …… 48
5. 多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の瓷器系陶器の散布状態 …… 49

6. その他の遺物の散布状態 ……50
（4）小結 ……51
3　養老・上多度地区
（1） 調査地区について ……51
（2） 遺跡と採集遺物 ……53
1. 沢田遺跡　2. 桜井古墳群　3. 上方古墳　4. 竜泉寺廃寺跡　5. 竜泉寺古墳　6. 喜勢遺跡　7. 喜勢古墳群　8. 戸関遺跡　9. 柏尾廃寺跡　10. 柏尾城跡　11. 柏尾1・2号古墳　12. 明徳遺跡　13. 鷲巣東遺跡　14. 白石道遺跡　15. 白石古墳　16. 千人塚古墳群　17. 京ヶ脇遺跡　18. 京ヶ脇1～3号古墳　19. 養老神社経塚跡　20. 小倉山古墳　21. 薬師山遺跡　22. 道上遺跡　23. 若宮古墳
（3） 遺物の散布状態とその立地
1. 養老・上多度地区の古墳時代土師器の散布状態 ……88
2. 養老・上多度地区の古墳時代須恵器の散布状態 ……88
3. 養老・上多度地区の古代須恵器の散布状態 ……90
4. 養老・上多度地区の灰釉陶器の散布状態 ……92
5. 養老・上多度地区の山茶碗の散布状態 ……92
6. 養老・上多度地区の瓷器系陶器の散布状態 ……92
7. その他の遺物の散布状態 ……92
（4）小結 ……96
4　池辺地区
（1） 調査地区について ……97
（2） 遺跡と採集遺物 ……98
1. 大巻薩摩工事役館跡　2. 根古地薩摩工事義歿者墓　3. 天照寺薩摩工事義歿者墓　4. 根古地城跡
（3）小結……100
5　結語 ……101

第3章　考　　察

1　遺跡の消長にみる養老町の歴史　（中島和哉）
2　測量図からみた象鼻山古墳群の構造　（中島和哉）
3　採集遺物からみた柏尾廃寺跡の形成過程と施設配置　－測量調査の成果から－　（中島和哉・竹谷充生）
4　養老町における中世前期の遺跡の様相　（竹谷充生）

第4章　おわりに　（中島和哉）

巻　頭　図　版

上空から見た養老……巻頭図版１

挿　図　目　次

関連頁

第１図　養老町の位置……1
第２図　養老町の地勢……4
第３図　調査の地区割り……6
第４図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の細別……7
第５図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の遺跡の位置……8
第６図　象鼻山全景（南東から）……8
第７図　象鼻山１号古墳からの濃尾平野の眺望……8
第８図　象鼻山古墳群の立地と構成……9
第９図　象鼻山古墳群出土・採集遺物実測図１……11
第10図　象鼻山古墳群出土・採集遺物実測図２……12
第11図　栗原九十九坊跡（北から）……13
第12図　栗原天待遺跡（東から）……14
第13図　栗原天待遺跡採集遺物実測図……14
第14図　日吉遺跡（東から）……15
第15図　日吉遺跡採集遺物実測図１……16
第16図　日吉遺跡採集遺物実測図２……17
第17図　日吉西遺跡（北東から）……19
第18図　若宮八幡神社の石仏・石塔（南から）……20
第19図　日吉西遺跡採集遺物実測図……20
第20図　郷勺遺跡（南から）……20
第21図　郷勺遺跡採集遺物実測図……21
第22図　六反田遺跡（南西から）……22
第23図　室原遺跡（北東から）……22
第24図　室原遺跡採集遺物実測図……22
第25図　室原東遺跡（西から）……23
第26図　室原東遺跡採集遺物実測図１……24
第27図　室原東遺跡採集遺物実測図２……25
第28図　井ノ下遺跡（北西から）……27
第29図　井ノ下遺跡採集遺物実測図……28
第30図　蛇持経塚跡（南から）……28

第31図　蛇持経塚跡出土柿経……29
第32図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古墳時代土師器の散布状態……29
第33図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古墳時代須恵器の散布状態……30
第34図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古代須恵器の散布状態……31
第35図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の灰釉陶器の散布状態……32
第36図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の山茶碗の散布状態……33
第37図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の瓷器系陶器の散布状態……34
第38図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の細別……36
第39図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の遺跡の位置……36
第40図　大墳城跡（北西から）……37
第41図　高田遺跡（北東から）……37
第42図　高田遺跡採集遺物実測図……37
第43図　押越遺跡（西から）……38
第44図　押越遺跡採集遺物実測図……39
第45図　江東遺跡（西から）……39
第46図　飯ノ木遺跡（北西から）……40
第47図　飯ノ木遺跡採集遺物実測図……40
第48図　大跡遺跡（南東から）……41
第49図　大跡遺跡採集遺物実測図……41
第50図　仲田遺跡（南から）……41
第51図　仲田遺跡出土・採集遺物実測図……42
第52図　上之郷遺跡（北西から）……43
第53図　上之郷遺跡採集遺物実測図……43
第54図　和田遺跡（北西から）……44
第55図　和田遺跡採集遺物実測図……44
第56図　下笠遺跡（北西から）……44
第57図　下笠遺跡北側の輪中堤（北西から）……44
第58図　下笠遺跡採集遺物実測図……45
第59図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の古代須恵器の散布状態……46
第60図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の灰釉陶器の散布状態……47
第61図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の中世土師器の散布状態……48
第62図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の山茶碗の散布状態……49
第63図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の瓷器系陶器の散布状態……50
第64図　養老・上多度地区の細別……52
第65図　養老・上多度地区の遺跡の位置……53
第66図　沢田遺跡（北東から）……53
第67図　沢田遺跡採集遺物実測図……54
第68図　桜井古墳群（南から）……54

第69図　坂尻古墳出土・桜井古墳群採集遺物実測図……55
第70図　坂尻古墳（北東から）……55
第71図　上方古墳採集須恵器……56
第72図　竜泉寺廃寺跡（南東から）……56
第73図　竜泉寺廃寺跡礎石群（北西から）……56
第74図　竜泉寺廃寺跡採集遺物実測図……57
第75図　安養院屋外に集積された石仏・石塔（東から）……58
第76図　安養院所蔵の石仏……58
第77図　竜泉寺古墳墳頂部（東から）……58
第78図　喜勢遺跡（西から）……59
第79図　洞穴（東から）……59
第80図　喜勢遺跡採集遺物実測図……59
第81図　須恵器の提瓶……60
第82図　古瀬戸の瓶子……60
第83図　勢至北谷付近の石仏・五輪塔の集積地点（東から）……60
第84図　勢至南谷付近に散布する石仏（東から）……60
第85図　喜勢古墳群の立地と構成……62
第86図　喜勢５号古墳（東から）……63
第87図　戸関遺跡（南から）……63
第88図　戸関遺跡採集遺物実測図……63
第89図　戸関遺跡周辺の小字名……64
第90図　柏尾廃寺跡（北から）……65
第91図　千体仏（東から）……65
第92図　基壇跡（北西から）……65
第93図　柏尾廃寺跡基壇跡平面図……65
第94図　柏尾廃寺跡礎石群平面図……66
第95図　洞穴（北から）……66
第96図　柏尾廃寺跡中心部平面図……67
第97図　柏尾廃寺跡中心部地形測量図……68
第98図　柏尾廃寺跡採集遺物実測図１……69
第99図　柏尾廃寺跡採集遺物実測図２……70
第100図　柏尾廃寺跡採集遺物実測図３……71
第101図　柏尾城跡（南東から）……73
第102図　柏尾城跡からの濃尾平野の眺望……73
第103図　柏尾２号古墳（西から）……74
第104図　明徳遺跡（東から）……74
第105図　明徳遺跡採集遺物実測図……74
第106図　鷲巣東遺跡（南西から）……75

第107図　鷲巣東遺跡採集遺物実測図 ……75
第108図　白石道遺跡（南東から）……76
第109図　白石古墳（南から）……76
第110図　千人塚古墳群の立地と構成 ……77
第111図　千人塚２号古墳（北から）……77
第112図　千人塚古墳群採集遺物実測図 ……77
第113図　京ヶ脇遺跡（南東から）……78
第114図　京ヶ脇遺跡採集遺物実測図 ……78
第115図　京ヶ脇１～３号古墳の分布と立地 ……78
第116図　京ヶ脇２号古墳（東から）……79
第117図　京ヶ脇３号古墳（北西から）……79
第118図　養老神社経塚跡（北東から）……79
第119図　養老神社経塚跡出土遺物実測図 ……80
第120図　小倉山古墳（南から）……81
第121図　薬師山遺跡（北西から）……82
第122図　薬師山遺跡採集遺物実測図 ……82
第123図　道上遺跡（南東から）……83
第124図　道上遺跡採集遺物実測図 ……83
第125図　多藝郡若宮新田石窟古奇物圖１ ……85
第126図　多藝郡若宮新田石窟古奇物圖２ ……86
第127図　多藝郡若宮新田石窟古奇物圖３ ……87
第128図　養老・上多度地区の古墳時代土師器の散布状態 ……89
第129図　養老・上多度地区の古墳時代須恵器の散布状態 ……90
第130図　養老・上多度地区の古代須恵器の散布状態 ……91
第131図　養老・上多度地区の灰釉陶器の散布状態 ……93
第132図　養老・上多度地区の山茶碗の散布状態 ……94
第133図　養老・上多度地区の瓷器系陶器の散布状態 ……95
第134図　池辺地区の細別 ……97
第135図　池辺地区の遺跡の位置 ……98
第136図　大巻薩摩工事役館跡（東から）……99
第137図　根古地薩摩工事義歿者墓（北西から）……99
第138図　甕の出土状況 ……99
第139図　天照寺薩摩工事義歿者墓（西から） ……100
第140図　根古地城跡（北西から） ……100
第141図　遺物採集地点の立地……102
第142図　養老町の主要遺跡の位置……106
第143図　象鼻山古墳群の位置……111
第144図　象鼻山古墳群中心部測量図……112

第145図　象鼻山山頂部の断層崖の位置……114
第146図　象鼻山１号古墳周辺の地形……115
第147図　象鼻山古墳群中心部の地形……116
第148図　象鼻山中腹部に位置する古墳の地形……117
第149図　象鼻山古墳群の立地分類及び位置分類……118
第150図　全長と墳頂の標高からみた墳形の分布……120
第151図　立地別にみた墳形……121
第152図　位置別にみた墳形……121
第153図　養老町とその周辺の中世山岳寺院跡の位置……124
第154図　柏尾廃寺跡の採集遺物分布……125
第155図　柏尾廃寺跡の立地と構成……126
第156図　柏尾廃寺跡地区分類……128
第157図　凡例……129
第158図　柏尾廃寺跡採集遺物の時期別組成……130
第159図　柏尾廃寺跡時期別遺物分布１……132
第160図　柏尾廃寺跡時期別遺物分布２……133
第161図　柏尾廃寺跡採集遺物の地区別種類組成……136
第162図　柏尾廃寺跡採集遺物の地区別器種組成……137
第163図　柏尾廃寺跡の瓦の分布……138
第164図　柏尾廃寺跡の鉄滓の分布……138
第165図　柏尾廃寺跡の喫茶具類と仏具の分布……142
第166図　柏尾廃寺跡の土師器皿の分布……142
第167図　養老町の中世遺跡の位置……145
第168図　各遺跡の種類別組成……147
第169図　各遺跡の灰釉陶器・山茶碗の消長……147
第170図　型式別山茶碗の競合関係……148
第171図　室原地区の旧小字図……150
第172図　室原東遺跡の遺物分布……151
第173図　室原東遺跡の各地区の種類別組成……152
第174図　分布調査採集遺物写真１……157
第175図　分布調査採集遺物写真２……158
第176図　分布調査採集遺物写真３……159
第177図　分布調査採集遺物写真４……160
第178図　分布調査採集遺物写真５……161
第179図　分布調査採集遺物写真６……162
第180図　分布調査採集遺物写真７……163
第181図　分布調査採集遺物写真８……164
第182図　分布調査採集遺物写真９……165

第183図　分布調査採集遺物写真10……166
第184図　分布調査採集遺物写真11……167
第185図　分布調査採集遺物写真12……168
第186図　分布調査採集遺物写真13……169
第187図　分布調査採集遺物写真14……170
第188図　分布調査採集遺物写真15……171
第189図　分布調査採集遺物写真16……172
第190図　分布調査採集遺物写真17……173
第191図　分布調査採集遺物写真18……174

表　目　次

第１表　象鼻山古墳群一覧……10
第２表　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の遺物採集地点の立地……35
第３表　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の遺物採集地点の立地……50
第４表　喜勢古墳群一覧……62
第５表　千人塚古墳群一覧……77
第６表　養老・上多度地区の遺物採集地点の立地……96
第７表　根古地薩摩工事義歿者墓に埋葬された義士……99
第８表　天照寺薩摩工事義歿者墓に埋葬された義士……100
第９表　養老町の主要遺跡の消長……106
第10表　文献資料にみる養老町の集落……108
第11表　象鼻山１～56号古墳の属性……119
第12表　墳形別にみた全長と墳頂の標高の平均値……120
第13表　養老町とその周辺の中世山岳寺院跡の消長……124
第14表　編年対照表……127
第15表　柏尾廃寺跡測量調査採集遺物組成……129
第16表　分析対象の中世遺跡と灰釉陶器・山茶碗の消長……145
第17表　室原東遺跡の地区別遺物組成……151
第18表　室原東遺跡の各地区の種類別組成比……152

付　　図

象鼻山古墳群中心部測量図

第１章　はじめに

１　調査の目的

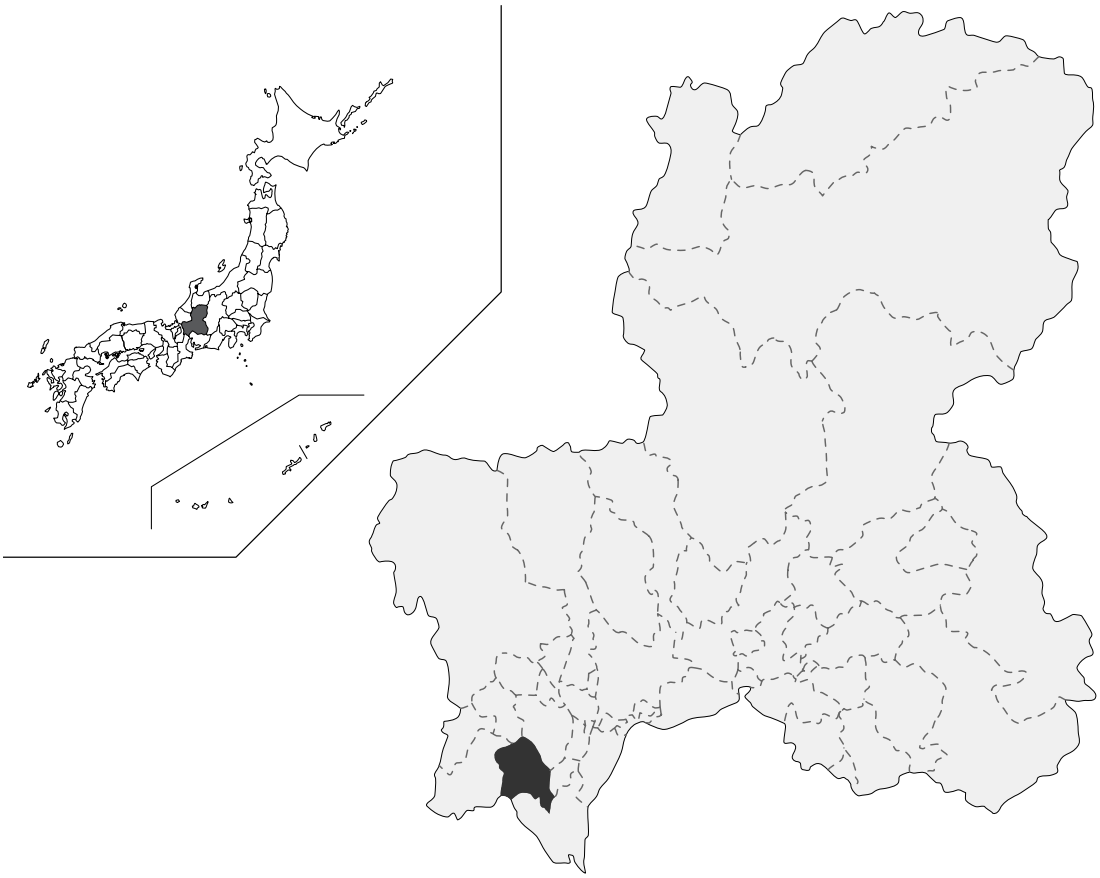
養老町がはじめて人の活動の舞台となったのは、現在確実なところでは、今から約16,000年前、象鼻山山頂においてである。以後、遺跡は養老山地から揖斐川まで広く分布し、現在に至るまで連綿と人々の営みが続いたものと思われる。

養老町の遺跡の数は、昭和53年（1978）の『全国遺跡地図 岐阜県』で57箇所、平成２年（1990）の『岐阜県遺跡地図』では99箇所と徐々に増加してきている*。

しかし、これらの成果は系統だった分布調査によるものではなく、その範囲・時期などについて不明な点が多く、未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予測される。

また、開発行為の増加に伴い、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発の調整のため、その基礎資料として遺跡地図の一層の充実が望まれたのである。



第１図　養老町の位置

＊　文化庁文化財保護部 1978『全国遺跡地図　岐阜県』
岐阜県教育委員会 1990『改訂岐阜県遺跡地図』

2　調査の経過

このような状況のもと、養老町では平成13年度からスタートした第４次総合計画の基本計画の中で文化財の調査・保存をあげた。

これを受けて養老町教育委員会では平成14年度より遺跡地図をさらに充実させるため、国庫補助事業として養老町遺跡詳細分布調査を実施することになった。

調査にあたっては、養老町教育委員会を中心とし、地元住民の協力を得て、下記の調査団を編成した。

調査の方針としては、養老町全域を調査対象とし、５ヶ年計画とすること。最終的には養老町遺跡地図を刊行することが決定された。

養老町遺跡詳細分布調査団

（平成14年度）

団　　長：久保田正剛（養老町教育委員会教育長）

調　査　員：中島　和哉（養老町教育委員会生涯学習課学芸員）

調査協力者：安瀬　佳織・稲石　純子・大岡　明臣・大橋富士夫・岡田　　幸・折田　晃子
梶田亜友美・川地　一幸・川地　三好・河村　　諭・木村　政明・久保田　勇
河本　博治・佐藤絵理奈・重金　英男・新宅　由紀・高木　英司・高木　正雄
高木　吉一・高志こころ・田中　　正・中谷　正和・中野　秀昭・中山　光義
長沢博千代・西脇　正夫・丹羽　直美・細川　文子・堀江　吉一・本田　晃久
村上　篤雄・村上　　滋・村上　　實・村上　　求・森川　　孝・安福　隆司
山田　　清

事　務　局：伊藤　信彦（養老町教育委員会生涯学習課課長）
川島　正信（養老町教育委員会生涯学習課課長補佐）

（平成15年度）

団　　長：久保田正剛（養老町教育委員会教育長）

調　査　員：中島　和哉（養老町教育委員会生涯学習課学芸員）

調査協力者：菟原　雄大・大野　壽子・大橋富士夫・小川　卓哉・景山　武清・片桐　清恵
片山健太郎・川地　三好・河村　　諭・木村　　強・木村　政明・久保浩一郎
久保田　勇・佐々木康男・笹栗　　拓・重金　英男・新宅　由紀・進藤　智美
高木　正雄・高木　吉一・高志こころ・竹谷　充生・田中　　正・富永　茂樹
中谷　正和・中野　秀昭・中山　定男・中山　光義・長沢博千代・福崎　裕介
藤本　忠男・本田　晃久・牧野啓太郎・的場　茂晃・村上　篤雄・村上　成人
村上　幹夫・村上　　實・森川　　孝・森田　一樹・安福　彰男・安福　隆司
安福　　勝・安田　　務・山口　欧志・山田　　清

事　務　局：伊藤　信彦（養老町教育委員会生涯学習課課長）
川島　正信（養老町教育委員会生涯学習課課長補佐兼文化係長）

（平成16年度）

団　　長：久保田正剛（養老町教育委員会教育長）

調　査　員：中島　和哉（養老町教育委員会生涯学習課学芸員）

調査協力者：青木　規子・東　　良明・菟原　雄大・岡島　怜子・尾上さやか・川地　三好
木村　光基・久保浩一郎・小林　高太・近藤　景子・笹栗　　拓・真田　泰光
重金　英男・志知　識子・高木　正雄・高木　吉一・高橋　彰則・竹谷　充生
田中　　正・棚橋　宏昭・徳井　恵子・富永　茂樹・中谷　正和・中野　秀昭
中村　まや・長沢博千代・福沢　佳典・福西　麿衣・藤本　忠男・間野　　達
村上しおり・森川　　孝・森田　一樹・安福　彰男・安福　隆司・山口　欧志
用田　聖実

事　務　局：伊藤　信彦（養老町教育委員会生涯学習課課長）
川島　正信（養老町教育委員会生涯学習課課長補佐兼文化係長）

（平成17年度）

団　　長：野村浩太郎（養老町教育委員会教育長）

調　査　員：中島　和哉（養老町教育委員会生涯学習課学芸員）

調査協力者：東　　良明・岡島　怜子・川地　三好・小林　高太・近藤　景子・笹栗　　拓
富永　茂樹・高木　正雄・高木　吉一・竹谷　充生・竹中　庸介・田中　　正
栃堀　哲彦・中谷　正和・中野　秀昭・長沢博千代・福沢　佳典・福西　麿衣
藤本　忠男・間野　　達・森川　　孝・森田　一樹・安福　隆司・山口　欧志
用田　聖実・吉田　有里

事　務　局：伊藤　信彦（養老町教育委員会生涯学習課課長）
倉本　雅志（養老町教育委員会生涯学習課課長補佐兼文化係長）

調査風景

集合写真

3　養老町の地勢と自然環境

養老町は、岐阜県の西南部に位置し、南北に12km、東西は10km に及びその面積は72.14km² を測る。全域は東高西低の地盤運動のため、濃尾平野東部に顕著な河岸段丘は見られず、大きくは断層運動によって形成された西域の険しい山地と東域の低地の両極端な地形に二分される。

また、地塁をなす養老山地の東側は、低い濃尾平野と断層崖をもって続いているため、山地より流出する多量の土砂によって数多くの扇状地が形成されている。養老山地北部では北から吉谷・宮谷・桜井西谷・坂尻谷・威徳谷・行平谷・勢至北谷・勢至南谷・柏尾谷・滝谷・直江谷・小倉谷となり、

第２図　養老町の地勢

それぞれの流域に比例して扇状地の大きさが異なる。

水流は急斜面を流れるため比較的短く扇頂近くで伏流し、扇面では水無川が長く続き透水性が高い。また伏流した水は扇端で湧出しているため、扇端に多くの集落が発達している。

すなわち養老町は、標高800mを測る養老山地や象鼻山と海抜０ｍの平野部、さらにその間を埋める扇状地と狭小な段丘面の３つの特徴的な地形から成り立っている。そのため、各時代の人々がこれらとどのように取り組んで暮らしたかを知ることができたならば、当地域の歴史の理解にとどまらず、それぞれの特徴的な地形が人々の生活にどのような役割を果たしているかを明らかにし得る可能性を秘めている。また、養老町は近江から東日本に至る玄関口であり、伊勢へぬける伊勢街道が通るため、当地域の在り方を集中的に調査することは、広域の現象の把握にも有効である。

なお分布調査は、発掘調査ほど詳細な分析を行うことが困難な反面、調査を精密に実施して得られた資料を集計すれば、発掘調査に比べ広範囲の動向の大勢を知ることができる。

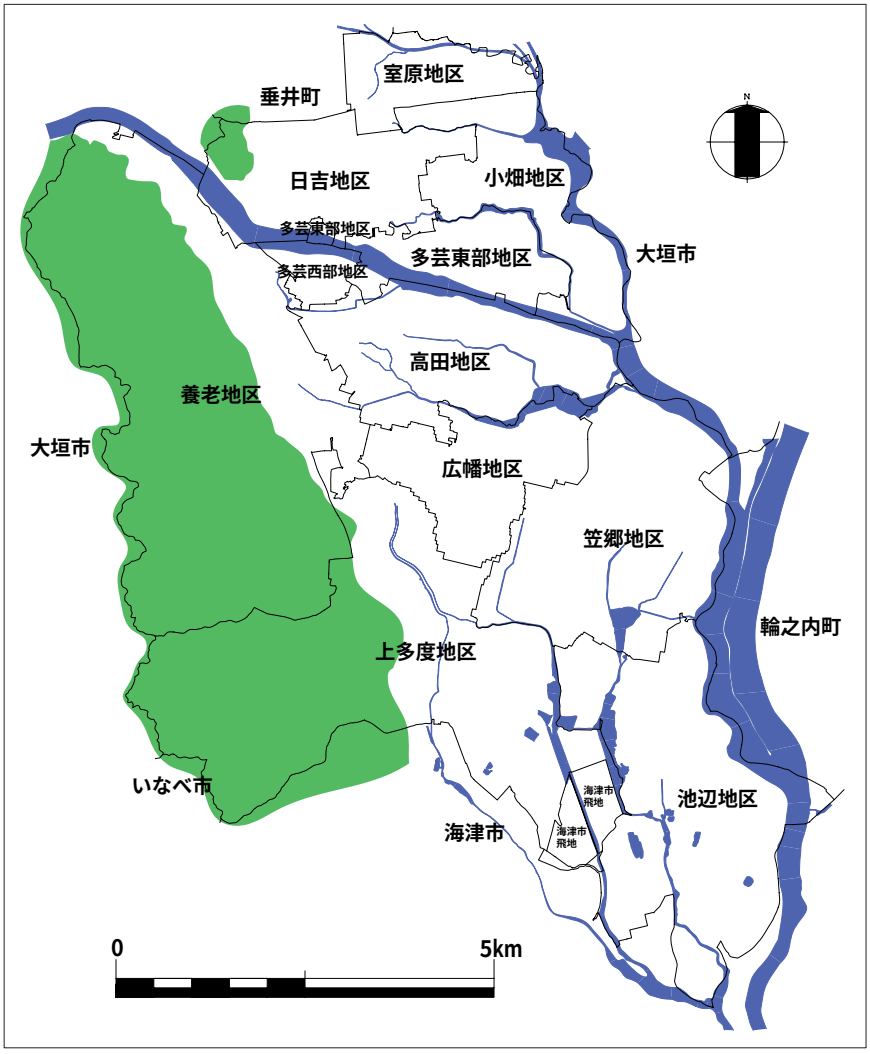
本分布調査の目的は、遺跡を確認・周知し、その保存・活用を図る基礎資料として遺跡地図を作成することであるが、それにとどまらず、調査の結果を出来る限り分析していきたい。なお、ここで示す成果は、多くの方々のご理解とご協力によるものである。特に川地三好氏は個人においても精力的に踏査を行い、養老町における古墳時代を考える上で多くの成果をあげられた。記して感謝申し上げるとともに、今後ともご助力をお願いしたい。

４　調査の方法と地区割りについて

調査は踏査によるものとし、養老町全域を対象とした。

現地調査は養老町北部にあたる日吉・室原・小畑・多芸東部地区、養老町の中心部にあたる多芸西部・高田・広幡・笠郷地区、養老町西部にある養老山地を中心に広がる養老・上多度地区、養老町南部で最も低地にあたる池辺地区の４つに地区割りし、さらにそれぞれの地区を大字及び小字界を参考に細別して実施した（第３図）。また、その結果を細別区画ごとに集計し、種類･時期毎の採集数を図示して遺跡の盛衰と立地の変化、遺跡の存続期間を把握する基礎資料とした。

遺跡の名称については過去の調査や研究を参考としながら、遺跡のある地域の名称等適当と思われるものを遺跡名とした。



第３図　調査の地区割り（S ＝１/100,000）

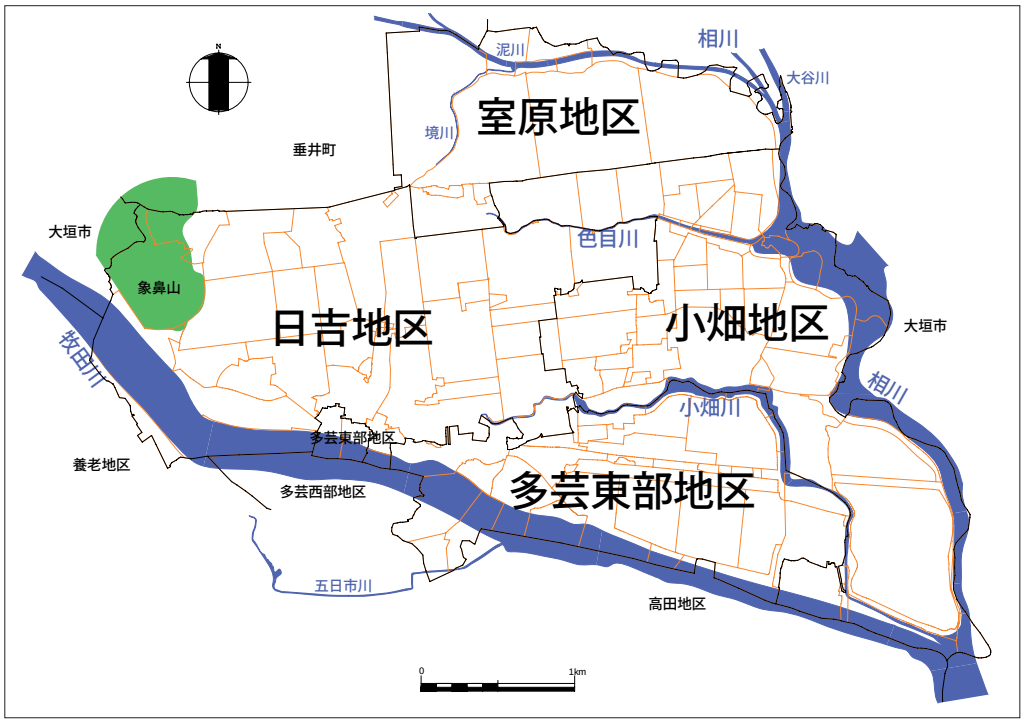
第２章　分布調査の成果

１　日吉・室原・小畑・多芸東部地区

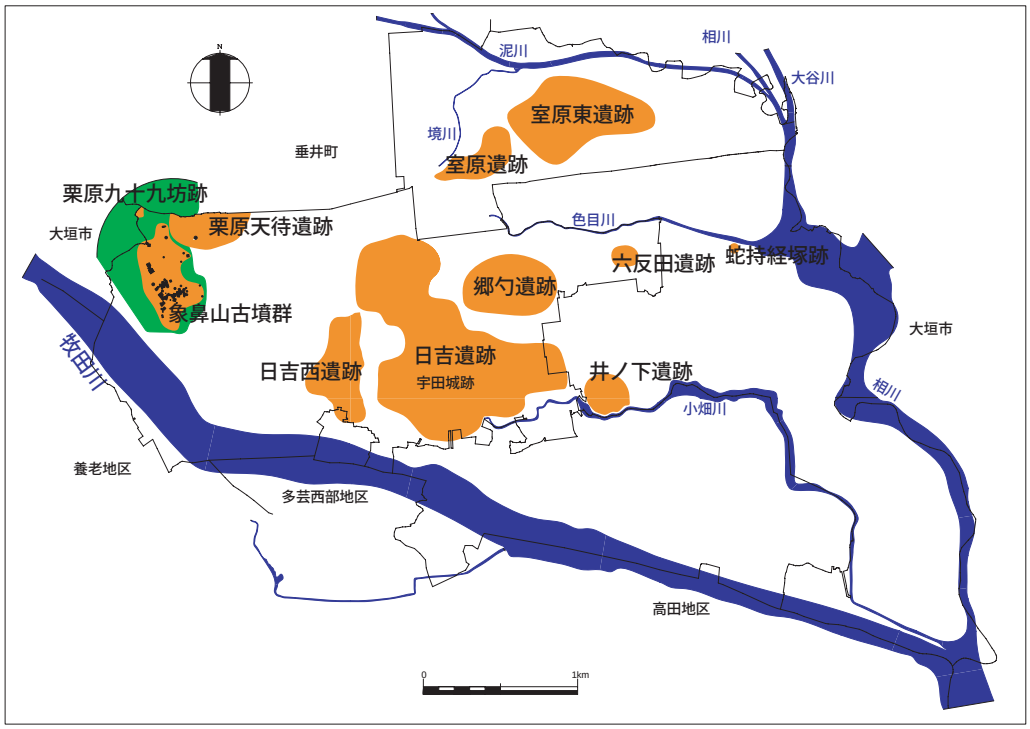
（１）調査地区について

日吉・室原・小畑・多芸東部地区は養老町北部を中心とした地区で西には南宮山の一支脈にあたる象鼻山が位置し、北に泥川、南に牧田川、東に相川が流れている。

この地区の多くは、牧田川によって形成された扇状地とその周囲に広がる沖積低地によって占められており、象鼻山及びその東麓に丘陵とわずかな段丘面が形成されている。また、当地区の東側にあたる小畑地区では、戦後に米軍が撮影した航空写真に堀田が確認でき、現在においても河川氾濫の危険が高い地域である。以上から当調査区は過去の様々な時代においても微高地を中心とした遺跡の展開が予想された地域である。調査は小字界を参考にそれぞれの地区を細別して実施した（第４図）。



第４図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の細別（S＝1/50,000）



第５図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の遺跡の位置（S ＝１/50,000）

（２）遺跡と採集遺物

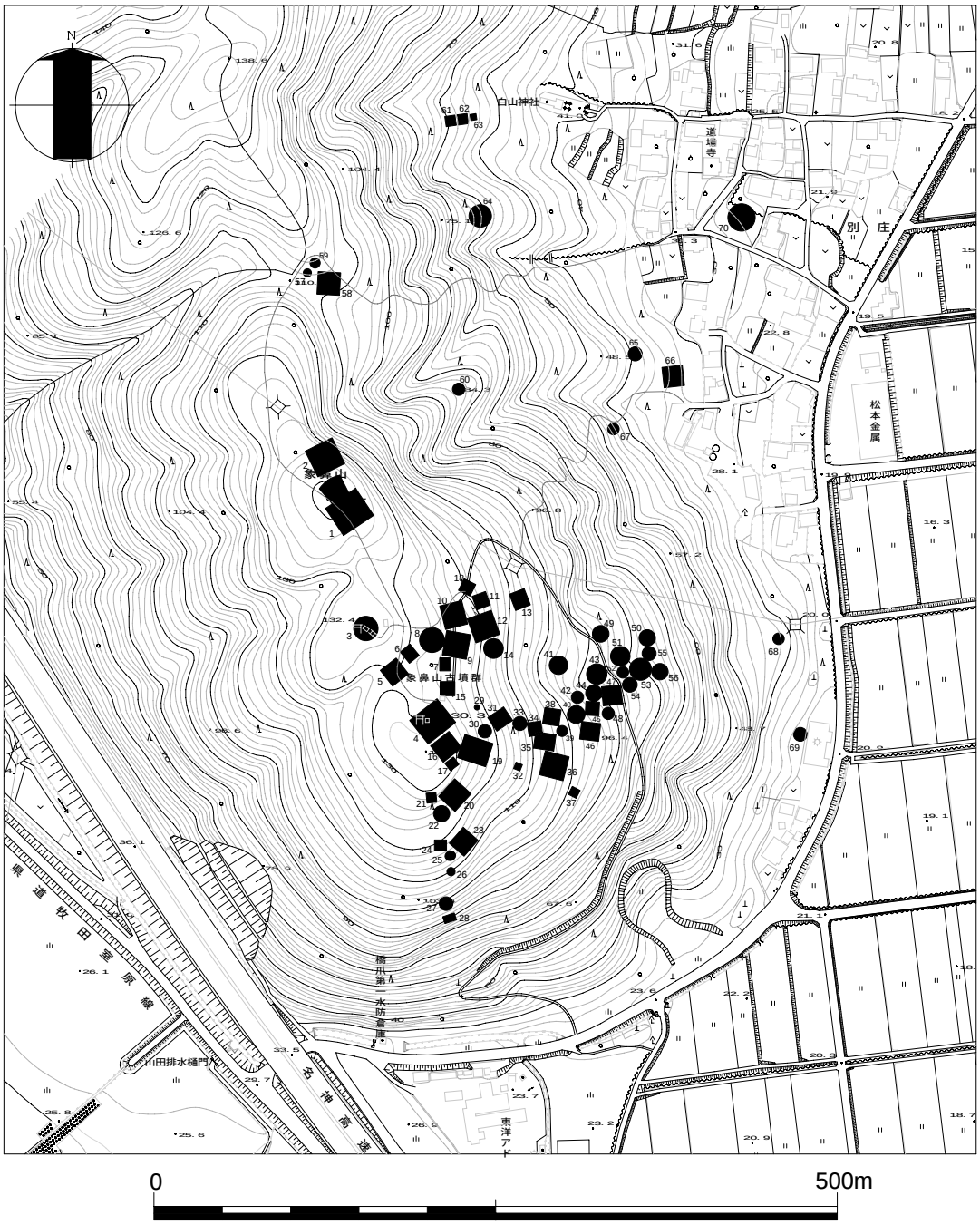
１．　象鼻山古墳群　養老町橋爪字岡山

本遺跡は南宮山の一部である象鼻山に立地し、標高140m を測る山頂からは東に濃尾平野を見下ろすことができる（第６・７図）。1987年の東海古墳文化研究会の分布・測量調査や1989年の養老町教育委員会・三重大学の分布調査、1996年から1998年にかけて実施された養老町教育委員会・富山大学の発掘調査、2002年から2005年の養老町教育委員会の分布・測量・発掘調査により、この古墳群は古墳時代前期に属する前方後方墳１基のほか、上円下方壇１基、方墳35基、円墳33基、形状不明のもの１基からなることが明らかになっている（第８図、第１表）*。また、山頂部からは石器や土器、陶磁器

第６図　象鼻山全景（南東から）

第７図　象鼻山１号古墳からの濃尾平野の眺望

*　赤塚次郎1988「象鼻山古墳群」『古代』第86号
養老町教育委員会1990『養老町象鼻山古墳群分布確認調査報告書』
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1997『象鼻山１号古墳－第１次発掘調査の成果－』
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1998『象鼻山１号古墳－第２次発掘調査の成果－』
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1999『象鼻山１号古墳－第３次発掘調査の成果－』
養老町教育委員会2006『象鼻山古墳群第３次発掘調査現地説明会資料』



第８図　象鼻山古墳群の立地と構成（S＝１/5,000）

など後期旧石器時代から古墳時代初頭や古代、中世後期にかけての遺物が確認できており、さらに山頂部には断層活動による地形変位により南北方向に断層崖が形成されている。

今回の分布調査では石器１片、須恵器４片を採集できた。また、平成15年８月に山頂部の遊具を撤去した際に石器１片、土器11片を確認している。さらに平成16年度に実施した象鼻山古墳群第１次発

第１表　象鼻山古墳群一覧

番号	墳　形	全長(m)	高さ(m)	番号	墳　形	全長(m)	高さ(m)
1	前方後方墳	40.1	4.97	36	方　墳	17.8	4.2
2	方　墳	20.9	3.8	37	方　墳	6.5	2.7
3	上円下方壇	83.7	10.5	38	方　墳	13.3	5
4	方　墳	25.5	4.6	39	円　墳	8.5	3.9
5	方　墳	14	2.5	40	円　墳	12.3	4.9
6	方　墳	10	1.2	41	円　墳	12.8	4.2
7	方　墳	9.9	1.6	42	円　墳	10.6	3.4
8	円　墳	20	4.2	43	円　墳	14.4	3.9
9	方　墳	17.8	4.4	44	円　墳	12.4	4.1
10	方　墳	20.9	6	45	円　墳	10.1	3.8
11	方　墳	10.7	1.8	46	方　墳	13.6	2.9
12	方　墳	17.6	3.4	47	方　墳	14.8	4
13	方　墳	11.2	4	48	円　墳	8.9	2
14	円　墳	15.5	3.1	49	円　墳	12.2	2.8
15	方　墳	12.4	2	50	円　墳	12	4.1
16	方　墳	18.2	2	51	円　墳	14.3	4.6
17	方　墳	8.5	1.1	52	円　墳	8.5	2
18	方　墳	8.6	－	53	円　墳	16.1	3.7
19	方　墳	19.1	4.3	54	円　墳	10.8	2.6
20	方　墳	16.5	3.9	55	円　墳	10.3	2.4
21	方　墳	8.1	1.9	56	円　墳	12	3.2
22	円　墳	13.9	2.3	57	円　墳	6	0.85
23	方　墳	15.2	5	58	方　墳	16.5	3.05
24	方　墳	6.7	1.5	59	円　墳	7.5	1.19
25	円　墳	7.6	2.2	60	円　墳	9	4.48
26	円　墳	7	2.5	61	方　墳	7.5	1.56
27	円　墳	9	2.6	62	方　墳	7.5	1.5
28	方　墳	4.5	2.2	63	方　墳	4.5	4
29	円　墳	4	1.4	64	円　墳	16.5	3.29
30	円　墳	6.7	2	65	円　墳	10.3	2.18
31	方　墳	14	3.2	66	方　墳	15	3.22
32	方　墳	6	2.7	67	円　墳	8.5	2.53
33	円　墳	10.3	4.6	68	円　墳	8.4	2.93
34	方　墳	9.3	3	69	円　墳	10.1	1.88
35	方　墳	13.6	4.1	70	不　明	－	－

掘調査では石器26片、土器25片、陶磁器10片を確認した。ここではこれらのうち石器14片、土器４片、須恵器３片、瀬戸美濃１片を図示した（第９・10図の１～22)。

１～３はチャート製の石核である。１は石刃技法の石核である。上面・下面ともに打面調整を行い、上下からの連続する剥離によって縦長剥片を作出している。２は剥片素材の石核である。打面の調整はみられず、不特定の方向から幅広の剥片を作出している。３は断面三角形を呈し、両側面を作業面とし横に移動しながら剥片の剥離を行っている。

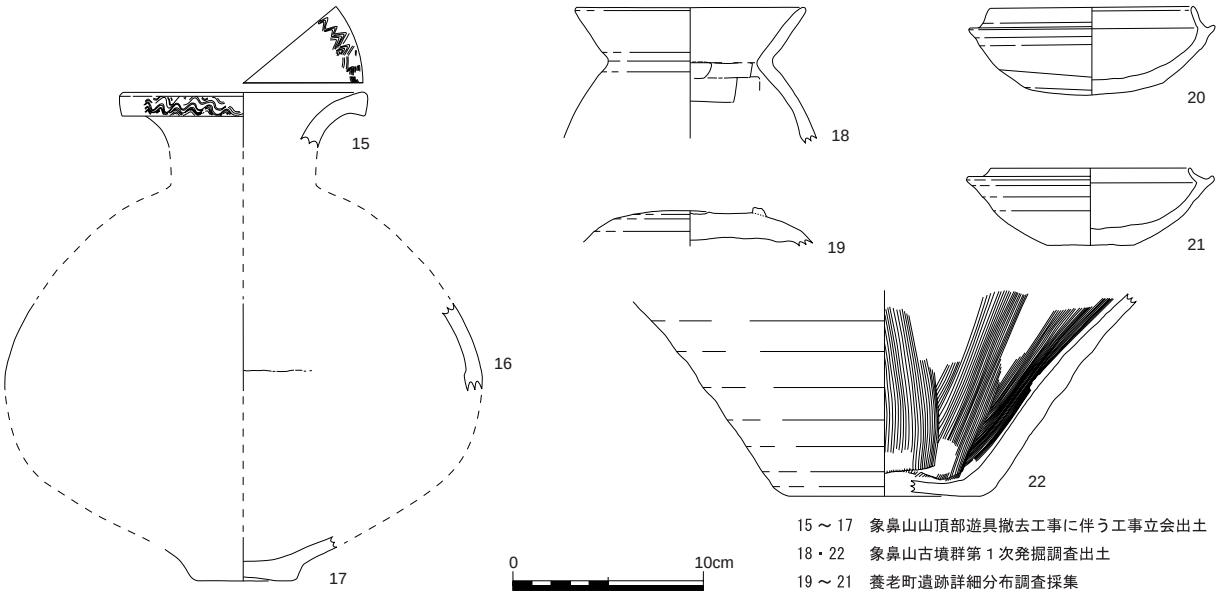
４はチャート製のナイフ形石器である。基部を加工しており、縦長剥片を素材としている。裏面は基部周辺を丁寧にブランティングしているが、表面は右側面のみ調整している。先端を欠損している。赤褐色を呈するチャートを使用しており、養老山地で採集した石材を用いた可能性が高いだろう。

５はチャート製のスクレイパーである。幅広の剥片の先端にブランティングを施し、表面右端の刃部を欠損している。

６～12はチャート製の剥片である。このうち７・９の２片は赤褐色を呈しており、養老山地で採集した石材を使用したと考える。８は表面の左側面に使用痕が確認できる。

1～ 12・14　象鼻山古墳群第１次発掘調査出土
13　象鼻山山頂部遊具撤去工事に伴う工事立会出土

第９図　象鼻山古墳群出土・採集遺物実測図１（S＝1／2）



第10図　象鼻山古墳群出土・採集遺物実測図２（S＝1／4）

以上のうち、時期を詳細に検討できるのは１の石核である。両設打面の石核から縦長剥片を剥離する砂川型刃器技法を用いた石核であり、武蔵野台地第Ⅳ層出土資料や相模野台地Ｌ２層～Ｂ１層出土資料に代表される砂川期に併行するものと考える。象鼻山から出土した他の遺物には、この石核から作出された縦長剥片やそれを素材とした２側縁加工のナイフ型石器は確認できていないが、現段階では確実に砂川期をさかのぼる資料もなく、ここでは他の旧石器時代の遺物についてもほぼ同じ時期のものと考えておきたい。この後期旧石器時代後半は地域性が確立してくる時期であり、当地域においても独自の文化圏が形成されている可能性が高いだろう*。今後の資料の増加を待って詳細を明らかにしたい。

13・14は石鏃である。13はチャート製であり、厚さは約２ mm と薄い。基部には凹状のわずかな抉りが施されている。先端部は全体の成形を行った後、再度調整している。14はサヌカイト製であり、基部に抉りを施している。先端と逆刺の一方を欠損している。ともに詳細な時期は不明であるが、基部の加工や大きさ、厚みなどの特徴から13を縄文時代、14を弥生時代の遺物と考えておきたい。

15～17は土器の広口壺であり、同一個体と考えた口縁部・胴部・底部によって復元したものを１個体として図示した。外反する口縁部をもち、口径は12.6cm、底径は5.0cm を測る。口縁端部は面をなし、その内外面には波状文が施されているが、胴部には文様がない。遺存状態が悪く器面調整は不明である。色調は橙色を呈し、焼成は良好であり、胎土は密である。これらの特徴から、この広口壺は古墳時代初頭に属する資料と考える。具体的には赤塚次郎による廻間Ⅰ式から廻間Ⅱ式前半に位置づけることができるだろう**。

18は土器の小型丸底壷である。象鼻山３号墳の表面から出土した。口縁端部を丸くおさめ、頸部内外面には強い横方向のナデを行っている。全体的に丁寧な作りであり、色調は橙色を呈する。古墳時代前期に属するもので、赤塚による松河戸Ⅰ式に位置づけることができる資料であろう***。象鼻山

*　伊藤　健2000「趣旨説明－シンポジウム砂川研究プロジェクトの概要－」『石器文化研究』８
**　赤塚次郎1990「廻間遺跡」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
***　赤塚次郎1994「松河戸様式の提唱」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集

３号墳の存続期間の一時期を示す資料として注目できる。

19は須恵器の蓋である。象鼻山登山道の入口付近で採集した。天井部外面を回転ヘラケズリ調整しており、やや丸みがある。さらに天井部の器壁が1.5cmとやや厚い。口縁部が遺存していないため時期は不明確であるが、その特徴から古墳時代後期後半に属するもので、田辺昭三によるTK43～TK209型式、渡辺博人による美濃須衛窯Ⅱ期後半、尾野善裕によるⅢ期中～新段階の範囲で捉えることができるだろう*。

20・21は須恵器の杯である。象鼻山の麓に位置する67～69号古墳の周辺で採集した。口径は20が10.6cm、21が10.4cmを測り、形態の縮小化が顕著である。ともに受部を器高中位より高い位置にもつが、21は回転ヘラケズリ調整を行っていない。いずれも古墳時代後期後半から終末に属するもので、具体的には田辺によるTK217型式、渡辺による美濃須衛窯Ⅲ期前半、尾野によるⅣ期古段階に位置づけることができると考える*。

22は瀬戸美濃の擂鉢である。口縁部は遺存していないが、大窯期に属するものであろう。

この他に、平成18年度の発掘調査で象鼻山８号古墳の周囲から廻間Ⅰ式前半を中心とした土器を多数確認できている**。

以上から象鼻山古墳群は前期古墳である１号古墳に加え、廻間Ⅰ式期に遡る墳墓や後期古墳を含む古墳群である可能性が高い。そして、古墳時代前期の資料が山頂付近に集中し、後期資料が麓に集中していることから中腹部に築造された古墳の中には中期に属するものも存在する可能性があるだろう。また、古墳時代以外においても、後期旧石器時代後半や縄文時代、古代、中世において人々の活動の舞台となった可能性が高い遺跡である。

２．栗原九十九坊跡　養老町橋爪、垂井町栗原、大垣市上石津町

栗原九十九坊跡は南宮山から南東に延びる支脈の根本に位置する遺跡で、栗原山山頂を中心に広がる寺院跡である。標高は約50～230mを測り、主に山頂部の隆起準平原や麓の下位段丘面を利用している。遺跡の大半が不破郡垂井町に属しており、遺跡南側の一部のみが養老町域と大垣市上石津町域に含まれる。垂井町では町の史跡にも指定されており、詳細については垂井町域の調査を待ちたいが、数少ない資料からは中世を主体とした遺跡であることが読みとれる***。今回の調査では養老町域のみを対象とし、時期は不明であるものの土塁と堀切を確認できた。遺物は採集できなかった。

第11図　栗原九十九坊跡（北から）

---

*　田辺昭三1981『須恵器大成』
　渡辺博人1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋杯の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古学』創刊号
　尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５-１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』

**　養老町教育委員会2006『象鼻山古墳群第３次発掘調査現地説明会資料』

***　安福彦七1976『栗原山九十九坊象鼻山別所寺の歴史を尋ねて』
　垂井町1969『垂井町史』

３．栗原天待遺跡　養老町橋爪字天待、垂井町栗原

第12図　栗原天待遺跡（東から）

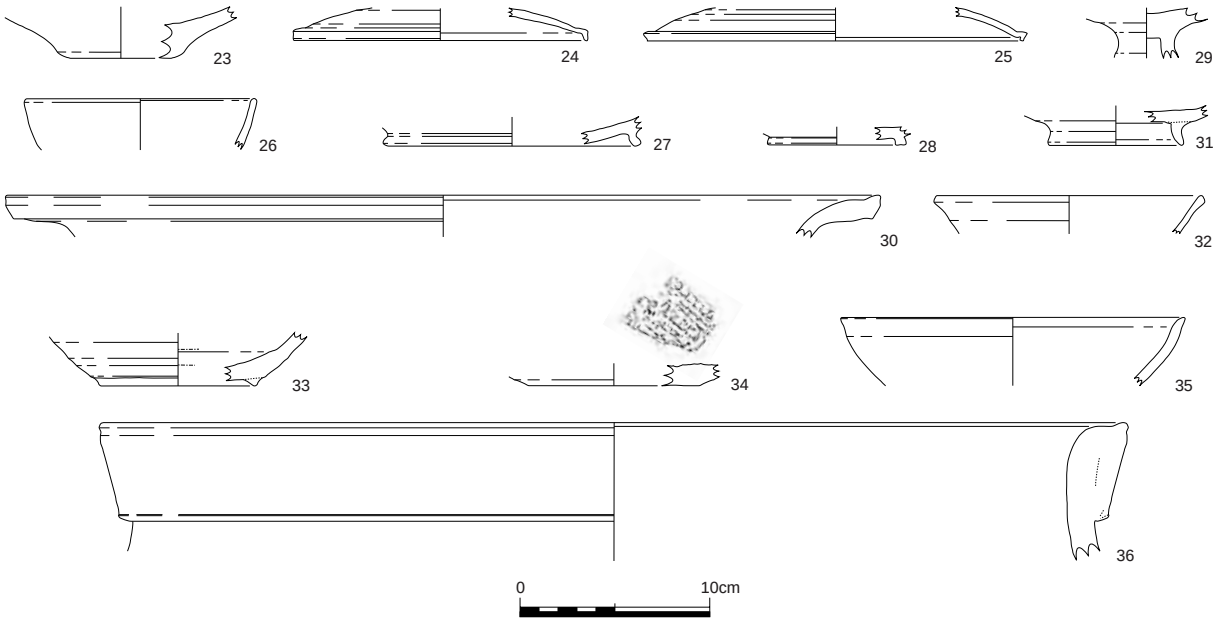
栗原天待遺跡は象鼻山の北東側に形成された標高10～40mの扇状地に立地する。当地点は養老町と不破郡垂井町との町境付近であり、遺跡の範囲は垂井町側にも広がる。さらに遺跡の範囲内には象鼻山70号古墳が立地している。今回の分布調査では養老町域のみを対象とした。

調査では石器１片、土器１片、須恵器131片、灰釉陶器19片、山茶碗50片、古瀬戸９片、瓷器系陶器９片、近世陶器１片を採集でき、そのうち土器１片、須恵器７片、灰釉陶器１片、山茶碗２片、古瀬戸２片、瓷器系陶器１片を図示した（第13図の23～36）。

23は土器の壺で、平底の底部である。遺存状態が悪く詳細な時期は不明であるが、平底であることから弥生時代に属する可能性が高いだろう。

24～30は須恵器で、30については須恵器系陶器の可能性も考えておきたい。24・25は蓋、26～28は杯、29は高杯あるいは盤の脚部、30は甕である。このうち24・25は口縁端部を折り返しており、25はやや折り返しが強い。27は高台がやや大きく、底部が下側へ突出している。28は高台外面の付け根部分が沈線状に凹む。その他の須恵器の詳細な時期は不明だが、24・25・28については尾野によるⅤ期、27についてはⅣ期新段階に属すると考える*。

31は灰釉陶器の椀である。縦長の断面三角形に近い高台をもち、斎藤孝正による猿投窯第Ⅵ期第３小期に位置づけることができると考える**。



第13図　栗原天待遺跡採集遺跡遺物実測図（S＝1／4）

*　尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５-１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』
尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』
**　斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３

32・33は山茶碗の椀である。32は口縁端部が少し尖り気味で、33は高台がやや低く、体部もやや直線的である。ともに第６型式に位置づけることができるだろう。

34・35は古瀬戸で、34は卸皿、35は平椀である。34については詳細な時期を明らかにできなかったが、35は古瀬戸後期の資料であろう。

36は常滑産の瓷器系陶器の甕で、口縁部の形態から中野晴久による９型式に位置づけることができると考える*。さらに図示はできなかったが、採集した須恵器片の中に古墳時代終末期に属するであろう蓋を確認できた。

以上から栗原天待遺跡は確かなところでは古代から中世、近世にかけての遺跡である。継続的な遺跡であるか断続的に営まれた遺跡であるかの判断は採集した遺物からでは難しいが、少なくとも８世紀初頭には成立していただろう。ただし、象鼻山古墳群のすぐそばに位置し、少ないながらも古墳時代後期の遺物が確認できたことや、垂井町栗原地内において過去に弥生時代後期に属する土器の出土事例があることから、弥生時代や古墳時代後期においても人々の活動の舞台となった可能性の高い遺跡である**。

４．日吉遺跡　養老町宇田、豊、中、飯田

日吉遺跡は象鼻山の東側、主に牧田川によって形成された標高７～11mの扇状地に立地している。調査で採集された遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器が657片、古墳時代の須恵器が４片、古代の土師器が15片、古代の須恵器1,453片、灰釉陶器161片、中世土師器62片、山茶碗434片、古瀬戸26片、瓷器系陶器24片、中国製陶磁器２片、瀬戸美濃１片に上り、今回の調査で発見された遺跡の内、弥生時代から古代では最も多数の遺物を採集できた遺跡である。しかし、時期を区切ってみれば遺物の採集地点には偏りがあり、弥生時代から中世にかけての遺跡が複合して本遺跡を形成している。

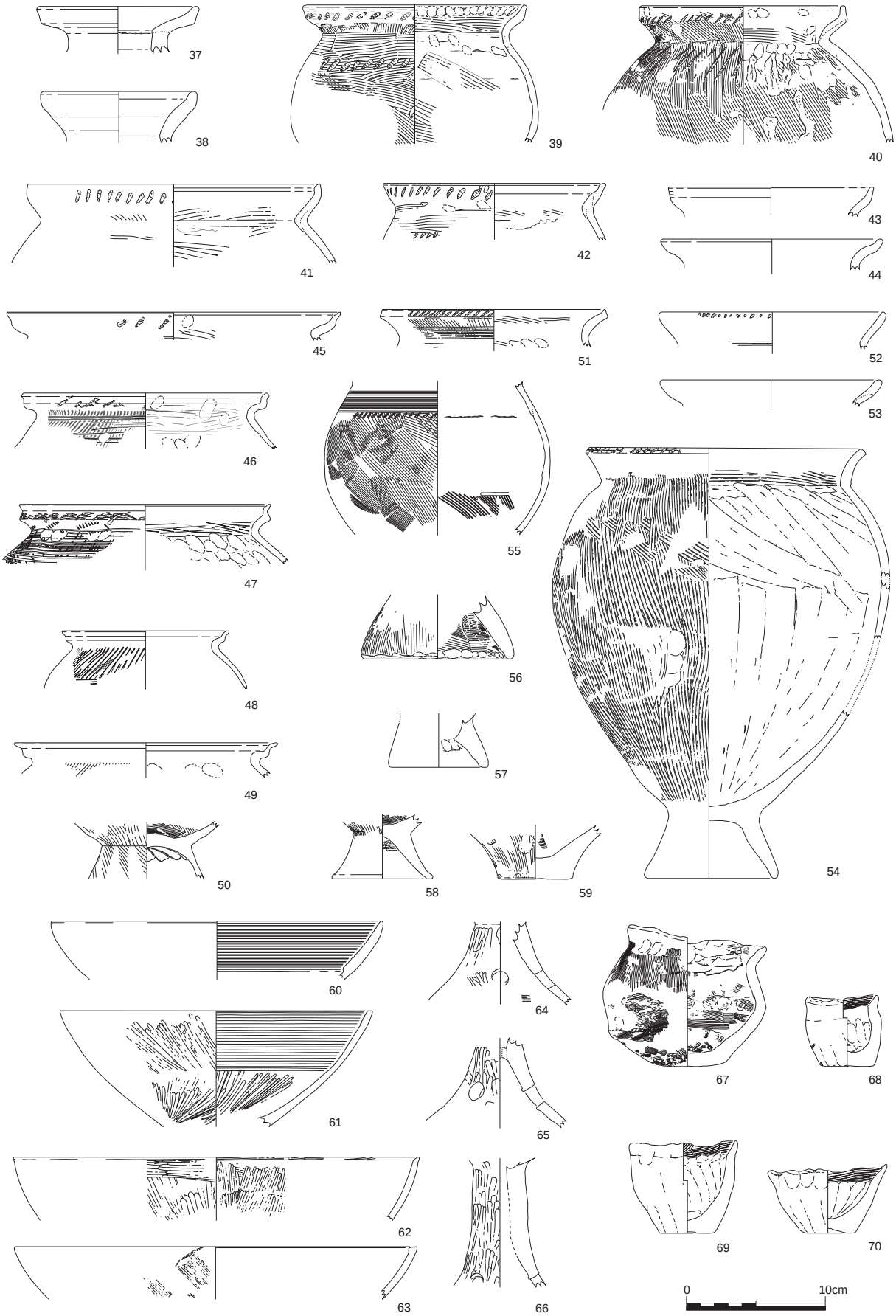
第14図　日吉遺跡（東から）

採集された遺物の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器34片、古代の土師器２片、古代の須恵器26片、灰釉陶器14片、中国製陶磁器１片、山茶碗12片、瓦１片を図示した（第15・16図の37～126）。

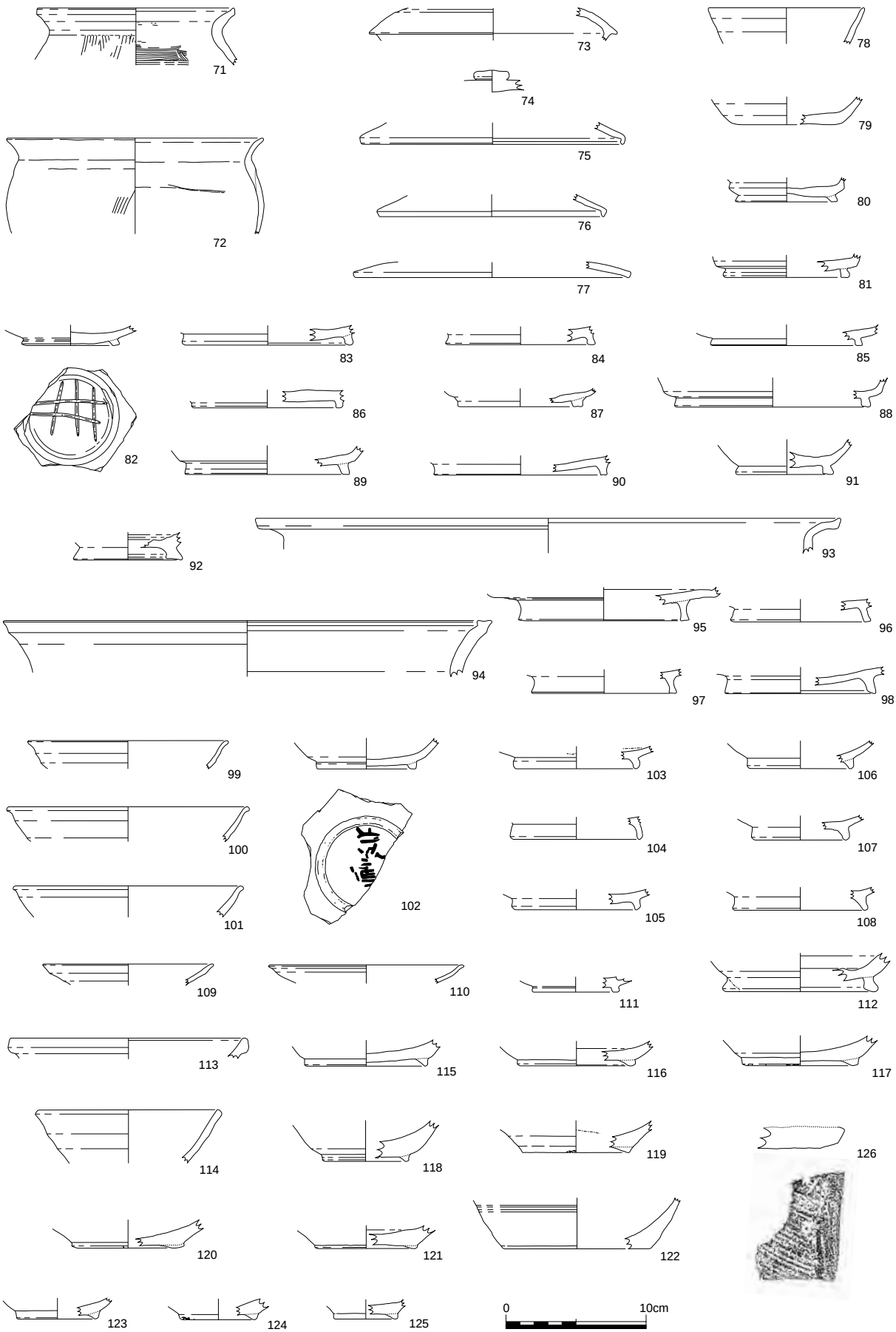
37～70は土器で、37・38が広口壺、39～59が甕、60～66が高杯、67が鉢である。68～70はミニチュア土器である。

このうち時期を詳細に検討できるのが45～49のＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字甕とする）の口縁部片である。45は口縁部二段目が直立気味に立ち上がり、口縁端部が外側に明瞭につまみ出される。さらに、口縁部の一段目と二段目の境に刺突文を施し、頸部内面には横方向の荒いハケを施す。また口縁端部内面には面をもつ。46・47は口縁部の一段目と二段目の境に押引状の刺突文を施し、体部外面

*　中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
**　高木宏和2004「美濃周辺地域における山中式の実相」『伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題　山中式の成立と解体』



第15図　日吉遺跡採集遺物実測図１（S＝１／４）



第16図　日吉遺跡採集遺物実測図２（S＝1／4）

には羽状のハケを施した後、横方向のハケを施す。46の横方向のハケは頸部外面のものとやや下半のものがそれぞれ別に施されているのに対して、47の横方向のハケは一度に施されている。ともに頸部内面にも荒い横方向のハケを施しており、口縁端部に面をもつ。48・49は口縁部二段目がやや外反し、口縁部外面に刺突文が施されていない。体部外面には羽状のハケを施し、48は頸部下半に横方向のハケを確認できる。ともに頸部内面に横方向のハケを施さず、口縁端部の面取りもやや不明瞭である。頸部外面屈曲部に沈線は確認できない。

以上の特徴から、45はＳ字甕０類、46・47がＳ字甕Ａ類、48・49はＳ字甕Ｂ類に分類でき、赤塚による廻間Ⅰ式～廻間Ⅱ式の範疇で捉えることができるだろう*。

また、柱状で中空の脚部をもち、透孔の位置が低い66の高杯が山中式に遡る可能性をもつ**。その他の図示した土器の中に廻間Ⅲ式以降に降るものは確認できず、現段階ではこれらの土器を山中式から廻間Ⅱ式を中心とした時期に属する遺物であると考えておきたい。

71・72は古代の土師器である。71は甕である。口縁端部をつまみ上げ、頸部以下の外面に縦方向のハケを施し、内面には横方向のハケを施す。体部はほとんど残存していないが、長胴甕の可能性が少なくないと考える。72は遺存状態が非常に悪く、詳細は不明である。

73～98は須恵器である。73～77は蓋、78～90は杯、91・92は壺、93は鉢あるいは甕の口縁部、94は壺、95～98は有台盤である。詳細が明らかでないものもあるが、そのほとんどを尾野のⅣ期新段階からⅤ期新段階の範疇に位置づけることができると考える***。そして少数ではあるが、73の受け部をもつ蓋が尾野のⅣ期古段階まで遡り、77の折り返しをもたない蓋や98の逆台形の高台をもち、底径がやや小さい有台盤がⅥ期まで降る可能性をもつだろう。

99～112は灰釉陶器で、99～108が椀、109～111が皿、112が瓶類である。102と108を除いて黒笹90号窯式～東山72号窯式の範疇で捉えることができるだろう。102は底部外面に墨書があるが、内容を判読できなかったため、なるべく忠実に図示した。遺存した中での観察では施釉範囲は底部内面のみであるが、断面方形の付け高台をもち、黒笹14号窯式に遡る可能性をもつ。また、108は高台断面が三角形を呈し、やや外に開く。藤澤による椀Ｂに分類できるもので、百代寺窯式に属するものであろう****。この２つは斎藤による猿投窯第Ⅴ期第１小期及び第Ⅵ期第３小期に位置づけることができる資料である*****。

113は白磁の椀で肉厚な玉縁状口縁をもつ。白磁椀Ⅳ類に分類されるもので、11世紀後半から12世紀前半の資料である******。

114～125は山茶碗で、114～121は椀、123～125は小椀である。122は詳細が不明であるが、残りのうち114を除いてすべて第４型式から第６型式の範疇で捉えることができるだろう。中でも第５型式に属するものが多い。114は口縁端部がやや尖っており、体部が直線的に伸びることから第７型式か第８型式まで降るものと考える。また、図示はできなかったが、採集した山茶碗の中には第３型式に遡る資料や均質手の胎土をもつものも確認できている。

---

* 赤塚次郎1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
** 赤塚次郎1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集
*** 尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』
**** 藤澤良祐1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』
***** 斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３
****** 太宰府市教育委員会2000『太宰府城坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』

126は平瓦であり、凹面に縄の圧痕が残る。凸面は遺存状態が悪く詳細は不明である。

以上から、日吉遺跡はおおよそ２世紀には養老町宇田の五社神社東側一帯に出現し、象鼻山１号古墳出現前後である３世紀後半に一度衰退する。その後遺跡が再び勢いをもつのは７世紀中葉になってからである。そして８世紀に最盛期を迎え中近世まで存続するが、その間は大きな断絶期間はなかったものと考える。ただ、当遺跡はその存続期間が長く、不安定な平野部に立地し、広い遺跡範囲をもっている。そのため、異なった範囲や存続時期や性格をもつ多様な遺跡が複合した姿が日吉遺跡の現在の状況であろう。

なお、分布調査の成果からは日吉遺跡が衰退する３世紀後半から６世紀初頭にかけて、その空白期間を埋めるように養老町室原や養老町飯田など周辺に遺跡が出現することが明らかになっている。この衰退期間は象鼻山１号古墳築造以後の象鼻山古墳群の存続期間にほぼ併行しており、日吉地区の古代以前の歴史を考える上で興味深い現象である。さらに、少数ではあるが当遺跡の範囲において瓦を確認できていることにも注意しておきたい。

５．宇田城跡　養老町宇田

養老郡史の中で土岐氏の末流である大野氏が大野郡より蟄居した城として紹介されている*。その参考文献として『濃州城略誌』があげられているが確認することはできなかった。門脇はその所在について明らかでないとしながらも、宇田に堀ノ内の小字があることから大通寺周辺を候補にあげている。しかし、大通寺から小字堀ノ内まで直線で約800m離れており根拠としてはやや弱い。大通寺は日吉遺跡の範囲に含まれ、今回の調査では大通寺周辺から須恵器や灰釉陶器、中世土師器、山茶碗、近世陶器等が採集できている。

６．日吉西遺跡　養老町中、宇田、橋爪、金屋

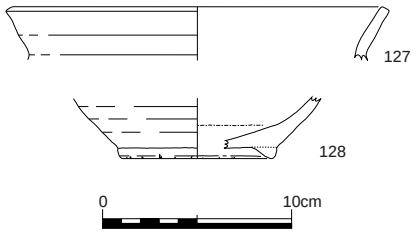
日吉西遺跡は日吉遺跡の西側に位置し、主に牧田川によって形成された扇状地に立地している。標高は13～14mを測り、現在の日吉遺跡の標高より２～３ｍ高い。南側には牧田川の旧堤防が残っている。遺跡に関わる堤防の可能性は低いだろうが、調査の成果からはこれを遺跡の南境と考えた。また、遺跡の西側には若宮八幡神社があるが、その北側及び東側にも部分的ではあるものの堤状の地形が残っている。築堤の方向やその形態から、遺跡南側の旧堤防と一連のものであろう。

第17図　日吉西遺跡（北東から）

今回の調査では古墳時代の須恵器１片、古代の須恵器22片、山茶碗３片、古瀬戸２片、近世陶器１片を採集したほか、石仏や石塔が多く確認できた。特に、養老町橋爪の若宮八幡神社には石仏や五輪塔、宝篋印塔、板碑など約70点が集積されている（第18図）。いずれも中世に属するものである。採集した遺物からは須恵器１片と山茶碗１片を図示できた（第19図の127～128）。

*　門脇黙一1925『養老郡史』

第18図　若宮八幡神社の石仏・石塔（南から）



第19図　日吉西遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

127は須恵器の甕である。口縁部が直線的に開き、端部は面取りを施す。詳細は不明である。

128は山茶碗の椀である。断面三角形のややしっかりした高台をもち、端部には籾殻痕が残る。第５型式に属する資料と考える。

以上にみるように、当遺跡は採集遺物がやや少なく、さらに図示できなかった遺物には小片のものが多い。そのため詳細を明らかすることが難しく、現状では当遺跡の所属時期を概ね古代及び中世と推定するにとどまった。今後の資料の増加をまって再度評価を行いたい。ただ、遺跡内に石仏・石塔が多く確認できていることは当遺跡の評価を考える上で注目できる成果であると考える。

７．郷勺遺跡　養老町宇田、豊

第20図　郷勺遺跡（南から）

郷勺遺跡は日吉遺跡の北東に位置し、北野の集落からイオンタウン養老ショッピングセンターの範囲にかけての扇状地に立地している。遺跡の北側では色目川が東に流れる。

当遺跡の周辺一帯は過去に土地改良事業が行われており、工事に伴い須恵器など多数の遺物が出土したと伝えられている*。養老町郷土資料館にはそのときの出土資料の一部が保管されているが、それらには古墳時代に遡る資料が多くみられる。

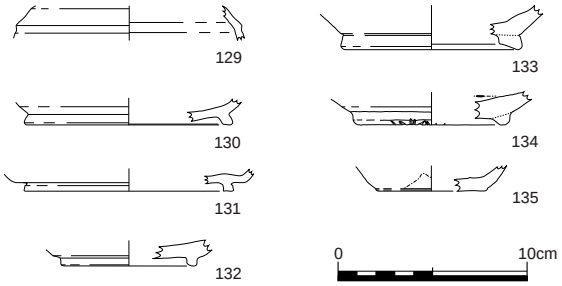
今回の調査では古墳時代の土師器31片、古墳時代の須恵器14片、古代の須恵器124片、灰釉陶器10片、中世土師器８片、山茶碗46片、古瀬戸２片、瓷器系陶器１片、中国製陶磁器１片、近世陶器３片を採集し、そのうち須恵器３片、灰釉陶器２片、山茶碗２片を図示した（第21図の129～135）。

129は須恵器の蓋である。小片のため詳細は不明であるが、口縁部と天井部の外面境に沈線をめぐらせている。口縁端部は欠損しているがおおよそ12cm を超えることが想定でき、尾野によるⅢ期新段階に属するものと考える**。

130･131は須恵器の杯である。130はヘラ切りによって底部を切り離しており、底部がやや下側に突

*　養老町教育委員会1984『のびゆく養老町』
**　尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５-１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』

き出す。131は高台断面がバチ形を呈し、角がわずかにはりだしている。体部よりやや内側に高台がつき、高台外面の付け根部分にヘラによる調整が施されている。130は尾野によるⅣ期、131はⅤ期に属するものであろう*。



第21図　郷勺遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

132・133は灰釉陶器で、132が椀、133が壺である。132は断面方形の付け高台をもち、内面を施釉している。また底部内面には重ね焼きによる高台の痕跡が残り、底部の外面にヘラケズリの痕跡はみられない。黒笹90号窯式のもので、斎藤による猿投窯第Ⅴ期に属するものと考える**。133は逆台形の高台をもち、内面を施釉している。時期の判断は難しいが、132と大きく変わらない時期のものと考えている。

134･135は山茶碗である。134は椀で断面三角形の高台をもち、端部には籾殻痕が残る。底部内面と体部内面の境がわずかに凹むが、第５型式の範疇で捉えておきたい。135は小皿で体部内外面ともに自然釉が掛かっている。底部がわずかに突出しており、134と同じく第５型式に属するものであろう。

また図示できなかったが、この他に荒いハケを施した土器片や細かい波状文を施した須恵器の壺片、細かな刺突文を施した須恵器の壺片、奈良文化財研究所の分類による杯Ｈの蓋及び身、杯Ｇの蓋が確認できている***。過去の土地改良で出土したと伝えられている資料にも円形の透かしを三方向にもつ須恵器の脚や完形の短頸壺、甕が確認できており、少なくとも尾野によるⅢ期には当遺跡は成立していただろう。さらに、宇田様式期にまで遡る可能性もある****。その後、郷勺遺跡は古代や中近世にかけて人々の活動の舞台となる。

なお、古代から近世にかけての採集遺物の所属時期は比較的まんべんなく多時期にわたっているが、斎藤による猿投窯第Ⅵ～Ⅶ期の資料は確認できていない**。

８．六反田遺跡　養老町宇田

六反田遺跡は郷勺遺跡の東約600m に位置し、杉本の集落西側の扇状地に立地している。今回の調査で採集できた遺物は山茶碗５片、古瀬戸１片、瓷器系陶器１片の計７片とわずかであり、遺跡の範囲も小さなものである。

採集された遺物はいずれも小片で図示はできなかったが、そのうち山茶碗の椀と瓷器系陶器の２片については時期を推定できた。山茶碗の椀については第５型式～第６型式、瓷器系陶器は常滑産のもので中野による４型式に属するものである*****。ともに12世紀後半から13世紀前半の中で捉えることができ、そのほかに採集された遺物も中世に属することから12世紀後半から13世紀前半を中心とした時期に短期間存続した遺跡である可能性がある。具体的には、短期間営まれた散居型の集落遺跡を考えておきたい。

---

*　尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』
**　斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３
***　奈良文化財研究所1976『平城京跡発掘調査報告書Ⅶ』
****　赤塚次郎・早野浩二2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第２号　愛知県埋蔵文化財センター
*****　中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

第22図　六反田遺跡（南西から）

第23図　室原遺跡（北東から）

９．室原遺跡　養老町室原

室原遺跡は現在の養老町室原の集落とほぼ同じ場所に位置する遺跡である。西側には境川、北側には泥川、南側には色目川が流れており、これらの川と牧田川が主となって形成した扇状地に立地している。

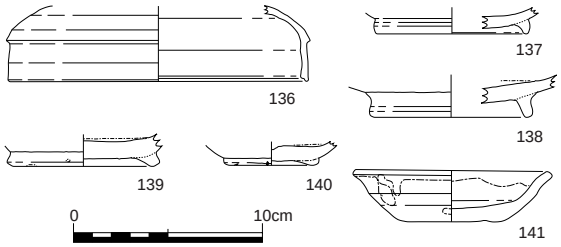
今回の調査では、古墳時代の須恵器２片、古代の須恵器12片、灰釉陶器２片、中世土師器３片、山茶碗14片、古瀬戸１片、瀬戸美濃１片を採集できた。そのうち、須恵器１片、灰釉陶器２片、山茶碗２片、古瀬戸１片を図示できた（第24図の136～141）。

136は須恵器の蓋である。口径は15.6cm と大きく、器壁は薄い。口縁部と天井部の境が明確な段をなし、天井部の回転ヘラケズリ調整は全体の約９割に及ぶ。さらに口縁端部の内側に段をもつ。尾野のⅡ期新段階～Ⅲ期古段階に属し、渡辺の美濃須衛窯Ⅱ期の早い段階に併行するものと考える*。

137・138は灰釉陶器で137は皿、138は椀である。137は高台が低く、体部下端側につけられている。138は高台断面が三角形を呈し、やや外に開く。137は折戸53号窯式～東山72号窯式、138は百代寺窯式のもので、どちらも斎藤による猿投窯第Ⅵ期に属すると考える**。

139・140は山茶碗で139は椀でやや高い高台をもち、高台径は7.4cm を測る。体部内面と底部内面の境には重ね焼きによる高台の痕跡が残る。140は小椀である。やや低めの高台に籾殻痕が残る。ともに第４型式に属するものだろう。

141は古瀬戸で縁釉小皿の完形品である。短く外反する口縁をもち端部は面をなす。底部は糸切りされ、口縁内外面は鉄釉が漬掛けされている。古瀬戸後期に属するものである。



第24図　室原遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

以上により、室原遺跡は古墳時代後期や古代から中世にかけての遺跡である。ただし、採集できた遺物がやや少なく、詳細な存続期間については今後の課題となった。次に記述するが、すぐ東に隣接する室原東遺跡と同時に存続する時期が

*　尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５-１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』
渡辺博人1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋杯の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古学』創刊号

**　斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３

あることも当遺跡を考える上で問題になる。遺物分布の偏りから別の遺跡と考えたが、時期によっては室原東遺跡と一体の遺跡である可能性もあるだろう。

10. 室原東遺跡　養老町室原

室原東遺跡は室原遺跡の北東に隣接しており、室原遺跡と似た立地環境をもつが、現在の地形分類によると扇状地ではなく沖積低地に分類されている。伊勢湾から揖斐川を利用して不破郡へ向かう交通の要衝に位置する重要な遺跡であるが、過去２度にわたって土地改良工事が行われ、遺跡内には多数の遺物が散乱している。遺跡周辺の小字についても工事の際に大きく変更されており、変更前には茶園原や五郎丸といった小字名が残されていた。

第25図　室原東遺跡（西から）

今回の調査では弥生土器１片、古墳時代の土師器205片、古墳時代の須恵器12片、土製品１片、古代の須恵器222片、灰釉陶器137片、中世土師器60片、山茶碗1,300片、古瀬戸10片、瓷器系陶器84片、須恵器系陶器１片、瀬戸美濃１片、中国製陶磁器９片、陶硯１片、瓦４片、近世陶器17片を採集している。中世において最も多数の遺物を採集できた遺跡であり、特に山茶碗が多い。採集できた資料のうち、弥生土器１片、古墳時代の土師器７片、土製品１片、古墳時代の須恵器１片、古代の須恵器４片、灰釉陶器16片、中世土師器２片、山茶碗36片、瓷器系陶器３片、須恵器系陶器１片、中国製陶磁器３片、陶硯１片、瓦３片を図示した（第26・27図の142～220）。

142は弥生土器の高杯である。口縁部外面に凹線文と波状文を施し、口縁端部に面をもつ。藤田英博と高木宏和による美濃西部第Ⅳ様式に属し、尾張の高蔵式に併行すると考える*。

143～149は古墳時代の土師器である。143･144は二重口縁壺で143は二次口縁部外面に刺突文が施されている。柳ヶ坪型壺に分類できるもので、赤塚による松河戸Ⅰ式に属するものと考える**。

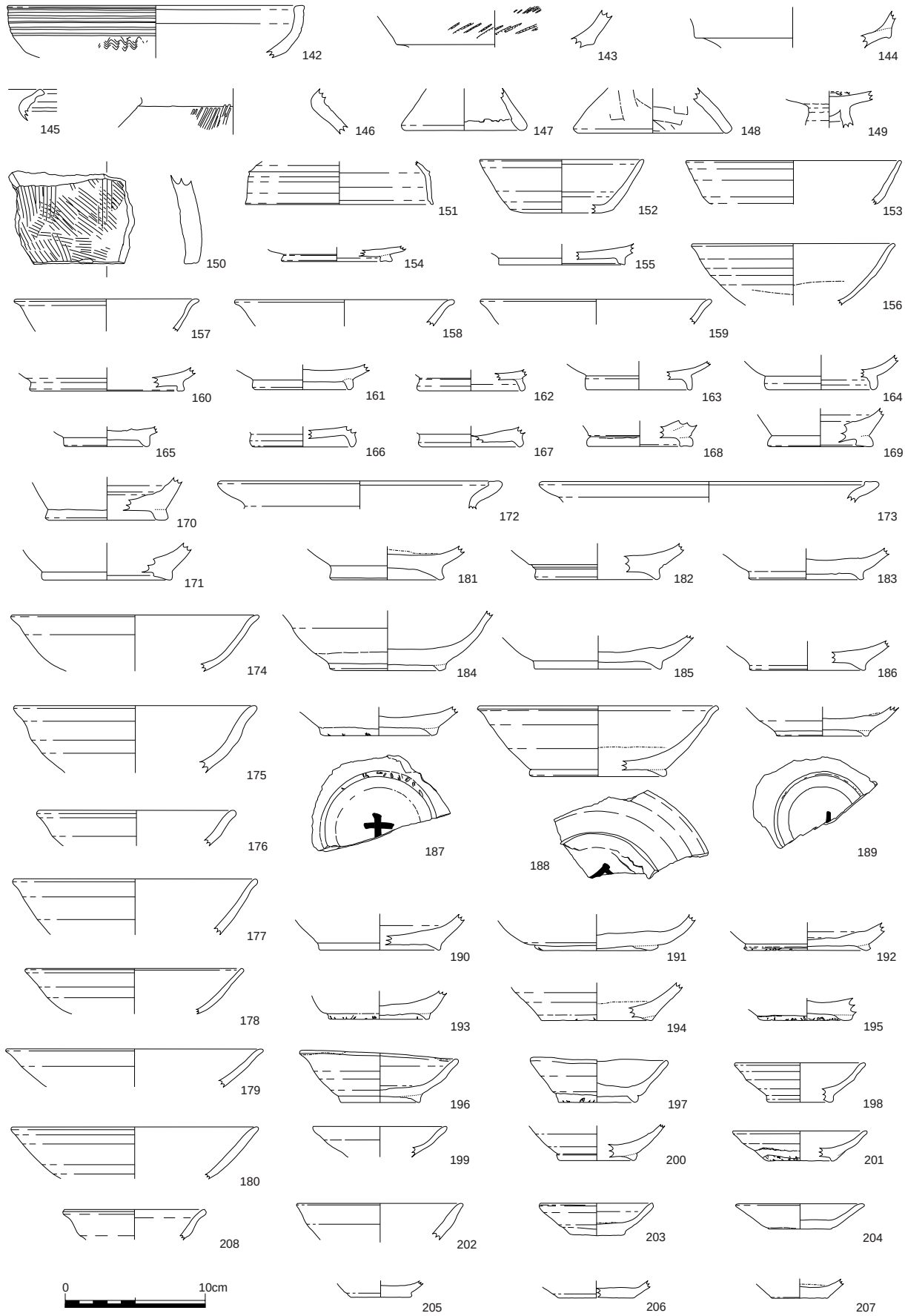
145～148は甕である。145は小片のため口径は不明であるが、口縁端部が肥厚し、面を有している。146は口縁部を欠損しているが、頸部外面屈曲部に強いナデ、体部には荒いハケを施している。器壁も厚い。ともにＳ字甕Ｄ類に分類できると考える**。147・148は脚台で器壁が厚く、やや開いている。147は端部を折り返す。149は高杯の脚の付け根部分であるが、遺存状態が悪い。以上から、145・146は赤塚による松河戸Ⅰ式、147･148は松河戸Ⅰ～Ⅱ式の範疇で捉えることができると考える**。149については詳細が不明であるが、現段階では145～148と大きな時期差はないものと考えておきたい。古墳時代前期後半に属する資料で、おおよそ４世紀のものであろう。

150は土製品で詳細は不明である。外面にハケが施されているが、方向は定まっておらず、埴輪に特徴的な一次調整と二次調整の違いも看取できない。内面にはナデが施されており、径は不明である。遺存状態は悪い。

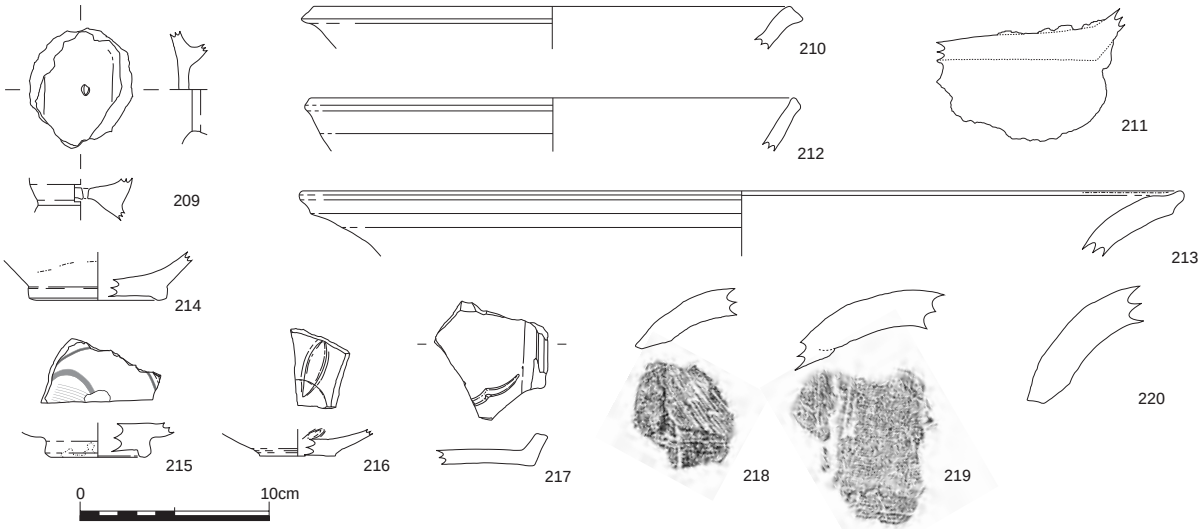
---

*　藤田英博・高木宏和2002「美濃（飛騨）地域」『弥生土器の様式と編年』東海編

**　赤塚次郎1994「松河戸様式の提唱」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集



第26図　室原東遺跡採集遺物実測図１（S＝１／４）



第27図　室原東遺跡採集遺物実測図２（S＝１/４）

151は須恵器の蓋である。口径は13.4cmを測り、器壁は薄く、口縁部と天井部の境に沈線をもつ。天井部はその７割以上を欠損しているが、残存した範囲では天井部に回転ヘラケズリ調整の痕跡はない。口縁端部の内側には段をもっている。以上から、151は尾野のⅢ期中段階に属し、渡辺の美濃須衛窯Ⅱ期に併行するものと考える*。

152～155は須恵器である。152は無台椀、153は椀あるいは杯の口縁部、154・155は杯の底部である。小片が多く、詳細な時期を検討できないが、図示できなかったものにボタン状のつまみをもつ蓋などが確認できており、尾野のⅤ期を中心とした範囲で捉えておきたい**。

156～167は灰釉陶器の椀で、168～171は灰釉陶器の瓶類である。156は器壁が薄く、口縁部の外反や体部下半の張りがやや弱い。ツケガケにより施釉されている。157は口縁部が外反し、体部はやや直線的である。施釉は確認できない。158は口縁端部がやや外反し、体部は直線的である。器壁がやや厚く、口縁端部に施釉を確認できる。159は口縁端部が弱く外反し、施釉は確認できない。160はバチ形の高台をもち、内面を施釉している。外面への施釉は確認できない。161は直接重ね焼きが行われているが、高台接地面近く及び体部内面にハケヌリにより施釉が行われている。162はやや縦長の高台が付されており、器壁がやや薄い。163･164はともに体部下端側に縦長の高台をもつが、164は器壁が厚い。また、163は体部内面が施釉されている。165～167はいずれも底径がやや小さい。165についてはツケガケによる施釉が確認できるが、166・167については施釉が確認できない。168～171はいずれも底部で、168は高台外面の付け根部分にヘラによる調整が施され、体部外面及び底部内外面に施釉が確認できる。160・161については斎藤による猿投窯第Ⅴ期、162～167は折戸53号窯式～東山72号窯式のもので、猿投窯第Ⅵ期に属するものであると考える***。168～171の瓶類については詳細な時期は明らかにできなかった。

172・173は土師器の鍋で、ともに口縁端部を内側へ折り返して肥厚させている。端面はほぼ水平で

*　尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５-１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』
　渡辺博人1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋杯の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古学』創刊号
**　尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』
***　斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３

やや凹む。赤塚による伊勢型鍋Ｂ類、北村和宏による伊勢型鍋Ａ２類に分類できるものである*。

174～209は山茶碗で、美濃須衛産と思われる175・176・202を除いて全て荒肌手である。しかし、図示できなかった資料には少量ではあるが東濃産も確認できている。174～195は椀、196～201が小椀、202が小椀あるいは小皿、203～207が小皿、208が小杯、209が高高台をもつ耳皿である。174・181～183・196を第３型式、175・176・184～186・197～201を第４型式、177～179、187～191、203～205を第５型式、192～195・206・207を第６型式、202を第５型式～第６型式に属すると考える。179については体部が開き気味に立ち上がるものの、口縁端部がやや外反し、丸くおさめられることから第５型式に属すると考えた。181については断面三角形を呈する高台がやや外側に開くことから、百代寺窯式に遡る可能性がある。206・207について206は体部内面と底部内面の境が凹んでおり、207は体部内面と底部内面の境が明確でない。そのため、ともに第７型式まで降らず、第６型式のものと考えた。180は口縁端部を丸くおさめるが、体部が直線的に大きく開いており第９型式に属すると考えた。209は中空の高高台をもち、底部に焼成前穿孔を行っている。類似の耳皿が瀬戸市に所在する旭浄水場窯跡で確認されており、第３～４型式に属する資料に共伴している。旭浄水場窯跡の耳皿底部の穿孔は図示された資料を確認する限り、高台のないものに限られているため、すぐに同一視はできないが209についても現段階では第３～４型式に属すると考えておきたい**。使用方法は不明である。また、182の椀及び200の小椀については内面に墨が付着しており、転用硯の可能性が高い。

210･211は常滑産の瓷器系陶器である。210は片口鉢で中野による７～８型式に属する資料と考える***。211は器種が不明であるが、底部の周囲に焼台が付着しており、未使用製品であり選別行為が行われる以前の製品であった可能性がある。

212は須恵器系陶器の片口鉢である。産地は明らかにできていないが、口縁端部に面をもち、上下に肥厚していないことから11世紀後半から12世紀初頭の資料と考えておきたい。213は瓷器系陶器の甕である。産地及び時期は不明であるが、胎土の観察からは常滑産の可能性は考えにくい。

214・216は白磁、215は青磁で、器種は214・215が椀、216が皿である。214は幅広のやや粗雑な高台をもち、底部の削り出しが浅い。そのため底部の器壁が厚く、白磁椀Ⅳ類に分類できる。11世紀後半から12世紀前半に属する資料であろう****。215は龍泉窯系青磁で断面四角形の高台をもつ。高台内部は刳りが若干浅く底部は肉厚である。また、高台部畳付け及びその内側は露胎している。内面には片彫文と櫛目による草花状の文様が確認できる。椀Ｉ類に分類でき、12世紀中頃から後半のものである。216は底部が僅かにつき出しており、底部と体部の境は明確である。やや上げ底状で、全面施釉後に底部外面の釉を削り取っている。また、内面には花文を確認できる。内部見込みに段をもたないが、皿Ｖ・Ⅵ類の特徴をよく備えており、11世紀後半から12世紀前半のものと考える。

217は陶製の風字硯である。硯背及び硯側を灰釉で施釉し、硯面には宝珠形の装飾を施す。詳細は不明である。218～220は丸瓦である。いずれも、凹面に布目の圧痕を確認できるが、凸面は遺存状態が悪い。布目は細かい。

---

*　赤塚次郎1994「鎌倉・室町時代」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
　北村和宏1996「尾張の伊勢型鍋」『鍋と甕そのデザイン』

**　青木　修1996「旭浄水場窯跡－初期山茶碗窯成立期の様相－」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第４輯』

***　中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

****　太宰府市教育委員会2000『太宰府城坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』

以上から、室原東遺跡は確かなところでは古墳時代前期後半、おおよそ４世紀前半には遺跡西側に出現し、古墳時代を経て古代・中世・近世へと存続した複合遺跡である。特に中世については今回の調査で発見された遺跡のなかで最も多数の遺物が採集できており、その内容も多彩である。中でも、転用硯や陶硯、瓦が確認できたことは、当遺跡に瓦を使用した建物が建ち、文字を使用する有力層が存在したことを示しており、焼台が付着した常滑産の瓷器系陶器や須恵器系陶器は当遺跡が生産地と消費地を結ぶ物流の重要な拠点であったことを示している。具体的には伊藤裕偉による集散地遺跡としての性格を当遺跡に考えておきたい*。また、直接の関係は不明であるが、南に隣接する養老町大坪には条里地割の名残と伝えられる地名が残っている**。

なお以上に記述した資料の中には、２度目の土地改良工事の際に、川地利昭氏が採集し、養老町に寄贈していただいた資料を含んでいる。川地氏の資料には、完形の山茶碗の小椀など重要な資料が多く、良好な状態で保管されていたため当遺跡を理解する上で重要な情報が得られた。記して感謝申し上げる。

11. 井ノ下遺跡　養老町飯田

井ノ下遺跡は日吉遺跡の東約500m に位置しており、南側では小畑川と牧田川が東に流れている。扇状地に立地しており、標高は約５～７ｍを測る。遺跡内の小畑川北側には川に沿って池があり、小畑川堤防を造る際の土取り跡とも伝えられている。

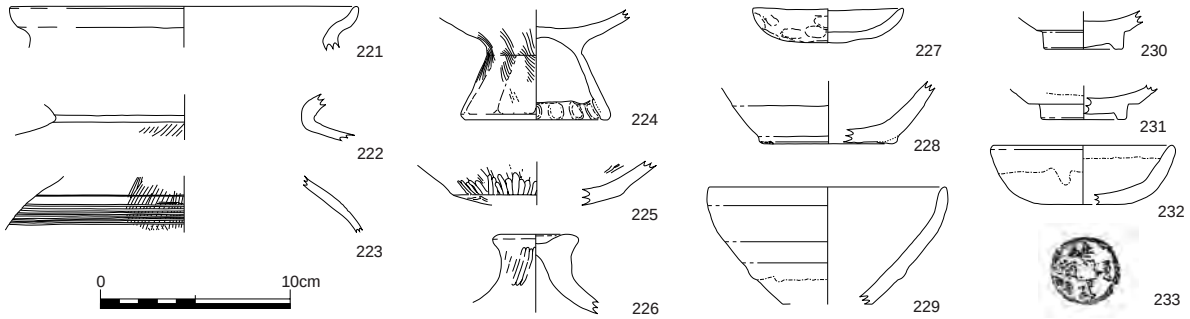
第28図　井ノ下遺跡（北西から）

今回の調査では古墳時代の土師器78片、古墳時代の須恵器４片、古代の土師器１片、古代の須恵器10片、灰釉陶器１片、中世土師器60片、山茶碗８片、古瀬戸５片、瓷器系陶器４片、瀬戸美濃８片、近世土器２片、近世陶器１片、古銭１片を確認している。採集できた資料のうち、古墳時代の土師器６片、中世土師器１片、山茶碗１片、古瀬戸２片、瀬戸美濃１片、近世陶器１片、古銭１片を図示した（第29図の221～233）。

221～226は古墳時代の土師器で221～224が甕、225が高杯、226が蓋である。221は受口状の口縁をもつ甕である。遺存状態が悪く表面の摩滅が著しいが、屈曲部にやや丸みをもち、二段目の口縁がやや外側に開く。222～224はＳ字甕である。いずれも口縁部は残っていないが、222は頸部調整技法、223は屈曲部より下降した位置へのヨコハケ、224は台部の明瞭な折り返しや逆三角形状のハケが確認できる。225は杯部に段をもつ有段高杯である。小片が多く、詳細は明らかにできないが222～224については先述した諸特徴からＳ字甕Ｂ～Ｃ類に分類でき、廻間Ⅱ式～廻間Ⅲ式に属すると考える***。また、その他に図示した土師器についても現段階ではほぼ同時期の資料と考えておきたい。

227は土師器皿である。手づくね成形されており、口径は7.8cm を測る。外面にナデ調整は施されていない。15～16世紀に属する資料であろう。228は山茶碗の椀である。高台が低く、体部はやや直線

*　伊藤裕偉2001「中世における集散地遺跡の分析」『考古学ジャーナル478』
**　養老町教育委員会1984『のびゆく養老町』
***　赤塚次郎1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集



第29図　井ノ下遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

的に開く。また、底部内面と体部内面の境が比較的明瞭であり、第６～７型式に属すると考える。

229～231は天目茶碗で、古瀬戸後期から大窯期に属する資料であろう。232は縁釉小皿で、口縁端部内外面に錆釉を施釉している。内面に煤の付着が確認でき、灯明皿として使用された可能性が高い。近世に属するものと考える。233は洪武通宝である。

以上から、井ノ下遺跡はおおよそ古墳時代前期前半にあたる３世紀中頃に日吉遺跡の下流に出現し、その後古代、中世、近世において人々の活動の舞台となった遺跡である。採集できた資料は小片が多く、詳細な検討は難しいが、古墳時代前期前半の資料が比較的多い。反対に古墳時代中期から中世にかけては数が少なく今後の資料の増加をまって評価を行いたい。なお、井ノ下遺跡で得られた古墳時代前期前半の資料は、象鼻山１号古墳の築造時期とほぼ同時期のものであり、日吉遺跡と室原東遺跡の空白期間を埋める資料でもある。

12. 蛇持経塚跡　養老町蛇持

第30図　蛇持経塚跡（南から）

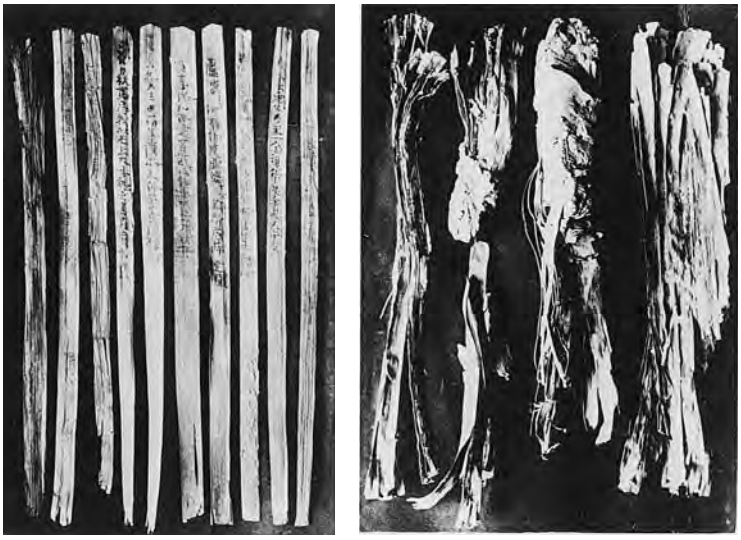
蛇持経塚跡は昭和37年７月に養老町の史跡に指定されている遺跡である。昭和13年に小川栄一により蛇持柿経発見地として紹介されており、管見ではこれが当遺跡の最も古い報告になる*。

小川によると昭和８年の救農土木工事において低地の地上げを目的とした土取りの際に色目川南堤防の南の池の底からこけら経が多数出土し、その内10巻余りを採集したとされている（第31図）。また、採集地点付近には弥生土器や花瓶形の焼き物が発見されたとも記述されており、現段階では当遺跡の所属時期を中世と考えておきたい。なお、出土地点は現在の色目排水機場北西約120m の池の中である。

また経塚とする本遺跡の名称であるが、徳島県敷地遺跡では河道で柿経が確認されており、またその他の発見例にも奈良県元興寺の本堂の天井裏、富山県堀切遺跡の溝など経塚から出土していない例が多数ある。本例も池の底での発見であり、経塚跡とはすぐに断定できないと考える。本書では町史跡の名称を用いるが今後の課題としてあげておきたい。なお、今回の調査では遺物を採集できておら

＊　小川栄一1938「蛇持柿経発見地」『岐阜県史蹟名勝天然記念物報告書』第七輯

ず、土器・陶器片があったとする小川の記述を裏付けることはできなかった。しかし、柿経出土地点と最も近い中世遺跡との距離は直線で約700m離れており、当遺跡周辺に中世の遺跡が存在する可能性は十分にあるだろう。



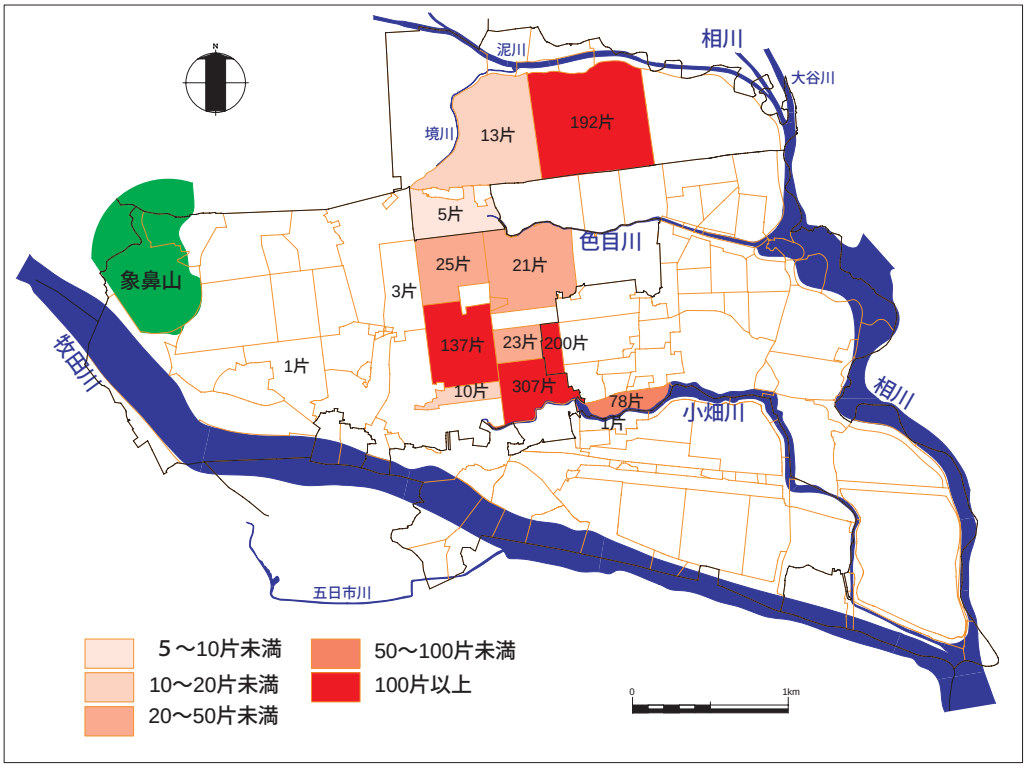
第31図　蛇持経塚跡出土柿経
（小川1938「蛇持柿経発見地」『岐阜県史蹟名勝天然記念物報告書』第７輯より）

（３）遺物の散布状態とその立地

１．日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古墳時代土師器の散布状態（第32図）

日吉・室原・小畑・多芸東部地区の分布調査で採集した古墳時代土師器片の総数は1,016片に上る。その内、80.2%（806片）が扇状地、19.8%（210片）が沖積低地で採集されており、これらはおおよそ古墳時代の前半に属するものが多い。

ただ、当地域の弥生時代後期末から古墳時代初頭の平野部はその形成過程から三角州帯に分類されており、微地形レベルでは自然堤防と旧河道が主であったと推定されている*。そのため現在の扇状地で採集した80.2%の遺物についても、今後さらに立地を検証していく必要があるだろう。



第32図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古墳時代土師器の散布状態（S＝1/50,000）

＊　高橋　学1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』

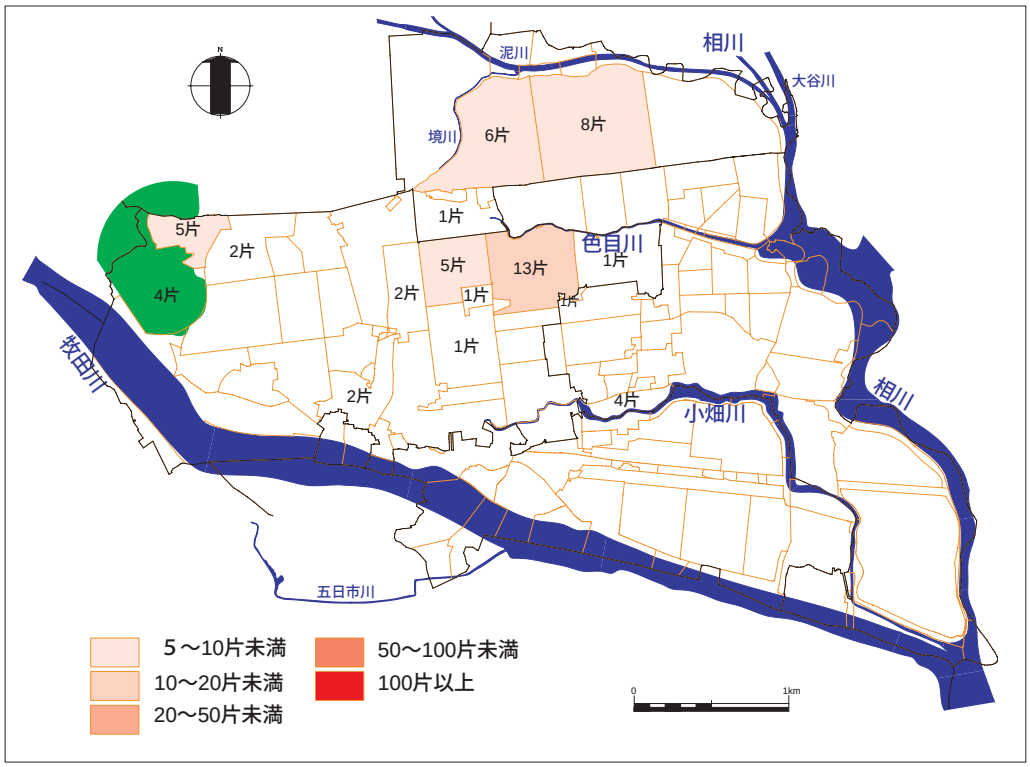
しかし、古墳時代の土師器の約８割が現在の扇状地で採集されているということは、少なくとも当地域においてより急速に拡大した三角州帯の中でも、さらに陸地化の早かった谷口付近から集落が進出していった結果を示していると考える。また、古墳時代の土師器が多数散布している付近には中小河川の湧水点が存在している。ただし、活断層が想定されている象鼻山のすぐ東側では遺物は採集されておらず、この地形は避けている。

この他、分布調査では確認できなかったが、発掘調査を進めている象鼻山山頂からは古墳時代の土師器が確認できており、これらは造墓に伴うものであった*。そのため、古墳時代の特に前半においては、遺跡の立地が三角州帯を中心とした平野部と丘陵の大きく二つに区別でき、当時の遺跡がその目的にあわせた立地選択を行っていたと考えておきたい。

２．日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古墳時代須恵器の散布状態（第33図）

日吉・室原・小畑・多芸東部地区の分布調査で採集した古墳時代須恵器片の総数は56片であり、おおよそ古墳時代後半に属するものが多い。これらの立地ごとの内訳は、丘陵が４片で7.1％、扇状地が39片で69.6％、沖積低地が13片で23.2％である。この内、丘陵の須恵器の採集地点は象鼻山65･66号古墳のすぐ近くであり、古墳に伴う遺物である可能性が高い。そのため、古墳時代の須恵器を立地毎の比率で見れば、古墳時代土師器と近似した結果と評価でき、やはり目的にあわせて遺跡の立地を選択しているだろう。

しかし、その散布状態は古墳時代の土師器に比べ、採集破片数が減少した反面、採集できた細別区画数はやや増加しており、土師器に比べ散布範囲が広くなっていることが指摘できる。この結果を陸



第33図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古墳時代須恵器の散布状態（S ＝ 1 /50,000）

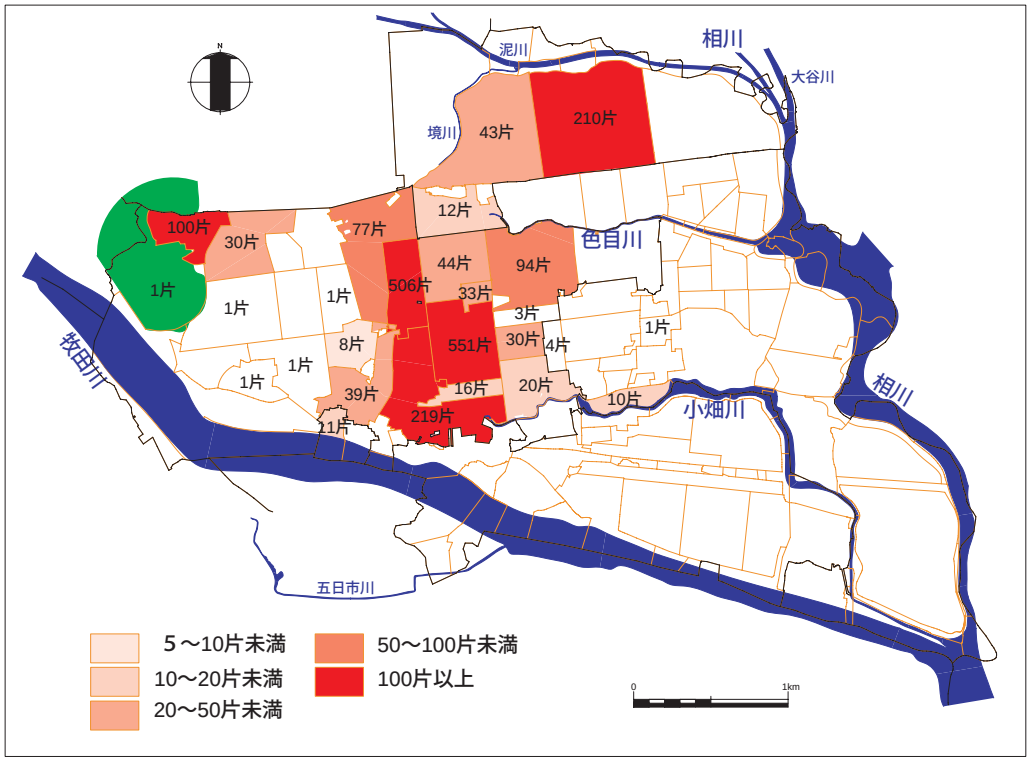
＊　養老町教育委員会2006『象鼻山古墳群第３次発掘調査現地説明会資料』

地の拡大によるものとも評価できるが、高橋学は古墳時代末から古代頃になると当地域の河川の地形形成能力が低下し、微起伏を埋積するような消極的な堆積が続き、その結果平地の居住環境が悪化したことを指摘している*。そのため、ここでは広範囲の遺物散布と採集遺物の減少の背景を自然的な要因や利用地形の増加などに加え、当時期の集落が遺跡として把握しにくい形態をとった可能性を考えておきたい。

なお、古墳時代の須恵器が平地に広く散布することは古代の須恵器とやや似ている。しかし、遺物採集量は古代の方が著しく多い。

3．日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古代須恵器の散布状態（第34図）

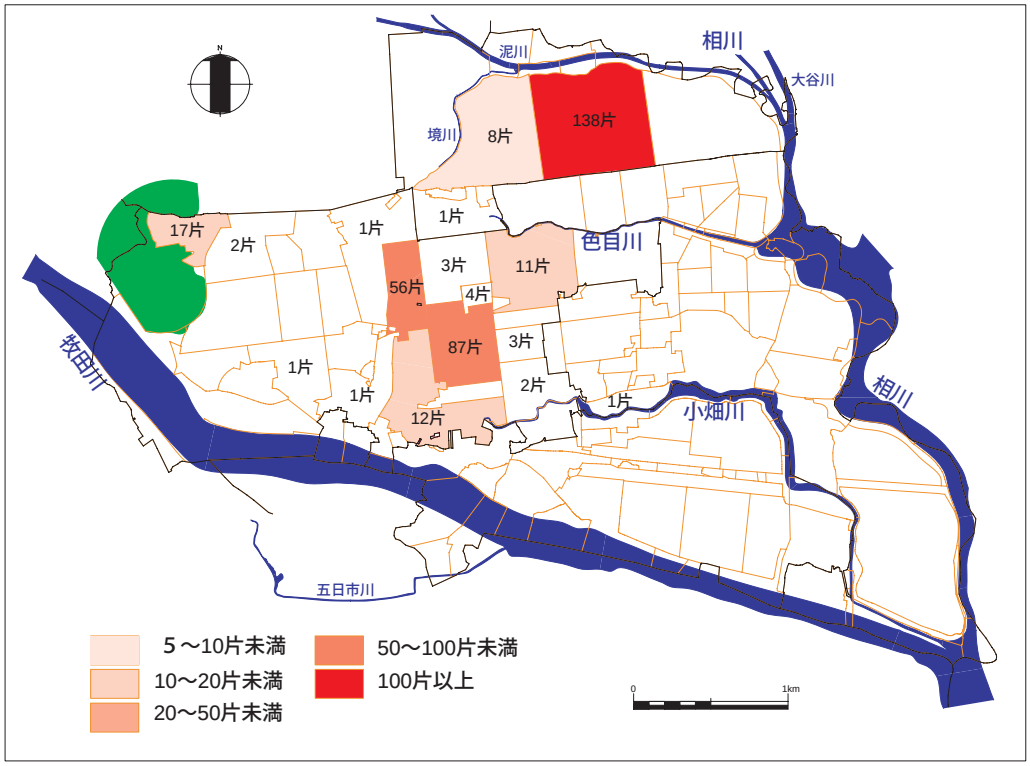
日吉・室原・小畑・多芸東部地区の分布調査で採集した古代須恵器片の総数は2,066片に上る。その立地毎の内訳は、丘陵が１片で０％、扇状地が1,813片で87.8％、沖積低地が252片で12.2％であり、遺物の採集地点がほぼ平地に限られている。これは、前段階に顕著であった墓域としての丘陵部の利用がなくなったことを示しているだろう。その反面、平地においては採集破片数と遺物を採集できた細別区画数がピークを迎えている。このことはそれまでの平地の多様な利用に加え、古代の遺跡が長期に存続したことを示すと考える。また古代遺跡の長期的存続の背景の一つには当地区の土地の安定という自然的要因があったと考えるが、その有無は今後の発掘調査で明らかにしたい。



第34図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古代須恵器の散布状態（S＝1/50,000）

＊　高橋　学1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』

4．日吉・室原・小畑・多芸東部地区の灰釉陶器の散布状態（第35図）



第35図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の灰釉陶器の散布状態（S＝1/50,000）

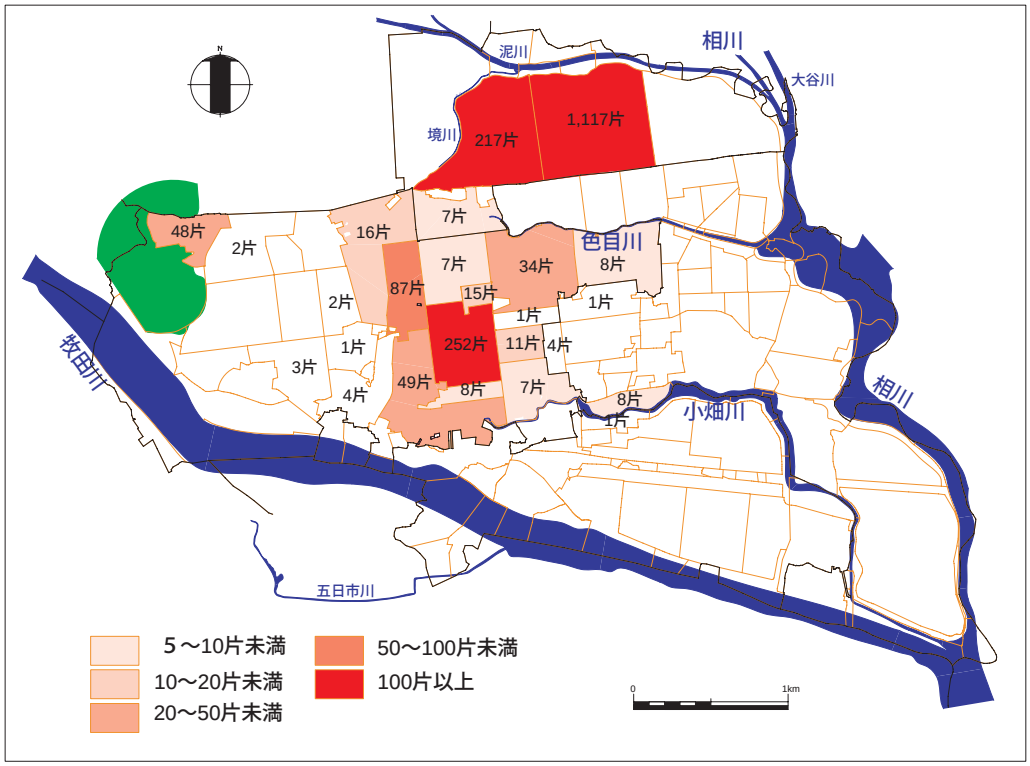
日吉・室原・小畑・多芸東部地区の分布調査で採集した灰釉陶器片の総数は348片に上り、その立地毎の内訳は、扇状地が203片で58.3%、沖積低地が145片で41.7%である。古代須恵器と同様に平地を中心とした立地をとるが、沖積低地の比率が高くなっており、当地区の陸地化がさらに進んでいることが想定できる。また、散布状態についても古代の須恵器とほぼ同様の範囲をとるが、養老町室原と養老町豊・宇田の２箇所でやや集中して採集されており、ここから当地区の段丘面の安定化が進んだこともあわせて想定できる。これは当地域の古代末から中世初頭の時期を河床低下期に位置づけ、完新世に形成された段丘面上での洪水による地形面更新の停止や地下水位の低下など地形環境が変化し、河川氾濫する範囲は限定されていったとする高橋の想定とほぼ一致する*。

なお、当地区の灰釉陶器の散布状態は、ほぼ同様の在り方で山茶碗の散布状態に移行することから、当地区の中世において平地に立地する遺跡は古代後期に端緒をもつものが多いだろう。

5．日吉・室原・小畑・多芸東部地区の山茶碗の散布状態（第36図）

日吉・室原・小畑・多芸東部地区の分布調査で採集した山茶碗片の総数は1,910片に上る。その内訳は扇状地が587片で30.7%、沖積低地が1,323片で69.3%であるが、これは焼台が付着した常滑産瓷器系陶器や瓦、硯を採集でき、集散地という特殊な性格を想定できる室原東遺跡が沖積低地に立地しているためであり、室原東遺跡を除けば沖積低地での採集片数は23片と少ない。この他、分布調査では遺物を採集できなかったが、象鼻山北側の丘陵部には栗原九十九坊跡が立地しており、中世において再

＊　高橋　学1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』



第36図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の山茶碗の散布状態（S＝1/50,000）

び山地及び丘陵の積極的な利用が進んだことを確認できる。

また、山茶碗の散布状態は灰釉陶器の散布状態と同様に広範囲にわたり、さらに養老町室原及び養老町豊・宇田の２箇所では引き続き多数の山茶碗が集中して採集されている。古代後期に引き続いての安定した立地に加え、山地への進出などさらなる利用地形の多様化がなされたことが中世における大きな特徴であろう。

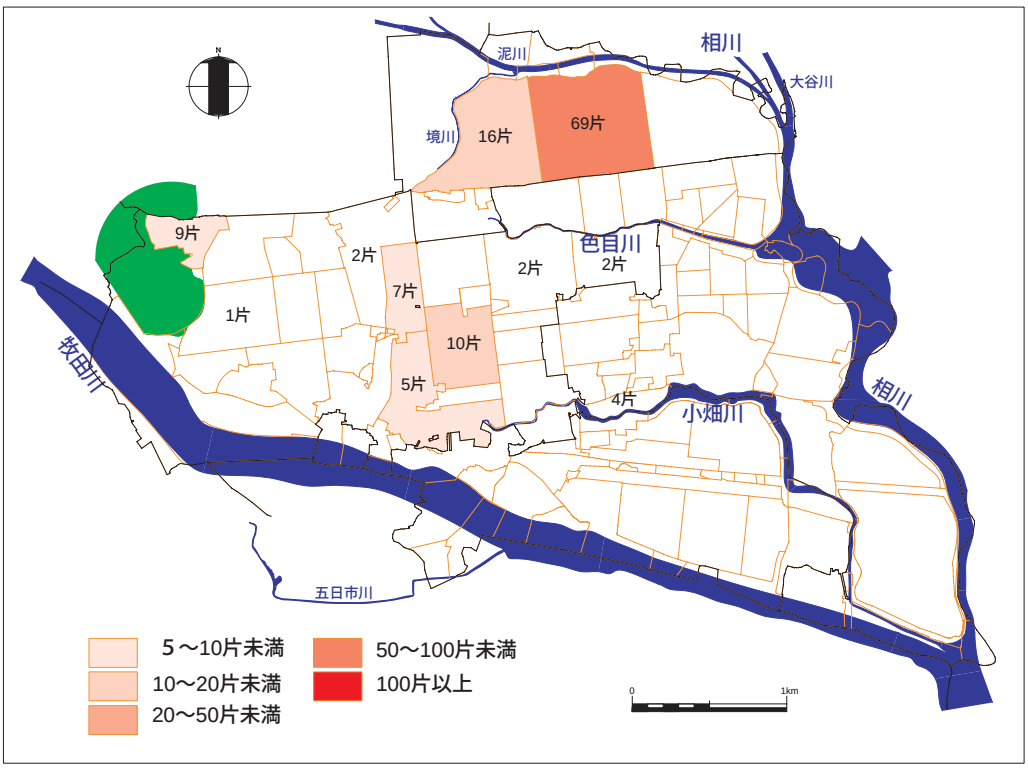
なお、山地に立地する中世の遺跡には当地区の栗原九十九坊跡のように寺院跡といった一般の集落とは区別できるものが多いと推察している。

６．日吉・室原・小畑・多芸東部地区の瓷器系陶器の散布状態（第37図）

日吉・室原・小畑・多芸東部地区の分布調査で採集した瓷器系陶器片の総数は127片で、その内訳は扇状地が42片で33.1％、沖積低地が85片で66.9％と他の遺物に比べ破片数はやや少ないものの山茶碗とほぼ近似した立地を示す。そのため、先述した内容とほぼ同じことが瓷器系陶器の散布状態からも指摘できるだろう。ただ、室原東遺跡において焼台がついた常滑産瓷器系陶器の底部が採集できていることから考えれば、当地区での瓷器系陶器の採集遺物片数はやや少ないように思う。室原東遺跡が不破郡へ向かう河川交通の要衝にあたることが一つの要因として想像できるが、室原東遺跡の詳細な解明と共に今後の課題にあげておきたい。

７．その他の遺物の散布状態

以上で示した遺物以外のものとして、弥生土器２片、古代土師器17片、古瀬戸60片、中国製陶磁器12片、瀬戸美濃11片などがある。



第37図　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の瓷器系陶器の散布状態（S＝1/50,000）

旧石器時代及び縄文時代に関しては今回の調査では遺物を採集できていないが、象鼻山山頂部の発掘調査において後期旧石器時代の石器や縄文時代に属する石鏃が確認できている。その一方、平野部では遺物を全く確認できていないが、当地区のほとんどの平野部が約6,400年前に海に水没し、当時期の地表面が厚い海成層の下にあることから、そうした地域での旧石器時代や縄文時代前半の遺跡の発見は困難なものであることが指摘されている*。そのため、遺物が確認できなかった平野部においても地表下深くに旧石器時代や縄文時代の遺跡が存在する可能性は考えておかなければならないだろう。

また、弥生時代に関しては日吉遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の資料を除けば、わずかに２片が平地において採集されているのみである。今後の資料の蓄積をまたなければならないが、当地区が削平よりも埋積を受けやすいことを考えれば、少数の遺物も無視することはできないであろう。

（４）小結

日吉・室原・小畑・多芸東部地区では分布調査によって81遺跡を確認し、5,836片の遺物を採集することができた。これらの資料は遺跡保護に役立つだけでなく、地域を網羅し広域の情報が得られる点において発掘調査の成果と補い合う歴史資料として活用できるものである。

日吉・室原・小畑・多芸東部地区の多くは牧田川や相川、小畑川、色目川等の河川によって形成された扇状地や沖積低地であり、西に僅かに丘陵がある。この中で、最も継続的に利用されているのは、日吉地区の中央部及びやや東側の牧田川扇状地と室原地区の東側の沖積低地であり、古墳時代以降各時代の遺物が多量に散布している。これに対し、おおよそ標高５ｍ以下の小畑地区の中心部から東側

＊　高橋　学1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』

第２表　日吉・室原・小畑・多芸東部地区の遺物採集地点の立地

立地		古墳時代 土師器	古墳時代 須恵器	古代須恵器	灰釉陶器	山茶碗	瓷器系陶器
丘陵	破片数合計		4	1			
	総合計の％		7.1％	0.0％			
扇状地	破片数合計	806	39	1,813	203	587	42
	総合計の％	79.3％	69.6％	87.8％	58.3％	30.7％	33.1％
沖積低地	破片数合計	210	13	252	145	1,323	85
	総合計の％	20.7％	23.2％	12.2％	41.7％	69.3％	66.9％
合計	破片数合計	1,016	56	2,066	348	1,910	127
	総合計の％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

や多芸東部地区では中世以前の利用は確認できていない。また、西の丘陵は旧石器時代、古墳時代、中世においては積極的に利用されているが、縄文時代においてはわずかに石鏃を確認できるのみであり、古代には遺物はほとんど散布していない。

以上、主に養老町で河北地区と呼ばれる当地区は縄文時代の海進最盛期以降、牧田川や相川などの河川が運んでくる多量の土砂により広大な扇状地と沖積低地が僅かな時間で形成され、そこに古墳時代以降急激に人々が住みつき、様々な地形を開発していく過程を分布調査によって知ることができた。

このような過程をもつ当地区の扇状地や沖積低地は広大である一方、しばしば起こる牧田川などの氾濫によって不安定であり、そうした地形の開発には相応の技術や相当な労働力の投下などが必要である。しかし、こうした地域の開発に成功したならば、その後には大きな生産力をもつ耕地が得られただろう。今回の調査結果からは、当地区の本格的な開発がはじまった時期を弥生時代末から古墳時代初頭に想定し、そうした開発を可能にした集団が象鼻山古墳群の築造に深く関わったと考えておきたい。なお、弥生時代末から古墳時代初頭の象鼻山からは当時の海が眺望できたと考えられており、西には関ヶ原に通じる山地、東には濃尾平野、南には伊勢湾という当地区のおかれた特殊な環境もその主要な要因であっただろう*。

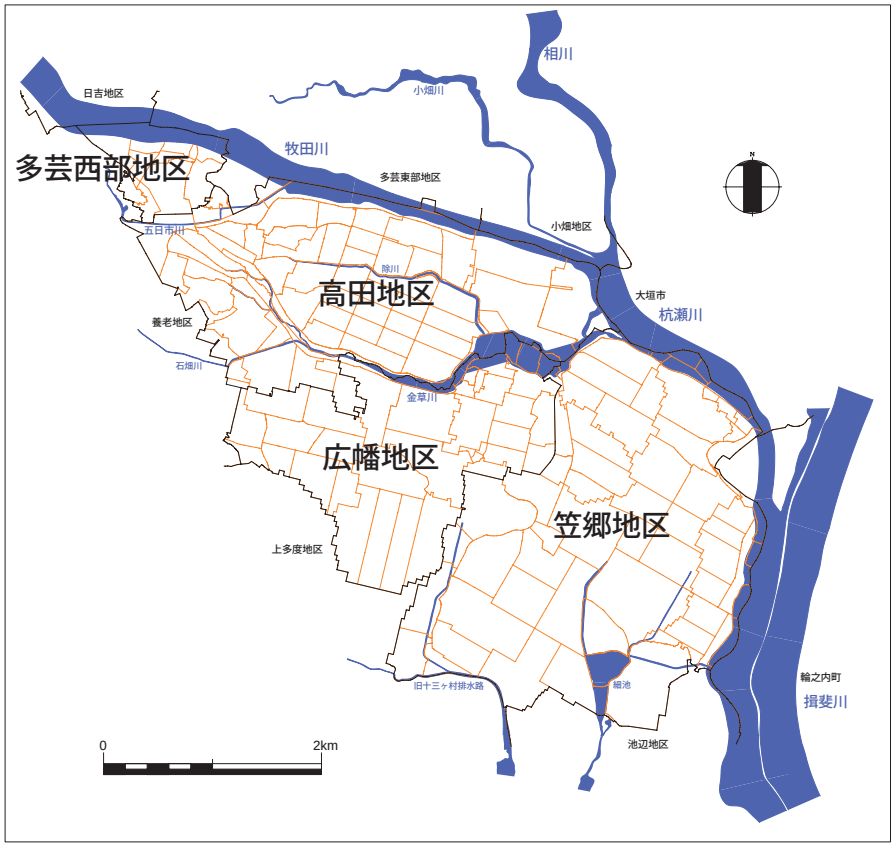
２　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区

（１）　調査地区について

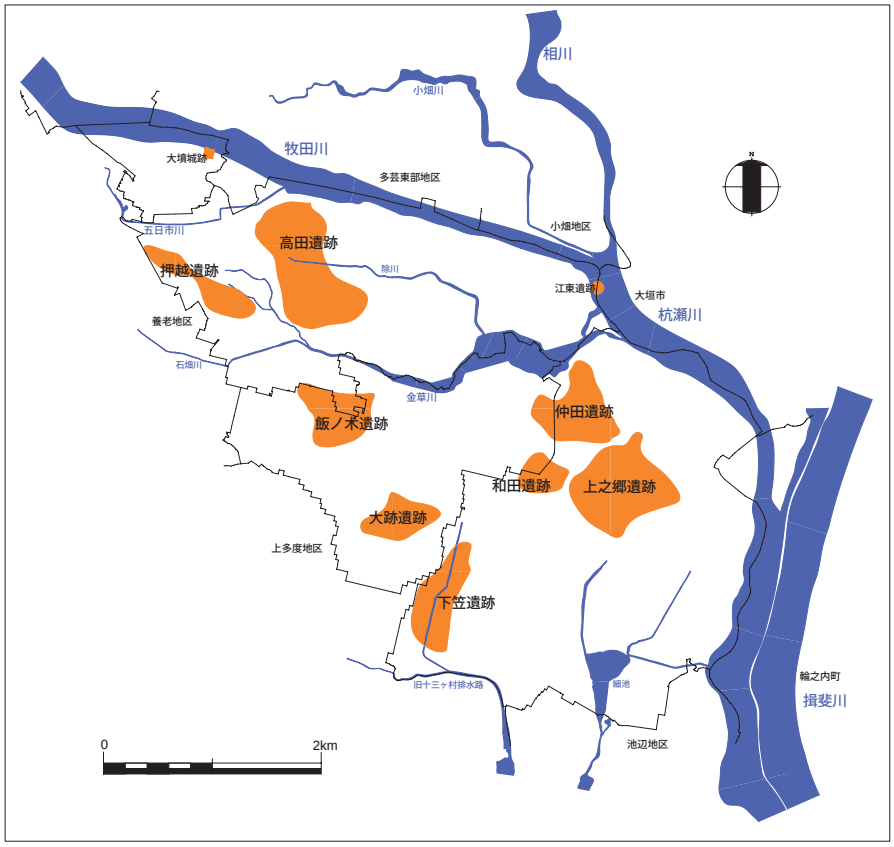
多芸西部・高田・広幡・笠郷地区は養老町のほぼ中央部に位置し、牧田川の南側一帯を中心に広がっている。また、東側には揖斐川が南流しており、当地区のほとんどはこれに杭瀬川を加えた河川によって形成された扇状地と沖積低地が占めている。そのため、微地形レベルでは自然堤防や後背湿地、旧河道を主としており、遺跡の立地は自然堤防を中心とした微高地に集中することが予想された地区である。

調査は日吉・室原・小畑・多芸東部地区と同様に、小字界を参考に調査区を細別して実施した（第38図）。

＊　赤塚次郎1994「３・４世紀の東海地域」『東日本の古墳の出現』
　　笹栗　拓2006「養老町祖父江における表採資料の紹介」『美濃の考古学』第９号



第38図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の細別（S＝1/70,000）



第39図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の遺跡の位置（S＝1/70,000）

（２）遺跡と採集遺物

１．大墳城跡　養老町三神町

大墳城跡は美濃明細記の中で丸毛兵庫頭や丸毛三郎兵衛兼頼などが城主を務めた城として紹介され、その位置については旧荘福寺の境内があてられている*。現在、旧荘福寺の位置には河川改修工事により牧田川の堤防が造られている。

丸毛兵庫頭や丸毛三郎兵衛兼頼が城主を務めたとされていることから16世紀後半の遺跡の可能性を指摘できるが、今回の調査では遺物は採集できず、詳細については明らかにできなかった。

第40図　大墳城跡（北西から）

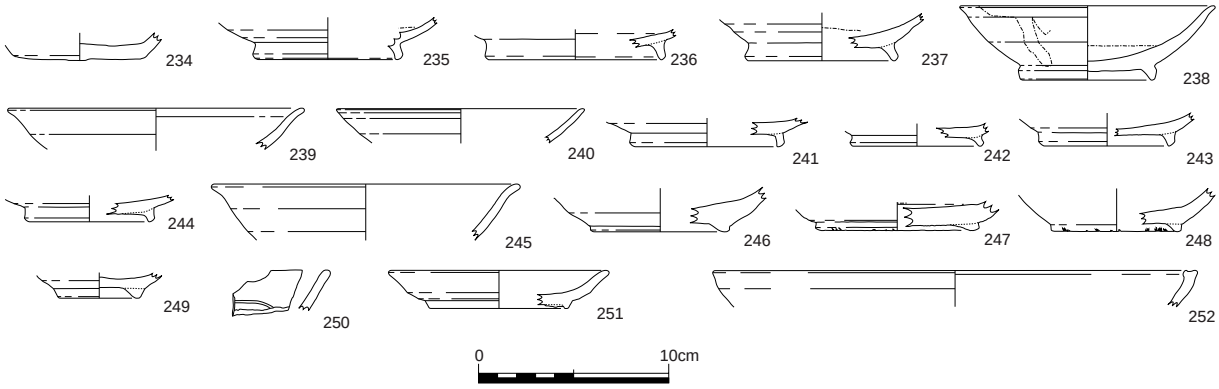
２．高田遺跡　養老町高田

高田遺跡は養老山地から東に約２ kmの地点に位置している。主に牧田川によって形成された標高約６～８ mの扇状地に立地し、北には牧田川、遺跡内には除川が流れている。当遺跡は東側を中心に一部区画整理が行われている。

今回の調査では、古代の須恵器11片、灰釉陶器30片、中世土師器９片、山茶碗32片、古瀬戸８片、瓷器系陶器１片、中国製陶磁器１片、瀬戸美濃１片、近世土器１片、近世陶器４片を採集できた。この内、古代の須恵器１片、灰釉陶器10片、山茶碗４片、中国産陶磁器１片、瀬戸美濃１片、近世土器１片を図示した（第42図の234～252）。

第41図　高田遺跡（北東から）

234は須恵器の杯である。腰部が屈曲し、高台をもたない。底部をヘラ切りにより切り離しており、



第42図　高田遺跡採集遺物実測図（Ｓ＝１／４）

*　平塚正雄1932『美濃明細記』

尾野によるⅣ期中～新段階に属すると考える*。

235～244は灰釉陶器で、235～238が椀、239～244は皿である。235は三日月形の高台をもち、体部下半がやや張る。236･237はやや縦長の高台をもち、236はやや器壁が薄く、237はやや厚い。238はやや幅広の低い高台をもち、口縁部はわずかに外反する。体部は直線的で、底部外面及び体部下半のケズリ調整は省略される。ツケガケにより施釉されている。

239･240は口縁部で、239は口縁部がわずかに外反しているが、240は外反しない。241はやや幅広で内側下半の内湾や外側下方の稜が弱い三日月形高台をもつ。242～244はさらに高台が低く、三日月形をなさない。

以上から235・241については黒笹90号窯式、236～240・242～244については折戸53号窯式～東山72号窯式の範疇で捉えることができるだろう。これらは斎藤による猿投窯第Ⅴ期第２小期から第Ⅵ期第２小期に属するものである**。また、小片のため図示できなかったが、輪花椀も確認できている。

246～249は山茶碗で、246～248が椀、249が小椀である。246～248はいずれもやや低い高台をもつが、246は体部内面と底部内面の境が不明瞭なのに対し、247･248はナデによる凹みをもち、その境が明瞭である。ただ、247は底部の器壁がやや厚い。そのため、246については第５型式、247については第５型式～第６型式、248は第６型式に属すると考える。249は底部が小さく第４型式に属するだろう。また、小片のため図示できなかったが、東濃産と推定できる山茶碗も確認できた。

250は龍泉窯系青磁の椀である。直口の口縁部をもつが、小片のため詳細は明らかにできなかった。251は瀬戸美濃で大窯第１段階に属すると考える。252はホウロクで近世に属する資料である。

以上から高田遺跡はおおよそ８世紀には出現し、中近世まで存続した遺跡である。この高田地区を続日本紀にみえる高田毗登足人の祖父が壬申の乱における戦功として得た所領や同じく続日本紀にみえる高田寺に比定する意見があるが、今回の調査ではそれを裏付ける成果は得られなかった***。

３．押越遺跡　養老町押越

第43図　押越遺跡（西から）

押越遺跡は養老山地の東に約１ km の地点、高田遺跡と養老山地の中間に位置する遺跡である。標高約８～11m を測る扇状地に立地し、北西から南東に向けてやや細長い遺跡範囲をもつ。

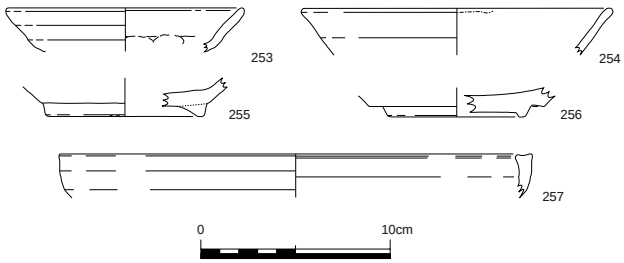
今回の調査では、中世の土師器４片、山茶碗６片、瓷器系陶器３片、中国製陶磁器１片、近世土器１片、近世陶器１片を採集できた。この内、中世土師器１片、山茶碗２片、近世陶器１片、近世土器１片を図示した（第44図の253～257）。

253は土師器皿である。手づくね成形されており、口径は12.4cm を測る。外面には１段ナデが施されており、体部が外反気味に伸びる。小野木学に

*　尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５-１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』
**　斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３
***　岡田　啓1931『新撰美濃志』

よるB2b類に分類できると考える*。

254・255は山茶碗の椀である。254は口縁端部が丸く、体部はほぼ直線的に立ち上がる。255は体部内面と底部内面の境にナデによる凹みをもち、その境が明瞭である。254を第５型式～第６型式、255を第６型式に属する資料と考える。



第44図　押越遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

256は陶器で皿の底部である。削り出しによって作られた高台をもつ。詳細は不明であるが、近世に属する資料であると考える。257はホウロクである。近世に属すると考えるがやはり詳細は不明である。

以上から押越遺跡は中世及び近世の遺跡である。詳細な存続期間は不明であるが、採集遺物が少なく、中世の遺物についてはほぼ13世紀頃に限られていることから、中世においては短期間の遺跡であったことが想定できる。また、押越遺跡の南には旧家として知られる渋谷家があり、押越城の候補地にあげられているが、今回の調査では遺跡としての裏付けが得られなかったため遺跡として扱わなかった**。今後の資料の増加を待って検討したい。

４．江東遺跡　養老町烏江・大垣市

江東遺跡は烏江橋の東約100m、牧田川の河川内に位置する遺跡である。今回の調査では遺物は採集できなかったが、近鉄養老線牧田川橋脚工事の際に、古墳時代土師器の高杯１片、古代の須恵器の甕２片、中世に属するであろう土錘が１点採集されている。いずれも摩滅が著しく、図示はできなかった。遺物の遺存状態が悪いことから、他の遺跡から採集地点まで河川によって流されてきた可能性もあるが、すぐ近くでは当該時期の遺跡は確認されておらず、また牧田川が天井川であることなどから今回の調査では当採集地点を遺跡として評価した。

第45図　江東遺跡（西から）

なお、沖積低地における現在の地形環境が、遺跡が営まれた時期と異なる場合が珍しくないことは高橋によっても指摘されており、養老町の天井川内において今後さらに遺跡が発見される可能性は十分にあると考えている***。

---

*　小野木学1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第２号
**　岐阜県教育委員会2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第１集（西濃地区・本巣郡）
***　高橋　学1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』

第46図　飯ノ木遺跡（北西から）

５．飯ノ木遺跡　養老町飯ノ木・押越・ロヶ島

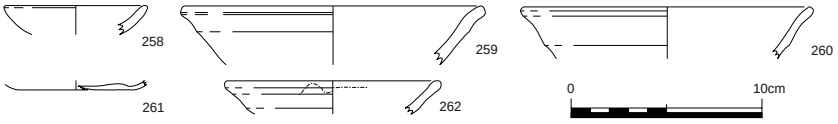
飯ノ木遺跡は養老山地の東約２ kmに位置し、主に牧田川によって形成された扇状地の先端部分に立地している。今回の調査では古代の須恵器２片、灰釉陶器１片、中世土師器９片、山茶碗４片、古瀬戸２片、瓷器系陶器３片、中国製陶磁器２片を採集できた。この内、中世土師器１片、山茶碗３片、古瀬戸１片を図示した（第47図の258～262）。

258は土師器皿で口径は7.2cmを測る。小片で遺存状態が悪いため、詳細は不明である。

259～261は山茶碗である。259は美濃須衛窯の製品で椀である。260は荒肌手の椀であり、ともに体部はやや直線的であるが、259は口径が15.6cmを測り、少し大きい。259は第５型式に併行する資料、260は第６型式に属する資料と考える。261は均質手の皿である。器壁は薄く、底部内面と体部内面の境にナデによる凹みをもつ。また、底部内面に静止ナデ、底部外面に板状圧痕が確認できる。体部は残存していないが、山内伸浩による大洞東窯式～生田２号窯式の範疇で捉えることができるだろう*。

262は古瀬戸の縁釉小皿である。口縁部がやや外反し、端部は丸い。灰釉がツケガケにより施釉されており、古瀬戸後期に属すると考える。

以上から飯ノ木遺跡は中世の遺跡であり、13世紀頃には成立していただろう。採集資料が少なく、その存続期間を考えるには不十分であるが、養老町史史料編に掲載されている資料や多岐神社懸仏群では14世紀から16世紀にかけて、春木郷や榛郷の名称が確認できる。すぐに当遺跡をこれらの集落に比定することはできないが、分布調査から想定できる存続期間とも矛盾がなく、現段階では当遺跡は断絶することなく中世を通して存続していた可能性が高いと考えておきたい**。



第47図　飯ノ木遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

６．大跡遺跡　養老町大跡

大跡遺跡は現在の養老町大跡の集落の南側に位置し、標高約２～３ mの沖積低地に立地している。今回の調査では中世土師器10片、山茶碗４片を採集できた。採集数としてはやや少ないが、当地区が削平よりも埋積を受けやすい地形であり、遺物の時期が中世で一括できることなどから、遺跡として評価した。採集できた遺物の内、山茶碗２片を図示した（第49図の263・264）。

263は均質手の椀である。口縁端部がやや尖っている。底部は残存していないが、口縁部から想定できる器高からはそれほどの扁平化はみられない。山内による明和１号窯式～大畑大洞４号窯式の範

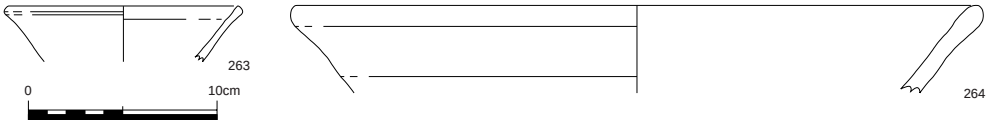
*　山内伸浩2004「美濃（東濃）窯の山茶碗」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』
**　養老町1974『養老町史史料編上』
山下　立2000「岐阜・多岐神社の懸仏群」『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要』第16号

疇で捉えることができるだろう*。264は片口鉢の口縁部で荒肌手の胎土をもつ。体部は直線的で、口縁部はやや肥厚し、丸くおさめられる。藤澤による第７型式に属する資料と考える**。

以上から、大跡遺跡はおおよそ13世紀後半から14世紀前半頃の短期間の遺跡であることが想定できる。ただし、養老町史史料編に掲載されている応永10年（1403）の「足利義満袖判御教書案」には多藝庄内大跡の記載がある。さらに検討が必要であるが、分布調査から想定できる遺跡の存続期間以後にも当遺跡が存続しているか、あるいは遺跡が移動した可能性を示す資料であるだろう***。

第48図　大跡遺跡（南東から）

また、大跡遺跡の北側にある現在の養老町大跡の集落内に周囲を堀のような地形で囲まれた旧家があり、これに城跡の可能性を考えるものもある****。しかし、今回の調査では遺物を採集できず、その裏付けが得られなかったため遺跡として扱わなかった。今後の資料の増加を待って検討したい。



第49図　大跡遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

７．仲田遺跡　養老町栗笠・上之郷・岩道

仲田遺跡は杭瀬川と金草川の合流地点から南へ約800mの地点に位置し、標高約２～３ mの沖積低地に立地する。当遺跡から遺物が出土することは、昭和57年に既に田中育次により報告されており、管見ではこれが仲田遺跡の最初の記録である*****。

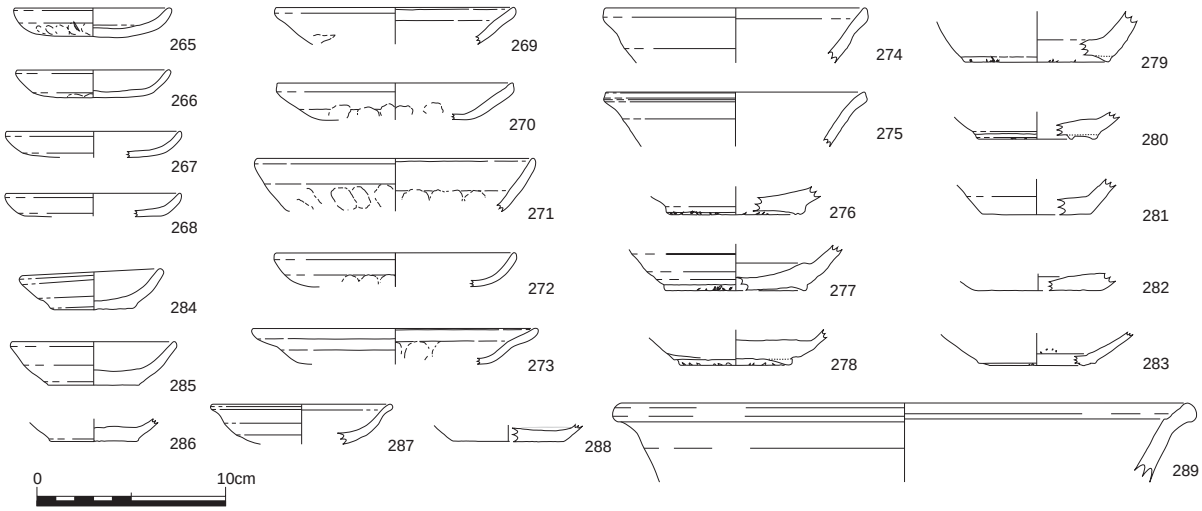
今回の調査では中世土師器162片、山茶碗134片、古瀬戸７片、瓷器系陶器６片、中国製陶磁器１片、瀬戸美濃３片、近世陶器１片を採集した。また、平成13年11月の道路拡幅工事の際に中世土師器137片、山茶碗16片、瓷器系陶器２片、中国製陶磁器１片を確認している。

第50図　仲田遺跡（南から）

これらの内、中世土師器９片、山茶碗14片、中国製陶磁器１片、古瀬戸１片を図示した（第51図の

---

*　山内伸浩2004「美濃（東濃）窯の山茶碗」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』
**　岡本直久2004「瀬戸窯・猿投窯山茶碗の編年について」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』
***　養老町1974『養老町史史料編上』
****　岐阜県教育委員会2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第１集（西濃地区・本巣郡）
*****　田中育次1982『栗笠の獅子舞』



第51図　仲田遺跡出土・採集遺物実測図（S＝1／4）

265～289)。

265～273は土師器皿で、いずれも手づくね成形されている。265～268は口径が８～９ cm の範囲におさまり、小皿に分類できるだろう。いずれも外面に１段ナデを施し、底部から体部にかけてほぼ均一な厚さをもつが、265は器壁が厚く、268はやや器高が低い。

269～272は口径が12～15cm の範囲におさまり、いずれも大皿に分類できる。269～271はやや器壁が厚く、外面に１段ナデを施し、直線的ないしは外反気味に伸びる体部をもつ。272は同じく外面に１段ナデを施し、直線的ないしは外反気味に伸びる体部をもつが器壁がやや薄い。273は口径が15cm を測り、器壁が薄く、体部は大きく外反する。体部外面の調整では横ナデを確認できたが、指頭圧痕は確認できなかった。

以上から265を小野木による A2a 類、266・267を A2b 類、268を A2c 類、269～271を B2a 類、272を B2b 類に分類でき、273は井川祥子による B1類に分類できると考える*。

274～287は山茶碗で、274～283は椀、284～286は小皿、287は小杯である。うち283のみ均質手である。276～280・284～286を第６型式、274・275を第７～８型式、281を第８型式、282を第９型式、283を山内による大洞東１号窯式に属すると考える**。287については、詳細は不明である。なお図示できなかったが、他に第５型式に属する山茶碗も少量確認できている。

288は白磁の皿である。底部は平底で、全面に施釉している。ただし底部外面については施釉がまばらで一部露胎している。Ⅸ類に分類できる資料で、13世紀後半から14世紀前半に位置づけることができるだろう***。289は古瀬戸の折縁深皿である。口縁部の屈曲がやや弱く、古瀬戸中期Ⅰ～Ⅱ期に属すると考える。

以上から、仲田遺跡は確かなところではおおよそ13世紀初頭から、14世紀前半を中心とした遺跡である。また、その後についても283の山茶碗や瀬戸美濃が確認できていることから中世末期まで存続

*　小野木学1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第２号
　井川祥子1997「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿－中濃地域を中心として－」『美濃の考古学』第２号
**　山内伸浩2004「美濃（東濃）窯の山茶碗」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』
***　太宰府市教育委員会2000『太宰府城坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』

していた可能性を指摘できるだろう。

なお、この遺跡が所在する一帯を福地の遺名から倭名類聚鈔に記載される「冨上郷」に比定する意見があるが、当遺跡からは古代に遡る遺物は確認できておらず、今回の分布調査の成果からは考えにくい*。

8．上之郷遺跡　養老町上之郷・栗笠・下笠・船附

上之郷遺跡は標高２ｍ前後の沖積低地に立地し、仲田遺跡の南西に隣接した遺跡である。

今回の調査では、古代の須恵器１片、中世土師器17片、山茶碗42片、古瀬戸１片、瓷器系陶器４片、瀬戸美濃３片、近世陶器２片、寛永通宝１点を採集し、その内中世土師器２片、山茶碗６片、瀬戸美濃１片を図示した（第53図の290～298）。

第52図　上之郷遺跡（北西から）

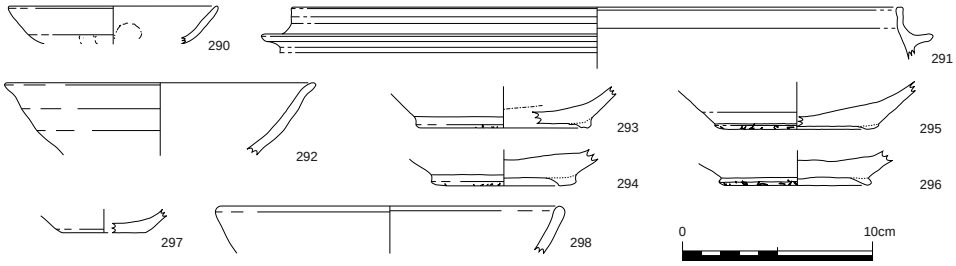
290は土師器皿で口径は11cmを測る。体部外面には１段ナデを施し、直線的に伸びる体部をもつ。器壁はやや薄い。小野木によるB2b類に分類できるだろう**。

291は羽釜である。ほぼ水平方向に突出する鍔と内傾したあと垂直方向に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は面をなすが、内側への折り曲げはみられない。口縁内側には浅い凹みがめぐる。体部は残存していないが、以上の特徴から北村和宏によるＡ２類に分類できると考える***。

292～297は山茶碗で全て荒肌手である。292～296は椀で、292は第５型式、293～296は第６型式に属すると考える。297は小皿で第７～８型式のものであろう。また、図示はできなかったが、採集した山茶碗の中に均質手のものも確認できている。

298は瀬戸美濃の平椀である。小片のため詳細は明らかにできなかった。

以上から上之郷遺跡は仲田遺跡と同様に13世紀初頭から14世紀前半に最盛期を迎えた遺跡であり、近世まで存続した可能性をもつ遺跡である。この二つの遺跡は距離も近接しているが、遺物分布の偏



第53図　上之郷遺跡採集遺物実測図（Ｓ＝１／４）

---

*　岡田　啓1931『新撰美濃志』
　田中育次1982『栗笠の獅子舞』
**　小野木学1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第２号
***　北村和宏1996「尾張の羽釜」『鍋と甕そのデザイン』

りからそれぞれを別の遺跡として評価した。

9．和田遺跡　養老町下笠・岩道

第54図　和田遺跡（北西から）

第55図　和田遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

和田遺跡は標高約２ｍの沖積低地に立地する遺跡である。今回の調査で採集できた遺物は中世土師器が２片、山茶碗が８片と非常に少ないが、仲田遺跡や上之郷遺跡に近く、採集できた遺物の時期も両遺跡の存続期間内であるため、遺跡として評価した。図示できた遺物は山茶碗１片のみである（第55図の299）。

299は椀の口縁部で荒肌手である。体部はやや直線的であるが、口縁端部は比較的丸くおさめられており、第６型式に属すると考える。

以上から和田遺跡は仲田遺跡及び上之郷遺跡の最盛期であった13世紀前半頃に短期間存続した遺跡であったと考える。今後資料の増加を待って検討するべきだが、その成立要因に両遺跡との関わりを考えておきたい。

10. 下笠遺跡　養老町下笠

第56図　下笠遺跡（北西から）

第57図　下笠遺跡北側の輪中堤（北西から）

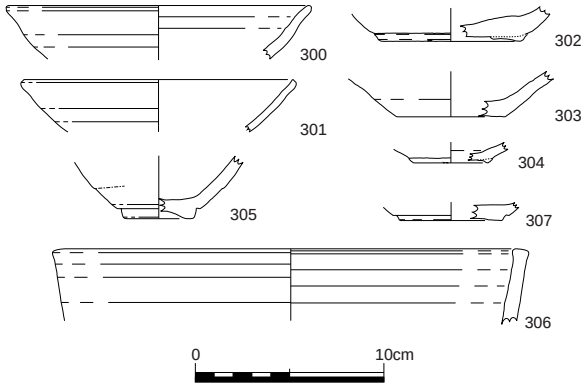
下笠遺跡は養老山地から東に約３ kmの地点に位置する南北に長い遺跡で、標高約２ｍ前後の沖積低地に立地している。遺跡の北側中央部には南北に輪中堤がつくられており、遺跡の南側には市場千軒の石碑が建てられている。

今回の調査では、中世土師器56片、山茶碗18片、古瀬戸７片、瓷器系陶器３片、瀬戸美濃を７片、近世陶器５片を採集できた。このうち山茶碗５片、古瀬戸２片、瀬戸美濃１片を図示した（第58図の300～307）。

300～304は山茶碗の椀で、301･304の２片は均質手である。300は口縁部がやや外反しており、器高はやや低い。第５型式に属すると考える。301は口縁端部が尖り、体部は直線的に伸びる。器高は低

く、山内による大洞東１号窯式に属するだろう*。302は高台が低く、底部内面と体部内面の境にナデによる凹みがあり、第６型式に属すると考える。

303は高台をもたず、平底である。体部は直線的に伸びるが、やや底部が厚い。器形の特徴を考えれば藤澤による第10型式から第11型式に属するもので、遡っても第８型式までであろう。しかし、おおよそこれまでの研究によれば美濃西部では当該時期の山茶碗は均質手のものが主である**。303の胎土は筆者の観察では荒いものの、色調はやや黄色く、均質手の山茶碗に分類できる可能性も考えておきたい。均質手であれば、山内による白土原１号窯式まで遡るだろう*。304は小片であるが、高台が低く、底径も小さい。また、底部内面が浅く凹むことから山内による大洞東１号窯式に属すると考える。



第58図　下笠遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

305は天目茶碗で内反り高台をもつ。高台脇の削り込みは狭く、高台周辺は露胎している。高台の削り込みはやや深く、古瀬戸後Ⅳ期に属するだろう。

306は古瀬戸の桶である。灰釉及び錆釉が施されており、古瀬戸後期に属すると考える。

307は瀬戸美濃である。小片のため詳細は不明であるが、皿類であろう。透明度の高い緑色を呈する灰釉を施し、貫入がみられる。

以上から下笠遺跡は他の笠郷地区の遺跡と同様におおよそ13世紀初頭に成立し、近世まで存続した遺跡であると考えておきたい。なお、当地には約800年前に大跡新田から下笠の懐にかけて市場千軒といわれるほどに栄えた集落と市場があったと伝えられている***。分布調査の成果からは遺跡の性格を検討できるだけの資料は得られていないが、遺跡の時期や範囲がよく符合しており注意しておきたい。

なお、遺跡の北側に南北に走る輪中堤が確認できているが、遺跡の周囲ではなく、中心に築かれていることから当遺跡に伴うものではなく、遺跡の廃絶後のものであろう。

（３）遺物の散布状態とその立地

１．多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の古代須恵器の散布状態（第59図）

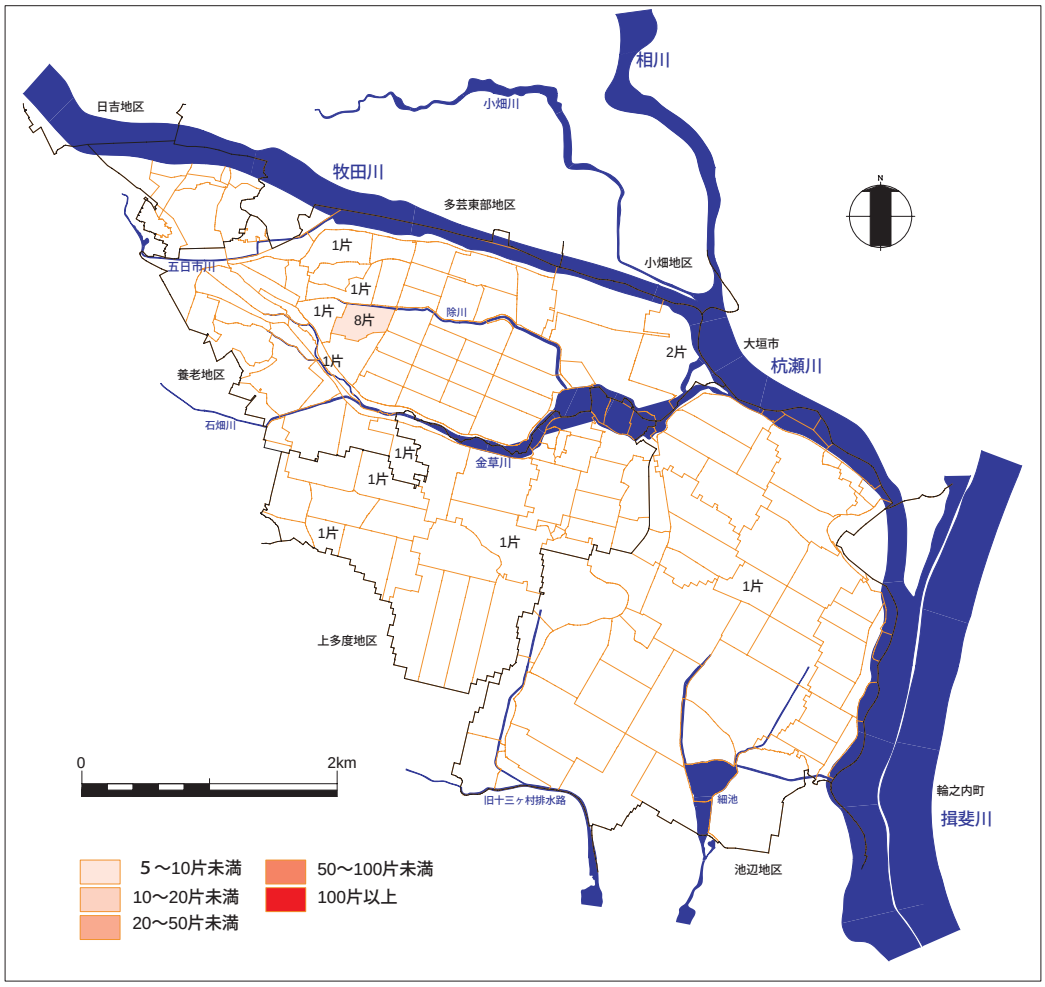
多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の分布調査で採集した古代須恵器片の総数は19片である。その内、78.9%（15片）が扇状地、21.1%（４片）が沖積低地で採集されており、この内まとまった資料が採集できた地点は扇状地に限られている。また、この調査区では古墳時代以前の遺物はほとんど採集できておらず、当地域における集落の進出は現段階では古代であったと推定できる。なお、当調査区の東

---

*　山内伸浩2004「美濃（東濃）窯の山茶碗」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』

**　藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター
小野木学2003「岐阜県における山茶碗分布と流通」『美濃の考古学』第６号

***　養老町立笠郷小学校・PTA 町制40周年記念実行委員会1994『ふるさと笠郷』



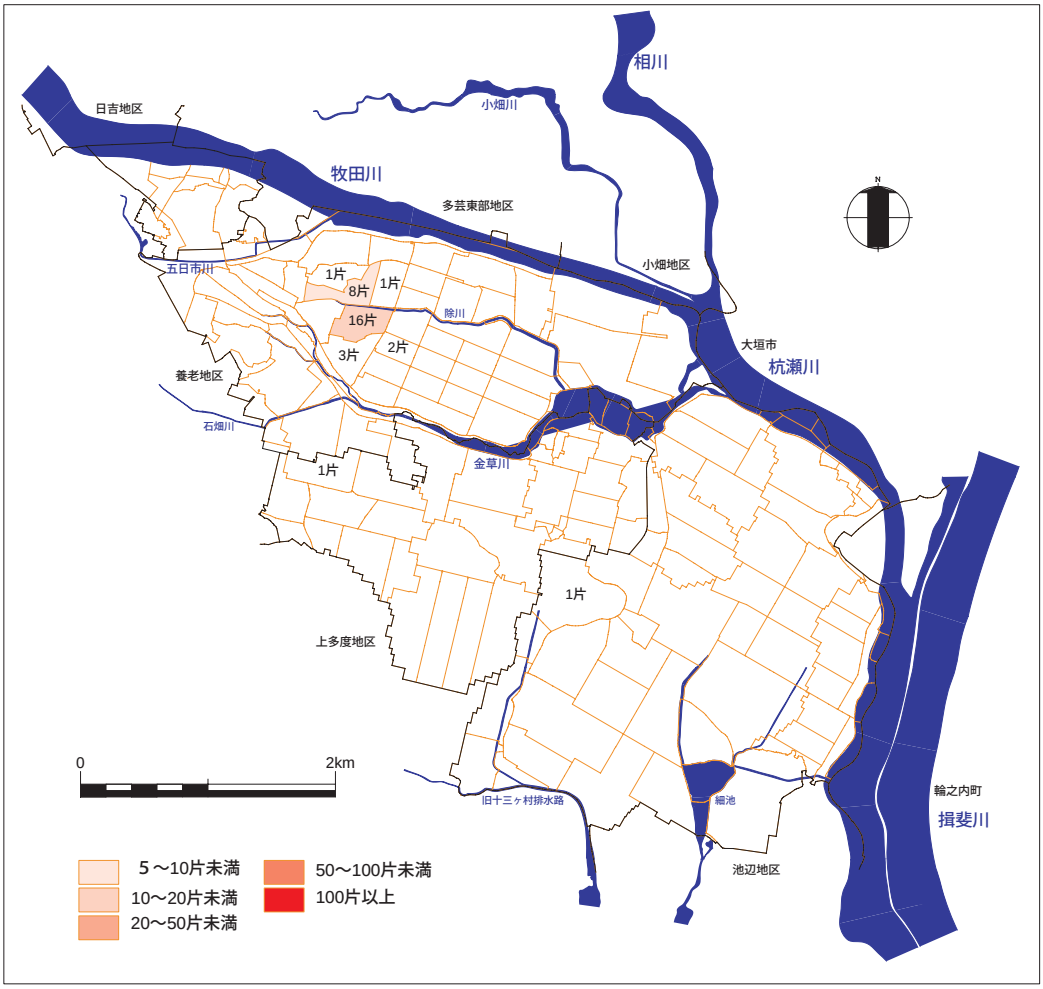
第59図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の古代須恵器の散布状態（S＝1/60,000）

側にあたる笠郷地区においては古代須恵器の採集片数は１片のみであり、笠郷地区への集落の本格的な進出は中世をまたなければならなかっただろう。そのため古代における当地域は、谷口に近い部分のみ集落等が進出できる要件を満たしていたと考える。

２．多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の灰釉陶器の散布状態（第60図）

多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の分布調査で採集した灰釉陶器片の総数は33片である。古代の須恵器に比べやや採集片数が増加するものの、立地毎の採集比率については、97.0%（32片）が扇状地、3.0%（１片）が沖積低地であり、散布状況とともに古代須恵器に近似した結果が得られている。ただし、採集片数が増加することや高田地区に採集地点がやや集中していることは日吉・室原・小畑・多芸東部地区と同様に当地区においても段丘面の安定化が進んでいた結果を示しているだろう。ただ、その散布範囲は古代須恵器から大きく変化しておらず、東側の沖積低地の陸地化は依然として進んでいなかったと考える。

なお、広幡地区において、現段階では遺跡として評価できるような集中地点は確認できていないが古代の須恵器や灰釉陶器がわずかに採集されており、古代において広幡地区に集落が進出していた可能性は考えておきたい。

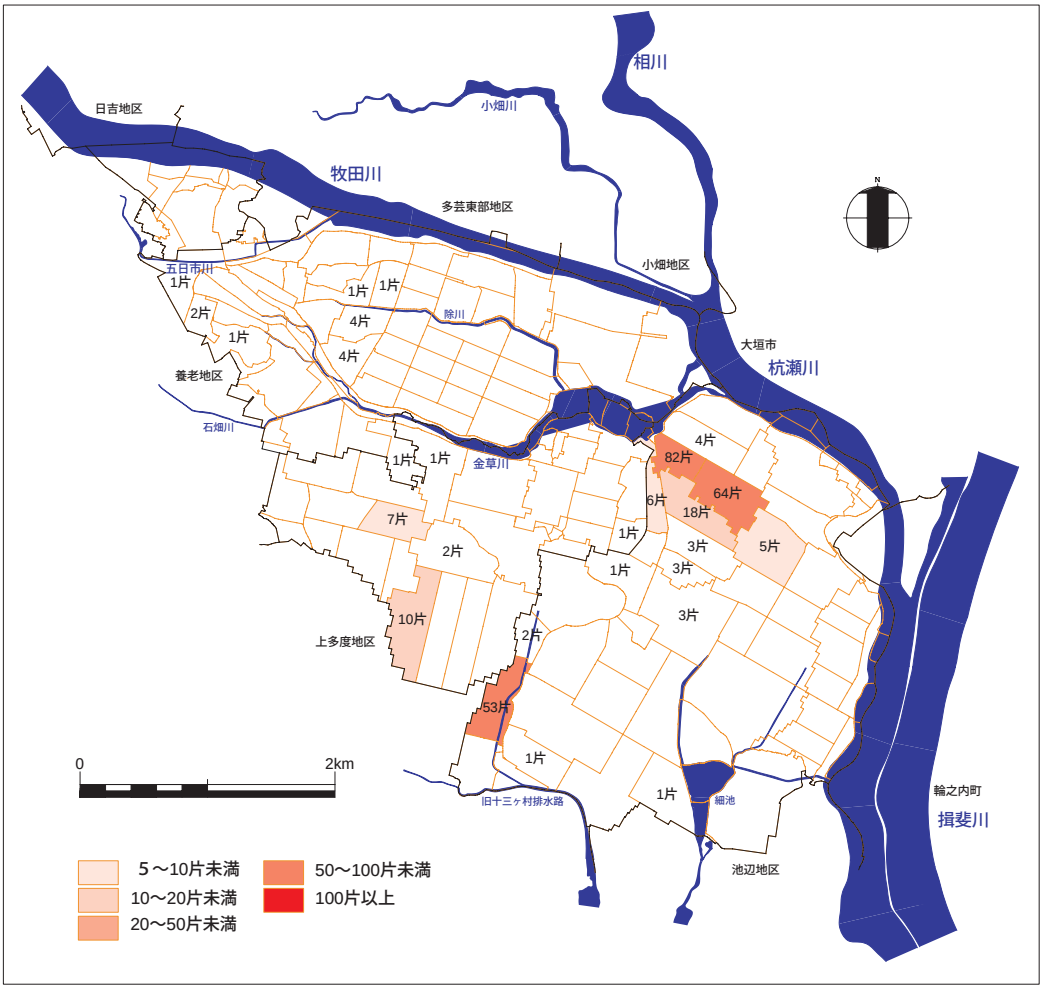


第60図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の灰釉陶器の散布状態（S＝1/60,000）

3．多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の中世土師器の散布状態（第61図）

多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の分布調査で採集した中世土師器片の総数は282片に上り、古代の須恵器や灰釉陶器に比べ、格段に増加する。その立地毎の内訳は、扇状地が23片で8.2%、沖積低地が259片で91.8%である。また、採集できた遺物数の増加にあわせて、採集できた細別区画数も増加しており、中世になって当地域が広く安定し、開発が一気に進んだことがわかる。特に笠郷地区は遺物数及び分布範囲の増加が顕著である。

ここで重要と考えるものは中世において新たな場所に遺跡が出現していることである。日吉・室原・小畑・多芸東部地区では中世の遺跡は古代から連続するものが主であり、中世において新たに出現し、長期間存続する遺跡は確認できていない。しかし、当地域においては仲田遺跡や上之郷遺跡、下笠遺跡など、古代において遺跡が確認できなかったところに新たに遺跡が出現したものがある。また、その出現時期についてもおおよそ12世紀後半から13世紀初頭に集中しており、その背景は自然的な要因だけにとどまらない可能性があるだろう。当該時期は中世荘園の成立に伴う開発が活発化する時期であり、中世における在地の人々と上位の権力との関係の解明は大きな課題である。



第61図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の中世土師器の散布状態（S＝1/60,000）

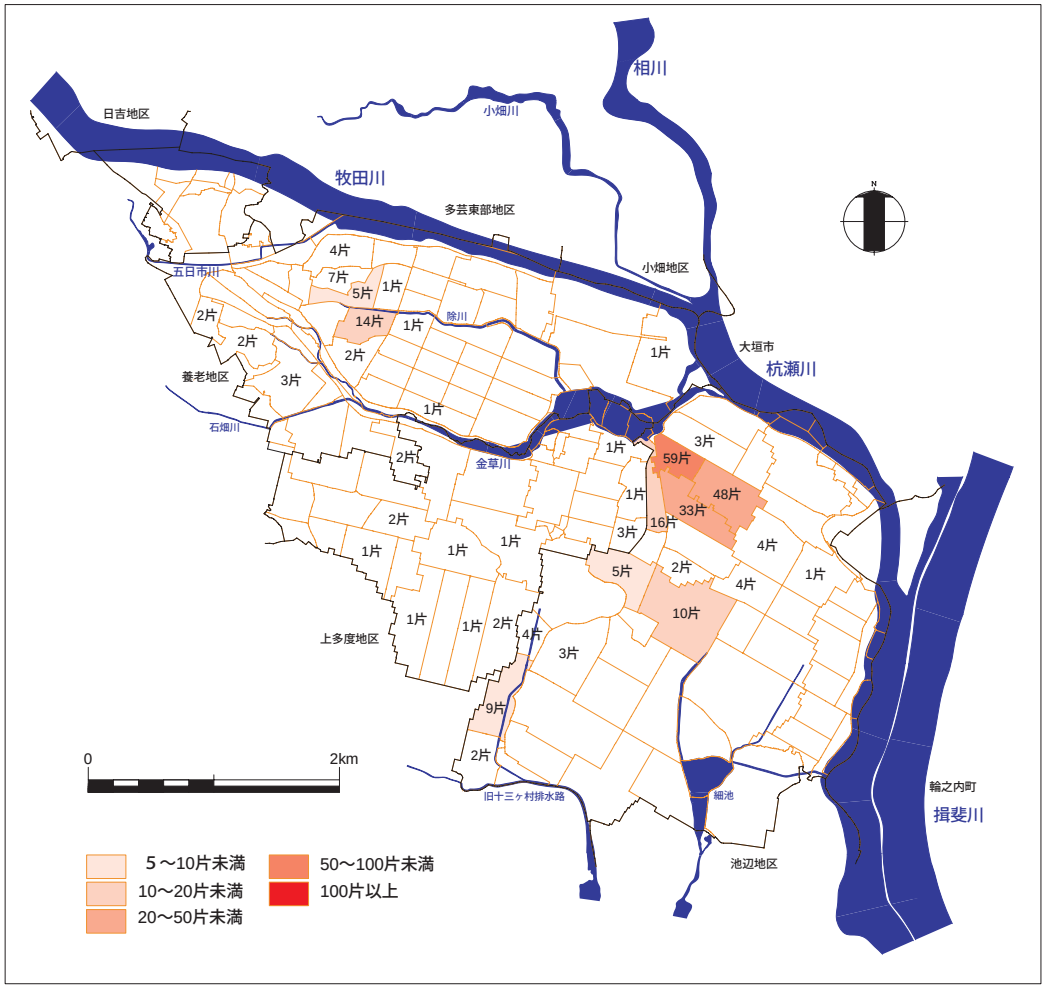
宇野隆夫は西日本において12世紀中頃から13世紀中頃より、以後14世紀に至るまで、長期型の拠点的集落を軸として多くの集落が増加していくことに村落中核層の役割を重視し、これを中世的（農民）集落のはじまりと考えている*。分布調査の成果からは、当地区における新出の中世遺跡にもこうした側面があった可能性を考えておきたい。一方、日吉・室原・小畑・多芸東部地区の古代から続く中世遺跡には違う性質をもつものがあるだろう。

4．多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の山茶碗の散布状態（第62図）

多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の分布調査で採集した山茶碗片の総数は263片である。その立地毎の内訳は扇状地が48片で18.3%、沖積低地が215片で81.7%を測り、中世土師器と同様に沖積低地での採集が多い。採集片数はほとんど変わらないものの、山茶碗が中世土師器に比べて、広く分布するという結果は両者の性格の違いを表しているだろう。

なお下笠遺跡では北側中央部に輪中堤があり、現在の集落の外側からも山茶碗が採集されている。この結果は輪中堤が遺跡廃絶後に築堤された可能性を示すものであろう。高橋は大垣において段丘面の開発が一段落した中世後期以降、現氾濫原面の開発が始まり、築堤技術をもとにした治水が重要な

* 宇野隆夫1991『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』
宇野隆夫2001『荘園の考古学』



第62図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の山茶碗の散布状態（S＝1/60,000）

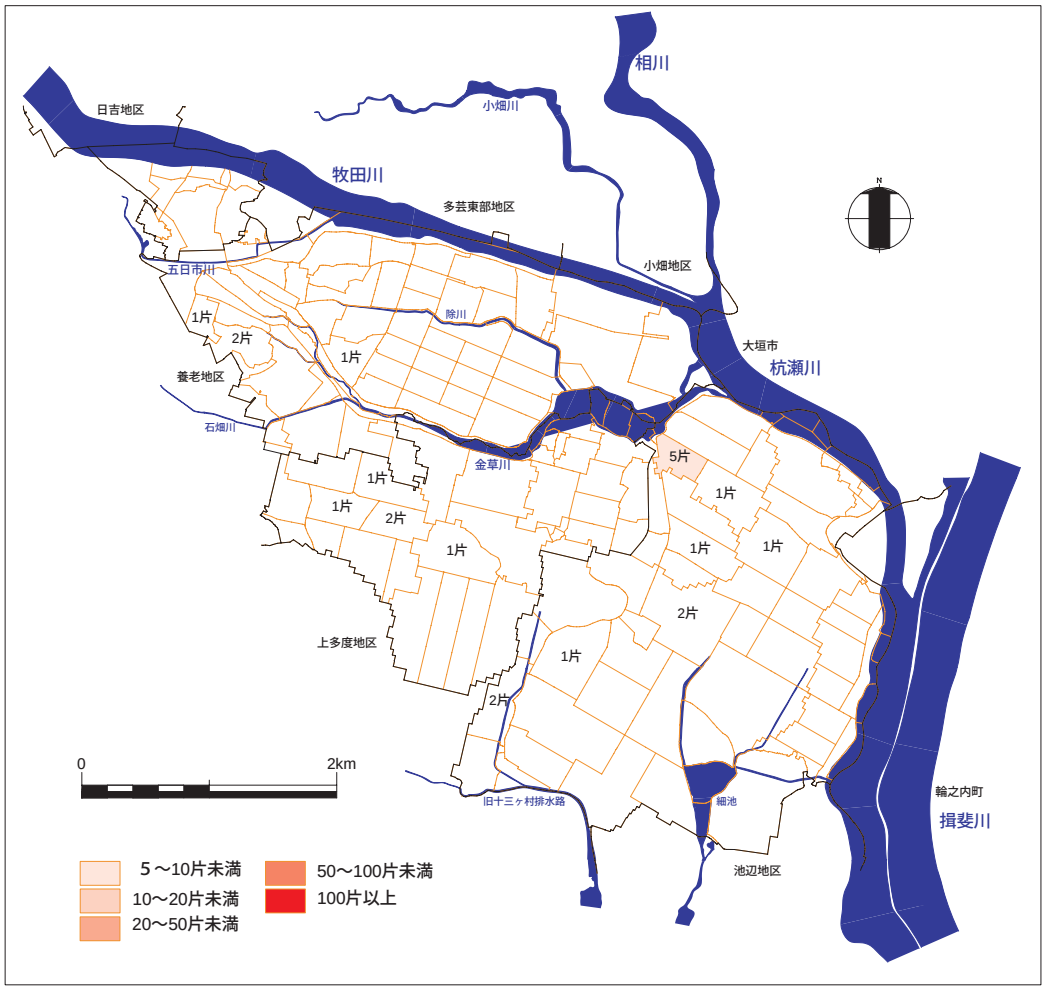
問題であったと考えている*。そのため、下笠遺跡が立地する笠郷地区の南側では中世には輪中堤を必要とせず、遺跡廃絶後である近世以降になって輪中堤を必要とする地形環境に変化したことを想定しておきたい。このことは養老町の現在の地形環境を考える上でも重要な転換期が近世以降にあったことを示すものであろう。

5．多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の瓷器系陶器の散布状態（第63図）

多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の分布調査で採集した瓷器系陶器片の総数は22片であり、その立地毎の内訳は扇状地が８片で36.4%、沖積低地が14片で63.6%である。やや破片数は少ないが、中世土師器や山茶碗の成果と同様に沖積低地での採集片数が扇状地より多く、散布状態についても中世土師器及び山茶碗の成果とほぼ同様に理解できる。古代においては扇状地での採集が多く、当地域においては古代から中世への転換のなかで沖積低地の役割が高くなったことがわかる。

当地域の主に東側に広がる沖積低地には、揖斐川や杭瀬川といった大河川の他、金草川など中小の河川が流れており、これらは河川交通において重要な位置を占めている。そのため、沖積低地での遺跡増加の背景には、その一因として河川交通が活発になった可能性があるだろう。

＊　高橋　学1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』



第63図　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の瓷器系陶器の散布状態（S＝1/60,000）

6．その他の遺物の散布状態

以上で示した遺物以外のものとして、古瀬戸25片、中国製陶磁器７片、瀬戸美濃15片、近世陶器25片などがある。このうち中世に属する古瀬戸・中国製陶磁器・瀬戸美濃の散布状態はいずれも中世土師器や山茶碗と同様の傾向を示している。

一方、近世陶器については、中世以前には遺物が確認できていない養老町船附小字小川に新たな採集地点が確認できている。遺物数は少ないが、養老町船附には近世に濃州三湊の一つがあり、当採集地点はその位置を示している可能性があるだろう*。

第３表　多芸西部・高田・広幡・笠郷地区の遺物採集地点の立地

立地		古代須恵器	灰釉陶器	中世土師器	山茶碗	瓷器系陶器
扇状地	合計	15	32	23	48	8
	総合計の%	78.9%	97.0%	8.2%	18.3%	36.4%
沖積低地	合計	4	1	259	215	14
	総合計の%	21.1%	3.0%	91.8%	81.7%	63.6%
合計	合計	19	33	282	263	22
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

＊　養老町1978『養老町史通史編上』

（４）小結

多芸西部・高田・広幡・笠郷地区では分布調査によって10遺跡を確認し、693片の遺物を採集することができた。そして、採集した資料を時期・種類・採集地点・立地毎に分析した結果、当地区は扇状地を中心にした地域ではおおよそ８世紀、その東側に広がる沖積低地を中心にした地域では13世紀初めには遺跡が出現していることを明らかにできた。特に高田地区の中心付近からやや東にかけては８世紀以降、古代から中世にかけての遺物が採集できており、当地区内では最も継続的に利用された場所であった。

ただ、今回の調査では多芸西部地区に所在する多岐神社周辺で遺物を採集することができなかった。多岐神社には岐阜県重要文化財にも指定されている14世紀前半から17世紀前半にかけて作られた27面の懸仏が現存しており、この他にも社殿裏に文治５年（1189）の銘をもつ如法経碑が立つなど、少なくとも中世においては大社であったことが予想できる神社である。しかし今回の調査結果からは現在の多岐神社周辺に遺跡があったとは考えにくい。そのため現段階では、大墳城跡が現在の牧田川堤防の下に位置していたと伝えられていることから、多岐神社についても現在の位置よりも北の牧田川周辺にあった可能性を考えておきたい。

この他に下笠遺跡の輪中堤が遺跡廃絶以後のものである可能性も指摘でき、これらの成果は、考古学のみならず、当地区の地形環境を復元する上でも重要な成果になるだろう。すなわち、中世以前では河川等による堆積にあわせて居住域を拡大していったが、近世以降には河川による堆積を待たず、築堤により安定した居住域や耕地の拡大を図ったのだろう。

高橋は大垣における中世後期の河川の流路の固定が、天井川や地下水位の上昇を引き起こし、河川の堆積をより下流に向かわせ、結果として築堤地点周囲の低湿地化や洪水の危険性が増大したことを指摘しているが、同様の環境変化を下笠遺跡の周辺一帯にも考えておきたい*。

３　養老・上多度地区

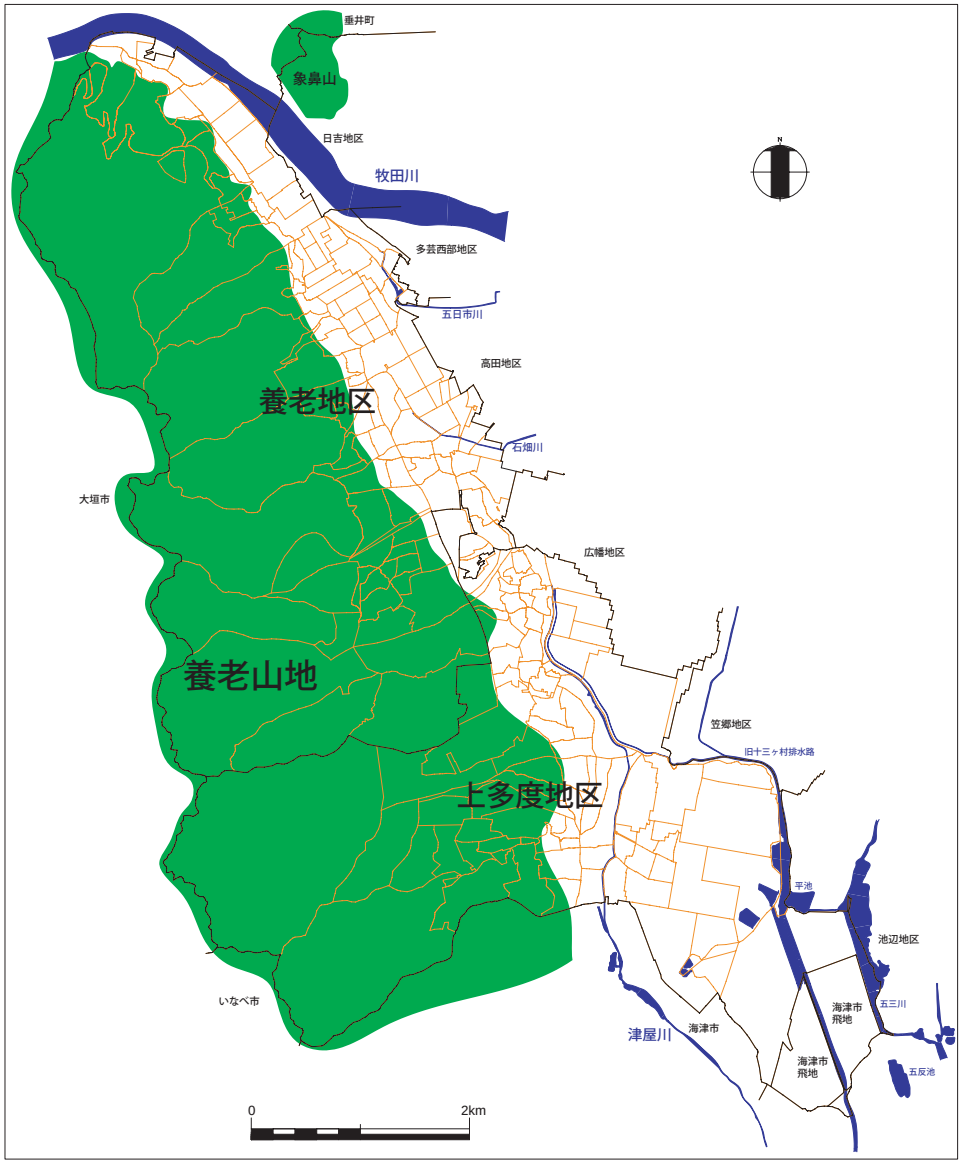
（１）　調査地区について

養老・上多度地区は地塁をなす養老山地とその断層崖に沿って形成された数多くの扇状地を中心とした地区である。山麓の谷筋には、やや狭小ではあるが所々に段丘面が形成され、東側には津屋川が南流している。

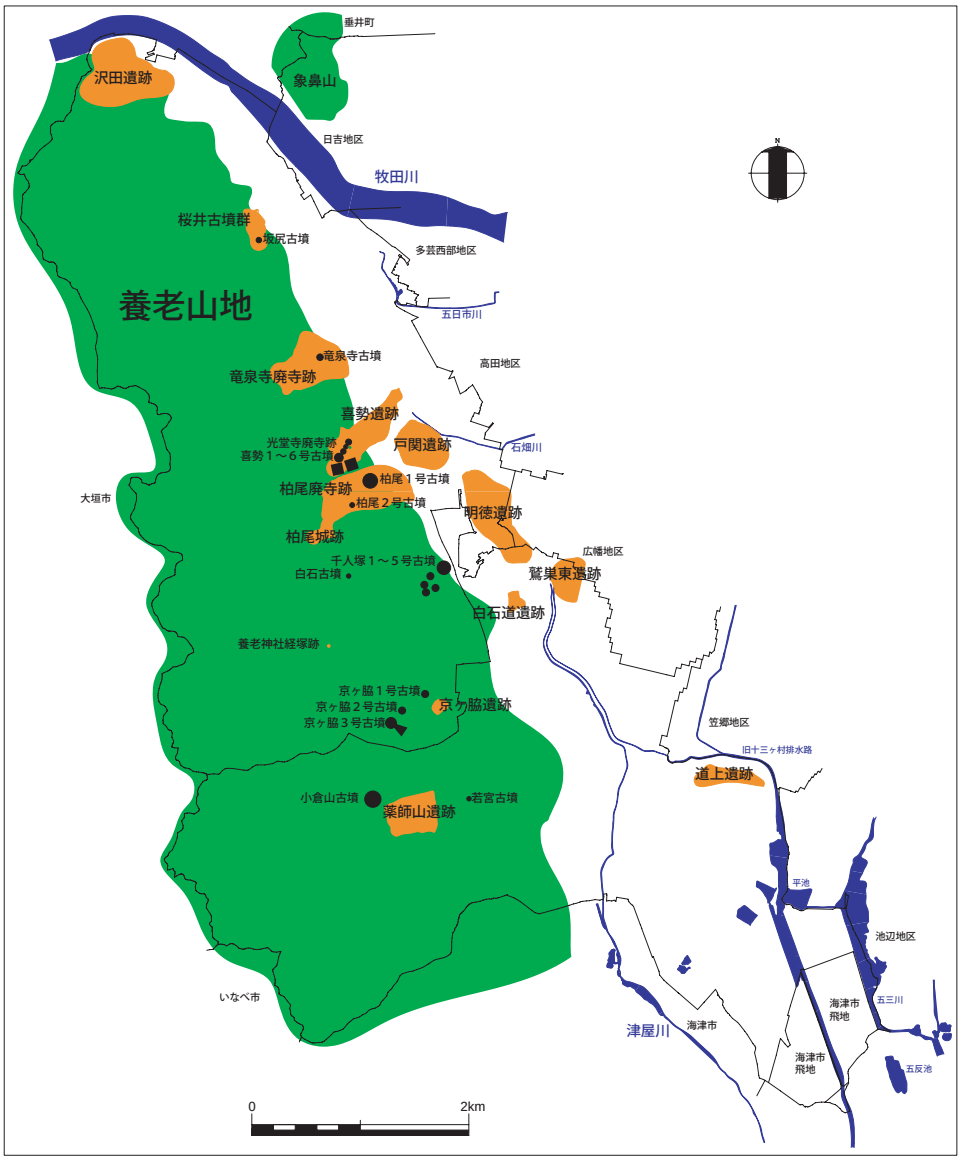
また養老山地をもつ当地区には、孝子伝説の舞台となった「養老の滝」をはじめとして、「ヤマトタケルノミコト伝説」や「元正・聖武天皇の行幸」、「多芸七坊」、「勢至の鉄座」など養老町を代表する伝承や歴史の舞台がある。古墳や寺院跡など既知の遺跡も多く、養老山麓に広がる段丘面や扇状地の扇央・扇端部を中心に遺跡が展開することが予想できた地区である。

調査はこれまでと同様に小字界を参考にそれぞれの地区を細別して実施した（第64図）。

＊　高橋　学1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』



第64図　養老・上多度地区の細別（S＝1/70,000）



第65図　養老・上多度地区の遺跡の位置（S＝1/70,000）

（２）遺跡と採集遺物

１．沢田遺跡　養老町沢田

沢田遺跡は養老山地の最北端、関ヶ原から南宮山南側を下り、濃尾平野への出口となる位置に所在している。すぐ北側には牧田川が東に流れており、これにより形成された扇状地が立地の中心である。また、養老山地やその麓に僅かに形成された下位段丘面も遺跡の範囲に含んでいる。

今回の調査では古墳時代須恵器１片、古代土師器４片、古代須恵器19片、灰釉陶器１片、山茶碗

第66図　沢田遺跡（北東から）

第67図　沢田遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

２片、中国製陶磁器１片を採集し、そのうち古代土師器１片と古代須恵器１片を図示した（第67図の308・309）。

308は土師器の甕である。口縁端部をつまみ上げ、体部内面は上半にハケメを施している。体部外面は摩滅が著しく、その調整方法は不明であるが上村安生によるＡ１類に分類できるだろう*。口縁部があまり肥厚せず、頸部から体部にかけての張りが顕著でないことから８世紀中頃から後半にかけての資料と考える。309は須恵器の杯である。古代に属する資料であるが、小片のため詳細は明らかでない。

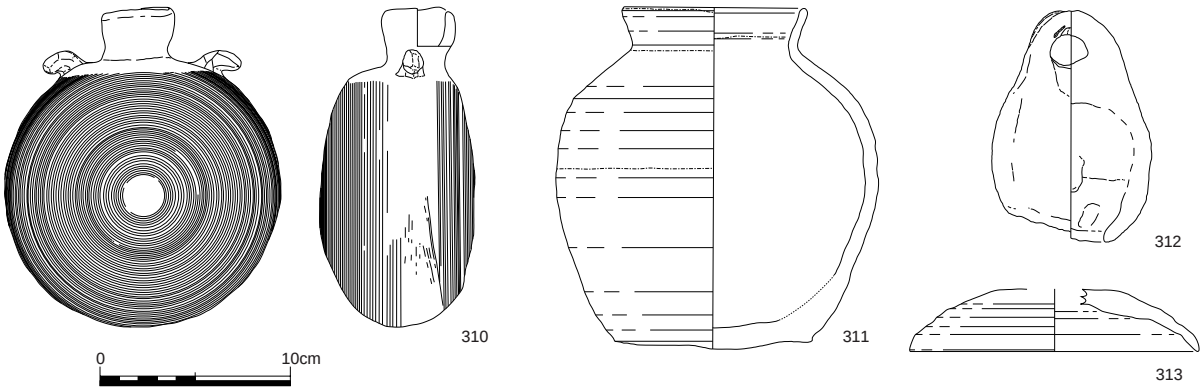
以上から沢田遺跡はおおよそ８世紀頃には成立していた可能性が高いだろう。そして当遺跡で採集できた遺物は古代・中世ともに扇状地がほとんどで、採集地点も重なっていることから、中世においてもほとんど位置を変えることはなかったと考えておきたい。ただし、遺跡南側の標高100m に近い山地からは山茶碗が１片採集できており、当遺跡の中世における山地利用には注意が必要である。なお他に古墳時代の須恵器が１片採集されているが、これが当遺跡の成立時期が遡ることを示すのか、それとも周囲に古墳が存在したことを示すのかは今後資料の増加を待って明らかにしたい。

２．桜井古墳群　養老町桜井

第68図　桜井古墳群（南から）

桜井古墳群は養老山地とその麓に形成された扇状地に立地しており、標高は約20～80m を測る。村上弁二によれば、この遺跡の最初の発見は大正10年２月であり、石材目当てに石室を火薬で砕いたことがきっかけであったらしい**。古墳の名称は桜井古墳となっており、横穴式石室をもつ古墳である。以後その報告を要約すると古墳の面積は約７坪、石室の長さは３間、幅は５尺、高さ９尺、側壁には100～200貫の石、床面には10貫程度の石、天井は100貫程度の盤石で覆われており、石室には普通の人より長大な５体の人骨が葬られていた。その内の１体は石棚かあるいは積み石により形成された上段、４体は床面に相対し伏していた。そして、人骨の周辺には５振の剣と多数の須恵器が副葬されていたようである。村上によると５振の剣は東京大学に所蔵されているらしい。その他の副葬品についてもほとんど残っていないが、僅かに残った２点の須恵器が養老町の重要文化財に指定されている（第69図の310･311）。なお、この桜井古墳は昭和53年に文化庁文化財保護部から刊行された遺

*　上村安生1996「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』
**　村上弁二1971「桜井古墳」『養老町の文化財』第１号



第69図　坂尻古墳出土・桜井古墳群採集遺物実測図（S＝1／4）

跡地図や平成２年に岐阜県教育委員会から刊行された遺跡地図では坂尻古墳という名称で報告されており、以後は当古墳の名称を坂尻古墳とする*。

310は須恵器の提瓶で完形品である。把手が鈎状を呈しており、尾野によるⅢ期古段階から中段階、渡辺による美濃須衛窯Ⅱ期に属する資料であろう**。おおよそ６世紀中頃から後半のものと考える。311は須恵器の壺で同じく完形品である。短く直立する口縁部にやや張りの弱い体部をもつ。底部は平底である。310に近い時期のものと推察するが詳細な時期は明らかにできなかった。

以上から坂尻古墳は、おおよそ６世紀後半を中心とした遺跡であると考える。ただし、最低でも５体に上る人骨が確認されていることから追葬が行われた可能性が高く、その存続期間には注意しておきたい。現在、墳丘のほとんどは削平されており、跡地には石壇が建っている（第70図）。

この他、文化庁や岐阜県教育委員会の遺跡地図によると桜井古墳群には坂尻古墳の他に桜井１号古墳及び桜井２号古墳の２つの古墳がある。これらは、桜井の白鳥神社社殿裏の高台に完全な形で残っているとして養老町文化財保護協会からも報告されているが、現地調査を行った結果、古墳は確認できなかった***。なお、遺跡周辺では一石五輪塔２基の他、板碑や石仏が確認できており、中世において墓域となっていた可能性がある。

その一方、遺跡の東に南北に走る東海自然歩道の東側からは、昭和５年10月に土師器の飯蛸壺が採集されており、養老町の重要文化財に指定されている。さらに今回の調査でも古墳時代の須恵器が１片採集できており、飯蛸壺とあわせて図示した（第69図の312・313）。

第70図　坂尻古墳（北東から）

313は古墳時代の蓋である。天井部は偏平で直線的に開き、口縁部との境は不明瞭である。口縁端部は丸くおさめ、回転ヘラケズリ調整を行っていない。胎土に黒い鉄の粒を含み、口径は15.0cm、

*　文化庁文化財保護部1978『全国遺跡地図　岐阜県』
岐阜県教育委員会1990『改訂岐阜県遺跡地図』

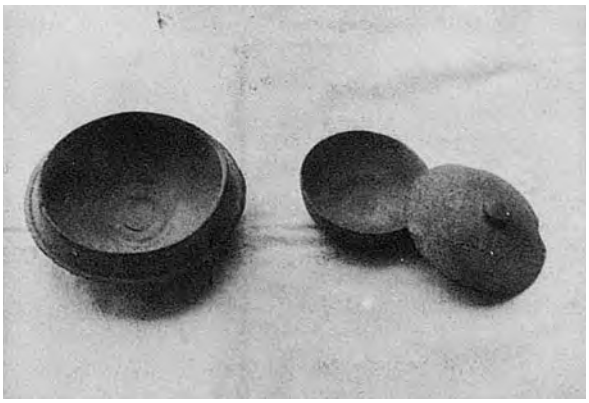
**　尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』
渡辺博人1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋杯の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古学』創刊号

***　養老町文化財保護協会1974「養老町の埋蔵文化財包蔵地」『養老町の文化財』第13号

器高は3.3cmを測る。ややロ径が大きいが、渡辺による美濃須衛窯Ⅲ期後半、尾野によるⅣ期古～中段階に位置づけることができると考える*。７世紀後半の資料であろう。

当遺跡やその周辺には古墳以外の遺跡は確認できておらず、これらの遺物については古墳の副葬品である可能性が高いと考えている。今後に課題は多いが、以上からこれらの古墳及び遺物の散布範囲を古墳群として評価した。

３．上方古墳　養老町上方



第71図　上方古墳採集須恵器（高木他1960『白鳥神社史』より）

上方古墳は高木佳又らによって昭和35年に報告された遺跡である**。報告によると地元の大橋鶴二という方がぬくとばの畑の中から須恵器を掘り出したことが発見の契機であったらしい。古墳の構造についての記述はないが、掘り出した３点の須恵器の写真が掲載されており、６世紀後半から７世紀前半くらいの資料であると思う（第71図）。

今回の調査で、この報告の作成に携わった高木正義氏に話を聞くことができたが、遺跡の位置を特定することはできなかった。報告の中に採集地点周辺において今後も破片等がみつかるだろうと記述されていることから、これからも発見に努めたい。なお、墳丘等についての記述がみられず、遺物も畑で発見されていることから古墳ではなく集落の可能性も考えておく必要があるだろう。

４．竜泉寺廃寺跡　養老町竜泉寺

第72図　竜泉寺廃寺跡（南東から）

第73図　竜泉寺廃寺跡礎石群（北西から）

竜泉寺廃寺跡は養老山地とその麓に形成された中位及び下位段丘面、扇状地に立地し、標高40～230mを測る比高差の著しい遺跡である。最高所の一部は養老町の史跡に指定されている。遺跡の北側には威徳谷、南側には行平谷が走っており、おおよそ、これらが遺跡の南北境を形成している。ま

---

*　渡辺博人1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋杯の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古学』創刊号
　尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５-１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』

**　高木佳又他1960『白鳥神社史』

た標高約100mから最高部である200m付近にかけての斜面には階段状に造成された多数の平坦面が遺存している。

新撰美濃志や養老町史などでは、当遺跡を養老山地を中心に所在した多芸七坊の一つに数えられた寺院跡として紹介しているが、多芸七坊の名称やそれらの起源が古代に遡るとする根拠は文化年間の記録とされているだけで、詳細は明らかになっていない*。この他にこれらの寺院跡を西山七坊として紹介している存徳寺文書もあるが、今回の調査で実見することはできなかった**。

これらの資料によると多芸七坊と呼ばれた寺院跡は北から別所寺、竜泉寺、光堂寺、柏尾寺、養老寺、光明寺、藤内寺の７つであり、このうち別所寺は垂井町、藤内寺は海津市にある。それぞれ、象鼻山、大威徳山、勢至山、柏尾山、竜寿山、小倉山、福寿山に所在し、坊数は別所寺が49坊、竜泉寺48坊、光堂寺24坊、柏尾寺24坊、養老寺12坊、光明寺36坊、藤内寺６坊であったと記されている。これらの寺院跡は天平宝字年中に建立され、当初法相宗であったが、後に天台宗に改宗したとされる。また、それらの寺院跡の廃絶については信長記の「永禄五年五月上旬、信長公多芸山ふもとより北を上りにやきはらひ、洲俣へ越へ、要害を拵えし」といった記述や、存徳寺の記録に同じく多芸七坊の一つである柏尾寺が天正五年四月中旬に織田信長の焼き討ちによって消失したとあることを根拠に16世紀後半が想定されている。ただし、この存徳寺の記録についても確認はできていない。

なお後にそれぞれ詳述するが、竜泉寺廃寺跡をはじめ多芸七坊とされている寺院跡の内、今回の分布調査で詳細をある程度明らかにできたものはいずれも中世を中心とした遺跡であった。そのため、19世紀の資料や存徳寺の所蔵する資料が、これらの当時の状況をどの程度正確に表しているかは今後資料の増加を待って慎重に判断する必要があるだろう。

今回の調査で竜泉寺廃寺跡から採集できた資料は古代須恵器１片、中世土師器９片、山茶碗２片、古瀬戸３片、瓷器系陶器７片であり、そのうち瓷器系陶器１片を図示できた（第74図の314）。

314は瓷器系陶器の鉢で、常滑産である。中野による10型式に属する資料で、15世紀後半のものと考える***。他にも図示はできなかったが、高台をもつ山茶碗の片口鉢が確認できており、中世前期には既に遺跡として出現していた可能性が高い。

また、関ヶ原町の水野清孝氏から昭和38年に竜泉寺小字中尾において採集した連珠文をもつ軒平瓦１片、布目の圧痕をもつ瓦２片を寄贈して頂いている。

さらに、養老町史には大正年間に当遺跡の周辺の谷から石仏108体を集め安養院に祀り、その内の一体には大永四年（1524）十二月三日の紀年銘があったことや、竜泉寺村西脇家家系図に「利行　母落合五郎兵衛女、故有出家、康正二年（1456）子十月九日、濃州大威徳山竜泉寺住持す。十六歳也、依之三男家督ス」の記載があったことが報告されている（第75・76図）****。

第74図　竜泉寺廃寺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

今回の分布調査で採集できた資料は

* 岡田　啓1931『新撰美濃志』
養老町1978『養老町史通史編上』
** 藤田侑山1972「多芸七坊（１）」『養老町の文化財』第３号
藤田侑山1972「多芸七坊（２）」『養老町の文化財』第４号
*** 中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
**** 養老町1978『養老町史通史編上』

第75図　安養院屋外に集積された石仏・石塔（東から）

第76図　安養院所蔵の石仏

少ないが、以上に示した資料により当遺跡は中世を中心とした山岳寺院跡である可能性が高いだろう。当遺跡の最高所に位置する塔跡かあるいは鐘堂跡と推定されている礎石群も、寺院に付属するものである可能性が高く、同様に中世に属すると評価しておきたい。ただし、養老町史通史編上に10個と報告された礎石群は、今回の地表面の観察では５個しか確認できなかった。また、遺跡周辺の谷において過去に多数の石仏が採集されていることは、当遺跡付近に中世墓があった可能性を示している。今回の調査では発見できなかったが今後も発見に努めたい。

５．竜泉寺古墳　養老町竜泉寺

第77図　竜泉寺古墳墳頂部（東から）

竜泉寺古墳は竜泉寺廃寺跡の範囲内に所在する遺跡で、標高約80m の下位段丘面に立地し、微地形レベルでは小規模な谷に挟まれた尾根上の高まりに築造されている。墳丘は明瞭でなく、埋葬施設は石材採取により破壊され、墳頂部には石が散乱している（第77図）。破壊される以前には横穴式石室が開口していたと伝えられているが、現況からは確認できない。

墳形についても養老町文化財保護協会の報告や過去の遺跡地図では前方後円墳としているが、表面観察からは墳形の確認は困難である*。昭和49年の養老町文化財保護協会の調査時において既に現在と同様に不完全な遺存状態であったことが報告されており、当古墳を前方後円墳とは評価できないだろう。

今回の調査では遺物は採集できず、築造時期についても明らかにできなかった。

* 養老町文化財保護協会1974「養老町の埋蔵文化財包蔵地」『養老町の文化財』第13号
文化庁文化財保護部1978『全国遺跡地図　岐阜県』
岐阜県教育委員会1990『改訂岐阜県遺跡地図』

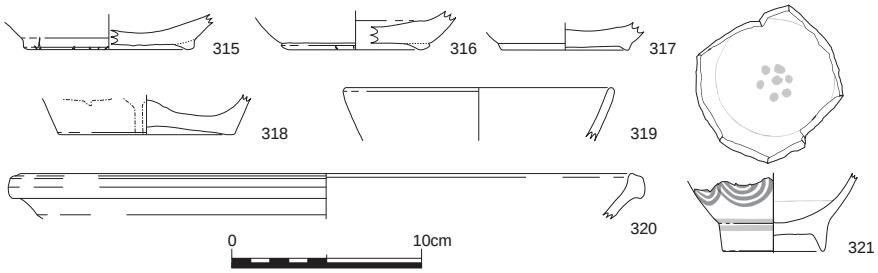
６．喜勢遺跡　養老町勢至・石畑

第78図　喜勢遺跡（西から）

第79図　洞穴（東から）

喜勢遺跡は竜泉寺廃寺跡の南東約600m に位置し、養老山地とその麓に形成された中位及び下位段丘面、扇状地に立地している。標高は約15～140m を測り、竜泉寺廃寺跡と同様に標高差が著しく、多様な立地をとる遺跡である。周辺には戸関遺跡や柏尾廃寺跡、遺跡内には町の史跡に指定され多芸七坊の一つに数えられる光堂寺廃寺跡や勢至の鉄座、喜勢古墳群を含んでおり、養老地区においてもっとも遺跡が集中する地域の一角を形成している。

今回の調査では、古墳時代須恵器１片、古代須恵器１片、中世土師器２片、山茶碗６片、古瀬戸８片、瓷器系陶器８片、中国製陶磁器１片、瀬戸美濃７片、近世陶器２片、鉄滓８片を採集し、そのうち山茶碗３片、古瀬戸１片、中国製陶磁器１片、瀬戸美濃１片、近世陶磁器１片を図示した（第80図の315～321）。



第80図　喜勢遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

315～317は山茶碗の椀の底部である。すべて荒肌手であり、315が第５型式、316及び317は第６型式に属する資料と考える。318は古瀬戸の瓶子Ⅱ類である。底部のみであるため詳細は不明である。319は越州窯系青磁の椀である。口縁部は直線的で、端部を丸くおさめている。小片のため詳細は不明である。320は瀬戸美濃の擂鉢であり、体部には緩やかなナデを施している。321は染付磁器の椀である。近世に属する資料と考えるが、詳細は不明である。

また、当遺跡内では昭和40年代に標高約80m に位置する日吉神社社殿裏において須恵器の提瓶、勢至北谷西側の山地では古瀬戸の瓶子が採集され、前者は町、後者は県の重要文化財に指定されている（第81・82図）。今回の調査では両者ともに実見の機会は得られず、写真からの観察であるが、提瓶は

第81図　須恵器の提瓶

第82図　古瀬戸の瓶子

把手がなく、細く長い頸部をもつことからおおよそ６世紀末から７世紀前半のものであろう。また瓶子についてはやや外反した頸部に、縁帯を有する口縁部をもち、端部が浅く凹む。藤澤による瓶子Ⅱ類に分類できるもので、おおよそ古瀬戸前Ⅲ期～中Ⅰ期のものと考える*。

このうち提瓶について、その出土位置が光堂寺廃寺跡とほぼ重なることから寺院跡に伴う遺物と考える意見があるが、日吉神社周辺には古墳が複数分布しており、時期からみても古墳の副葬品と考える方が妥当であろう**。

古瀬戸の瓶子については杉の切り株の根に抱えこまれた形で発見されており、中には人骨が入っていたと伝えられている***。蔵骨器であるだろうが、注意したいのは発見された場所が勢至北谷の北側の標高約80m の地点で付近には石仏約20躯と五輪塔の集積場所が確認できていることである（第83図）。今回の分布調査では勢至南谷の北側の標高110～140m 付近でも石仏が集中して散布することが確認できており、いずれも中世墓として評価できると考える（第84図）。そのため当遺跡内には二つの中世の墓域が存在する可能性が高いであろう。

第83図　勢至北谷付近の石仏・五輪塔の集積地点（東から）

第84図　勢至南谷付近に散布する石仏（東から）

*　藤澤良祐2005「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
**　村上弁二1972「不破内親王由縁の岩窟」『養老町の文化財』第４号
***　木村幸夫1976「養老町内の指定文化財紹介（一）」『養老町の文化財』第21号

ここで、注目しておきたいのが養老町史史料編に報告されている応永27年（1420）の「土岐善弘書状案」である*。これは土岐伊与入道善弘が勢至寺の別当房及び持宝房に宛てた書状で、勢至寺の境域を証明した文書である。

まず、重要と考えるのが応永年間に勢至寺と呼ばれる寺院が当遺跡の範囲内に存在していたことである。遺跡内に所在する日吉神社周辺には竜泉寺廃寺跡と同様に階段状の平坦面や土塁跡が残り、日吉神社の西には４つの礎石を確認できている。さらに、勢至北谷の北側には洞穴も確認できた（第79図）。新撰美濃志や養老町史通史編では竜泉寺廃寺跡において示した同様の資料からこれを光堂寺跡としているが、日吉神社周辺で採集できた資料は中世に属する土師器１片と古瀬戸１片であった。小片であり資料数はやや少ないが、その時期など現段階での情報からは光堂寺跡より勢至寺跡の名称のほうが適当であると考える。以後、養老町勢至に所在する中世山岳寺院跡について本稿では勢至寺跡の名称を用いたい。

次に注目したいのが、勢至寺に少なくとも二つの坊が存在したことである。今回の調査では当遺跡をさらに細別できるだけの成果は得られていないが、遺跡内に中世の墓域が二つ存在する可能性が高いことは先述したとおりである。

最後は勢至寺の境域である。文書によれば東は伊勢街道、南が鼬尾南谷、西が一瀬山之峯、北が立岩の下大谷水落境となっている。今に伝えられる地名から、東は養老町勢至の神明神社から柏尾のふれあいセンターへ南北にぬける道路付近、南は勢至南谷、西は養老山地頂上の尾根付近と推定できる。北境については、立岩は現在も存在するものの下大谷水落境の位置は不明である。行平谷か勢至北谷がその候補になるだろう。いずれも大まかな想定であるが、この文書が示す勢至寺の境域は分布調査の成果が示す遺跡の範囲を大きく越え、山全体に及んでいる。勢至寺の領域を示すものであろうが、養老山地において標高850m に近い山頂部までを含み、南では柏尾廃寺跡に接していることは養老山地に位置する中世山岳寺院の性格を考える上で重要である。詳細な検討は今後の課題であるが、養老山地に由来する動植物資源や地下資源、水資源などをこうした山岳寺院に無断で使用することは難しかったと推察している。

養老町史史料編にはこの他にも当遺跡の中世に係る文書がいくつか報告されており、勢至の鉄座については16世紀の資料が多い*。遺跡内には今も鍛冶屋町の小字名が残っており、この周辺から鉄滓も採集できていることから、鉄座は麓の鍛冶屋町を中心とした範囲に位置していたであろう。なお、この一帯は勢至寺の領域内でもある。

以上から喜勢遺跡は中世の遺跡であり、山岳寺院である勢至寺跡と鉄座跡を中心としている。ただし、古代に属する遺物もわずかではあるが採集できており、今後さらに詳しく遺跡の存続期間を検討していきたい。

７．喜勢古墳群　養老町勢至

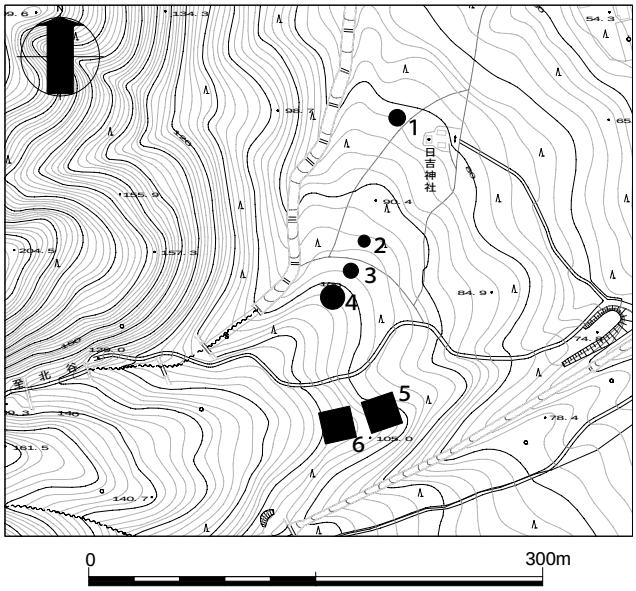
喜勢古墳群は養老町史などに紹介される勢至古墳群と同じ遺跡である。勢至古墳群はこれまで養老町史通史編や養老町文化財保護協会の調査、過去の遺跡地図などにおいてその内容が報告されているが、古墳の数や番号が統一されていないため、それぞれの古墳を特定することが困難であった。その

* 養老町1974『養老町史史料編上』

ため今回の調査では新たに喜勢古墳群と名称を変更し、その位置や数、大きさについて再整理を行った。

喜勢古墳群は標高80～110m を測る中位段丘面及び山地に立地しており、その数は円形４基、方形２基の合計６基に上る（第85図、第４表）。なお、過去の調査で勢至古墳群には９～10基の古墳が報告されているが、その内の３～４基については今回の調査では古墳として評価できないと判断した。６号古墳の西に隣接する高まりについても５・６号古墳築造に伴う地形改変の痕跡と考えている。今後測量調査を行ってさらに確認していきたい。

また、今回の調査では当遺跡から遺物を採集することはできなかったが、先述したように日吉神社



第85図　喜勢古墳群の立地と構成（S＝1/5,000）

第４表　喜勢古墳群一覧

番　号	墳　形	全長（m）
1	円　墳	11
2	円　墳	8
3	円　墳	10
4	円　墳	16
5	方　墳	21.6
6	方　墳	21

付近からは提瓶が採集され、当古墳群に属した古墳の副葬品である可能性が高い。確認できた古墳以外にも古墳が存在し、当古墳群が古墳時代後期に属する可能性を示す資料であるだろう。

第86図　喜勢５号古墳（東から）

８．戸関遺跡　養老町石畑

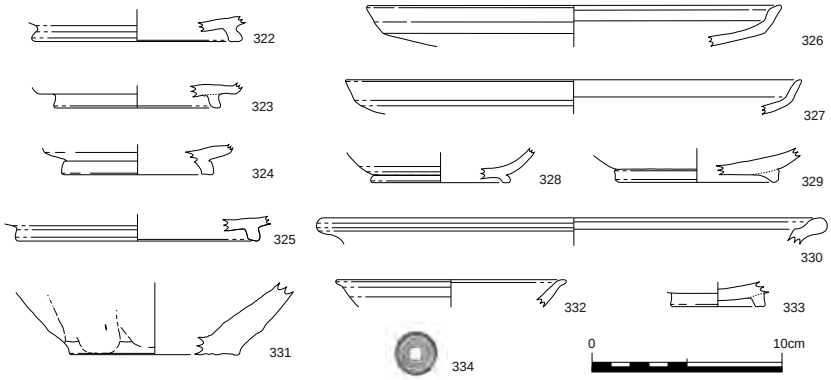
戸関遺跡は標高約12～44m の扇状地に立地している。西側では喜勢遺跡と柏尾廃寺跡の二つの遺跡に隣接し、勢至寺跡の東境と考えた伊勢街道の東側に位置する。

今回の調査では、古墳時代須恵器１片、古代須恵器108片、灰釉陶器５片、山茶碗９片、古瀬戸18片、瓷器系陶器６片、瀬戸美濃５片、近世陶器１片、古銭１点を採集でき、当調査区において最も多くの古代の遺物が採集できた遺跡である。採集できた遺物のうち、古代須恵器６片、灰釉陶器１片、山茶碗１片、中国製陶磁器１片、瓷器系陶器１片、瀬戸美濃１片、寛永通宝１点を図示した（第88図の322～334）。

第87図　戸関遺跡（南から）

322～327は須恵器で322～325は有台杯、326・327は盤である。322～325はいずれも底部を回転糸切りにより切り離している。322は高台の断面がバチ形で角が強く張り、323はやや張り出しが弱い。324･325はさらに張り出しが弱く、高台外側面の付け根部分が沈線上に凹んでいる。いずれも尾野によるＶ期に属すると考える*。口縁部のみであるが、326・327についてもほぼ同様の時期のものであろう。

328は灰釉陶器の椀である。断面方形の付高台を有し、体部外面下半にヘラケズリが施されている。



第88図　戸関遺跡採集遺物実測図（Ｓ＝１／４）

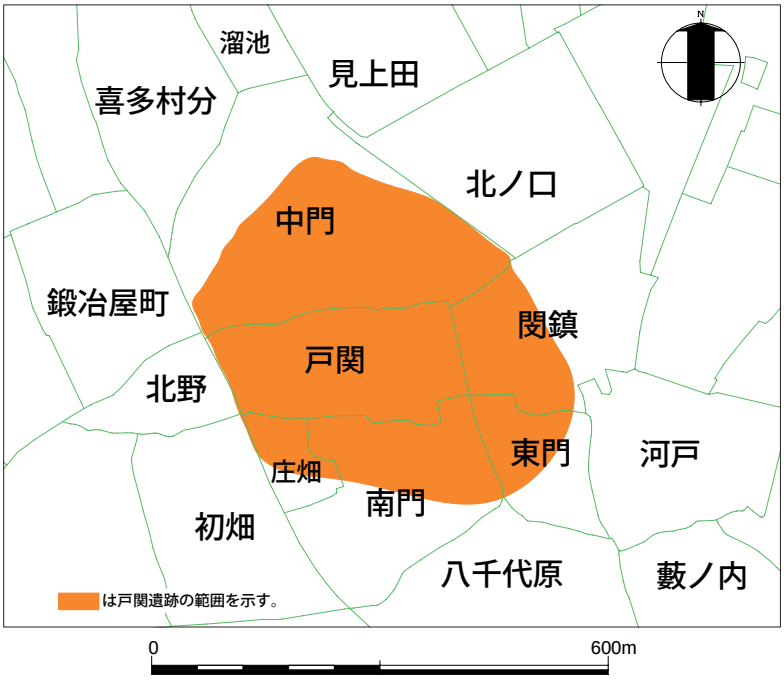
＊　尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』

斎藤による猿投窯第Ⅳ期第４小期～第Ⅴ期第１小期の資料と考える*。329は山茶碗の椀である。断面三角形のややしっかりした高台をもち、底径もやや大きい。第４型式に属する資料であろう。330は古瀬戸の折縁深皿である。口縁部を外折し、端部内側にはナデによる凹みがある。古瀬戸中期に属する資料と考える。331は常滑産の瓷器系陶器である。小片であり、器種は明らかにできなかった。332は白磁の皿である。釉色はやや青みを帯びた灰白色を呈し、口縁端部が外側に屈折している。小片であるがⅤ類に分類できる資料であろう**。333は瀬戸美濃の丸椀で断面方形の付高台をもつ。内面には灰釉が施されており、大窯１～２段階に属する資料と考える。334は寛永通宝である。

以上から戸関遺跡は古代を中心として中世から近世にかけて存続した遺跡である。特に８世紀中頃から９世紀初頭にかけての資料が多く確認できており、聖武天皇が養老に行幸した際に、最も養老の滝に近かったであろう遺跡である。また遺跡の範囲内には、当遺跡の名称にもなった戸関の小字名を中心に、中門や東門、南門といった小字が配置されている（第89図）。

現在の小字を遺跡に結びつけて考えることには慎重な姿勢も必要であろうが、養老山地が形成した西高東低の勾配のきつい扇状地形をものともせずに、方位を重視した集落形態をとることは古代の思想による可能性が高いと考えている。そして、この推察が正しければ当遺跡の性格には官衙かあるいは寺院といった候補をあげておくことができるだろう。関ヶ原から養老山地の東側を通って伊勢へ抜ける街道沿いに位置する遺跡でもあり、今後の調査では特に当遺跡の性格に注意しておきたい。

なお、当遺跡が所在する養老町石畑は過去に椿井郷と呼ばれていたことが新撰美濃志に記されており、養老町史史料編の文書資料において中世末期から近世にかけて確認できる多藝庄椿井郷は当遺跡のことを指しているだろう***。さらに元資料の確認はできなかったが、養老町史通史編には李瓊日録という文書に寛正６年（1465）椿井郷が勢至寺に遺乱されたという記載があると記述されている。分布調査の成果からも当遺跡と喜勢遺跡は近接しており、当調査区の中世を考える上で参考となる報告である。



第89図　戸関遺跡周辺の小字名（S＝1/10,000）

*　斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３
**　太宰府市教育委員会2000『太宰府城坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』
***　養老町1974『養老町史史料編上』

９．柏尾廃寺跡　養老町柏尾

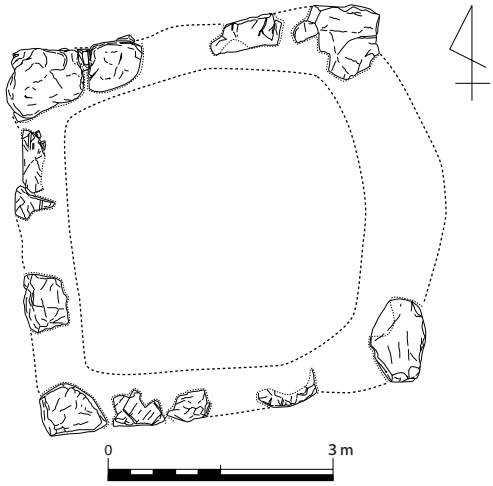
柏尾廃寺跡は標高約40～140m を測る山地及び中位・下位段丘面に立地する。北側に喜勢遺跡、南側では養老公園に隣接しており、遺跡の中心部に残る礎石群や基壇跡の周囲一帯は岐阜県の史跡指定を受けている。竜泉寺廃寺跡などと同様に多芸七坊の一つに数えられており、遺跡内には明治30年の開墾によって出土した多数の石造物を一箇所に集積した千体仏がある（第91図）。

昭和14年の小川の調査ではこれらの石造物の内、石仏５躯、五輪塔３基で紀年銘が確認されており、石仏では應永九年（1402）、永正十六年（1519）、天文九年（1540）、天文十六年（1547）、弘治年間（1555～1557）、五輪塔では明応九年（1500）、享禄四年（1531）、天文十六年（1547）の年号をもつものが報告されている*。また、この報告には永禄二年（1559）の棟札も記載されている。この他にも彦根市の竜潭寺には天文23年（1554）濃州多藝庄柏尾寺の墨書をもつ阿弥陀如来像が所蔵されており、これらの紀年銘資料から少なくとも本遺跡が15～16世紀には存在していたことがわかる**。しかし、遺跡の範囲や詳細な存続時期については明らかになっておらず、現地には階段状に広がる平坦面や土塁、洞穴などの遺構に加え、中世後期だけでなく、中世前期さらには古代に遡る遺物が散乱している。

第90図　柏尾廃寺跡（北から）

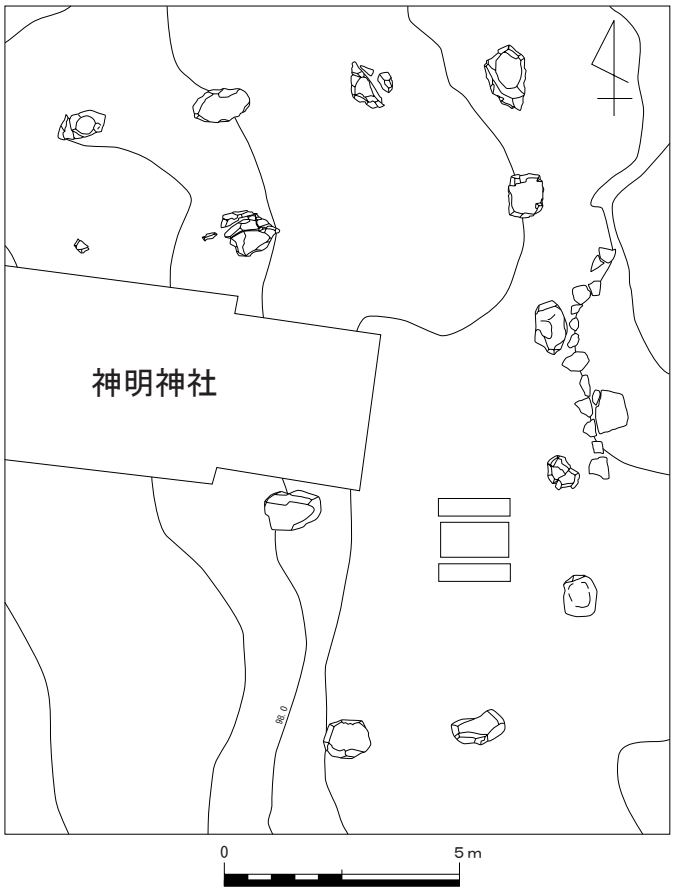
第91図　千体仏（東から）

第92図　基壇跡（北西から）



第93図　柏尾廃寺跡基壇跡平面図（S ＝ 1 /100）

*　小川栄一1939「柏尾廃寺阯」『岐阜県史蹟名勝天然記念物報告書』第八輯
**　養老町文化財保護協会1990「旅をした“ほとけ”」『養老町の文化財』第75号



第94図　柏尾廃寺跡礎石群平面図（S＝1/160）

第95図　洞穴（北から）

そのため、今回の調査では柏尾廃寺跡について遺物の採集だけでなく、地形測量図及び平面図の作成もあわせて行った（第96・97図）。いずれも遺跡全体を網羅することはできなかったが、史跡指定範囲を中心に実施し、散乱している遺物についても測量調査時に発見できたものは全て採集地点を記録した。

その結果分布調査では、灰釉陶器１片、中世土師器１片、山茶碗17片、古瀬戸64片、瓷器系陶器37片、中国製陶磁器３片、瀬戸美濃６片、近世陶器３片を採集し、さらに測量調査では古墳時代須恵器３片、古代須恵器12片、灰釉陶器６片、中世土師器11片、山茶碗93片、古瀬戸375片、瓷器系陶器570片、中国製陶磁器12片、瓦質土器１片、瀬戸美濃54片、近世陶磁器33片、瓦66片、石製品３片、鉄滓３片を採集できた。また、過去の試掘確認調査において古代の土師器を１片確認できている。その内、古墳時代の須恵器１片、古代須恵器１片、灰釉陶器４片、古代土師器１片、山茶碗24片、古瀬戸36片、瓷器系陶器13片、中国製陶磁器５片、瓦質土器１片、茶臼１片、瓦２片、瀬戸美濃４片、近世陶器４片を図示した（第98～100図の335～431）。

335は須恵器の蓋である。丸みのある天井部につまみをもち、器壁は薄い。天井部の回転ヘラケズリ調整とナデ調整の境に明瞭な段を作り、さらに口縁部と天井部の境の稜が強く突き出す。口縁部は外反し、胎土はセピア色を呈している。当地域では他に類例の資料が見当たらず、所属時期の検討は難しいが、須恵器製作開始当初のものであろう。具体的には、田辺によるTK73型式、尾野によるⅠ期かあるいはそれ以前に遡る可能性が強いと考える*。遺跡内には２基の古墳が確認できているが、採集地点はそのうち柏尾１号古墳の近くである。

336は土師器で鍋か甑の把手である。古代に属する資料であろう。

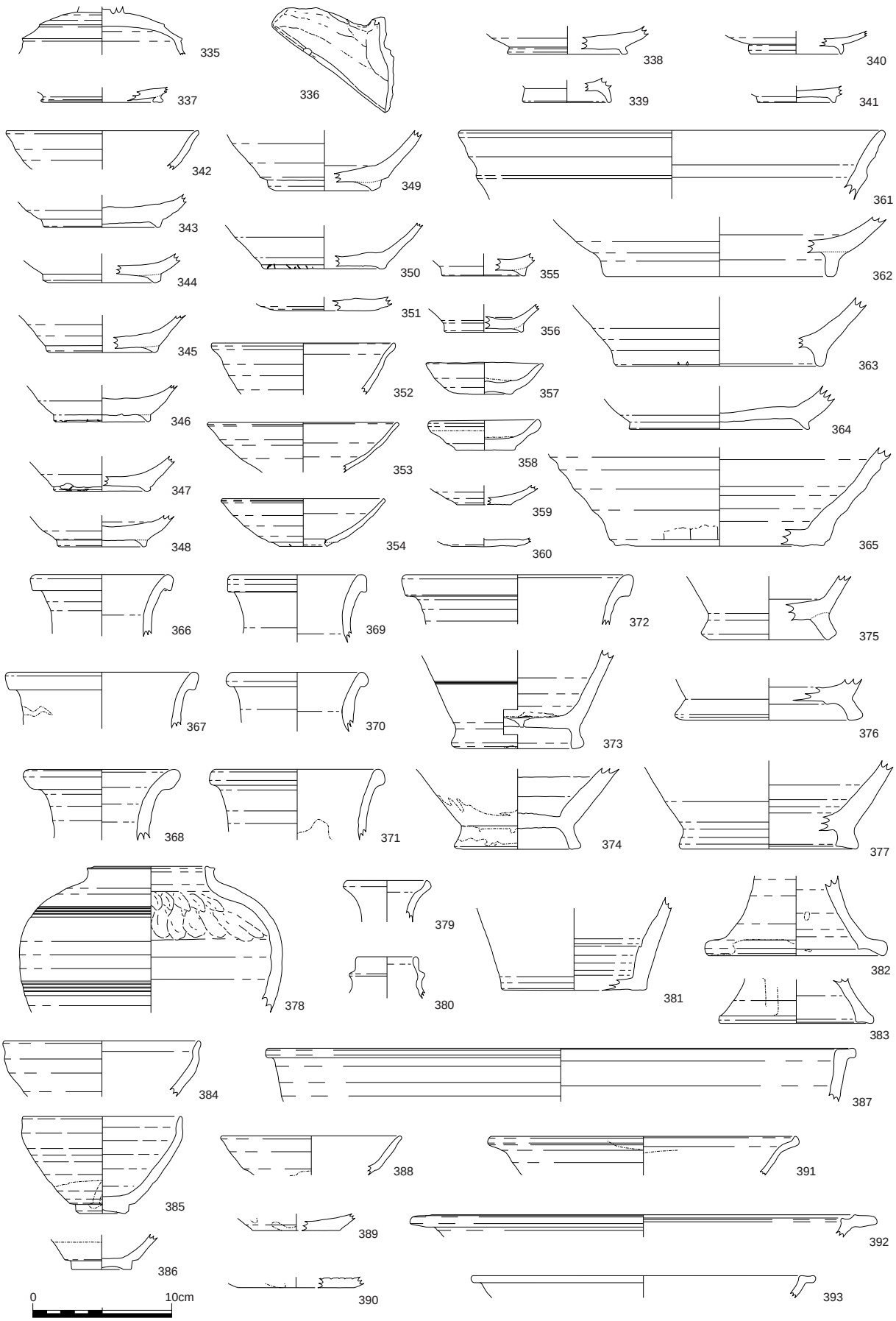
337は須恵器の杯である。糸切りによって切り離した底部はやや下側へ張り出している。高台は低

* 田辺昭三1981『須恵器大成』
尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』

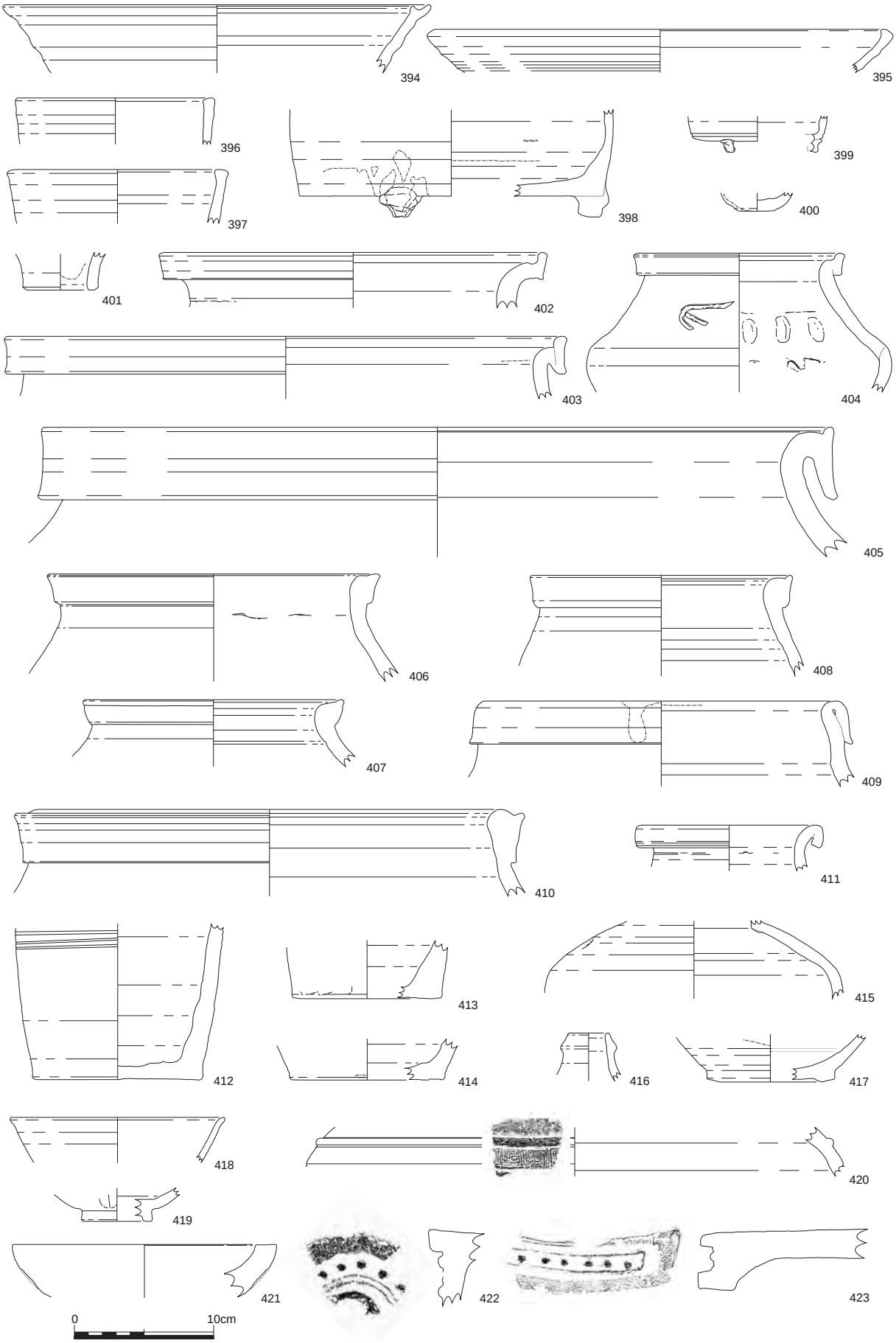
0　250m

第96図　柏尾廃寺跡中心部平面図（S＝1/2,500）

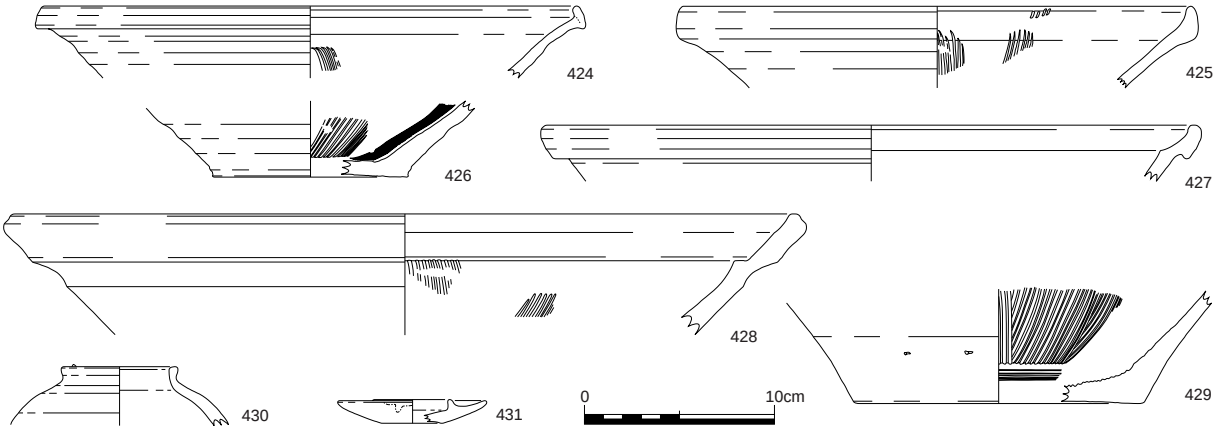
第97図　柏尾廃寺跡中心部地形測量図（S ＝ 1 /1,500）



第98図　柏尾廃寺跡採集遺物実測図１（Ｓ＝１／４）



第99図　柏尾廃寺跡採集遺物実測図２（S＝１／４）



第100図　柏尾廃寺跡採集遺物実測図３（S＝１／４）

く、角が張り出しており尾野によるＶ期古～中段階に属すると考える*。

338～341は灰釉陶器で338・339は椀、340・341は皿である。338は断面方形の付高台をもつが、底部外面に回転ヘラケズリは確認できず、内面のみ施釉が確認できる。339は縦長の高台をもっている。340はやや低い三日月形の高台をもつ。器壁は薄く、内外面とも施釉は確認できない。341は底部を糸切りによって切り離している。全体的に粗雑な作りで高台も低い。いずれも小片であるが、338・340は斎藤による猿投窯第Ｖ期、339・341については第Ⅵ期の範疇で捉えておきたい**。

342～365は山茶碗で342～354が椀、355・356が小椀、357～360が小皿、361～365は片口鉢である。このうち、352～354・360については均質手の胎土をもつ。椀では343・344が第４型式、342・345・346が第５型式、347が第５～６型式、348・349が第６型式、350が第６～７型式、351が第10～11型式、352は山内による明和１号窯式、353は大谷洞14号窯式、354は大洞東１号窯式に属すると考える***。小椀はいずれも第４型式、小皿は357・358が第５型式、359が第６型式、360は大畑大洞４号窯式に属するだろう。片口鉢は、口縁部がやや外反し端部を丸くおさめる361と体部がやや丸みを帯びて立ち上がる362については第４型式、体部がやや直線的に立ち上がる363は第５型式に属する資料と考える****。高台がやや低い364や高台を省略する365は第６型式以降のものであろうが、詳細については明らかにできなかった。

366～401は古瀬戸である。そのうち366～377は四耳壺類で366のみ刷毛塗りによって施釉されている。その他は流掛けにより施釉されており、373については焼成後底部が穿孔されている。366については古瀬戸前期、それ以外の資料については古瀬戸中～後期の資料であろう。なお、ほとんどの四耳壺類は墓域付近で採集されており、その大半は蔵骨器として使用された可能性が高いだろう。

378は広口壺である。流掛けによって灰釉が施釉されており、肩部と体部に櫛描き沈線を施している。古瀬戸中期に属する資料であろう。379は水注で流掛けによって灰釉が施されており、古瀬戸中期に属する資料であろう。380は水注あるいは瓶子の口縁部で、流掛けによって灰釉が施されている。全体がやや「八」の字形を呈しており、古瀬戸中～後期に属すると考える。

---

*　尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』
**　斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３
***　山内伸浩2004「美濃（東濃）窯の山茶碗」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』
****　岡本直久2004「瀬戸窯・猿投窯山茶碗の編年について」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』

381～383は瓶子で、381がⅡ類、382・383がⅢ類である。381は底部を穿孔している可能性が高い。流掛けにより施釉されており、中～後期の資料であろう。382・383は後期の資料である。382については鉄釉、383については灰釉が施されている。

384～386は天目茶碗である。384は口唇部にくびれがあり、体部がやや丸みを帯びる。古瀬戸中期のⅢ～Ⅳ期に属すると考える。385は内反り高台をもち、高台周辺は露胎している。体部は直線的に伸び、口唇部との境で屈折する。口唇部はわずかにくびれ、体部下半内面には茶筅の痕跡が確認できる。386は385と同じく内反り高台をもつが、高台周辺に錆釉を施している。ともに古瀬戸後期に属する資料であろう。

387は桶の口縁部で鉄釉を施している。古瀬戸後期に属すると考える。388は小鉢の口縁部である。透明度が高く貫入した灰釉を施しており、古瀬戸後期に属すると考える。389は縁釉陶器の底部で、一部灰釉が掛かる。古瀬戸後期に属する資料であろう。390は卸皿の底部で、灰釉が垂れているのが確認できる。詳細は不明であるが、古瀬戸中～後期の資料と考える。391は折縁中皿で、端部に灰釉が漬掛けされている。端部の屈折は明瞭でない。小片であり、詳細は不明であるが古瀬戸中～後期の資料であろう。

392・393は折縁深皿である。392は口縁部が大きく屈折し、屈折部の内側に強いナデを施している。内外面ともに灰釉が施されている。393は短くほぼ水平に屈折した口縁部をもつ。ともに古瀬戸後期に属する資料である。

394・395は擂鉢である。394は直線的な体部をもち、口縁部内側に小突帯が形成されている。395は錆釉が施され、口縁端部を僅かに内側に折り曲げている。ともに古瀬戸後期に属する資料であると考える。

396～399は香炉類で、すべて筒形である。いずれも灰釉を施している。398・399については口縁部が残っていないが、三足が小さく古瀬戸後期に属する資料であろう。

400は底部を糸切りによって切り離し、鉄釉が漬け掛けされている。古瀬戸後期の資料であろう。水滴、合子、茶入などの器種が候補にあがるが詳細は明らかにできなかった。401は外面に灰釉を施し、底部の接地面を施釉後に削っている。小片であり、器種等は明らかにできなかった。

402～414は瓷器系陶器である。402～411については常滑産、412・413は美濃須衛産である。414は産地を明らかにできなかったが、胎土観察から猿投産を候補にあげておきたい。

402～410は甕である。それぞれの口縁部の特徴から、402は５型式、403・404については６型式、405については８型式、406～409については９型式、410については10～11型式に属すると考える*。411については詳細な時期を明らかにできなかった。なお、図示できなかったが常滑産瓷器系陶器にも底部を穿孔したものが確認できており、古瀬戸同様蔵骨器として使用されたと推定できる資料がある。

412･413は筒形の容器である。412は体部外面に三筋文を施している。詳細は明らかにできなかったが、本遺跡で採集できた筒形の容器はこの美濃須衛産の２片のみであり、注目できる成果である。414は壺類である。小片であり詳細は明らかにできなかった。

415～419は中国製陶磁器で、415～417は白磁、418・419は青磁である。415は壺類の肩部である。小片のため耳の有無は確認できないが、四耳壺の可能性が高いと考える。肩の屈曲が強く内外面ともに

* 中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

施釉されており、Ⅲ－２～３類に分類できる資料であろう*。13～14世紀前半のものと考える。416は水注もしくは瓶子類の口縁部と考えるが、詳細は明らかにできなかった。417は椀で体部外面下位から底部外面にかけて施釉していない。内面見込み部分に高台径より広い圏線をもち、高台下側面が広い。Ⅸ－１ａ類に分類できる資料で、13～14世紀前半のものである。418･419は椀である。418はやや外反した口縁部をもつが、小片のため詳細は明らかにできなかった。419は断面方形の高台をもち、体部外面に連弁文が施される。高台径は５ cm を測り、畳付部分及び底部内面は施釉されていない。釉や色調から越州窯系であると考える。

420は瓦質土器の浅鉢で、中世後期に属する資料である。421は茶臼である。凝灰岩を用いて製作されており、表面が平滑に仕上げられている。詳細は明らかにできなかった。

422・423は瓦である。422は軒丸瓦で、巴文をもつ。珠文帯の内側には２本の圏線が施されている。423は軒平瓦で、連珠文をもつ。連珠文の外側には１本の圏線が施され、凹面には布目の圧痕が残る。ともに中世に属する資料である。

424～426は瀬戸美濃で、いずれも擂鉢である。426は体部外面下半部に回転ヘラケズリ調整を施しておらず、大窯第１段階に属する資料と考える。

427～431は近世に属する陶器で、427～429が擂鉢、430が壺類、431が灯明皿である。430は内面に有機物が付着している。いずれも詳細な時期は明らかにできなかった。

以上から、柏尾廃寺跡は古代に起源をもち、中世から近世にかけて存続した遺跡である。次に寺院としての機能を有していた時期や範囲が問題になるが、これについては次章で測量調査の成果から検討してみたい。

10. 柏尾城跡　養老町柏尾

第101図　柏尾城跡（南東から）

第102図　柏尾城跡からの濃尾平野の眺望

標高270～340m の養老山地中腹の尾根上に立地する遺跡で、濃尾平野側の眺望が非常に良い（第102図）。麓からは柏尾廃寺跡にある洞穴の背後を尾根沿いに登るルートが最短である。今回の調査で堀切や小規模な平坦面など城跡であることを示す遺構を確認できたが、遺物は採集できなかった。地元では柏尾廃寺跡から柏尾城跡に登る道を山伏道と呼んだと伝えられており、柏尾廃寺跡に付設された防御施設であった可能性を想定しておきたい。

＊　太宰府市教育委員会2000『太宰府城坊跡ＸＶ-陶磁器分類編-』

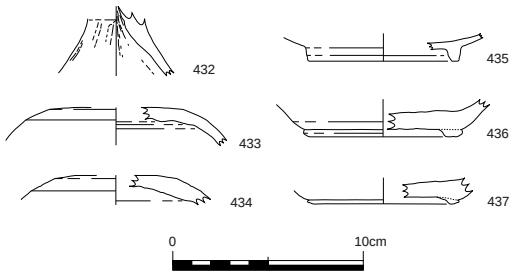
11. 柏尾1･2号古墳　養老町柏尾

第103図　柏尾２号古墳（西から）

柏尾１・２号古墳はいずれも柏尾廃寺跡内に所在する古墳である（第96図）。ともに円墳であり、１号古墳の全長は約15m、２号古墳は約８ｍを測る。このうち２号古墳についてはほぼ完全な形で残っているが、１号古墳については中心部が破壊されており、幅３ｍ、長さ７ｍの大きな穴があいている。また、今回の調査では柏尾廃寺跡の範囲から古墳時代の須恵器が３片採集できているが、これらの古墳に伴うものであるのか、それとも柏尾廃寺跡によって破壊された古墳が他に存在したのかという点については今後さらに調査していきたい。

12. 明徳遺跡　養老町明徳・石畑・鷲巣・飯ノ木

第104図　明徳遺跡（東から）



第105図　明徳遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

明徳遺跡は柏尾谷と滝谷が合流する扇端部に立地しており、標高は約９～20mを測る。また、滝谷南側の大字石畑付近には湧水地があったと伝えられている。

今回の調査では古墳時代の土師器６片、古墳時代須恵器４片、古代須恵器13片、灰釉陶器２片、山茶碗５片、瓷器系陶器１片、寛永通宝１片を採集でき、そのうち古墳時代土師器１片、古墳時代須恵器２片、灰釉陶器１片、山茶碗２片を図示した（第105図の432～437）。

432は土師器の高杯である。遺存状態が悪く、小片であるため詳細は明らかにできなかった。

433･434は須恵器の蓋で、433はセピア色の胎土をもつ。ともに天井部外面を回転ヘラケズリ調整しており、やや平坦である。口縁部が残存していないが、天井部の回転ヘラケズリ調整の範囲が中心から最大径のほぼ５～７割程度におさまっており、渡辺による美濃須衛窯Ⅱ期後半、尾野によるⅢ期中～新段階に属すると考える*。

435は灰釉陶器の皿である。断面方形の付高台をもち、器壁は薄い。残存している部分では施釉は

* 渡辺博人1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋杯の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古学』創刊号
尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５-１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』

確認できなかった。斎藤による猿投窯第Ⅴ期に属すると考える*。

436･437は山茶碗でいずれも荒肌手である。436はやや低い高台をもち、底部内面と体部内面の境にナデによる凹みをもつ。437は体部がほとんど残存していないが、高台は低い。436については第６型式、437については第６～７型式に属すると考える。

さらに、当遺跡では踏査終了後の平成18年９月に岐阜県教育委員会により大垣養老公園線バイパス工事に伴う試掘確認調査が実施され、廻間Ⅰ式を中心とした多数の土師器をはじめ、古代須恵器や灰釉陶器、瓷器系陶器、瀬戸美濃、近世陶器などが遺構とともに確認されている。

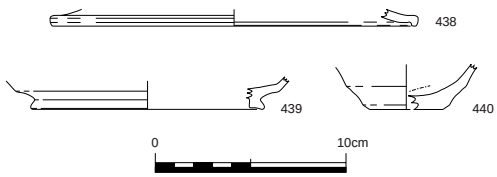
そのため、明徳遺跡は古墳時代初頭から古代・中世・近世にかけて存続した遺跡である可能性が高い。なお、試掘確認調査で確認された遺構・遺物は砂礫層をはじめとした自然堆積層に厚く覆われていた。扇状地が多い当調査区において少数の採集遺物も無視できないことを示す好例であろう。

13. 鷲巣東遺跡　養老町鷲巣・飯ノ木

鷲巣東遺跡は標高３～４ｍを測る扇状地及び沖積低地に立地しており、遺跡のすぐ西側には津屋川が南に流れている。扇端部付近の遺跡であるため、周囲には湧水地があったであろう。

今回の調査では古代の須恵器11片、灰釉陶器９片、中世土師器４片、山茶碗43片が採集できており、そのうち古代の須恵器２片、山茶碗１片を図示できた（第107図の438～440）。

第106図　鷲巣東遺跡（南西から）



第107図　鷲巣東遺跡採集遺物実測図（Ｓ＝１／４）

438は須恵器の蓋である。小片で遺存状態は良くない。口径は約19cmを測り、口縁端部の折り曲げは弱い。尾野によるⅥ期に属する資料と考えておきたい**。439は有台杯である。高台は断面がバチ形で、角が強く張り出し外端接地している。尾野によるⅤ期古段階に属すると考える。440は山茶碗である。体部は丸みをもち、４cmに満たない底部には高台がない。内面に一部自然釉が掛かっており、小杯の可能性を考えておきたい。なお、図示できなかった山茶碗の中には第４～６型式に含まれる椀の小片が確認できている。

以上、鷲巣東遺跡では詳細を明らかにできた遺物は少なかったが、古代から中世にかけて一定量の遺物を採集できており、当該時期の遺跡であると考えておきたい。

*　斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３
**　尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』

14. 白石道遺跡　養老町鷲巣

第108図　白石道遺跡（南東から）

白石道遺跡は滝谷によって形成された標高15～20mの扇状地に立地する遺跡である。今回の調査で採集できた遺物は瀬戸美濃１片のみであったが、周囲に庄司屋敷や堀ノ上といった小字名が残っており、また平成17年11月に岐阜県教育委員会によって実施された大垣養老公園線バイパス工事に伴う試掘確認調査において当遺跡の北東100mの地点で弥生時代終末期から古墳時代初頭に属する土器７片が確認されている。そのため、今回の調査では当採集地点を遺跡として評価した。詳細な検討は資料の増加を待って行いたいが、現段階では弥生時代終末期から古墳時代初頭及び中世末期の遺跡と考えておきたい。

15. 白石古墳　養老町養老

第109図　白石古墳（南から）

白石古墳は標高約170mを測る中位段丘面に立地している。現地での観察では20～40cm程度の石を直径約８ mの範囲に集積しただけのものにも見えるが、過去に鎧が出土したとの伝承が残されている。

岐阜県史や養老町史では後述する千人塚古墳群のことを白石古墳群として報告しており、名称の混乱から創出された古墳の可能性も考えられるが、昭和53年に文化庁文化財保護部から刊行された遺跡地図や平成２年に岐阜県教育委員会から刊行された遺跡地図では当古墳を千人塚古墳群とは別の遺跡として報告している*。さらに、楢崎は千人塚（白石）古墳群とは別に白石に独立した古墳があったことを岐阜県史の中で報告しており、当遺跡のことを指している可能性がある。

そのため、様々な問題はあるが、今回の調査では白石古墳を千人塚古墳群とは別の遺跡として評価した。しかし、今後さらに詳細な検討を必要とするだろう。なお当古墳付近からは瓷器系陶器１片を採集できている。

16. 千人塚古墳群　養老町養老

千人塚古墳群は標高50～80mを測る下位段丘面に立地している。楢崎の報告によれば以前は12～13

* 楢崎彰一1972「古墳時代」『岐阜県史通史編原始』
養老町1978『養老町史通史編上』
文化庁文化財保護部1978『全国遺跡地図　岐阜県』
岐阜県教育委員会1990『改訂岐阜県遺跡地図』

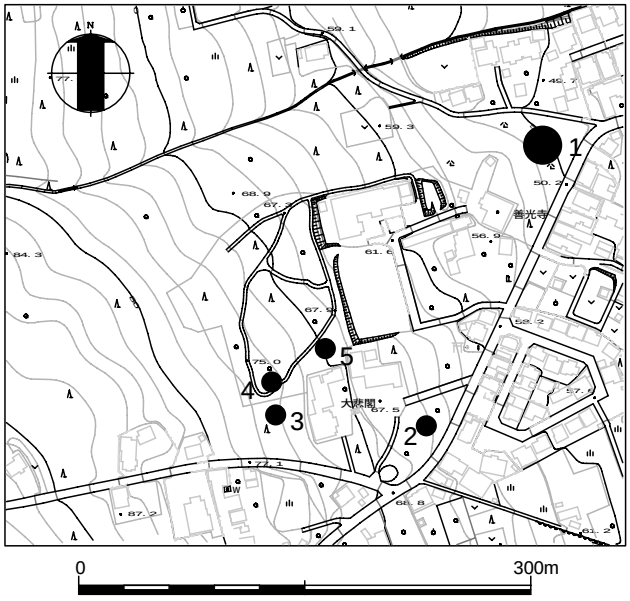
第５表　千人塚古墳群一覧

番　号	墳　形	全長（m）
1	円　墳	25
2	円　墳	13
3	円　墳	－
4	円　墳	－
5	円　墳	－

基の古墳からなる古墳群であったようであるが、現在は５基の円墳を残すのみである（第110図、第５表）*。

今回の調査ではこの内３～５号古墳を確認することができず、その位置や墳形については養老町文化財保護協会の調査報告に依った**。

千人塚１号古墳は標高約50m に位置し、現地表面の観察からは周溝をもつ可能性が指摘できる。墳頂部には廃墟となった家屋が残されている。すぐそばで須恵器の甕を１片採集できているが、古代に属するもので１号古墳の時期を示す可能性は低いだろう（第112図の441）。千人塚２号古墳の墳頂部には石仏や板碑、五輪塔、宝篋印塔が集積されている（第111図）。



第110図　千人塚古墳群の立地と構成（S＝1/5,000）

第111図　千人塚２号古墳（北から）

第112図　千人塚古墳群採集遺物実測図（S＝1/4）

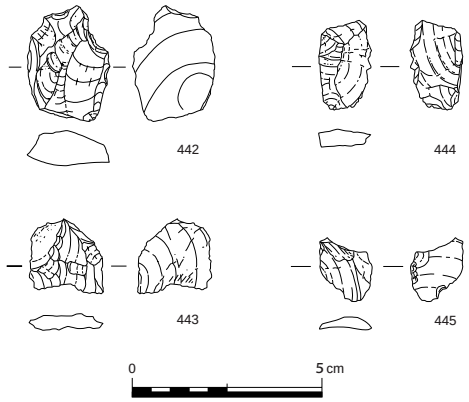
17. 京ヶ脇遺跡　養老町京ヶ脇

京ヶ脇遺跡は標高約65～80m を測る下位段丘面に立地する遺跡である。今回の調査では石器９片、近世陶器１片を確認できており、そのうち石器４片を図示できた（第114図の442～445）。

442はチャート製である。先端部右側面に抉りが施されている。詳細は明らかにできなかったが、先端部左側面を刃部としたナイフ形石器かスクレイパーの可能性を考えておきたい。443～445はチャート製の剥片である。いずれも詳細な時期は不明であるが、周囲から土器などは発見されておらず、旧石器時代に遡る資料であると考えておきたい。

*　楢崎彰一1972「古墳時代」『岐阜県史通史編原始』
**　養老町文化財保護協会1974「養老町の埋蔵文化財包蔵地」『養老町の文化財』第13号

第113図　京ヶ脇遺跡（南東から）



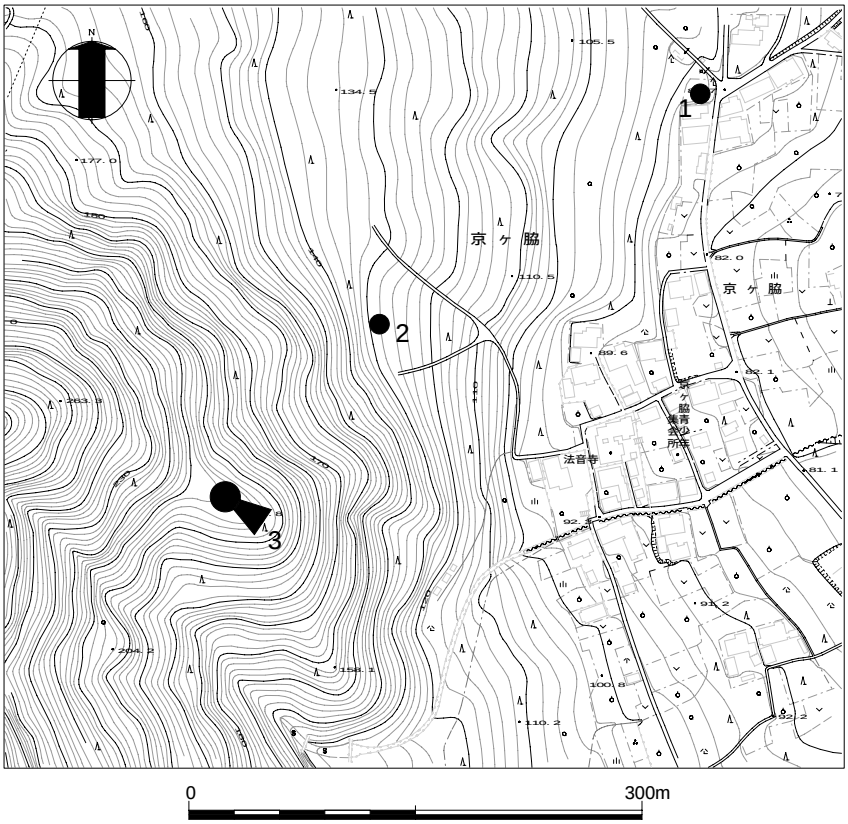
第114図　京ヶ脇遺跡採集遺物実測図（S＝1／2）

18. 京ヶ脇１～３号古墳　養老町京ヶ脇

養老町京ヶ脇には３基の古墳があるが、それぞれにやや距離があり立地も異なるため、今回の調査では古墳群としては評価せず個別の古墳として扱った。いずれも遺物は確認できていない。

京ヶ脇１号古墳は標高約90m の中位段丘面に立地しており、これまでの遺跡地図で京ヶ脇古墳と報告されている遺跡と同一のものである。現況は畑地であり、現地では墳丘を確認することはできなかった。過去の調査報告や養老町史では畑地・柿の老木の下に埋まるとされているのみでそれ以上の報告はなく、詳細は明らかになっていない。今後の調査の機会を待ちたい。

京ヶ脇２号古墳は標高約130m を測る山腹緩斜面に立地している。約13m の円墳で、一部林道によって破壊されている（第116図）。



第115図　京ヶ脇１～３号古墳の分布と立地（S＝1/5,000）

第116図　京ヶ脇２号古墳（東から）

第117図　京ヶ脇３号古墳（北西から）

京ヶ脇３号古墳は山腹から平野部につき出す尾根上に立地している。標高は約200m を測る。雑木が繁茂しており、詳細な観察は難しかったが、全長約40m の前方後円墳である可能性がある。前方部を東の平野部に向けており、古墳の周囲にはやや平坦な地形が残されている。

19. 養老神社経塚跡　養老町養老公園

養老神社経塚跡は養老神社の敷地拡張工事において発見された遺跡である。村上の報告によれば昭和37年３月28日に本殿裏手の石垣の中から工事中に外容器が転げ出たことが発見の契機であったらしい*。外容器である常滑産瓷器系陶器の甕の中には、経筒、鏡３面、刀子、火打鎌、青白磁の合子１片が納められていた。外容器の蓋の記述はない。合子について甕の中に流れ込んだ泥土の中から発見されたという記述があることから、外容器が上下を逆にしていた可能性も低いだろう。経筒の中に経典は残存していなかった。

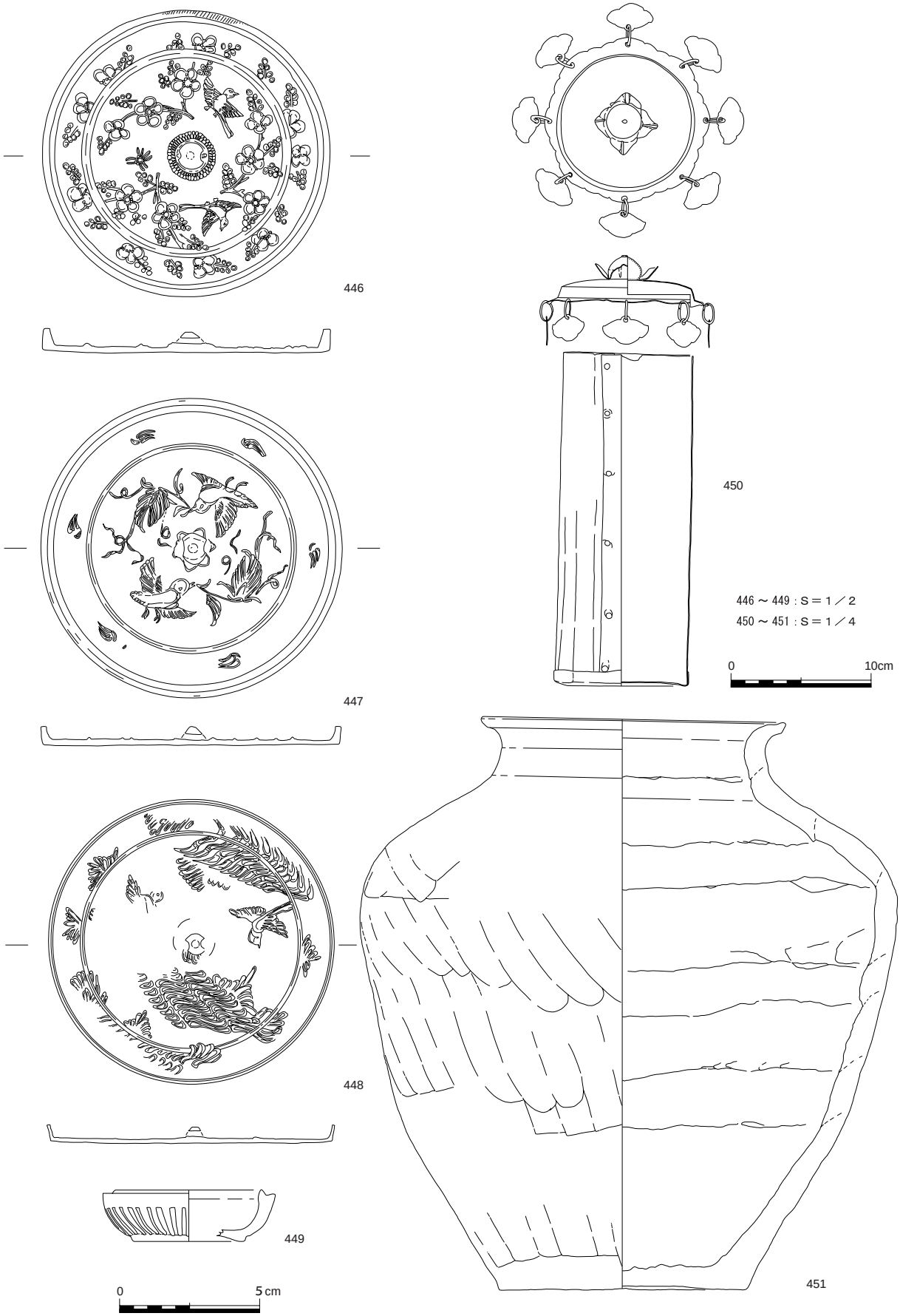
第118図　養老神社経塚跡（北東から）

なお、その出土位置が本殿の真後ろであり、外容器の口縁部に古い欠損がみられることから二次移動を考える意見もあるが、現段階での判断は困難である**。ただし、養老神社が元は養老町高林にあったという伝承があることは注意しておく必要があるだろう。

今回の調査では遺跡周辺で遺物を採集することはできていないが、当時出土した遺物のうち常滑産瓷器系陶器の甕、鏡３面、経筒、合子の実測図の写しを岐阜県教育文化財団文化財保護センターから寄贈していただいた。ここでは、その実測図をもとに養老町教育委員会で図化したものを示す（第119図の446～451）。

446～448は和鏡でいずれも銅製である。446は直径10.2cm を測り、内区に山吹双雀文、外区に山吹文をもつ。紐座は花芯形を呈する。447は直径10.6cm で内区に瑞花鴛鴦文、外区に流雲文をもつ。紐

*　村上弁二1971「養老神社境内出土経塚埋蔵品について」『養老町の文化財』第２号
**　花林尚雄1970「養老神社経塚出土品」『岐阜県指定文化財調査報告書』第13巻



第119図　養老神社経塚跡出土遺物実測図

座は六弁の花形を呈する。448は直径10.2cm を測り、内区に流雲双禽文をもち、外区に流雲文をもつ。紐座は輪菊形で、背面文様の残りが良くない。

449は青白磁の合子で破片である。口径は5.2cm で底径は4.0cm、器高は1.8cm を測り、受部及び底部外面が露胎している。時期等詳細は明らかにできなかった。

450は経筒で銅製である。蓋は花形を呈しており、８つの稜をもつ。稜間には３ヶ所の欠き切りがあり、中央の欠き切りが最も深い。上面の紐は四葉を具した中空の宝珠形で、四葉の中央には上面から棒状工具で線をつけ葉脈を表現している。紐の先端には約１ mm の突出が見られる。瓔珞は８個あり平均の長さは3.3cm、高さは1.9cm である。平面形は上辺が笠形で、下辺は丸みを帯びている。上辺には６ヶ所、下辺には３ヶ所の欠き切りがある。瓔珞を吊す掛け物は紐状の銅を楕円形のリングに成形しており、その幅は９ mm である。蓋の掛け物の穿孔径は約３ mm を測り、瓔珞よりもやや大きい。いずれも上面から下面に向けて穿たれている。蓋の盛り部径は上段が9.2cm、下段が9.8cm である。筒は口径9.2cm、底径8.3cm、器高は23.8cm を測る。円筒形を呈し、約1.5cm の合わせ目を６個の鋲で留めている。鋲は外面から打ち込まれ、内面で先端を潰している。外面には縦削調整が施されており、削り幅は約３ cm を測る。底板は外側から被せるだけで、留め具はない。筒部に蓋を被せると総高は27.1cm になる。

451は瓷器系陶器の甕で常滑産である。口径17.7cm、胴部最大径31.2cm、底径14.3cm、器高33.5cm を測り、口縁部内面、肩部外面、底部内面に自然釉が掛かる。口縁部はやや厚く、口縁端部が斜め上方につまみ上げられており、中野による４型式に属し、12世紀末から13世紀初頭の資料であると考える*。

以上から本遺跡の時期について現段階では外容器である常滑産の甕の時期をその上限に想定するのが妥当であろう。本遺跡に関わるその他の遺物は出土例が少なく詳細な所属時期を明らかにするのが困難である。また、いずれも伝世して使用される可能性が高く、流雲双禽文鏡の背面の摩耗が著しいことも製作後すぐに埋納されなかった可能性を示しているだろう。

20. 小倉山古墳　養老町小倉

小倉山古墳は標高約170m を測る小さな尾根の先端部に立地している。古墳西側の尾根は一部切断されており、そこに林道が通っている。古墳のすぐ下からは東に向けて狭い下位段丘面が形成され、南側では小倉谷が東西に走っている。墳形は不明瞭であるが円形の可能性が高い。全長は約30m を測り、墳頂部には赤岩龍神と白龍大神を祀った社が建てられている。周囲から石器が出土したとも伝えられているが、今回の調査では遺物は確認できなかった。

第120図　小倉山古墳（南から）

＊　中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

21. 薬師山遺跡　養老町鷲巣・若宮

第121図　薬師山遺跡（北西から）

薬師山遺跡は多芸七坊の一つである光明寺跡に比定されている遺跡で、そのほとんどが養老町鷲巣の飛地である。標高110～220mの山地及び下位段丘面に立地しており、北側には小倉谷が走っている。

養老山地に所在する他の中世山岳寺院跡と同様に階段状に造成された平坦面が遺存しており、遺跡の最高部付近では石仏や五輪塔を確認できている。

今回の調査では古墳時代の土師器１片、中世土師器10片、山茶碗５片、古瀬戸１片、瓷器系陶器５片を採集しており、そのうち中世土師器１片、山茶碗５片、瓷器系陶器１片を図示した（第122図の452～458）。

452は土師器の皿である。手づくねにより成形されており、口径は8.4cmを測る。外面には１段ナデを施し、体部から口縁部にかけてほぼ均一な厚さを呈している。器高は低く、体部内面に指頭圧痕が残る。小野木によるA2a類に分類できるだろう*。

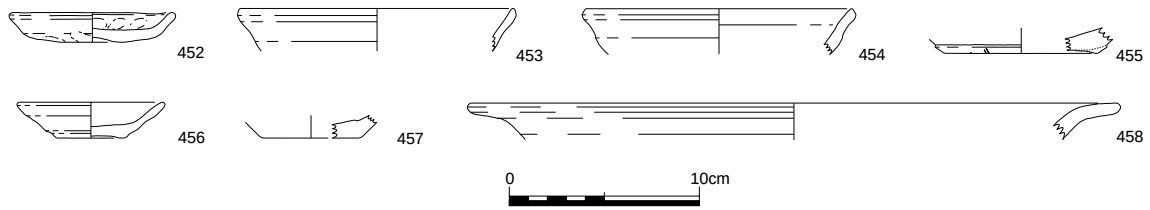
453～457は山茶碗で、すべて荒肌手である。453・454は椀の口縁部で、ともに口縁部外面がナデによりやや凹んでいる。454は口縁端部が尖っているが、453は尖りがやや弱い。453は第６型式、454については第７型式に属すると考える。455は椀の底部である。小片であるため底部内面と体部内面の境を観察しづらいが、高台がやや低く底径が8.0cmを測ることから第６型式に属すると考える。

456・457は小皿である。456は底部が突出しており、体部はやや直線的である。457は体部内面と底部内面の境に浅い凹みをもつ。456は第５型式、457は第６～７型式に属するだろう。

458は瓷器系陶器の甕で、常滑産である。ほぼ直線的に開く口縁部をもち、端部は丸くおさめている。口縁部内面には自然釉が掛かる。中野による３型式に属する資料であろう**。

なお、図示できなかったが当遺跡内において古墳時代に属する土師器を採集できており、当遺跡内に古墳が存在した可能性がある。

以上から、薬師山遺跡は中世の遺跡であり、その始まりは12世紀後半頃であろう。採集遺物からは当遺跡を寺院跡と確定できるような資料は得られていないが、平坦面や石造物が確認できていることから、その可能性は高いと考える。今後さらに調査を続け、資料の充実を図りたい。



第122図　薬師山遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

*　小野木学1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第２号
**　中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

22. 道上遺跡　養老町田・有尾

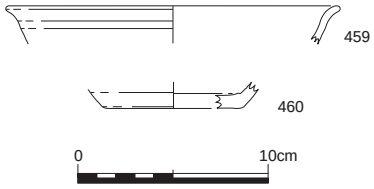
道上遺跡は標高約１～1.5mの沖積低地に立地する遺跡で、今回の調査で遺物を採集できた遺跡の中で最も低地に位置している。そのため、当遺跡は養老町の地理的環境の変化を考える上でも重要であろう。

今回の調査では灰釉陶器１片、山茶碗４片、古瀬戸１片、瓷器系陶器１片、近世陶器２片を採集できた。小片が多く、採集片数も少ないが、周囲に古代から中世の遺跡は確認できておらず、当遺跡に伴う資料であると考える。採集できた遺物のうち、灰釉陶器１片と山茶碗１片を図示できた（第124図の459・460）。

459は灰釉陶器の椀である。小片であり、詳細な時期は明らかにできなかったが古代に属するものである。表面の摩滅が著しい。460は山茶碗の椀である。高台をもたず、体部は直線的に伸び、底部内面と体部内面の境は角張っている。第８型式に属する資料であろう。

以上から道上遺跡は中世を中心とした遺跡である。古代に遡る可能性もあるが、確認できた資料は上述した459の摩滅の著しい灰釉陶器のみであり現段階での評価は難しい。今後の資料の増加を待ちたい。

第123図　道上遺跡（南東から）



第124図　道上遺跡採集遺物実測図（S＝1／4）

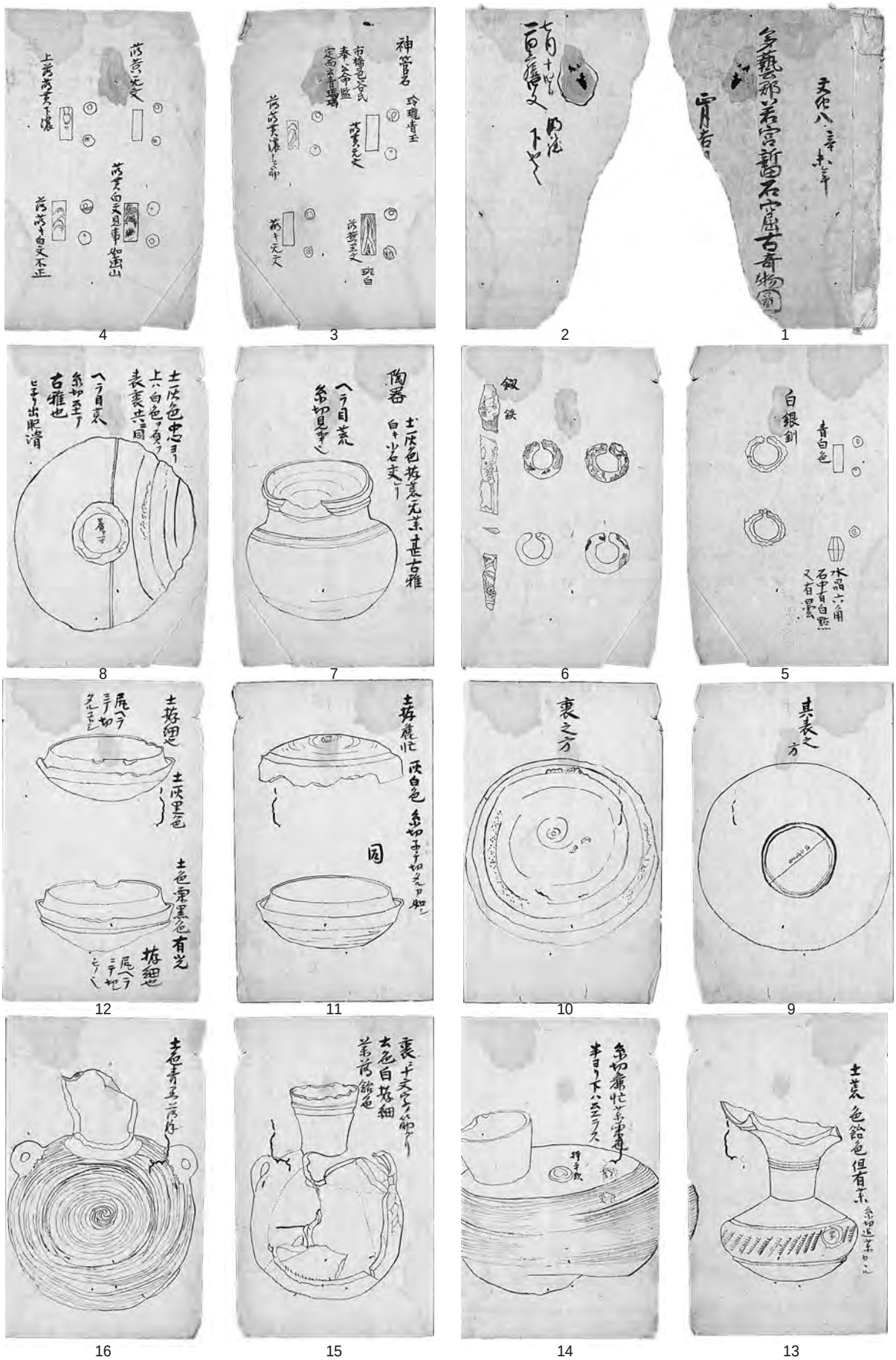
23. 若宮古墳　養老町若宮

若宮古墳は標高約80mの下位段丘面に立地していた古墳であるが、昭和44年の大垣共立銀行研修所建設工事において完全に破壊されている。養老町史では、文化６年（1809）に開拓に伴い、長さ３間、幅１間ほどの石室が発見され、石室内からは須恵器の他、「青玉といふべきもの、白銀もて造れる釧めくもの、小き剱の形」などが出土したことが報告されている*。この町史の報告は養老町石畑の中島邦彦氏が所有している文化８年（1811）の多藝郡若宮新田石窟古奇物圖（作成者：国学者　小原君雄）に基づいており、今回の調査では中島氏のご協力により本資料を実見することができた（第125～127図）。

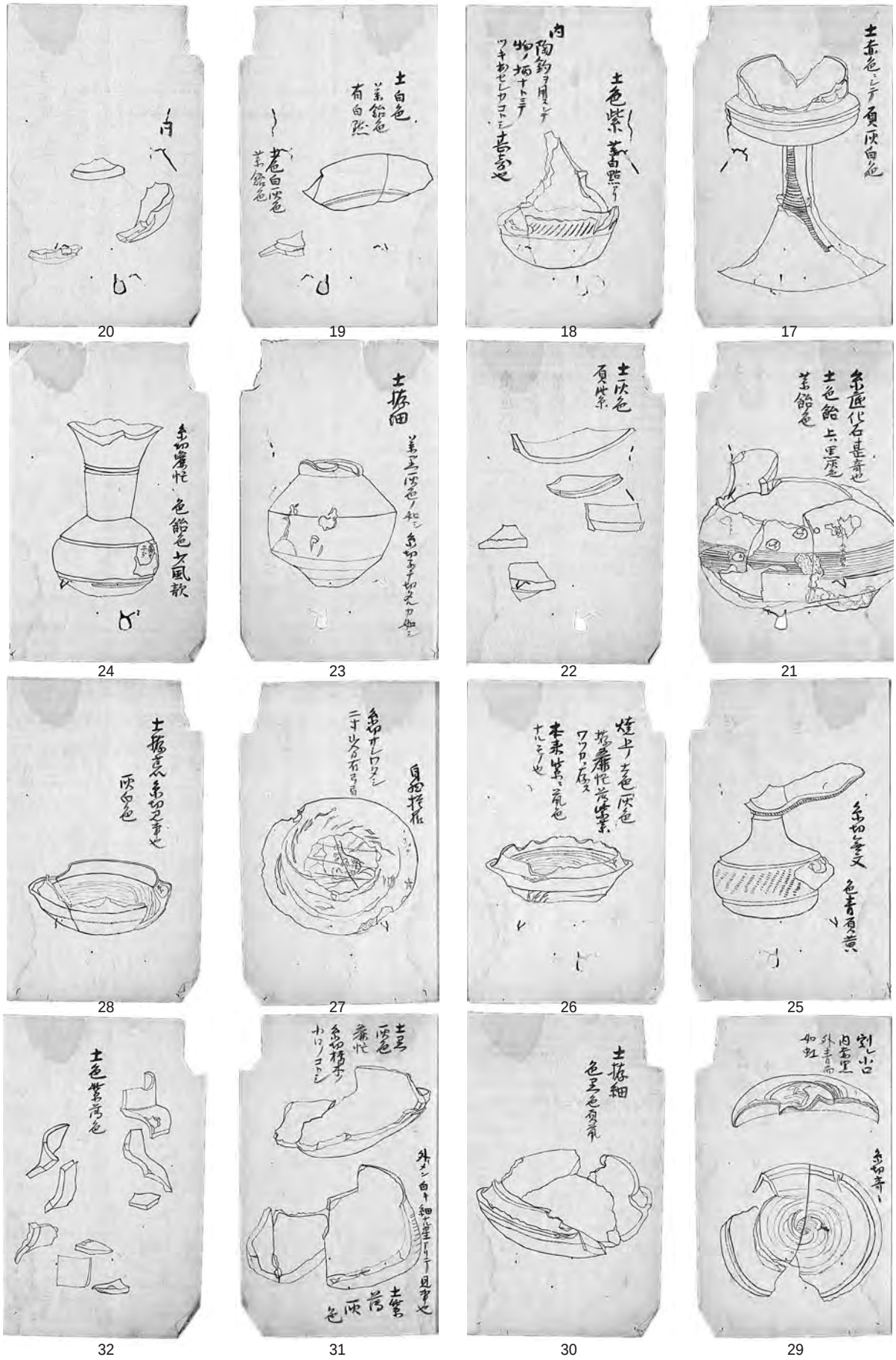
記述の解読は今後の課題であるが、古墳の位置した場所や出土遺物の絵図から、若宮古墳が横穴式石室をもち、少なくとも鉄刀が１振、管玉が９点、水晶製の切子玉が１点、耳環６点、須恵器の蓋が５点、杯８点、有蓋高杯１点、瓶４点、提瓶３点、平瓶２点、長頸壺１点、短頸壺３点、盌１点、不明器種２点を副葬していたことが分かる。これらの中には天井部と口縁部の境に沈線を施す蓋や環状

＊　養老町1978『養老町史通史編上』

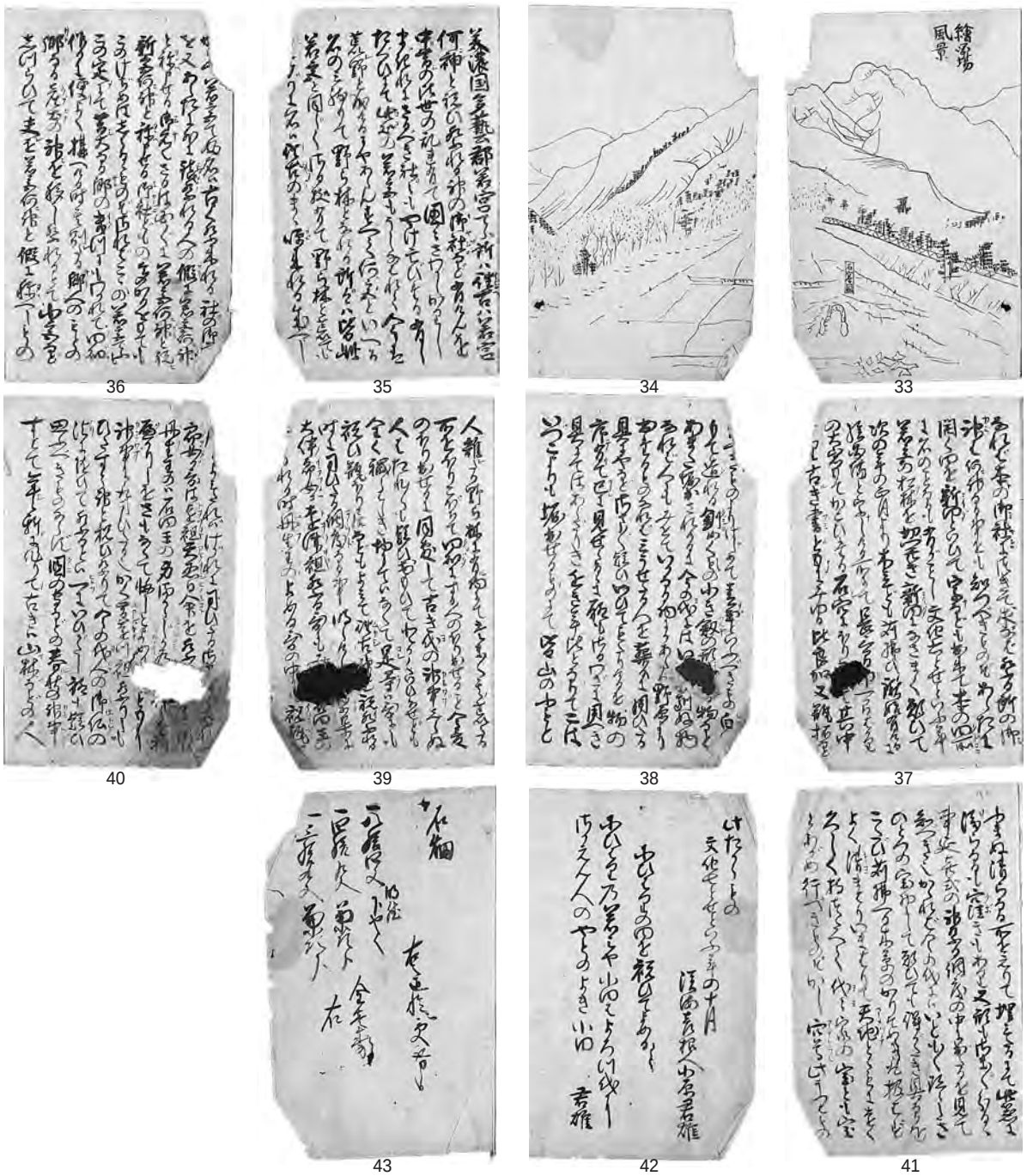
の把手をもつ提瓶があり、おおよそ6世紀前半から7世紀前半にかけての資料であろう。その存続期間から追葬の可能性を指摘できるが、詳細な検討については記述を解読した後に行いたい。出土した遺物の所在は不明である。



第125図　多藝郡若宮新田石窟古奇物圖１



第126図　多藝郡若宮新田石窟古奇物圖２



第127図　多藝郡若宮新田石窟古奇物圖３

（３）遺物の散布状態とその立地

１．養老・上多度地区の古墳時代土師器の散布状態（第128図）

養老・上多度地区の分布調査で採集できた古墳時代土師器の総数は８片で、立地毎の採集比率は山地12.5%（１片）、下位段丘面12.5%（１片）、扇状地75.0%（６片）である。

しかし、山地及び下位段丘面で採集されている遺物は古墳に伴う可能性が強いもので、実質当該時期の集落に伴う遺物は明徳遺跡の立地する扇状地での採集に限られている。先に報告した多芸西部・高田・広幡・笠郷地区や後に報告する池辺地区では古墳時代の土師器を全く採集できておらず、現段階では牧田川以南の地域における古墳時代土師器の採集地点は自ずと養老山麓の扇状地に限られることになる。今後、試掘確認調査等によって古墳時代における牧田川以南の平野部が利用されていたかどうかを確認していくことが重要な課題となるだろう。

また、明徳遺跡の立地する扇状地は柏尾谷と滝谷の二つの谷から形成されており、他の養老山麓の扇状地に比べ形成速度が早く、規模も大きい。そのため他の養老山麓の扇状地より生活に適した環境を得やすかった可能性がある。採集できた遺物数が少なく、採集地点の立地情報がどの程度当時の状況を反映しているか判断は難しいが、集落に伴う遺物がほぼ扇状地に集中し、現在の沖積低地での採集が皆無であることには注意しておきたい。

なお、明徳遺跡は牧田川以南の地域において象鼻山古墳群や日吉遺跡と同時期に営まれた数少ない遺跡と評価でき、その立地から当地域の古墳時代の地理的環境の一端を復元できる重要な遺跡である。

２．養老・上多度地区の古墳時代須恵器の散布状態（第129図）

養老・上多度地区の分布調査で採集した古墳時代須恵器片の総数は８片で、すべて扇状地から出土している。この中には古墳に伴う可能性が高いものも含まれているが、いずれにせよ古墳時代土師器と近似した結果であり、依然として遺物採集地点は養老山麓部に限られている。

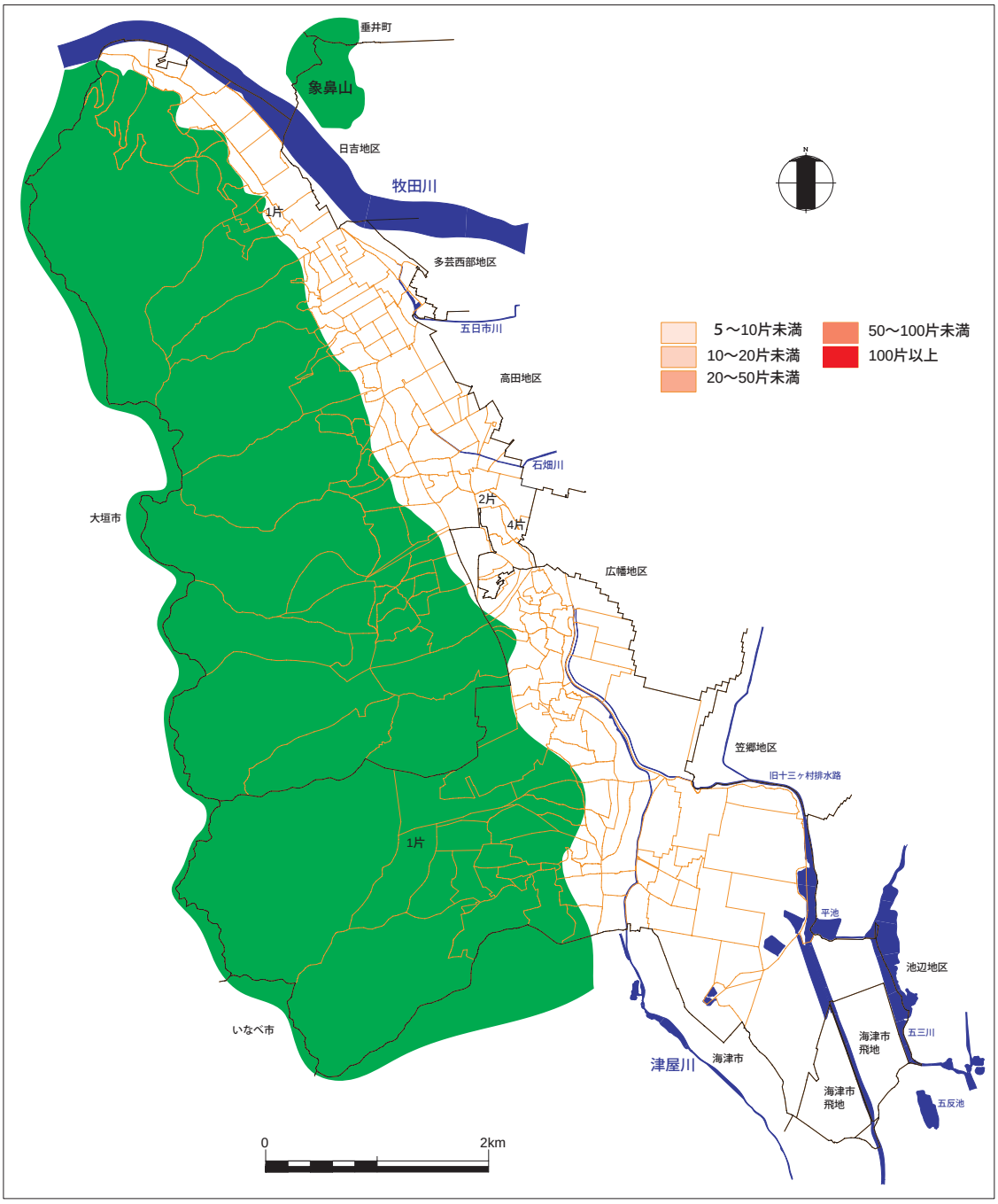
しかし、散布状態からは古墳時代の土師器に比べ、採集できた細別区画数が増加していることが指摘できる。その一因に養老山地では古墳時代中期以降に古墳が増加することがあるだろうが、遺物の散布範囲が明徳遺跡を中心として拡大し、また当地域の古墳時代末から古代頃が微起伏埋積期に分類されることから、利用地形が多様化したことも考えておきたい*。

また、採集遺物数は少ないが、当調査区には詳細が不明な上方古墳を除き21基に上る古墳が確認できており、その立地は山地14.3%（３基）、中位段丘面57.1%（12基）、下位段丘面14.3%（３基）、扇状地14.3%（３基）である。沖積低地で確認できない点では須恵器の散布状態と同様であるが、扇状地の古墳の占める比率が２割にも満たないことは古墳と集落の立地が目的にあわせて選択されている可能性を示しているだろう。

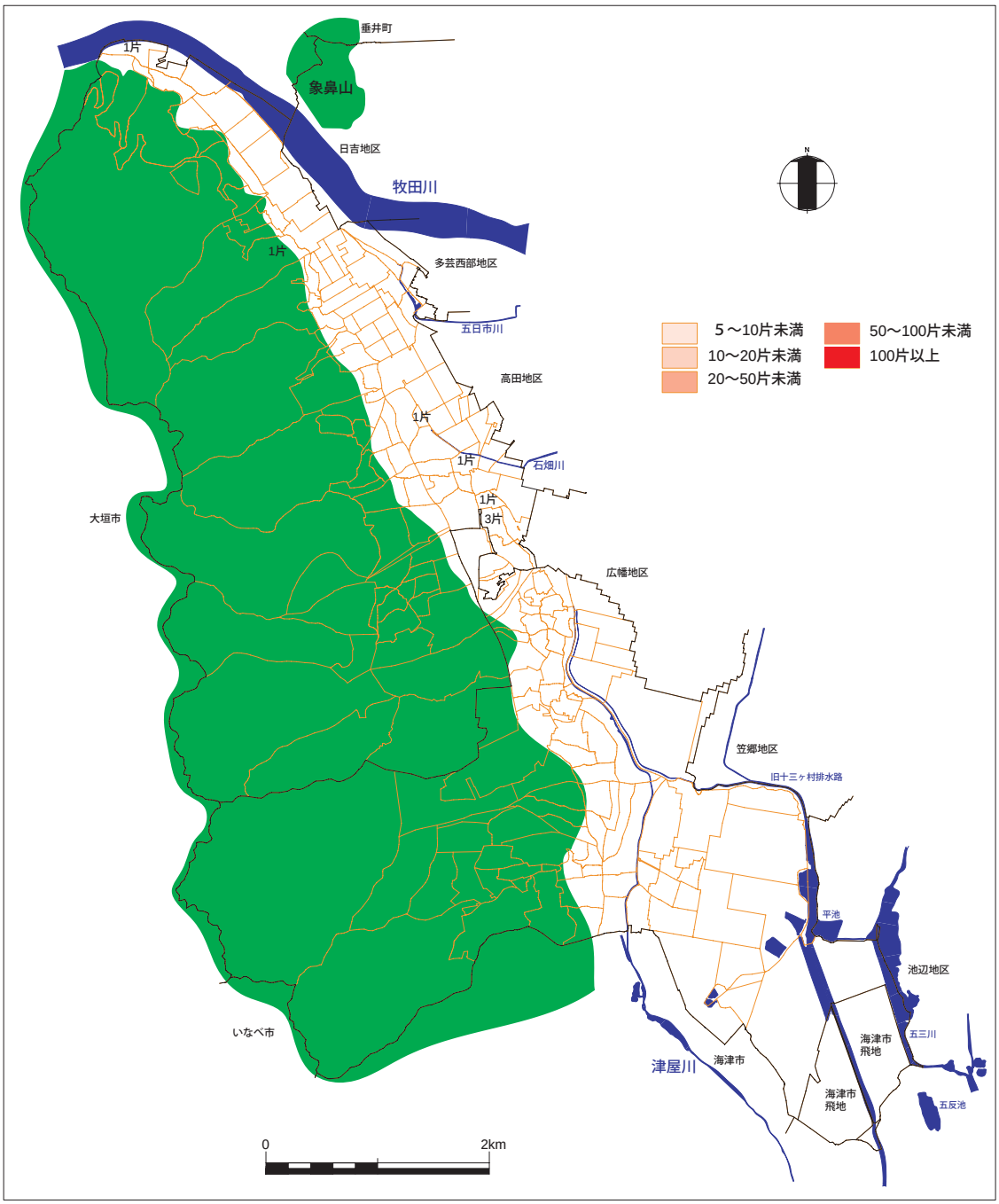
さらに、21基の古墳に対し、現在確認できている集落跡の可能性をもつ遺跡は明徳遺跡１つのみであり、当該時期の集落の立地が埋積の著しい扇状地を中心とするにしても数が少ない。日吉・室原・小畑・多芸東部地区と同様、当時期の集落が遺跡として把握しにくい形態をとる可能性を考えておきたい。

---

* 高橋　学1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』



第128図　養老・上多度地区の古墳時代土師器の散布状態（S＝1/60,000）



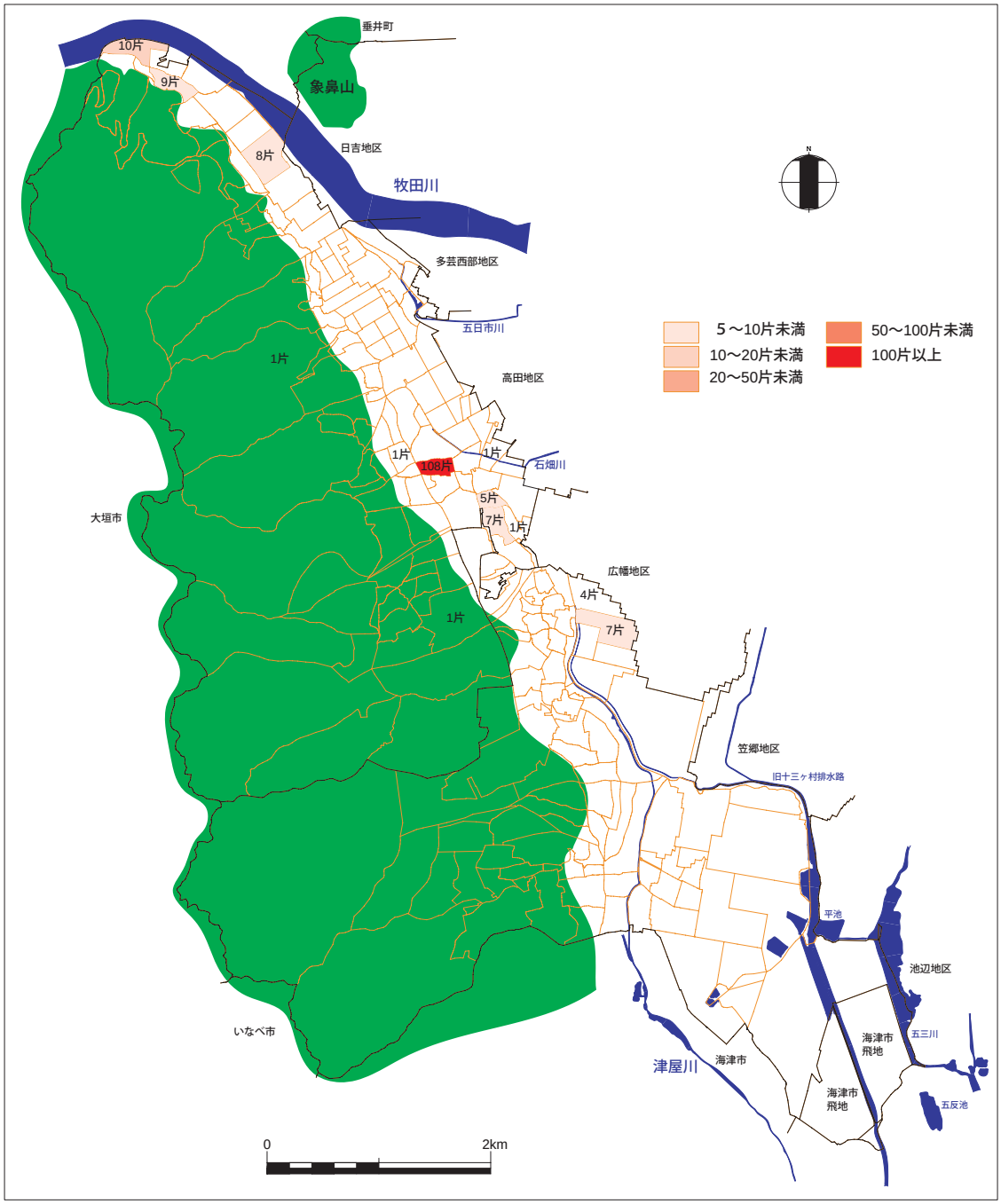
第129図　養老・上多度地区の古墳時代須恵器の散布状態（S＝1/60,000）

3．養老・上多度地区の古代須恵器の散布状態（第130図）

養老･上多度地区の分布調査で採集した古代須恵器片の総数は163片に上り、全て扇状地で採集されている。これは当調査区の種類毎の採集破片数では最も多い数であり、遺物が採集できた細別区画数も古墳時代の土師器や須恵器に比べ、格段に増加している。日吉・室原・小畑・多芸東部地区と同じく、利用地形の多様化及び遺跡の長期存続を指摘しておきたい。また高田地区への集落の進出が少なくとも古代にはなされていたことが明らかにできており、それまでの時期に比べ土地も安定しただろ

う。採集地点の立地が平野部に限られることも、他の調査区と同じ動向である。ただ、沖積低地においては遺物が採集できておらず、古墳時代の土師器や須恵器と同様に遺物の採集地点は養老山麓部に限られている。

さらに、一つ注意しておきたい点は鷲巣東遺跡より南において全く遺物が採集できていないことである。先にも述べたが、養老山地には広く古墳が分布しており、鷲巣東遺跡より南に位置する古墳も多い。そのため、これらの地域にも集落が存在する可能性を想定しておきたいが、採集遺物数がピー



第130図　養老・上多度地区の古代須恵器の散布状態（S＝1/60,000）

クを迎える古代においても遺物が採集できていない。これらの地域においても段丘面や扇状地は形成されており、地理的な問題だけでは理解しにくい結果である。沖積低地の陸地化が他と比較して遅かったことがその要因であろうか。

なお、柏尾廃寺跡の測量調査においては、山地でも古代須恵器を採集できている。前後の時期に比較して採集遺物は少量であるが、古代においても山地利用が行なわれていることが分かる。

4．養老・上多度地区の灰釉陶器の散布状態（第131図）

養老・上多度地区の分布調査で採集した灰釉陶器片の総数は19片で、その立地毎の内訳は、下位段丘面が１片で5.3%、扇状地が17片で89.5%、沖積低地が１片で5.3%である。古代須恵器と同様に平地を中心とした立地をとるが、僅かでも下位段丘面や沖積低地で遺物が採集できていることは重要であろう。具体的には下位段丘面での遺物の採集を中世において山地利用が活発化する端緒、沖積低地での採集は当調査区の陸地化が進行したことを示すと考えておきたい。ただし、牧田川以北や高田地区のように段丘面が安定化するようになるのは中世においてであったと考えておきたい。

5．養老・上多度地区の山茶碗の散布状態（第132図）

養老・上多度地区の分布調査で採集した山茶碗片の総数は104片で、その立地毎の内訳は山地18.3%（19片）、中位段丘面2.9%（３片）、下位段丘面7.7%（８片）、扇状地68.3%（71片）、沖積低地2.9%（３片）である。立地は多様化し、採集できた細別区画数はピークに達している。

特に、山地や中位及び下位段丘面での採集破片数の増加が顕著であり、中世において再び山間部の利用が活発になっていることがわかる。その原動力は養老山地に展開する中世山岳寺院の隆盛であっただろう。

なお、平地の散布状態では灰釉陶器が採集できた細別区画と重複しているものがあり、中世において平地に立地する遺跡の中には古代後期にその端緒を求められるものがある。

6．養老・上多度地区の瓷器系陶器の散布状態（第133図）

養老・上多度地区の分布調査で採集した瓷器系陶器片の総数は68片で、その内訳は山地38.2%（26片）、中位段丘面13.2%（９片）、下位段丘面23.5%（16片）、扇状地23.5%（16片）、沖積低地1.5%（１片）である。山茶碗に比べ山地や中位及び下位段丘面での比率が高いが、立地の多様化や細別区画数が多いという点では山茶碗とほぼ同じ評価ができるだろう。

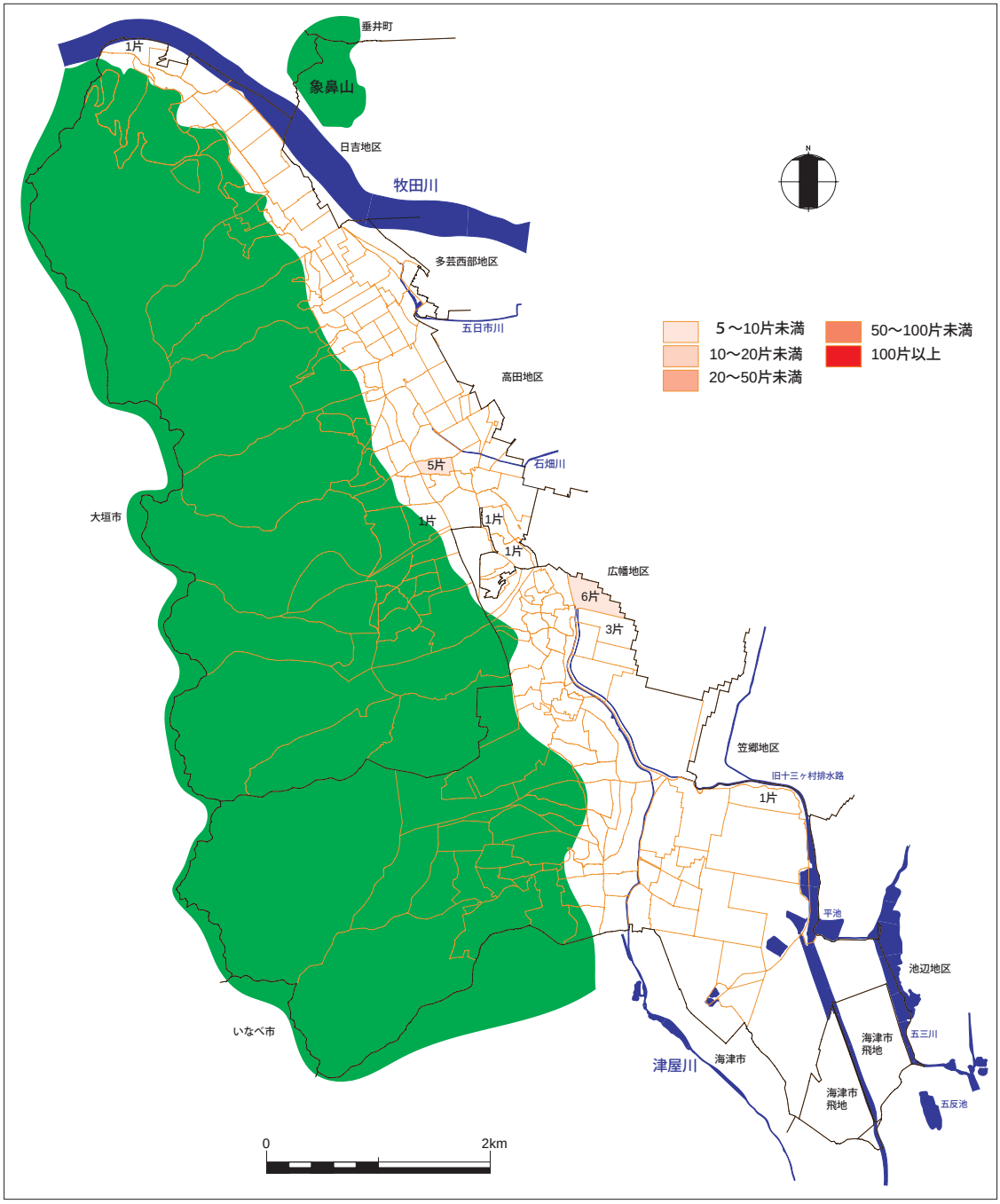
7．その他の遺物の散布状態

以上で示した遺物以外のものとして、旧石器時代の石器９片、古代土師器４片、中世土師器28片、古瀬戸96片、中国製陶磁器５片、瀬戸美濃19片などがある。

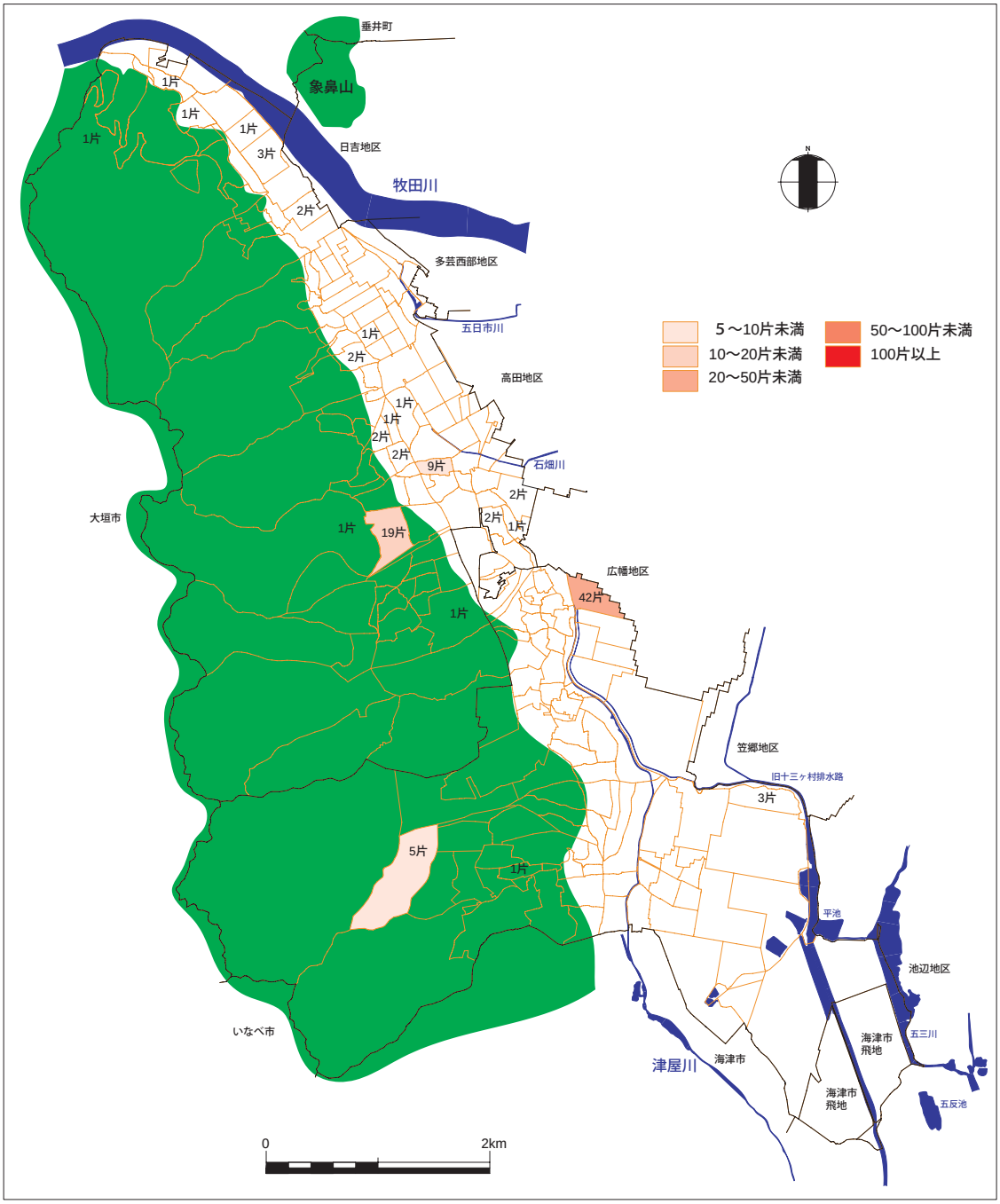
旧石器時代の石器はいずれも下位段丘面からの採集であり、全て京ヶ脇遺跡に属する遺物である。

縄文時代の遺物は今回の調査では採集できていないが、海津市の養老山麓沿いに庭田貝塚や羽沢貝塚が所在していることから、養老町においても山麓部では当該時期の利用があった可能性は高いと考えている。今後発見に努めたい。

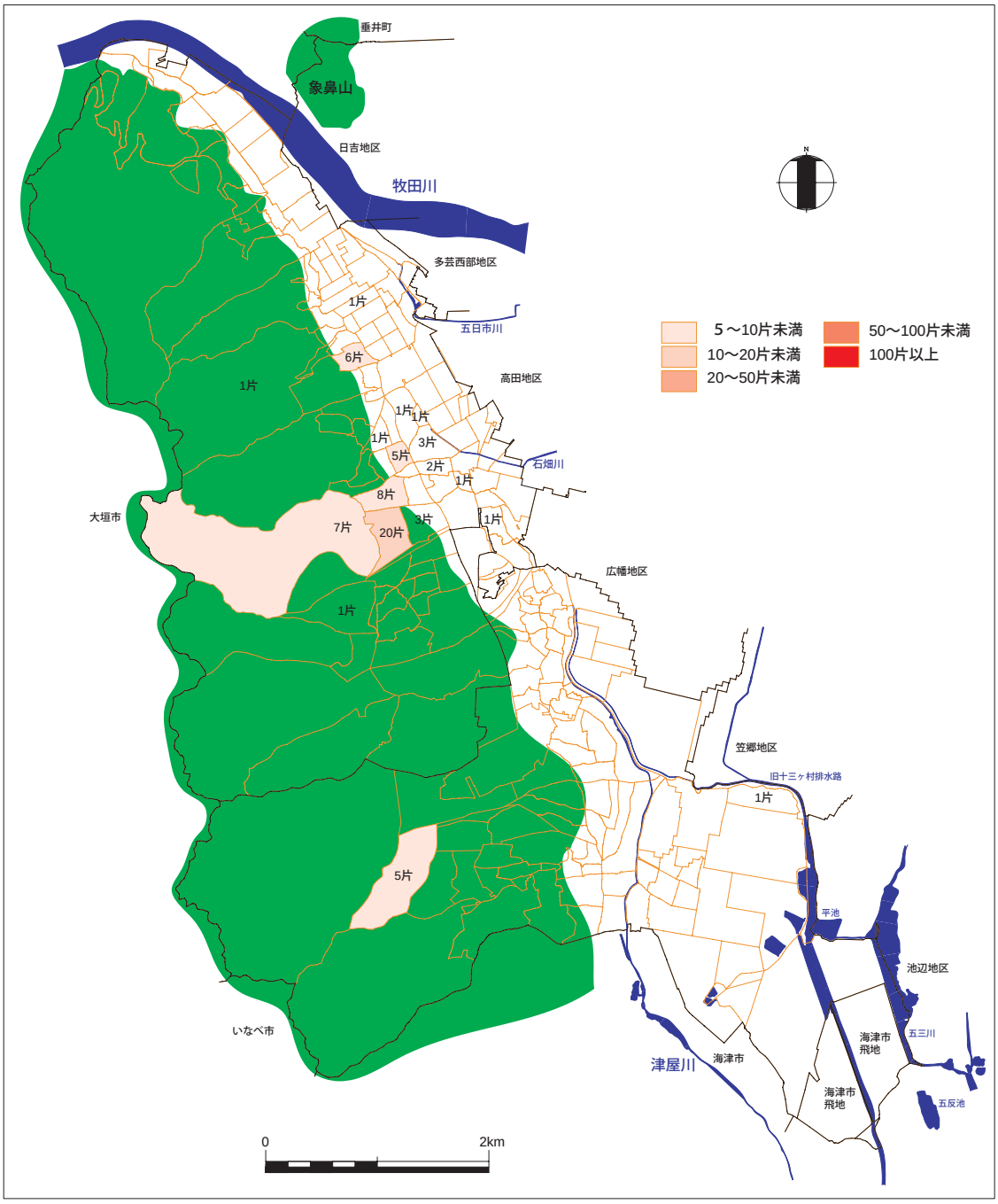
また、中世土師器についてその散布状態は図示しなかったが、その立地毎の内訳は山地67.9%（19



第131図　養老・上多度地区の灰釉陶器の散布状態（S＝1/60,000）



第132図　養老・上多度地区の山茶碗の散布状態（S＝1/60,000）



第133図　養老・上多度地区の瓷器系陶器の散布状態（S ＝ 1 /60,000）

片)、中位段丘面3.6%（１片)、下位段丘面3.6%（１片)、扇状地21.4%（６片)、沖積低地3.6%（１片）であり、図示した山茶碗や瓷器系陶器と比較しても山地からの採集が多い。山岳寺院跡との深い関わりが予想でき、注意しておきたい。

第６表　養老・上多度地区の遺物採集地点の立地

立地		古墳時代 土師器	古墳時代 須恵器	古代須恵器	灰釉陶器	山茶碗	瓷器系陶器
山地	合計	1				19	26
	総合計の%	12.5%				18.3%	38.2%
中位段丘面	合計					3	9
	総合計の%					2.9%	13.2%
下位段丘面	合計	1			1	8	16
	総合計の%	12.5%			5.3%	7.7%	23.5%
扇状地	合計	6	8	163	17	71	16
	総合計の%	75.0%	100.0%	100.0%	89.5%	68.3%	23.5%
沖積低地	合計				1	3	1
	総合計の%				5.3%	2.9%	1.5%
合計	合計	8	8	163	19	104	68
	総合計の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

（４）小結

養老･上多度地区では分布調査によって古墳21基を含む35遺跡を確認し、548片の遺物を採集することができた。当地区は関ヶ原から伊勢へ抜ける交通の要衝でもあり、また標高800m を測る養老山地から海抜０ m の沖積低地、その間には扇状地と段丘面といった非常に多様な地形から成り立つ地域でもある。

こうした地域において採集できた資料を時期・種類・採集地点・立地・遺跡の性格毎に分析した結果、旧石器時代の遺跡は下位段丘面、古墳時代から古代・中世にかけての集落遺跡は扇状地、古墳や中世寺院跡は主に山地から中位及び下位段丘面を中心に立地するなど、遺跡の性格や時期によって様々な地形を選択的に利用していたことを明らかにできた。

なお、こうした様々な立地選択の中においても養老町明徳から石畑付近の扇状地は古墳時代以降継続的に利用されており、特に戸関遺跡は聖武天皇の行幸に深く関わった可能性がある。古代における多藝郡の中心的役割を果たした遺跡の一つにあげられるだろう。

以上、背後に養老山地を抱く当地区が、養老山地が形成する山麓部の扇状地を中心とし、旧石器時代以降多様な地形を目的にあわせて利用してきた過程を分布調査により知ることができた。中でも、養老山地に密集した中世山岳寺院跡は岐阜県内では他に類例がないものであり、今後中世山岳寺院の性格を解き明かす上で重要な遺跡となるであろう。

4　池辺地区

（1）　調査地区について

池辺地区は養老町の南部を中心とした地区で、地区全体が沖積低地で占められる岐阜県でも有数の低地部である。標高は１ｍに満たないところがほとんどであり、東側では揖斐川が天井川となって南流している。近世に薩摩藩による宝暦治水工事の舞台となった場所としてもよく知られており、地区内には薩摩義士に由来する史跡が多く残っている。このことから当地域が18世紀において河川堤防無しには生活が難しい地域であったことがわかるが、当地域への集落の進出時期とそれが当初から輪中堤を伴っていたかどうかは当地区の歴史を考える上で重要な問題であろう。このことは養老町の地形環境復元においても有効な知見をあたえるものである。いずれにせよ池辺地区は今回の４つの調査区の中でも最も集落の進出が遅かったことが予想できた地区である。調査はこれまでと同様に小字界を参考にそれぞれの地区を細別して実施した（第134図）。

第134図　池辺地区の細別（S＝1/50,000）

第135図　池辺地区の遺跡の位置（S＝1/50,000）

（2）遺跡と採集遺物

1．大巻薩摩工事役館跡　養老町大巻

大巻薩摩工事役館跡は宝暦４年（1754）から翌宝暦５年にかけて薩摩藩が治水工事で使用した元小屋である。沖積低地に立地しており、その一部が岐阜県の史跡に指定されている。中心部は大きく盛土されており、最高所は標高約５ｍを測る。幕府が工事総括の場として選定した鬼頭兵内の建物を修繕したもので、元資料の確認はできなかったが鬼頭家文書によると本小屋は会所や宿からなり、増築を重ね畳399帖の規模であったらしい*。今回の調査では遺物は採集できなかった。

＊　児玉　充1989「養老郡」『岐阜県の地名』日本歴史地名大系第21巻

第136図　大巻薩摩工事役館跡（東から）

第137図　根古地薩摩工事義歿者墓（北西から）

２．根古地薩摩工事義歿者墓　養老町根古地

根古地薩摩工事義歿者墓は標高１ｍ前後の沖積低地に立地しており、岐阜県の史跡に指定されている。地元では浄土三昧とも呼ばれており、宝暦の治水工事で亡くなった24名の薩摩義士が埋葬された遺跡である（第７表）。明治40年の道路改修の際に無縁者の墓地として収用され一部が道路になっている。

当遺跡では昭和35年６月12日、排水路の改修工事に伴って発掘が行われており、遺骨を納めた７個の甕が確認できたと伝えられている（第138図）*。このときの遺骨は墓碑の南端に再度埋葬され、遺骨が納められていた甕のうち１個は現在天照寺に保管されている。この発見を契機に養老町薩摩義士顕彰会が設立され、遺跡内には慰霊堂が建てられた。今回の調査では遺物は採集できなかった。

第７表　根古地薩摩工事義歿者墓に埋葬された義士

法　　名	死亡年月日	俗　　名
相覚了頓信士	宝暦４年６月27日	新右衛門
通報浄達信士	宝暦４年７月13日	六　平
覚智道本信士	宝暦４年７月21日	助次郎
秋道良白信士	宝暦４年８月４日	新右衛門
恢山良廓信士	宝暦４年８月15日	利右衛門
本空誓厳信士	宝暦４年８月18日	川合瀬兵衛
順光隨玄信士	宝暦４年８月18日	権右衛門
義感了應信士	宝暦４年８月18日	喜右衛門
一道立然信士	宝暦４年８月25日	長左衛門
浄翁清感信士	宝暦４年９月６日	惣左衛門
一空相林信士	宝暦４年９月13日	岩　七
円山了諦信士	宝暦４年９月15日	深見勘助
一超乗感信士	宝暦４年９月27日	六左衛門
本倒還立信士	宝暦４年９月27日	長　八
頂法灌受信士	宝暦４年10月17日	三四郎
玄入義門信士	宝暦４年10月23日	太田喜三右衛門
節霜義端信士	宝暦４年11月９日	仁　八
灌山頂雪居士	宝暦４年11月21日	大灌十左衛門
正融義春信士	宝暦５年１月12日	助四郎
風外浄航信士	宝暦５年２月９日	大橋七郎右衛門
春到岸誓信士	宝暦５年２月12日	与　八
陽観春察信士	宝暦５年２月13日	覚佐衛門
報運順應信士	宝暦５年４月28日	市右衛門
宝国諦林信士	宝暦５年５月８日	仁　助

第138図　甕の出土状況

＊　養老町教育委員会1991『郷土の治水－養老町－』

３．天照寺薩摩工事義歿者墓　養老町根古地

第139図　天照寺薩摩工事義歿者墓（西から）

天照寺薩摩工事義歿者墓は天照寺の境内に所在する遺跡で、岐阜県の史跡に指定されている。宝暦治水工事で亡くなった義士の内３名が埋葬されており、それぞれが墓石をもっている（第８表）。

第８表　天照寺薩摩工事義歿者墓に埋葬された義士

法　　名	死 亡 年 月 日	俗　　名
攝心常在居士	宝暦４年８月18日	八木七郎右衛門
津門梁通居士	宝暦４年３月４日	山口清作
雲峰月秀居士	宝暦４年４月23日	松下清七

４．根古地城跡　養老町根古地

第140図　根古地城跡（北西から）

養老郡史や新撰美濃志の中で、天照寺境内に所在し、徳永左馬助が住んでいた城として紹介されている*。遺物は確認できなかったが周囲を水路で囲まれており今回の調査では遺跡として評価した。時期等詳細については今後の調査の機会を待ちたい。

（３）小結

以上のように、池辺地区では分布調査によって４つの遺跡を確認することができ、それらは近世を中心としたものであった。採集遺物についても、揖斐川近くで山茶碗が３片確認できたのみで、遺跡に伴うとは考えにくいものである。そのため、今回の調査結果からは当地区への集落の進出は近世を中心とした時期で、中世にまで遡る可能性は少ないだろう。

そして18世紀における宝暦治水工事や昭和34年の集中豪雨及び伊勢湾台風の被害状況から、集落進出後も当地域においては、陸地化が依然としてあまり進んでいなかったことが分かる。築堤による河川流路の固定によって河川が本来もつ平野の形成能力が低下したことが、その要因の一つであった可能性があると推察するが、現在に残る輪中堤を埋蔵文化財包蔵地として詳細に調査した事例はみられず、以上の課題に取り組むには輪中堤は今後欠かすことのできない研究対象であろう。

* 門脇黙一1925『養老郡史』
岡田　啓1931『新撰美濃志』

なお、池辺地区は現在においても治水の問題を抱えているが、これは当地区のみならず養老町を始めとした西濃地区一帯に広がる構造的な地盤沈下地域全てが取り組まなければならない課題である。今回の分布調査では、当地域においてその問題が本格的な居住の開始から現代に至るまで取り組まれてきたものであることを明らかにできた。

5　結語

平成14年度からの４年間にわたる遺跡詳細分布調査の結果、山地や丘陵、段丘面、扇状地や沖積低地での様相差がかなり明確になり、興味深い事柄が明らかになりつつある。ここでは、その成果をまとめておきたい（第141図）。

今回の養老町遺跡詳細分布調査では合計7,152片の遺物を採集でき、従来99遺跡が知られていた養老町に新たに32遺跡を加え、合計131遺跡を設定することができた。これまで養老町で知られていた遺跡は古墳を中心としていたが、新たな遺跡には散布地として評価できるものが多く、分布調査の実施によって遺跡の知見は一新された。

旧石器時代の遺物採集地点の立地については図示していないが、今回の分布調査で９片の遺物を確認できており、全て下位段丘面で採集している。養老町内ではこの他に象鼻山山頂での発掘調査において後期旧石器時代の遺物を確認しており、当時代の遺跡が丘陵頂部や段丘面といった土地が安定し、山の資源を得やすい環境を選択していることがわかる。ただ養老町のほとんどの平野部が約6,400年前に海に水没したため、当時期の地表面が厚い海成層の下に埋没し、旧石器時代や縄文時代の遺跡の発見が困難になっている可能性も考えておかねばならないだろう。なお、水の確保が難しく、石器に適した石材も採集できない象鼻山山頂が旧石器製作場所に選択されていることは注意しておきたい。

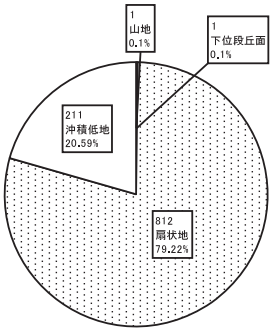
縄文時代の遺物は今回の調査では採集できておらず、象鼻山山頂部で数点の石鏃が確認されているのみである。山間部の現地調査が難しく、また山麓部が埋積しやすい環境であることが遺跡の発見を妨げている可能性もあるが、河岸段丘があまり発達しない地形もその一因として考えられる。

弥生時代前・中期でも縄文時代と同じくほとんど遺物は確認できず、弥生時代後期から古墳時代初頭になってはじめて平野部に日吉遺跡が確認できる。日吉遺跡では古墳時代初頭を中心とした遺物が多数採集できているが、ここではようやく養老町に出現した集落が、東海でも有数の古墳群である象鼻山古墳群とほぼ同時に出現していることが注意をひく。象鼻山古墳群は日吉遺跡の西約２ km にあり、70基の古墳が所在するが、平成16～18年の発掘調査の結果、遅くとも廻間Ⅰ式期には造墓を開始していることが明らかになりつつある*。また、古墳群の中心部には上円下方の形態をもつ象徴的な施設も併設されており、当地域だけにとどまらない役割をもった遺跡である可能性が高い。そうした遺跡が弥生時代からの基盤を十分にもたない地域に造られたのか、それとも未だ発見されていない規模の大きい弥生時代の遺跡が養老町に存在するかは重要な問題であり、今後明らかにしていきたい。

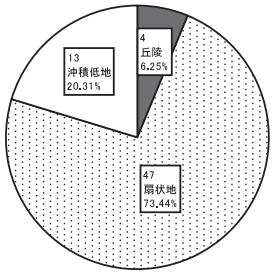
なお古墳時代の土師器や須恵器は、９割以上が扇状地及び沖積低地から採集されているが、反対に古墳は山地や丘陵、段丘面に築造した事例が多い。そのため古墳時代は遺跡の性格にあわせて多様な立地を選択したと評価している。

---

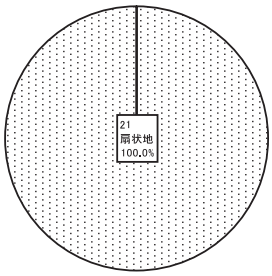
*　養老町教育委員会2006『象鼻山古墳群第３次発掘調査現地説明会資料』



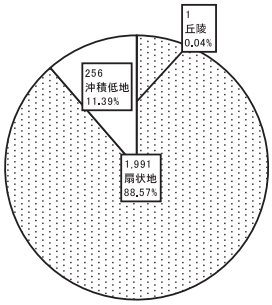
古墳時代土師器



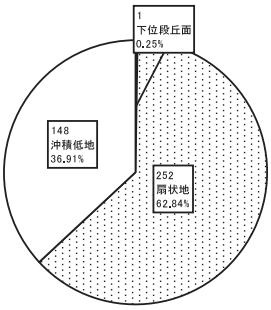
古墳時代須恵器



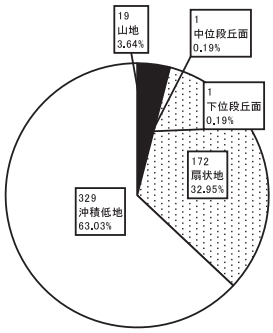
古代土師器



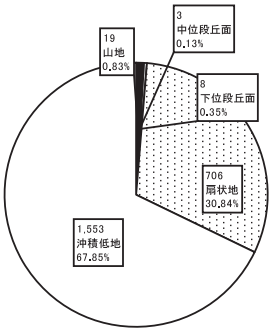
古代須恵器



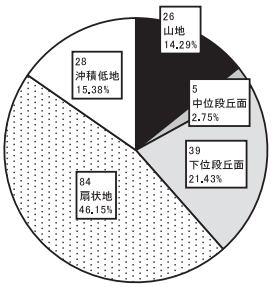
灰釉陶器



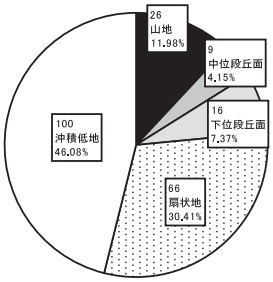
中世土師器



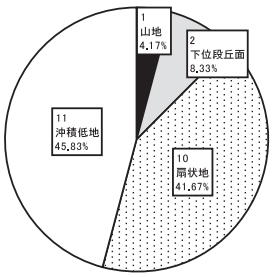
山茶碗



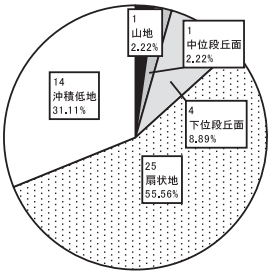
古瀬戸



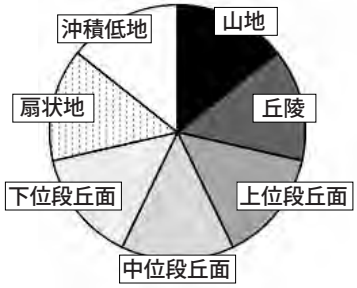
瓷器系陶器



中国製陶磁器



瀬戸美濃



凡例

第141図　遺物採集地点の立地

しかし古代になると、遺物採集地点の99%が扇状地と沖積低地に限られる。いつの時代においても山の資源が生活に欠かせないことに変化はないだろうが、前段階の古墳時代や後の中世に比べれば、古代の山地利用は明らかに異質である。前後の古墳時代や中世では山地を墓地として利用する例が多く見られたことから、古代における葬送の変化がその一つの原因であろう。しかし、平野部では多数の遺物が広範囲で採集できるようになっており、遺跡数も増加している。それまで遺物が全く散布しない地点においても遺物が採集できる場合があり、以前に比べ広く開発が進んでいったことがわかる。宇野は古代の集落が政治的な力で集住しただけでなく、祭祀や葬送行為、食事の器の形にまで制限が及んだことを指摘しており、当時代における利用地形の増加や遺物の集中散布、山間部での採集遺物の減少にもこうした律令国家による規制がその背景にあったであろう*。

中世に属する遺物としては、土師器、山茶碗、古瀬戸、瓷器系陶器、中国製陶磁器、瀬戸美濃の６種類の遺物採集地点の立地分析を行った。詳細に見れば山茶碗に比べ、古瀬戸や中国製陶磁器などの方が山地や段丘面での採集比率が高いといった違いもあるが、ここでは中世に属する遺物が他の時代に比べて多様な立地を採っていることに注目しておきたい。中世において物流が大きく発展したことは先学によって論じられているが、養老町においても河川交通の要衝や、河道の出発点となる湧水地付近、またその源流となる山間部など様々な地形に遺跡が成立している。中世は民衆の時代であり、遺跡立地の急激な多様化の背景には、京や鎌倉といった公権力だけではなく、民衆や在地有力者の力の増大があったであろう**。

また、養老町の中世遺跡は広範囲に網の目のように遺跡ネットワークを形成している。一つの例を挙げるならば、喜勢遺跡や柏尾廃寺跡、戸関遺跡、明徳遺跡、鷲巣東遺跡、津屋川、道上遺跡のような様々な性格をもつ遺跡が多様な立地をとりつつ、さらに地理的に連続した空間において秩序ある分布を形成するパターンがある。このような地理的あるいは社会的な紐帯をもったであろう遺跡群が同時に複数存在し、複雑に関係していたことが養老町の中世遺跡の大きな特徴であったと推察している。なお、養老山地に林立する寺院跡はもちろんであるが、河川交通の要衝に位置し、硯や瓦、焼台付の常滑産瓷器系陶器が発見された室原東遺跡はこれらの遺跡の中でも特別な存在である可能性が高く、注意しておきたい。

以上、分布調査の結果から養老町の歴史が旧石器時代にまで遡り、弥生時代後期以降中世にかけて養老山地や河川が急激に形成しつつあった平地を多様な形態をとりながら開発していく過程の一端を明らかにできた。特に養老町は西濃地域においても地形環境の変化が著しい場所であるため、当町の歴史は人々がそれぞれの環境とどのように取り組み現代の社会を築いてきたかを教えてくれる。

そしてその推移は河川が陸地を形成していく過程においてなされた営みと考えるものが多い。そのため、堤を用いた河川流路の固定による居住域や耕地の拡大が、天井川の進行や地下水位の上昇を引き起こし、河川の堆積をより下流に向かわせ、結果として築堤地点一帯の低湿地化や洪水の危険性を増大させていったとする高橋の指摘に依るなら、それは長い養老町の歴史の中でも大きな転換点であっただろう***。そしてこの治水問題は現在にも続いている。

養老町内に所在する様々な遺跡の調査に関わった立場からは養老町の先人がいかにそうした当地の

---

*　宇野隆夫1991『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』
**　宇野隆夫1989『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』
***　高橋　学1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』

自然環境を熟知し、それらの資源をくまなく効率的に利用していたかを知ることができる。本書にはそのうちのいくつかを示したが、その中には先の問題を解決するヒントも隠されているように思う。そしてそれらの点を発掘調査において明らかにするとともに養老町の動向を東海地方や日本列島の動向と比較検討することが今後の課題である。

文化財は守り伝えるだけでなく、様々に活用できる可能性をもつものである。先人が残した遺産は今を生きる私たちの礎そのものであり、本書がそうした文化財保護の一助となることを願って分布調査の成果についての報告を終えたい。

第３章　考　　察

１　遺跡の消長にみる養老町の歴史

（１）はじめに

今回の養老町の遺跡詳細分布調査では古墳を含め131ヶ所に上る遺跡が確認できており、この中には散布地や集落・寺院跡を中心として、その所属時期を明らかにできた遺跡が少なくない。本考察ではこのうち弥生時代から中世にかけて集落であると推定できる遺跡について整理し、その消長から養老町の歴史の動向を把握することを目的としている。

養老町の歴史の大勢を把握しておくことは、未発見の遺跡を予測し、既知の遺跡の研究を進める上でも重要な意義をもつであろう。また、今回の分布調査で得られた情報から、和名類聚抄や中世文書などの文献資料に記載されている集落との関わりについても検討し、今後の文字資料の発見に備えておきたい。

（２）養老町の主要遺跡の位置と消長

本考察では散布地を中心として分布調査の成果からその所属時期を明らかにできた遺跡に、象鼻山古墳群を加えた26ヶ所の遺跡を分析の対象とした（第142図）。これらの遺跡は弥生時代後期から中世にかけての時期に存続期間をもつものであり、分析ではそれらを10期に区分した（第９表参照）。

時期区分の指標については、各時代を特徴づける弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸・瀬戸美濃の編年を基軸とし、これに常滑産瓷器系陶器と中国製陶磁器の研究成果を加えた*。なお、弥生時代から古墳時代の土器についての併行関係や実年代については主に赤塚の研究に依拠し、古代においては尾野と齋藤、中世の各製品については柴垣の研究に依った**。

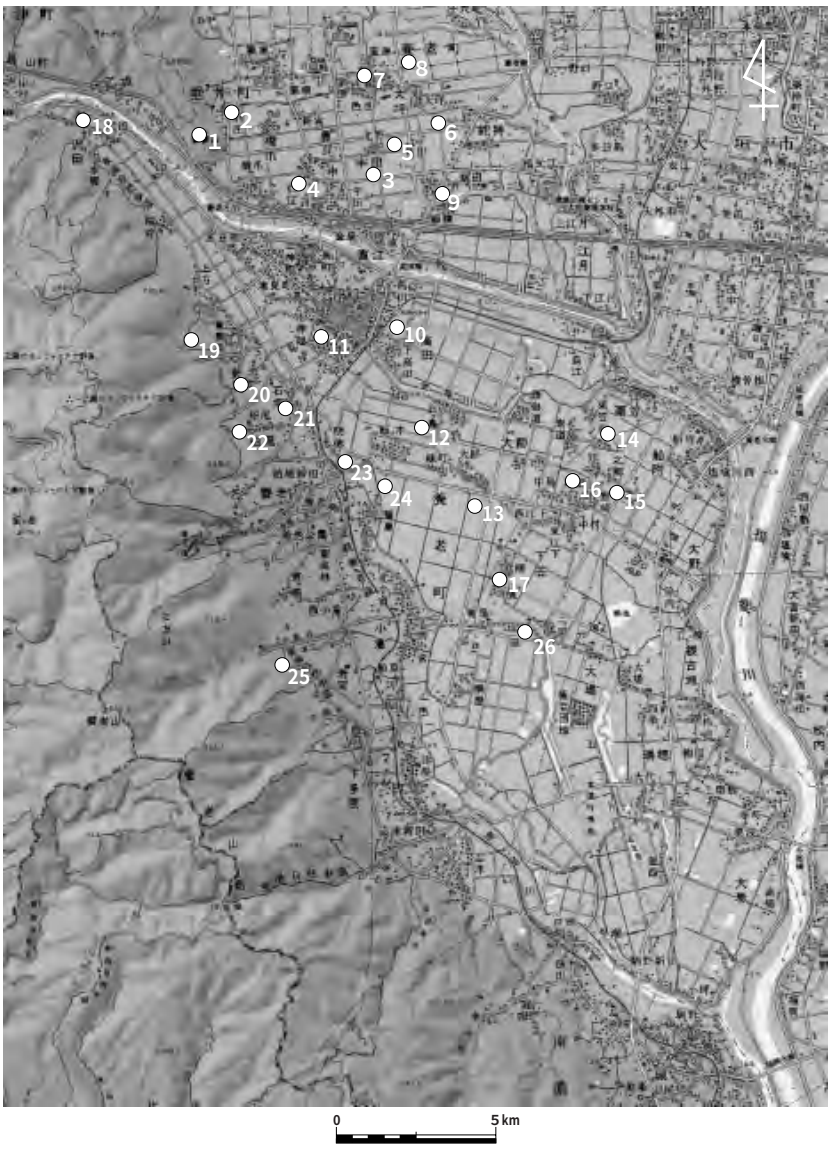
遺跡の消長については時期毎の採集遺物量を基準とし、その破片数が１～４片のものを●、５～９片を△、10～14片を○、15片以上を◎で示した（第９表）。

各時期の詳細な分析については前章で述べているが、この結果を通してみれば、いくつかの顕著な

---

*　赤塚次郎1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集
赤塚次郎1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
赤塚次郎1994「松河戸様式の提唱」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
赤塚次郎・早野浩二2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第２号　愛知県埋蔵文化財センター
尾野善裕1997「生産遺跡　尾張・西三河　猿投・尾北・その他」『古代の土器５-１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』
尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』
斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３
藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター
藤澤良祐2005「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
太宰府市教育委員会2000『太宰府城坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』

**　赤塚次郎2003「中部・近畿地方の弥生・古墳時代編年の現状と課題」『第５回考古科学シンポジウム発表要旨』
尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』
斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３
柴垣勇夫2004「まとめ」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』



第142図　養老町の主要遺跡の位置（S ＝ 1/235,000）

第９表　養老町の主要遺跡の消長

地区名	番号	遺跡名	性格	立地	弥生時代	古墳時代					古代		中世		
					150				650			1100			1600
					山中式期 赤塚1992	廻間Ⅰ~Ⅱ式期 赤塚1990	廻間Ⅲ式~松河戸Ⅱ式期 赤塚1990、1994	宇田Ⅰ~Ⅱ式期 赤塚・早野2001	尾野猿投窯Ⅲ~Ⅳ期 尾野2000	尾野猿投窯Ⅴ~Ⅵ期 尾野2000	斎藤猿投窯第Ⅵ~Ⅶ期 齋藤1995	山茶碗第4~6型式期 藤澤1994	古瀬戸中・後期 藤澤2005	大窯期 藤澤2005
日吉地区	1	象鼻山古墳群	古墳	丘陵		◎	◎		●					△
	2	栗原天待遺跡	散布地	扇状地					○	○	◎	◎	●	
	3	日吉遺跡	散布地・集落跡	扇状地	◎	◎	●	●	◎	◎	◎	◎	◎	△
	4	日吉西遺跡	散布地	扇状地					●			●	●	
	5	郷勺遺跡	散布地	扇状地				●	◎	○		△	●	●
	6	六反田遺跡	散布地	扇状地								△		
室原地区	7	室原遺跡	散布地	扇状地					●		●	○	●	
	8	室原東遺跡	散布地	沖積低地			◎	●	○	◎	◎	◎	△	●
小畑地区	9	井ノ下遺跡	散布地	扇状地			◎		●	●	●	●	●	△
高田地区	10	高田遺跡	散布地	扇状地					●	●	○	●	●	
	11	押越遺跡	散布地	扇状地								●		
広幡地区	12	飯ノ木遺跡	散布地	扇状地					●			●	●	
	13	大跡遺跡	散布地	沖積低地									●	
笠郷地区	14	仲田遺跡	散布地	沖積低地								◎	○	●
	15	上之郷遺跡	散布地	沖積低地								○	●	●
	16	和田遺跡	散布地	沖積低地								●	●	
	17	下笠遺跡	散布地	沖積低地								△	○	●
養老地区	18	沢田遺跡	散布地	扇状地・下位段丘面					●	●		●	●	
	19	竜泉寺廃寺跡	寺院跡	中位段丘面・下位段丘面・扇状地								●	●	
	20	喜勢遺跡	寺院跡・生産遺跡	中位段丘面・下位段丘面・扇状地					●			△	●	●
	21	戸関遺跡	散布地	扇状地					●	◎	●	●	●	●
	22	柏尾廃寺跡	寺院跡	山地・中位段丘面・下位段丘面						△	●	◎	◎	◎
	23	明徳遺跡	散布地	扇状地		◎			△	●		●		
上多度地区	24	鷲巣東遺跡	散布地	扇状地・沖積低地						●	△	△	●	
	25	薬師山遺跡	寺院跡	山地・下位段丘面							●	△	●	
	26	道上遺跡	散布地	沖積低地								●	●	

●は１～４片、△は５～９片、○は10～14片、◎は15片以上

変化が生じた画期を指摘することができるであろう。

まず、第１の画期は廻間Ⅰ～Ⅱ式期である。日吉遺跡や明徳遺跡といった集落が扇状地に本格的に進出する時期であり、象鼻山古墳群もほぼ同時に出現している。古墳群と集落の双方から弥生時代と古墳時代の境の指標となる廻間Ⅰ～Ⅱ式の土器様式が確認できており、新しい土器様式の拡散と集落形成や造墓の開始が一連の現象としてなされたことは当地域における弥生時代から古墳時代への移行過程について重要な知見を与えるものである*。

第２の画期は宇田Ⅰ～Ⅱ式である。５世紀から６世紀初頭を中心とした時期であり、それまで遺物が確認できていた遺跡において遺物数が減少したり、確認できなくなる事例が目立つ。この時期に集落の再編がなされた可能性があるだろう。

第３の画期は尾野による猿投窯Ⅲ～Ⅳ期である。おおよそ６～７世紀を中心とした時期であり、古墳時代から古代への転換期である。宇田Ⅰ～Ⅱ式で遺跡や遺物数が減少したこととは対照的に、この時期を境に確認できる遺跡数が増加し、さらに日吉・室原・小畑地区以外にも高田・広幡・養老地区で新たな遺跡が出現する。またそれらにはその後長期間にわたって存続するものが多い。

第４の画期は斎藤による猿投窯第Ⅵ～Ⅶ期である。遺物数を増加させる遺跡がある一方で減少する遺跡も目立ち、集落の性質が両極化した可能性のある時期で、おおよそ10～11世紀を中心としている。当時期は主に灰釉陶器を主体として時期区分されているが、中でもⅥ期の終わりからⅦ期にあたる百代寺窯式期の灰釉陶器と山茶碗第３型式に属する遺物は日吉遺跡と室原東遺跡以外ではほとんど確認できていない。宇野隆夫氏からは11世紀が木器の普及期にあたり、全国的にみても当該時期の土器・陶磁器の出土量が少ないというご教示を頂いており、当画期において遺物が減少する背景に木器の普及があった可能性を考えておきたい。

第５の画期は山茶碗第４～６型式の時期で12世紀から13世紀前半を中心としている。ほとんどの遺跡で遺物が確認でき、これまで遺物が確認できなかった笠郷地区においても新たに遺跡が出現している。

以上の変化は、それぞれに重要であるが、ここでは特に第３と第５の画期に注意しておきたい。第３の画期は古墳時代から古代、第５の画期は古代から中世の過渡期であるが、この画期の前段階に採集遺物数が減少し、その後、顕著に遺物数や遺跡数が増加している。

（３）文献資料にみられる集落

養老町域が養老郡となったのは、明治30年（1897）年の上石津郡との合併以後であり、それまでは郡の名称は多藝郡であった**。この名称の初見は続日本紀大宝２年（702）３月23日条の「美濃国多伎郡民七百十六口、遷于近江国蒲生郡」であり、郡名の用字としてはこの他に当藝や当耆、当嗜、当伎、多紀などがある***。

養老町では現在これらを「タギ」と発音しており、斉衡２年（855）の石津郡分立後は主に現在の養老町の範囲を指し示す名称であったという意見が支配的である。しかし、養老町沢田が中世に石津郡となっているなど、その郡域は一定ではなく、郡域の詳細については現段階では明らかになっていな

---

*　赤塚次郎1991「東海系のトレース－３・４世紀の伊勢湾沿岸地域－」『古代文化』44-６

**　養老町1978『養老町史通史編下』

***　所　三男他1989『岐阜県の地名』日本歴史地名大系第21巻

い。

ただ、９世紀前半の実情に適合するとされる倭名類聚抄には多藝郡内の郷として、軍事的職能に携わった氏族にちなんだ郷名をもつ物部・建部・佐伯郷を含む８郷が記載されており、こうした文献資料から古代における多藝郡に複数の勢力が存在したことが分かる*。

一方、養老町では古代から中世にかけての文献資料は少ないが、ここでは和名類聚抄に記載されている郷と養老町史史料編掲載文書や多岐神社所蔵の懸仏群などに記載された集落名を、年号が記されているものを中心に整理し、その結果を分布調査で得られた成果と比較しておきたい（第10表）。ただし、今回の分布調査で養老町の全ての遺跡が発見されたわけではなく、また同一の遺跡内に複数の集

第10表　文献資料にみる養老町の集落

集落名	時代	時期または年号	文書名・参考資料
冨上郷	古代	９世紀前半	和名類聚抄・岐阜県の地名
物部郷	古代	９世紀前半	和名類聚抄・岐阜県の地名
垂穂郷	古代	９世紀前半	和名類聚抄・岐阜県の地名
立野郷	古代	９世紀前半	和名類聚抄・岐阜県の地名
有田郷	古代	９世紀前半	和名類聚抄・岐阜県の地名
田後郷	古代	９世紀前半	和名類聚抄・岐阜県の地名
佐伯郷	古代	９世紀前半	和名類聚抄・岐阜県の地名
建部郷	古代	９世紀前半	和名類聚抄・岐阜県の地名
多藝庄内吉田	中世	1339	足利直義下文・養老町史資料編上
多藝庄内春木	中世	1339	足利直義下文、・養老町史資料編上
多藝庄内春木	中世	1355	足利義詮御教書・養老町史資料編上
多藝庄内春木郷	中世	1383	足利義満袖判下文・養老町史資料編上
南宮領家室原郷	中世	1383	室町幕府奉行人封裏寺領目録写・岐阜県の地名
多藝内吉田	中世	1393	管領斯波義將施行状案・養老町史資料編上
嶋田郷	中世	1395	多岐神社所蔵懸仏･山下立「岐阜多岐神社の懸仏群」
多藝庄内大跡・吉田郷	中世	1403	足利義満袖判御教書案・養老町史資料編上
勢至寺（別當房･持寶房）	中世	1420	土岐善弘満貞書状案・養老町史資料編上
渋江郷	中世	1436	多岐神社所蔵懸仏･山下立「岐阜多岐神社の懸仏群」
大塚郷	中世	1438	多岐神社所蔵懸仏･山下立「岐阜多岐神社の懸仏群」
直江郷	中世	1449・1459・1477	多岐神社所蔵懸仏･山下立「岐阜多岐神社の懸仏群」
宇田郷	中世	1465・1467	多岐神社所蔵懸仏･山下立「岐阜多岐神社の懸仏群」
大跡郷	中世	1488	室町幕府奉行人連著奉書案・養老町史資料編上
椿井郷	中世	1534	齋藤利政道三寄進状寫・養老町史資料編上
江月郷	中世	1541	多岐神社所蔵懸仏･山下立「岐阜多岐神社の懸仏群」
榛郷	中世	1542	多岐神社所蔵懸仏･山下立「岐阜多岐神社の懸仏群」
桜井	中世	1556	多岐神社所蔵懸仏･山下立「岐阜多岐神社の懸仏群」
柏尾寺	中世	1559	八所權現社社殿再興棟札・養老町史資料編上
多藝庄椿井郷	中世	1567	織田信長禁制判物寫・養老町史資料編上
椿井郷	中世	永禄年間（1558～1569）	齋藤義龍朱印状寫・養老町史資料編上
當国勢至□鉄座	中世	1569	織田信長朱印状・養老町史資料編上
竜泉寺村	中世	1573	西脇久左衛門知行目録寫・養老町史資料編上
多藝庄椿井郷	中世	1581	織田信忠禁制寫・養老町史資料編上
當国多藝郡勢至江鉄座	中世	1582	織田信孝判物・養老町史資料編上
多藝庄椿井郷	中世	1582	神戸織田信孝禁制寫・養老町史資料編上
はんの木村	中世	1591	八中堤南田地借用證文・養老町史資料編上
濃州瀧郡五日市村	中世	1594	豊臣秀次朱印知行方目録・養老町史資料編上

＊　所　三男他1989『岐阜県の地名』日本歴史地名大系第21巻

落が包括されている可能性もあり、ここでの検討は今後の調査のための基礎資料としたいものである。

この結果を通してみるとおおよそ９世紀前半には多藝郡に冨上郷、物部郷、垂穂郷、立野郷、有田郷、田後郷、佐伯郷、建部郷の８郷が所在し、中世では少なくとも1339～1403年に吉田郷、1339～1383年に春木郷、1383年に室原郷、1395年に嶋田郷、1403～1488年に大跡郷、1420年に勢至寺、1436年に渋江郷、1438年に大塚郷、1449～1477年に直江郷、1465～1467年に宇田郷、1534～1582年に椿井郷、1541年に江月郷、1542年に榛郷、1556年に桜井、1559年に柏尾寺、1569～1582年に勢至の鉄座、1573年に竜泉寺村、1591年にはんの木村、1594年に五日市村があったことが分かる。

分布調査の成果からは、おおよそ９世紀前半を主体とした遺跡として、栗原天待遺跡、日吉遺跡、郷勺遺跡、室原東遺跡、井ノ下遺跡、高田遺跡、沢田遺跡、戸関遺跡、明徳遺跡、鷲巣東遺跡の10遺跡があるが、この中に和名類聚抄の８郷と類似する地名をもつものは見当たらない。しかし、田後郷、佐伯郷、建部郷について津屋川水系に位置すると推定されていることは、遺跡を比定する上で参考になるだろう*。先にあげた遺跡の内、津屋川水系にあたるのは戸関遺跡、明徳遺跡、鷲巣東遺跡の３つであり、これらが田後郷、佐伯郷、建部郷に比定できる遺跡の候補と考えておきたい。ただ、いずれも津屋川上流部に集中して分布している遺跡であり、津屋川下流域において今後古代に属する遺跡が発見される可能性も考えておかなければならないだろう。

一方、牧田川水系と推定されている冨上郷、物部郷、垂穂郷、立野郷、有田郷については、栗原天待遺跡、日吉遺跡、郷勺遺跡、室原東遺跡、井ノ下遺跡、高田遺跡、沢田遺跡がその候補となる。中でも日吉遺跡はその遺跡範囲の中に須恵器の集中地点を複数もつことから、主導的な勢力の拠点であった可能性がある。さらに、高田遺跡についても唯一牧田川の南側に位置し、おおよそ当該期に集落の最盛期をもつことから候補地の１つである可能性を考えておきたい。現段階ではおおよその推測しかできないが、これら８郷は牧田川、津屋川の流域に位置し、現在の日吉・室原・小畑・高田・養老・上多度地区のいずれかに所在しているものが多いだろう。

中世の集落は古代と違い現在にまで集落名が存続しているものが多く、まずそれらについて取り上げたい。

文献に記載された集落名のうち今にその地名が残っているものとして、吉田郷、室原郷、嶋田郷、大跡郷、勢至寺、大塚郷、直江郷、宇田郷、椿井郷、江月郷、榛郷、桜井、柏尾寺、勢至の鉄座、竜泉寺村、はんの木村、五日市村がある。このうち、榛郷とはんの木村は同じであり、春木郷についてもその可能性が高いだろう**。地名は後世に移動する可能性もあるが、一つの手がかりとしてできるかぎり活用したい。

このうち日吉・室原・小畑・多芸東部地区に含まれる集落は吉田郷、室原郷、直江郷、宇田郷、江月郷で、このうち現在の養老町直江・江月周辺では遺跡を確認できていない。しかし、吉田郷については近世末頃に豊村と改称した養老町豊周辺、宇田村については現在の養老町宇田周辺であったことが推定できる。この二つは日吉遺跡の範囲内であり、吉田郷を日吉遺跡の北部を中心とした一帯、宇田郷を南部を中心とした一帯に比定しておきたい。なお、室原郷は室原東遺跡を中心とした範囲だろう。

---

*　所　三男他1989『岐阜県の地名』日本歴史地名大系第21巻

**　岡田　啓1931『新撰美濃志』

次に多芸西部・高田・広幡地区であるが、嶋田郷、大跡郷、大塚郷、春木郷（榛郷・はんの木村含む）がこの地区の範囲に含まれる。このうち大塚郷については大墳城跡の周辺が想定できるが、今回の調査では遺物は採集できていない。一方、嶋田郷、大跡郷、春木郷についてはそれぞれその周辺に中世の遺物が採集できている高田遺跡、大跡遺跡、飯ノ木遺跡があり、これらの遺跡を候補に考えておきたい。

最後に養老・上多度地区であるが、勢至寺、椿井郷、桜井、柏尾寺、勢至の鉄座、竜泉寺村があり、このうち桜井では中世の遺跡を確認できていない。しかし、桜井古墳群において一石五輪塔や板碑、石仏が確認できており、今後発見される可能性が高いであろう。竜泉寺村については、竜泉寺廃寺跡があるが16世紀に下る資料は確認できておらず、現段階では比定できる遺跡は見当たらない。勢至寺及び勢至の鉄座は喜勢遺跡、椿井郷は戸関遺跡、柏尾寺は柏尾廃寺跡にあたるだろう。

また、現在に地名の残らない渋江郷については類似した名称として祖父江がある。養老町祖父江の東を流れる杭瀬川周辺から中世に属する遺物が採集されたという報告もあり、養老町祖父江周辺に所在する可能性があるだろう*。

（4）遺跡からみる養老町の動向

このように養老町は弥生時代末頃に本格的に平野に進出して以降、古墳時代から古代への過渡期と古代から中世への過渡期の二つの大きな画期に、遺跡数が増加したことがわかる。また、そのうち古代においては軍事的職能に携わった氏族にちなんだ名称をもつ郷が含まれ、中世においては未だ遺跡が発見されていない郷があることが明らかにできている。

なお、分布調査の成果からは、それぞれの時期における集落の増加の原因を一様に捉えることはできず、それぞれに当時の社会背景や自然環境を明らかにしていく必要がある。そして、その社会背景を考える上で遺跡の増加の前段階に採集遺物数が減少することは重要な手がかりになると考える。

中井正幸は西濃地域に分布する古墳の編年研究から西濃地域の古墳時代前期以降の首長墓が短い期間で移動することを明らかにしている**。その変動は畿内の大古墳の消長と一致することが多く、古墳時代の西濃の首長が畿内の大王と深く関わり合っていたと考えられる。

養老町においても象鼻山１号古墳築造以降、首長墓と評価できるような規模の大きい古墳は確認できておらず、西濃地域において前方後円墳が本格的に築造されるようになった松河戸Ⅰ式から宇田式を中心とした時期は、造墓や集落の再編が目立つ。その一方、古代において著しく集落が安定かつ増加したことの背景には律令を基盤とした新しい政治体制の形成があったであろう***。

古代末に確認できるもう一つの画期については、遺物が集中する遺跡と少量しか遺物が採集できない両極の遺跡が存在することから、古代以降に成立した集村的集落が一定程度存続する一方で、小規模短期型の集落が新たに出現したと評価したい。また、古代後期の灰釉陶器の分布範囲が中世の遺物の分布範囲と重なることが多く、古代後期に出現した小規模短期型の集落には、中世に向けて営みを安定化し、成長するものが少なくなかったと考える***。このような集落の成長は中世社会の成立を

---

*　笹栗　拓2006「養老町祖父江における表採資料の紹介」『美濃の考古学』第９号
**　中井正幸2004「濃尾の首長墓系譜の展開と特質」『古墳時代の政治構造』
***　宇野隆夫1991『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』

考える上で重要な意義をもつだろう。

（5）おわりに

養老町は縄文時代の海進最盛期以降その地形環境を絶えず変化させ、様々な時代の変革期を経て現在の姿を形成した。そうした地域に成立した遺跡から、養老町の歴史を把握するには、様々な方向からの検討が必要であり、本考察では遺跡の消長と文献資料に残された地名をその手がかりとした。

そして、養老町では弥生時代末頃に本格的な集落形成と造墓がはじまって以降、古墳時代から古代、および古代から中世への転換期において、著しく遺跡数が増加したことを明らかにした。その要因には自然環境だけでなく、西濃地域あるいは日本列島に共通する社会的な背景があった可能性が高い。

ここでは詳細分布調査の成果を中心としたが、今後発掘調査をはじめとする様々な方法によって遺跡推移の実態や背景についての考察を深めていきたい。

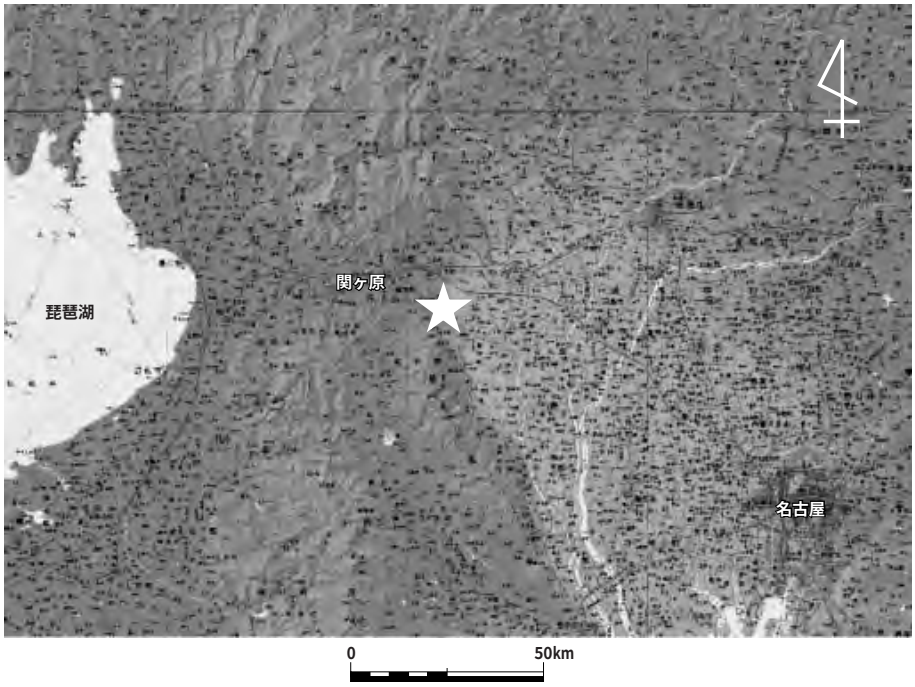
2　測量図からみた象鼻山古墳群の構造

（1） はじめに

養老町橋爪に所在する象鼻山古墳群は関ヶ原の東に位置する南宮山の一支脈に立地し、標高140mを測る山の頂上からその中腹にかけて多くの古墳を集中して築いた遺跡である。

象鼻山山頂からは濃尾平野や養老山地、当時の伊勢湾を見下ろすことができたと推定でき、象鼻山の西方には東西交通・軍事の要衝の地となってきた関ヶ原、東方には広大な濃尾平野が広がっている（第143図）。

象鼻山古墳群はこれまでの研究成果から、廻間Ⅱ式後半から廻間Ⅲ式前半の前方後方墳１基のほか、



第143図　象鼻山古墳群の位置（S ＝１/2,000,000）

上円下方墳１基、方墳35基、円墳33基、不明１基からなる古墳群であり、非常に遺存状態が良いことが明らかになっている。また、その築造年代については２世紀前半から６世紀に及ぶものと推定でき、古墳群の端緒が象鼻山１号古墳に求められないことが明らかになりつつある*。しかし、数年前まではこれら70基の古墳のうち全容が明らかになっているのは象鼻山１号古墳のみであった。そのため、

第144図　象鼻山古墳群中心部測量図（S ＝１/2,000）

＊　養老町教育委員会2006『象鼻山古墳群第３次発掘調査現地説明会資料』

養老町教育委員会では象鼻山古墳群全体の範囲及び性格の確認を目的として平成16年度から発掘調査を実施している。本考察の基礎となる測量図はこの発掘調査のための事前調査で得られたものである（第144図、付図参照）。

これまでの分布調査の成果から、象鼻山に築造された古墳には全長約40m を測る１号古墳から５ m に満たない古墳まで様々な大きさと墳形をもつものがあり、その立地も平坦な場所や比較的傾斜が緩やかな場所、傾斜のきつい丘陵斜面など多様であることが明らかになっていた。中には墳端から墳頂の最小比高差が20～30cm に満たない古墳や隣接する古墳に明確な境がないもの、古墳の築造に適した平坦部を避け、あえて古墳を築造しにくい急斜面を選択しているものが確認でき、古墳がもつ属性と位置関係は何らかの意図に基づいて主体的に決定されていると考える。そのため、その位置関係を明らかにし、それぞれの古墳がもつ属性とあわせて分析することは、象鼻山古墳群の性格を理解する上で役立つであろう。

象鼻山古墳群はそれぞれの古墳が密集して築造されており、円墳と方墳とがほぼ同数存在する。また、地形の保存状態も良好であり、測量調査は古墳間についても対象とした。さらに地形測量図の等高線の間隔を10cm としたことで、微細な地形変化についても検討できるようにした。

本考察は、この象鼻山古墳群地形測量図から得られる古墳群全体の情報や１～56号古墳がもつ属性について分析し、今後発掘調査を計画していく上での基礎資料を得ることを目的とするものである。

（２）測量図からみた象鼻山古墳群の特質

本考察での分析は、主に古墳が造られた位置や立地、墳形、全長という４つの情報から進めるが、その成果を解釈するためには、象鼻山全体の地形を把握しておくことが必須である。そのためここでは地形測量図から判読できる象鼻山古墳群全体の情報について、まず自然の営みによるものについて触れ、次に人為的な開発によるものを整理しておきたい。ただし、測量図から得られる情報は視点を変えることによって、様々なものがあり、ここでは特に古墳の位置関係や立地に関わるものを中心に取り上げる。

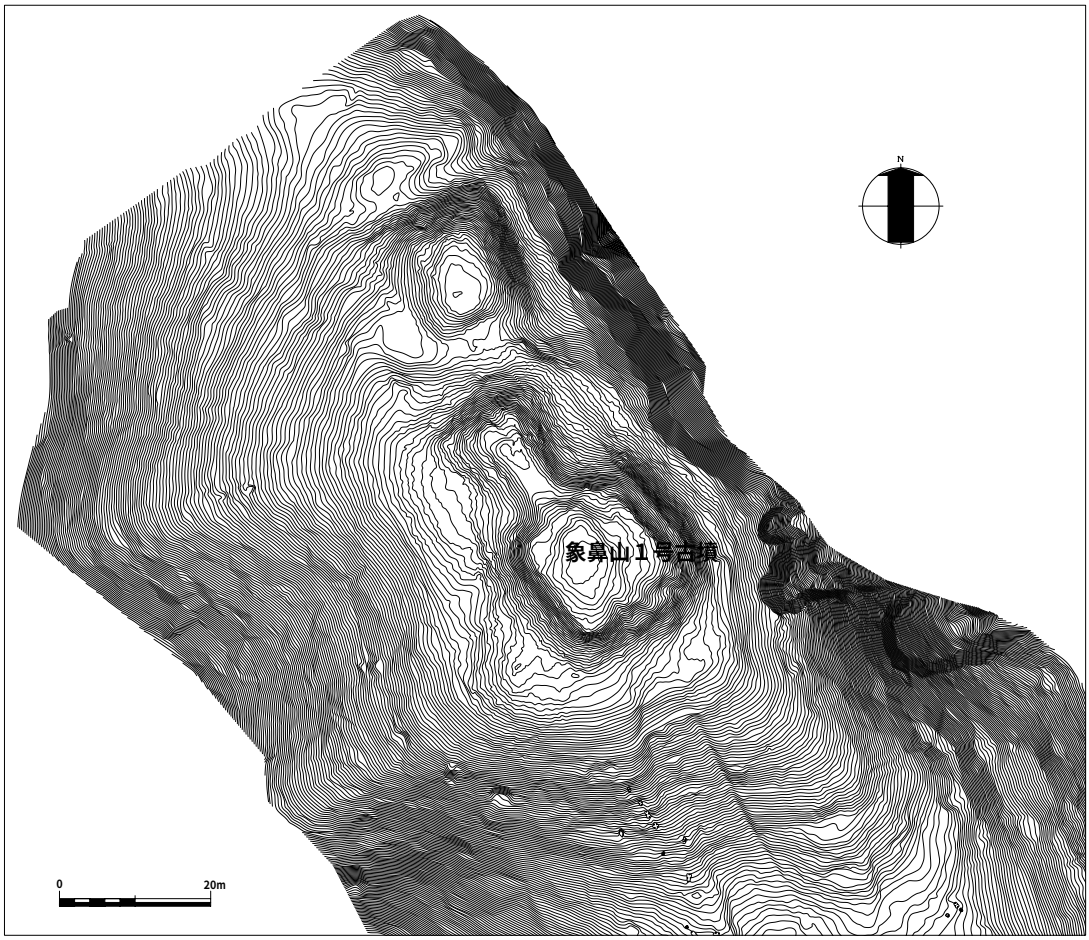
象鼻山が位置する岐阜県南西部は断層運動が活発であり、象鼻山山頂にも断層活動による地形変位が確認できる（第145図）。これらは断層崖を形成し、雁行状の配置をとっていることから縦ずれに横ずれの地形変位を伴ったものと想定でき、またその周囲がこの地形変位の大きな影響を受けていないことから、変位のスピードは緩やかであったと推測できる*。

これに対し、人為的な地形改変については、まず平坦面を造成した後に墳丘を構築する象鼻山１号古墳の事例が注目できる。１号古墳の築造過程については報告書で詳細に検討されているので再掲しないが、墳丘を全て盛土によって構築したことが発掘調査により明らかにされている**。本測量図の観察からも象鼻山１号古墳の築造された地点が複数の尾根の結節点に位置し、それらの尾根を水平に掘削した後に墳丘を構築していることがわかる（第146図）。

この他にも、象鼻山３号墳に伴う平坦面をはじめ、４・５・６・７・15・16号古墳や11・12・14号古墳が築造された場所でも、尾根やその他の自然地形を掘削していることが確認でき、やはり人為的な地形改変の後に墳丘の構築を行っているだろう。また、一つの平坦面を複数の古墳が利用している

＊　愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭剛氏のご教示による。
＊＊　養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1999『象鼻山１号古墳－第３次発掘調査の成果－』

第145図　象鼻山山頂部の断層崖の位置（S ＝１/2,000）



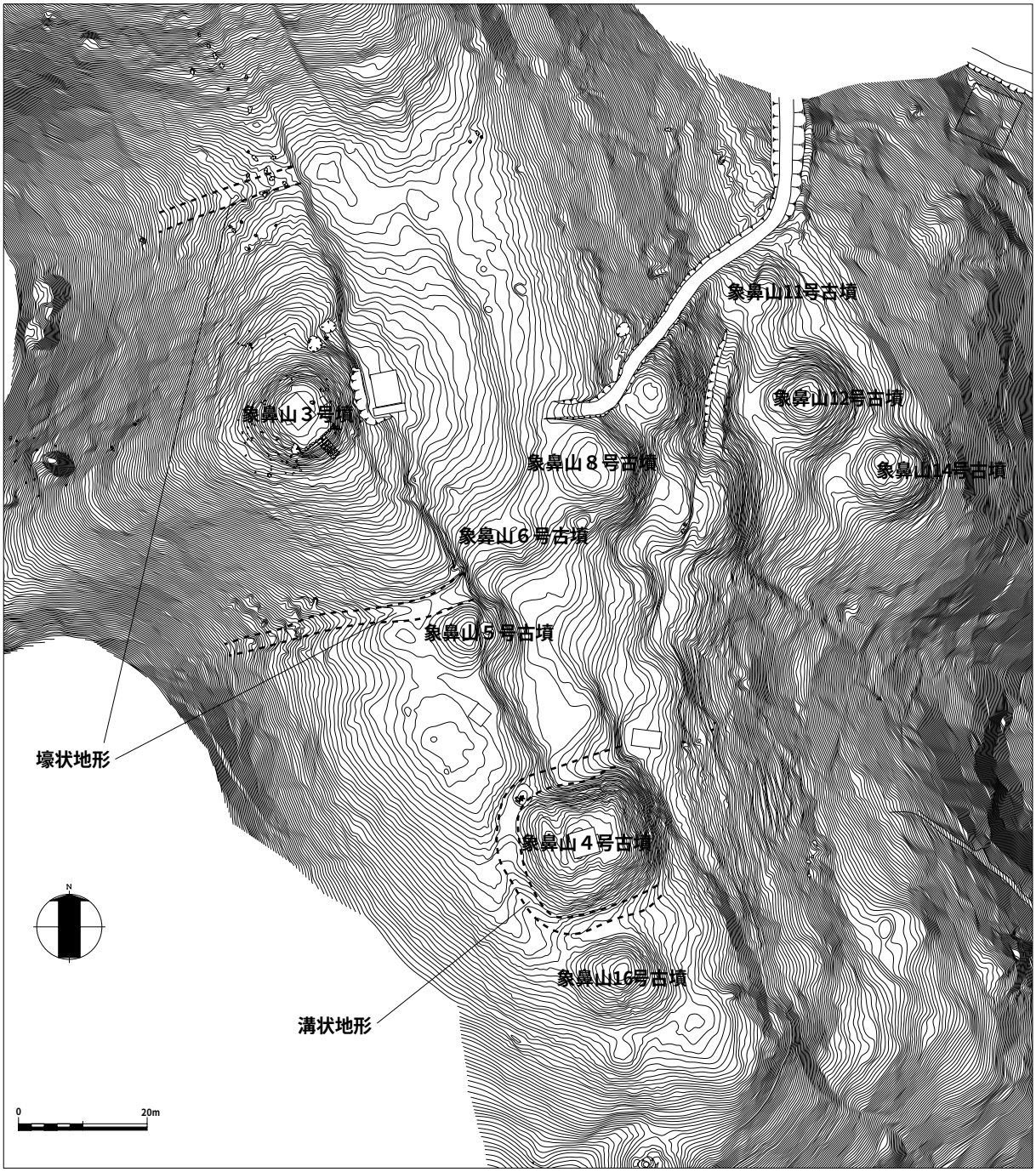
第146図　象鼻山１号古墳周辺の地形（S ＝１/1,000）

ことから、この地形改変が古墳群の築造を前提としたものであった可能性を考えておきたい（第147図）。

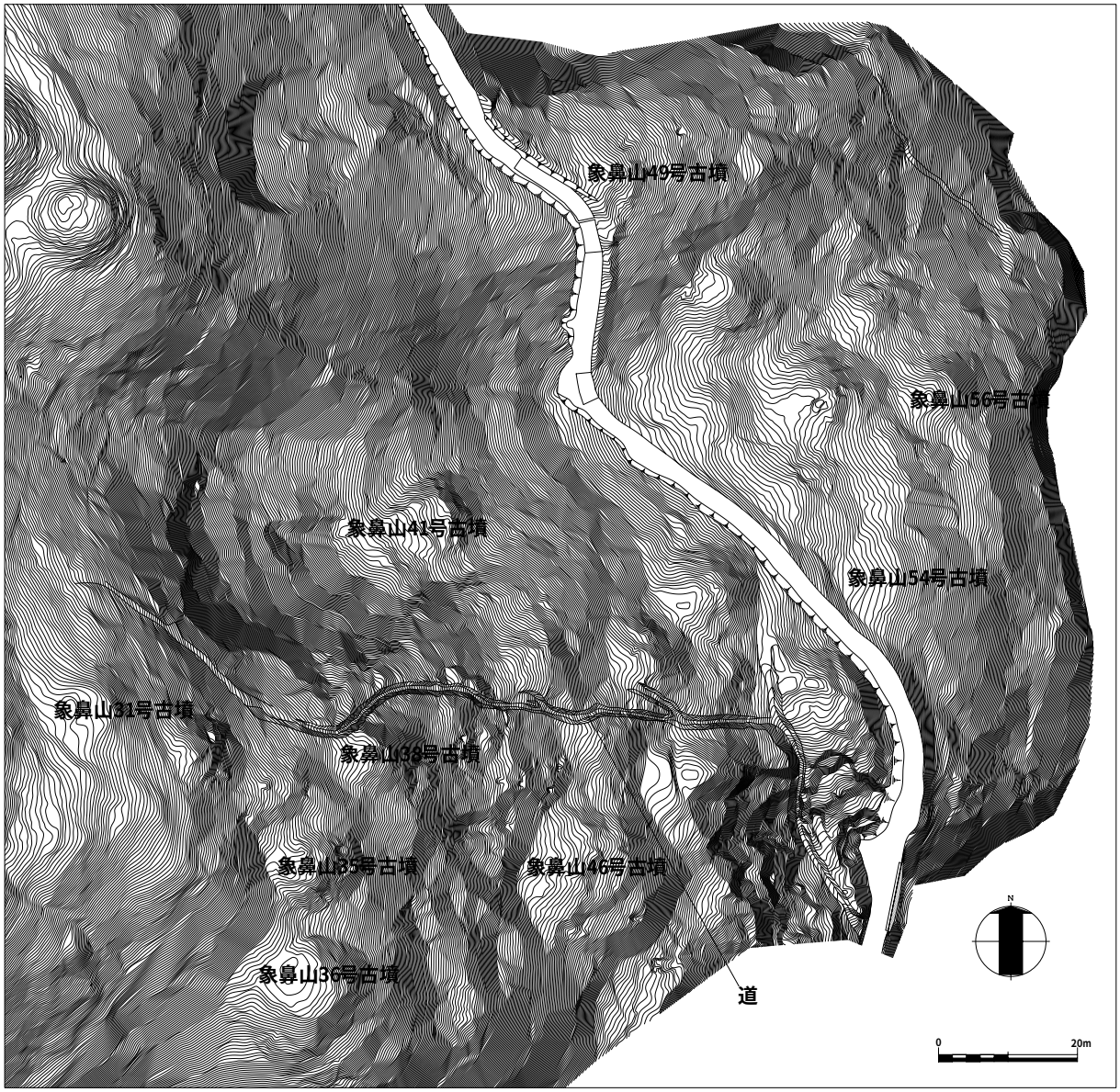
さらに、これら山頂部を中心とした古墳には、それらに伴う遺構であろう地形も確認できている。４号古墳の周囲に巡る溝状の地形や、３号墳の北と南に位置し東西に走る壕状の地形、中腹の古墳の間を縫うように走る道などが代表的なものであるが、このうち、３号墳の南北に伴う壕状の地形については発掘調査の知見が得られており、象鼻山古墳群成立当初のものである可能性が高くなっている（第147・148図）*。この２本の壕は断層崖を越えて東に続き、３号墳東側の平坦面を囲むが、５号古墳とともに３号墳中心部のすぐ東の断層崖によって大きく分断されている。一方、４号古墳以南では地盤の軟弱化による墳丘面の沈下はあるものの、断層崖は確認できず、３号墳築造後に４号古墳が造られた可能性を示すものだろう。ただ道についてはつい最近まで使用されていたようであり、その利用がどこまで遡るかは発掘調査で慎重に判断したい。さらに、４号古墳の北側には人為的に造成され、古墳が築造されなかった平坦面が残されている。

一方、こうした地形改変の後に墳丘を構築する古墳に対して、象鼻山中腹部に位置する古墳は自然地形の中に立地しており、斜面に小規模な盛土を行ったものがほとんどであると考えている。これは17号古墳より南に位置する古墳についても同様に理解できるだろう。

＊　養老町教育委員会2006『象鼻山古墳群第３次発掘調査現地説明会資料』



第147図　象鼻山古墳群中心部の地形（S ＝１/1,000）



第148図　象鼻山中腹部に位置する古墳の地形（S ＝１/1,000）

ただし、岐阜県揖斐川町の白石古墳群や滋賀県高月町の古保利古墳群など付近の代表的な前期古墳群では尾根に沿って線的に造墓を続ける事例が多く、象鼻山古墳群が濃尾平野側を中心に面的に古墳の築造を拡大させていることは周辺の古墳群の一般的様相とは異なっており、注意しておきたい*。

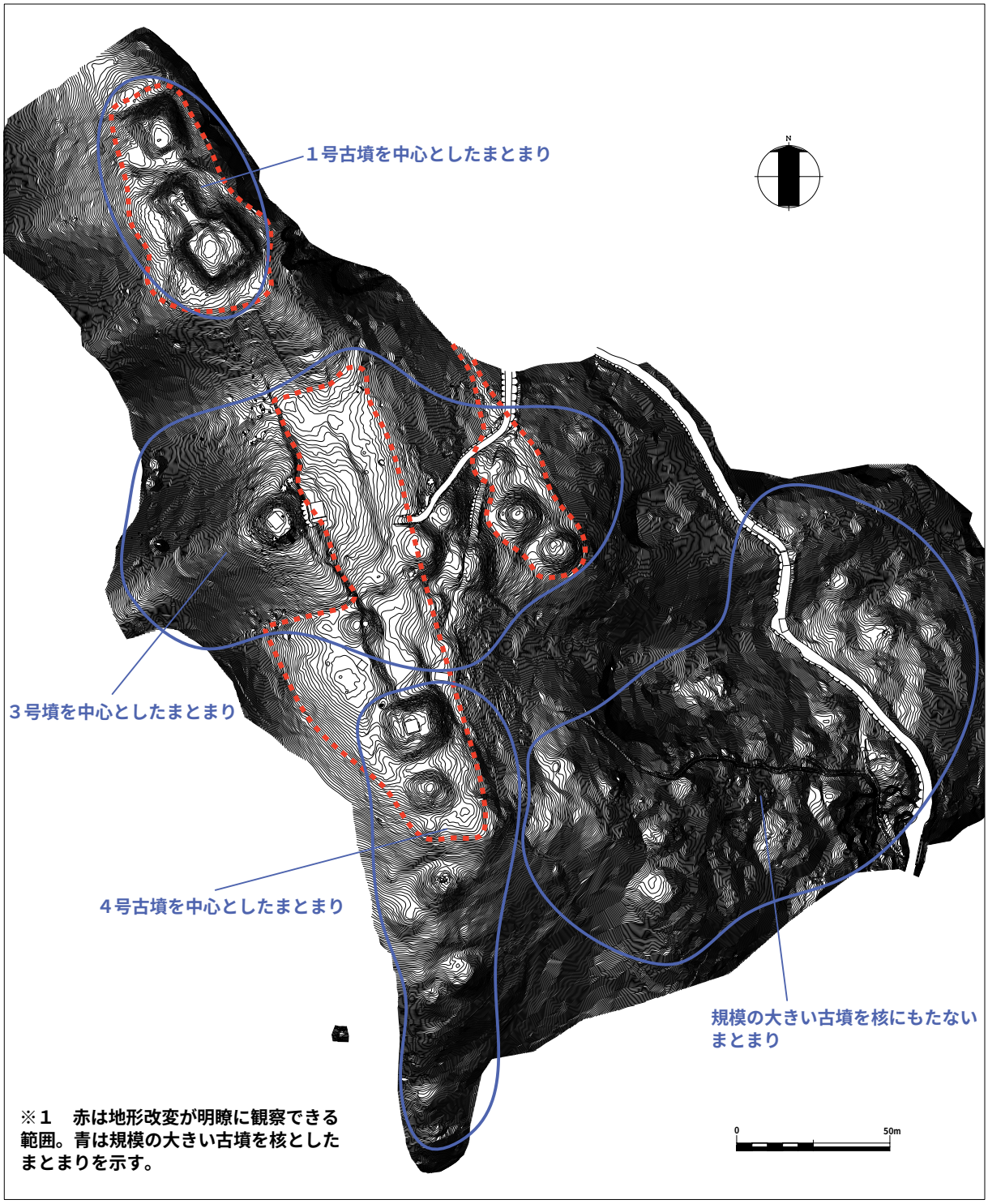
以上のように、象鼻山古墳群は廻間Ⅰ式期には造墓を開始し、複数の古墳を配置することを前提とした大規模な地形改変を行っている。また、造成した平坦面に古墳を築造しない空間を残したまま、丘陵斜面に面的に造墓範囲を拡げていくことがその特徴としてあげられるだろう。

（3）各古墳の属性からみた象鼻山古墳群の構成

こうした象鼻山古墳群の特質は、古墳を個別に分析する上でも有効な視点を与えてくれる。ここではそれぞれの古墳がもつ墳形、全長、墳頂の標高、古墳の立地、位置を中心にして分析を進めるが、

＊　小谷和彦他2005「白石古墳群」『揖斐川町史追録編』
　　高月町教育委員会1995『古保利古墳群詳細分布調査報告書』

そのうち古墳の立地と位置については先述した古墳群全体の様相を重視し、立地については人為的な平坦面と自然地形の斜面を区別した。また位置については象鼻山古墳群を代表する規模をもつ１号古墳・３号墳・４号古墳のいずれかを核として分布するものと、中心となる規模の大きい古墳をもたないものとに区別した（第149図･第11表）。なお、墳形については当測量図を元に作成した DEM（三次元地形図）の分析から斜面に立地する小規模な古墳ほど、現地での観察や測量調査の成果からだけで



第149図　象鼻山古墳群の立地分類及び位置分類（S ＝１/2,000）

第11表　象鼻山１～56号古墳の属性

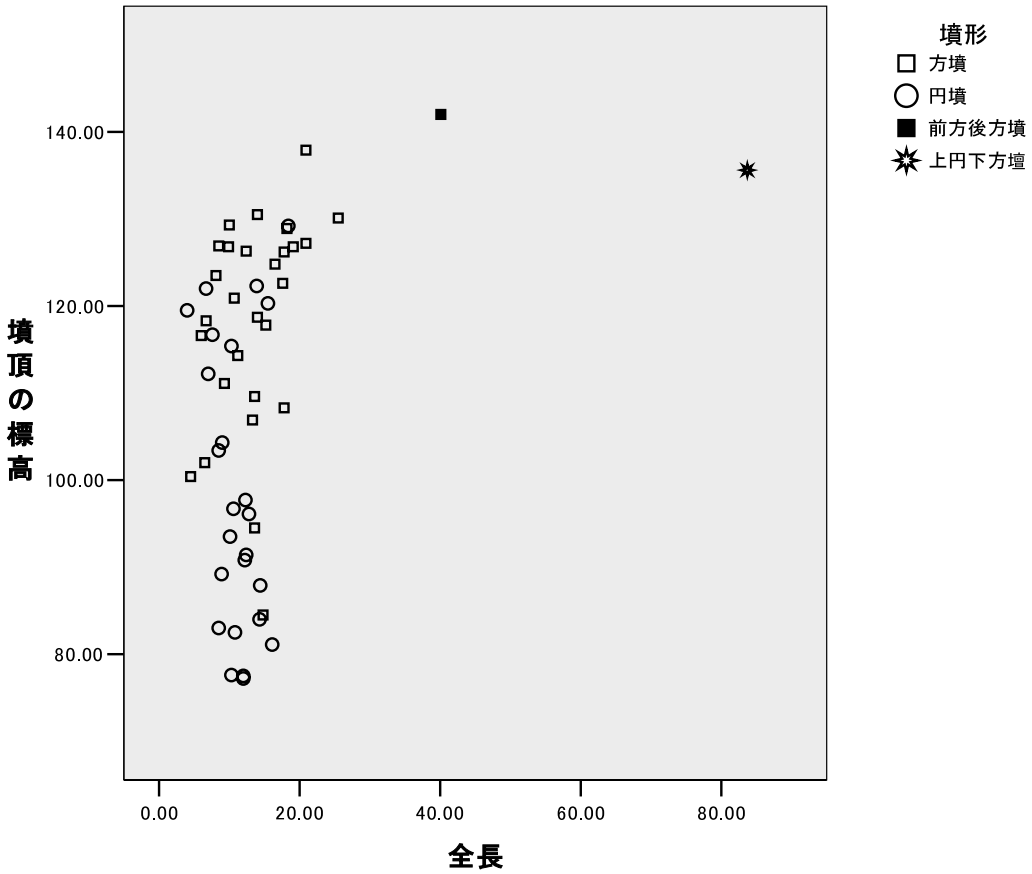
古墳番号	墳形	全長(m)	高さ(m)	墳頂の標高(m)	古墳の立地	位置
1	前方後方墳	40.10	4.97	142.00	平坦面	１号古墳中心
2	方墳	20.90	3.80	137.90	平坦面	１号古墳中心
3	上円下方壇	83.70	10.50	135.60	平坦面	３号墳中心
4	方墳	25.50	4.60	130.10	平坦面	４号古墳中心
5	方墳	14.00	2.50	130.50	平坦面	３号墳中心
6	方墳	10.00	1.20	129.30	平坦面	３号墳中心
7	方墳	9.90	1.60	126.80	平坦面	３号墳中心
8	円墳	18.40	3.00	129.20	平坦面	３号墳中心
9	方墳	17.80	4.40	126.20	斜面	３号墳中心
10	方墳	20.90	6.00	127.20	斜面	３号墳中心
11	方墳	10.70	1.80	120.90	平坦面	３号墳中心
12	方墳	17.60	3.40	122.60	平坦面	３号墳中心
13	方墳	11.20	4.00	114.30	斜面	３号墳中心
14	円墳	15.50	3.10	120.30	平坦面	３号墳中心
15	方墳	12.40	2.00	126.30	平坦面	３号墳中心
16	方墳	18.20	2.00	128.90	平坦面	４号古墳中心
17	方墳	8.50	1.10	126.90	平坦面	４号古墳中心
18	方墳	8.60	―	―	平坦面	３号墳中心
19	方墳	19.10	4.30	126.80	平坦面	４号古墳中心
20	方墳	16.50	3.90	124.80	斜面	４号古墳中心
21	方墳	8.10	1.90	123.50	斜面	４号古墳中心
22	円墳	13.90	2.30	122.30	斜面	４号古墳中心
23	方墳	15.20	5.00	117.80	斜面	４号古墳中心
24	方墳	6.70	1.50	118.30	斜面	４号古墳中心
25	円墳	7.60	2.20	116.70	斜面	４号古墳中心
26	円墳	7.00	2.50	112.20	斜面	４号古墳中心
27	円墳	9.00	2.60	104.30	斜面	４号古墳中心
28	方墳	4.50	2.20	100.40	斜面	４号古墳中心
29	円墳	4.00	1.40	119.50	斜面	４号古墳中心
30	円墳	6.70	2.00	122.00	斜面	４号古墳中心
31	方墳	14.00	3.20	118.70	斜面	中心なし
32	方墳	6.00	2.70	116.60	斜面	中心なし
33	円墳	10.30	4.60	115.40	斜面	中心なし
34	方墳	9.30	3.00	111.10	斜面	中心なし
35	方墳	13.60	4.10	109.60	斜面	中心なし
36	方墳	17.80	4.20	108.30	斜面	中心なし
37	方墳	6.50	2.70	102.00	斜面	中心なし
38	方墳	13.30	5.00	106.90	斜面	中心なし
39	円墳	8.50	3.90	103.40	斜面	中心なし
40	円墳	12.30	4.90	97.70	斜面	中心なし
41	円墳	12.80	4.20	96.10	斜面	中心なし
42	円墳	10.60	3.40	96.70	斜面	中心なし
43	円墳	14.40	3.90	87.90	斜面	中心なし
44	円墳	12.40	4.10	91.40	斜面	中心なし
45	円墳	10.10	3.80	93.50	斜面	中心なし
46	方墳	13.60	2.90	94.50	斜面	中心なし
47	方墳	14.80	4.00	84.50	斜面	中心なし
48	円墳	8.90	2.00	89.20	斜面	中心なし
49	円墳	12.20	2.80	90.80	斜面	中心なし
50	円墳	12.00	4.10	77.50	斜面	中心なし
51	円墳	14.30	4.60	84.00	斜面	中心なし
52	円墳	8.50	2.00	83.00	斜面	中心なし
53	円墳	16.10	3.70	81.10	斜面	中心なし
54	円墳	10.80	2.60	82.50	斜面	中心なし
55	円墳	10.30	2.40	77.60	斜面	中心なし
56	円墳	12.00	3.20	77.20	斜面	中心なし

はその判断が困難であることが指摘できているが、本考察では分布調査と測量調査の成果からそうした古墳の墳形についても暫定的に評価し、対象に含めた*。

象鼻山に所在する古墳をそれぞれ個別に考えるとき、まず注意したいのが方形と円形の比率である。本考察では象鼻山古墳群として評価されている70基の古墳のうち、象鼻山山頂とその中腹にまとまって分布する56基の古墳を対象としているが、その内訳は前方後方墳１基（１号古墳）、上円下方壇１基（３号墳）、方墳29基、円墳25基であり、古墳群の中心的なまとまりにおいても方形と円形それぞれの墳形を採用する古墳は同程度であることが分かる。しかし、古墳が築造される標高や大きさの分析では、方墳のほうが円墳より大きく、そして高い場所に築造するものが多い（第12表、第150図）。また、

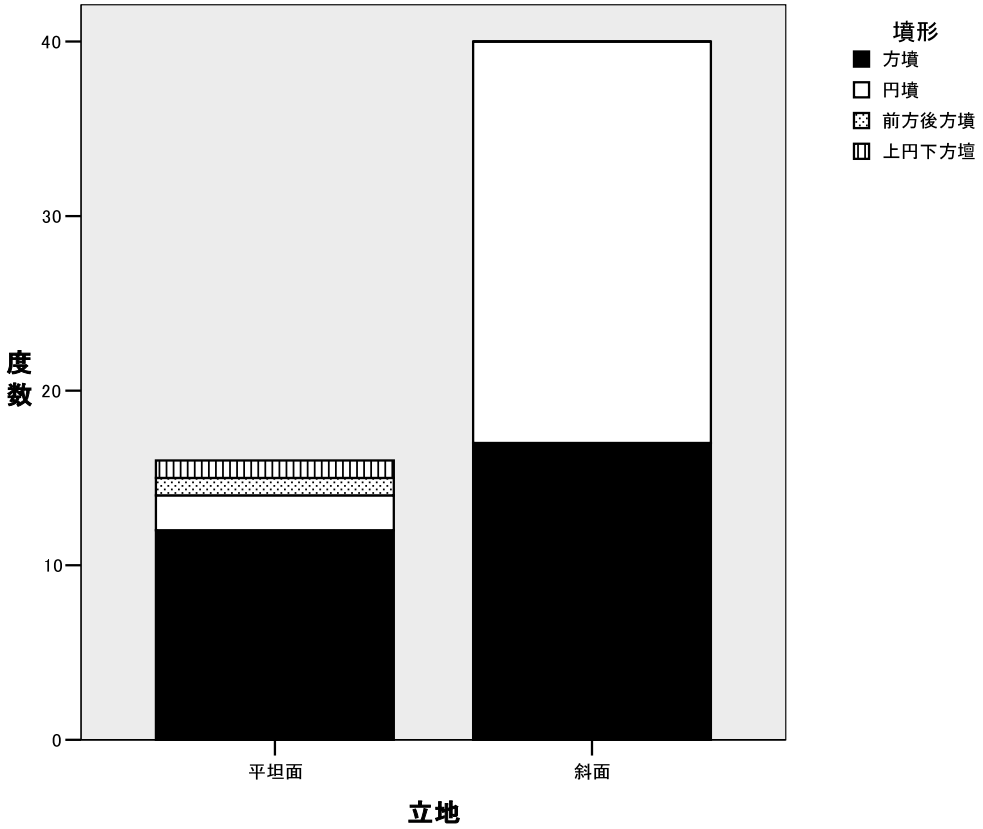
第12表　墳形別にみた全長と墳頂の標高の平均値

墳形		全長（m）	墳頂の標高（m）
上円下方壇	平均値	83.7000	135.6000
	度数	1	1
前方後方墳	平均値	40.1000	142.0000
	度数	1	1
方墳	平均値	13.2828	118.2750
	度数	29	28
円墳	平均値	11.1440	98.8600
	度数	25	25
合計	平均値	14.0643	110.1964
	度数	56	55

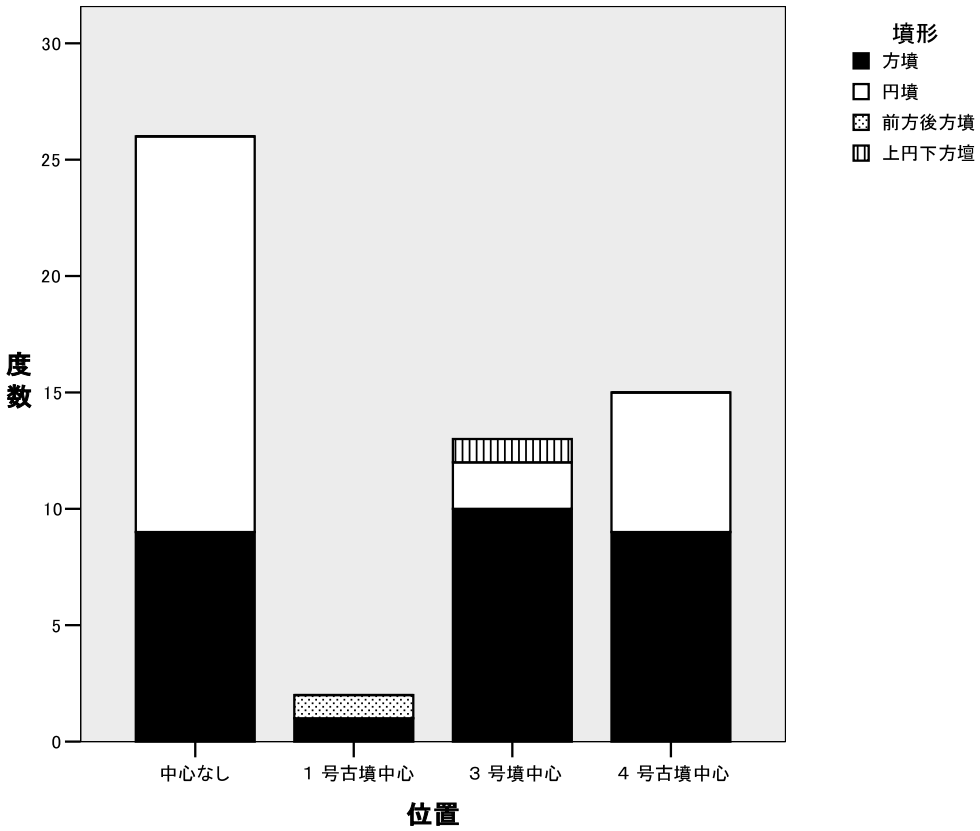


第150図　全長と墳頂の標高からみた墳形の分布

＊　中谷正和・中島和哉2006「岐阜県養老町象鼻山古墳群の調査と GIS の利活用」『実践 考古学 GIS』



第151図　立地別にみた墳形



第152図　位置別にみた墳形

立地別に墳形をみても、円墳の方が地形改変を伴わないものが多いことが明らかになっている（第151図）。そのため、象鼻山古墳群は総合的には方墳を主体として構成された古墳群として評価できるだろう。

しかし、その一方で円墳にも一定の規模をもつものや地形改変を伴うもの、標高の高い位置に築造されるものがあることが指摘できる。位置を重視した古墳のまとまり別にみても、方墳と円墳はそれぞれに一定量が含まれており、象鼻山に所在する円墳と方墳の間には明確な階層差や時期差を見出せない（第152図）。古墳分布からも同様の指摘ができ、古墳を個別にみれば、必ずしも方墳の優位性は認められない（前章第８図参照）。

（４）象鼻山古墳群の構造

以上から、象鼻山古墳群は全体としてみれば方形原理主体の古墳群であるが、詳細にみれば円形を呈する墳墓も重要な位置を占めていることがわかる。赤塚は弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓の編年研究から、東海地方ではおおよそ廻間Ⅲ式期までは方形を志向する墳墓が中心であり、松河戸Ⅰ式期以降に円形を志向する墳墓が増加していくことを明らかにした*。またそうした中で中井は松河戸Ⅰ式期以降の西濃地域において、同一の古墳群の中には方形原理と円形原理の古墳が拮抗する事例もあることを明らかにしている**。象鼻山古墳群もこれらの研究成果や古墳の標高から、全体としては方形から円形への変遷をたどったと考えるが、その過程は一様には捉えられず、方墳と円墳が併存した期間もあっただろう。そしてそれぞれの古墳を個別に比較すれば、象鼻山古墳群において選択された墳形は、階層性や時期差にとどまらない性質をもつ可能性がある。

また、８号古墳が廻間Ⅰ式期に遡ることから、８号古墳を含む３号墳を中心としたまとまりには他にも１号古墳を遡る墳墓がある可能性が高い。さらに、３号墳の中心部が円形を呈することが明らかになりつつあり、このまとまりには他にも円形を選択した可能性のある墳墓が含まれている。

弥生時代の東海地方における墓の形態は方形を呈するものが顕著であるが、長野県など他の地域では円形を呈するものもあり、象鼻山古墳群においても弥生時代から古墳時代への移行期に既に方形原理だけでなく円形原理も墳形の選択肢に含まれていた可能性を考えておきたい***。

（５）おわりに

東海地方の前方後方墳にみられる動向は、当地域の弥生時代から古墳時代への変遷を考える上で重要な位置を占めており、特に象鼻山１号古墳を含む象鼻山古墳群は白石古墳群などとともに有数の前期古墳密集地帯の一角を形成している。これらの遺跡は当地域の弥生時代から古墳時代への変遷とその背景を造墓から考えることができる重要な遺跡であり、そうした遺跡の性格を解明するためには、その基盤となる資料を整理・分析し、いくつかの仮説を得て、発掘調査を計画的に進めることが重要であると考える。

そのため、象鼻山古墳群の事前調査では発掘調査の対象となる古墳群中心部全体に及ぶ測量図を作成し、個別の古墳の情報に加え、古墳群全体の形成に対して見通しを得ることを重視した。そしてそ

---

*　赤塚次郎2003「中部・近畿地方の弥生・古墳時代編年の現状と課題」『第５回考古科学シンポジウム発表要旨』
**　中井正幸2005『東海古墳文化の研究』
***　大阪府立弥生文化博物館2001『弥生クロスロードー再考・信濃の農耕社会ー』大阪府立弥生文化博物館図録23

の結果、当古墳群が丘陵頂部の地形を改変しながら面的な古墳築造を進めた点において，類例の少ない計画的な造墓がなされた遺跡と考えた。また当遺跡が方形原理に基づいた古墳を主体とした古墳群である一方、円墳が階層差や時期差にとどまらない役割をもち、当初より古墳群の一要素として存在した可能性を示した。

以上のような成果は象鼻山古墳群の性格を明らかにする上でどのような視点と調査方法が有効であるかを教えてくれるだけでなく、他の古墳の研究する上でも重要な情報を提供できるだろう。今後この基礎資料を元にさらに調査方法を検討し、象鼻山古墳群全体の解明を進めていきたい。

3　採集遺物からみた柏尾廃寺跡の形成過程と施設配置
－測量調査の成果から－

（1）はじめに

養老町が所在する西濃地域は比叡山や白山山岳信仰、伊勢信仰といった中世を代表する宗教勢力の結節点に位置している。また、現在でも日吉神社や白山神社が多く、年始には各地域の代表が伊勢へ参る習慣も残っている。

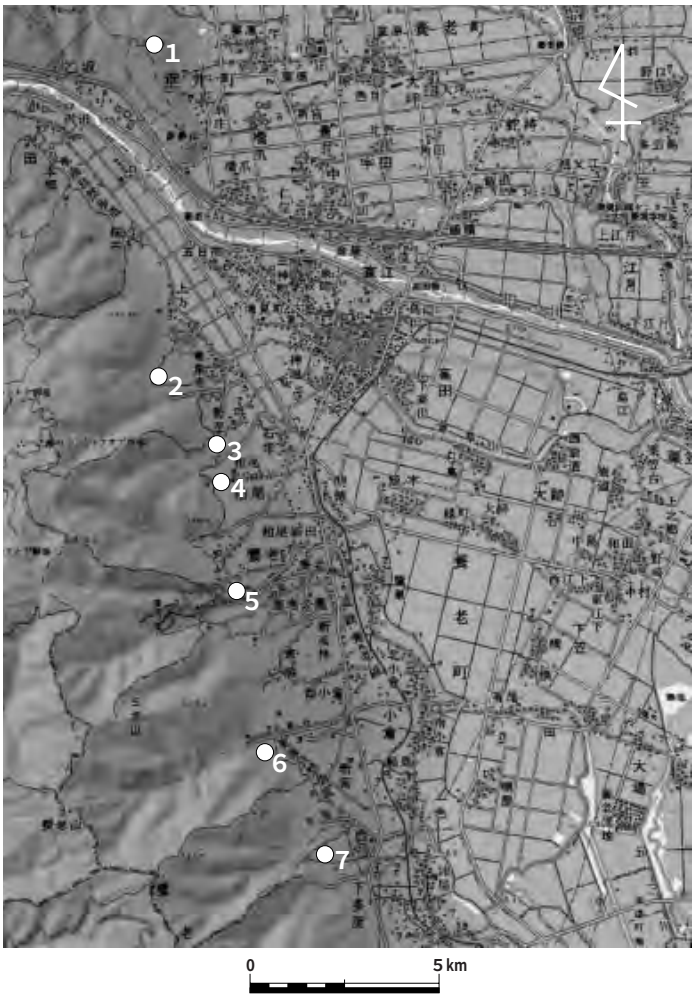
こうした地域の中でも、特に養老山地から南宮山にかけては「多芸七坊」と呼ばれる７つの寺院跡の伝承が残されており、そのうち５つの伝承地が養老町に所在している（第153図、第13表）*。今回の分布調査の成果からはこのうち養老寺を除く、竜泉寺廃寺跡、喜勢遺跡、柏尾廃寺跡、薬師山遺跡の４つの遺跡について中世を中心とした山岳寺院跡である可能性が高いことを明らかにできた。これらは養老山麓沿いにほぼ領域を接して位置しており、時を同じくして営まれた遺跡である。他にこれほど寺院跡が密集して創建される事例は県内では確認されておらず、養老山地を中心として分布する中世山岳寺院跡の性格を明らかにすることは、養老町内にとどまらず県内外の中世山岳寺院跡を考える上でも重要な情報を提供できるだろう。

本稿はこれら４つの遺跡の内、柏尾廃寺跡の測量調査の成果に基づく考察である。柏尾廃寺跡は過去の開墾や盗掘により多数の遺物が散乱し、貴重な情報が失われつつある遺跡であるが、７つの伝承地の中心に位置しており、現在も基壇跡や大小の平坦面、礎石、墓、土塁、溝、洞穴などの遺構が良好な状態で残っている。また、背後には柏尾城跡をもち、山腹には秣の滝がある。そのため、当遺跡を集中的に調査して得られた情報は他の寺院跡を調査する上でも役立つであろう。

測量調査では地形測量図及び平面図の作成に加え、調査中に発見できた遺物は全て採集地点を記録した。平面図については遺跡の大半部分を網羅できており、地点を記録できた遺物は瓦片や近代以降の遺物も含めば1,308片に上る（第154図）。本考察は、これらの遺物の分布や種類、器種、時期等の分析から、柏尾廃寺跡の形成過程と施設配置を明らかにすることを目的としたものである。

なお、本考察で報告する調査成果は遺跡の保護及び管理に尽力してこられた柏尾区並びに柏尾史跡保存会の協力によるところが大きい。記して感謝するとともに今後もご助力をお願いしたい。

＊　養老町1978『養老町史通史編上』



第153図　養老町とその周辺の中世山岳寺院跡の位置（S ＝ 1/200,000）

第13表　養老町とその周辺の中世山岳寺院跡の消長

番号	遺跡名及び寺院名	所在地	性格	立地	古代		中世		
					尾野猿投窯Ⅴ～Ⅵ期 尾野2000	斎藤猿投窯第Ⅵ～Ⅶ期 齋藤1995	山茶碗第4～6型式期 藤澤1994	古瀬戸中・後期 藤澤2005	大窯期 藤澤2005
1	栗原九十九坊跡	垂井町・大垣市・養老町	寺院跡・城館跡	丘陵・下位段丘面	※詳細は不明				
2	竜泉寺廃寺跡	養老町	寺院跡	中位段丘面・下位段丘面・扇状地			●	●	
3	喜勢遺跡	養老町	寺院跡・生産遺跡	中位段丘面・下位段丘面・扇状地			△	●	●
4	柏尾廃寺跡	養老町	寺院跡	山地・中位段丘面・下位段丘面	△	●	◎	◎	◎
5	養老寺	養老町	―	―	※詳細は不明				
6	薬師山遺跡	養老町	寺院跡	山地・下位段丘面		●	△	●	
7	藤内寺跡	海津市	？	山地・中位段丘面・下位段丘面	※詳細は不明				

●は１～４片、△は５～９片、○は10～14片、◎は15片以上

第154図　柏尾廃寺跡の採集遺物分布（S ＝１/5,000）

（２）平面図からみた柏尾廃寺跡の立地と構成（第155図）

柏尾廃寺跡はその主要施設のほとんどを山地及び中位段丘面に配置しており、塔跡の可能性が高い基壇や礎石建物をもつ平坦面など大小様々な規模の平坦面を自然地形に複雑に組み合わせて配置している。これらは主に仏像や経典を祀る堂塔地区や寺院経営の施設が置かれる院坊地区、墓域として評価できるものであり遺物散布の中心となっている。

さらに、堂塔地区及び墓域の背後には、小規模な平坦面と大きな露石に囲まれた中規模の平坦面、洞穴をもつ地区がある。この位置は養老山地へ登る入口でもあり、山岳修行を実践する行場であった可能性が高いだろう。また、養老山地中腹にあたる標高270～340mの尾根上には山城を配置している。

一方で堂塔地区や院坊地区の周囲をみると、北側にはしる勢至南谷沿いで、扇央部分に近く、災害の危険性が高くなる一帯の地区においては谷に沿って長い土塁を形成している。その内側の平坦面も地形に沿う形で造成されており、院坊地区と基軸を異にした配置を採っている。二次的な遺跡の拡大を想定できるだろう。また、東側の現在の柏尾集落内でも中世の遺物を確認できており、院坊地区と同様に連続して造成された平坦面に家屋を建てているものが多い。南側は現在桑畑等によって地形が改変されており、過去の面影を残していないが、やはり中世に属する遺物を採集している。

以上のように、現況の平面図からは柏尾廃寺跡が背後の養老山地に防御施設、行場、墓域をもち、堂塔・院坊地区を中心として周囲に拡大していった遺跡である可能性が高いことがわかる。しかし、平面図のみでは遺跡の時期的な変遷を探ることは難しく、ここではさらに採集遺物の情報を加えた分析を行ってみたい。

第155図　柏尾廃寺跡の立地と構成（S ＝ 1 ⁄2,500）

（３）柏尾廃寺跡の遺物分布と時期別組成

1．編年と時期区分

柏尾廃寺跡の存続期間は採集遺物により古代から近世初頭にかけてであることが明らかにできており、本考察ではこれを10期に区分した（第14表）。時期区分の指標については養老町の中世遺跡において普遍的に出土する尾張型山茶碗の編年を基軸とし、これに須恵器、灰釉陶器、古瀬戸、常滑産瓷器系陶器の研究成果を加えた*。その併行関係については主に柴垣の研究に依拠している**。

なお、中国製陶磁器と山茶碗の併行関係については、小野木による研究に依った***。

第14表　編年対照表

	須恵器 尾野2000	灰釉陶器 斎藤1995	山茶碗（尾張型） 藤澤1994	山茶碗（東濃型） 山内2004	古瀬戸 藤澤2005	常滑 中野2005	柏尾廃寺跡（本考察）
700							
800	Ｖ期	第Ⅳ期					１期
		第Ｖ期					２期
1000		第Ⅵ期					
1100		第Ⅶ期	第３型式	矢戸上野１		１a型式	３期
			第４型式	谷迫間２		１b型式	
						２型式	
1200			第５型式	浅間窯下１ 丸石３ 窯洞１	草創期	３型式	４期
					前期Ⅰ	４型式	
			第６型式	白土原１	前期Ⅱ	５型式	５期
			第７型式	明和１	前期Ⅲ	６a型式	
1300			第８型式		前期Ⅳ	６b型式	６期
					中期Ⅰ		
				大畑大洞４	中期Ⅱ	７型式	
			第９型式		中期Ⅲ		
					中期Ⅳ		
				大谷洞14	後期Ⅰ	８型式	
1400			第10型式		後期Ⅱ		７期
				大洞東１	後期Ⅲ	９型式	
			第11型式	脇之島３	後期Ⅳ		
				生田２		10型式	
1500					大窯１	11型式	８期
					大窯２		
					大窯３	12型式	９期
1600					大窯４		
					連房式登窯		10期

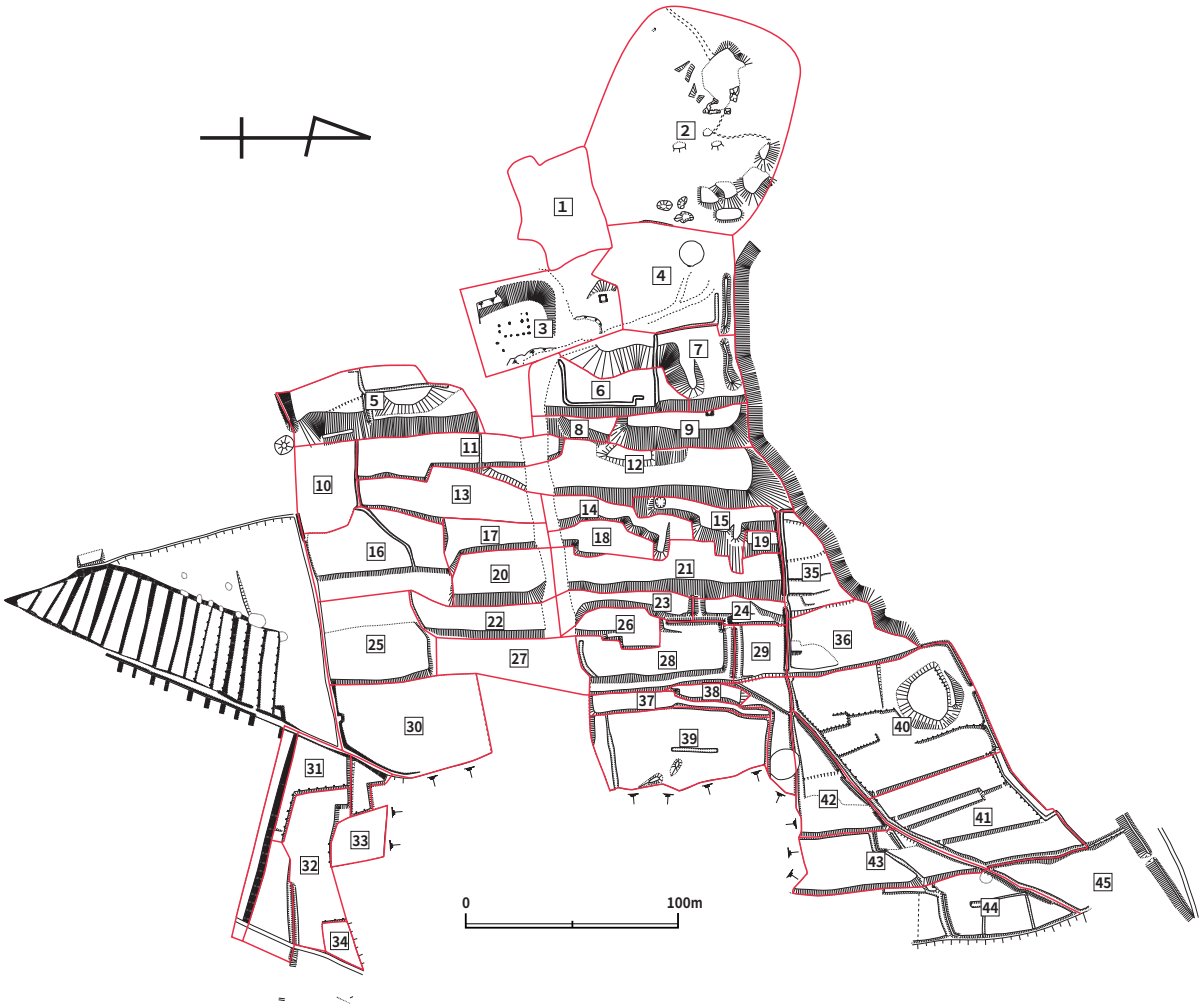
*　尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』
斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年」『須恵器集成図録』３
藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター
山内伸浩2004「美濃（東濃）窯の山茶碗」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』
藤澤良祐2005「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
中野晴久2005「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

**　柴垣勇夫2004「まとめ」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』

***　小野木学2004「美濃の山茶碗」『第23回　中世土器研究会』

2．柏尾廃寺跡の地区分類について

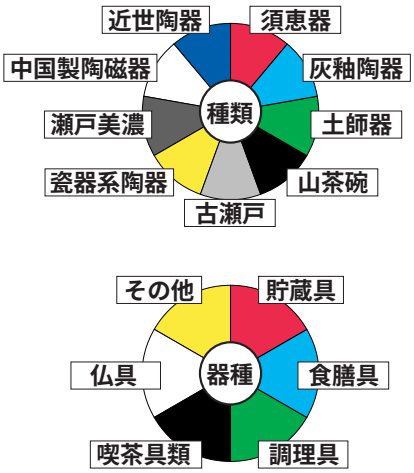
本考察では採集遺物の分布を測量調査で得られた平面図を元に分析していくが、ここではより詳細な位置情報を得るため、平面図をさらに45に分割し、採集遺物をそれぞれの地区に所属させた（第156図）。地区分けは遺物分布と地形的なまとまりを重視しておこない、平坦面の境を決定している斜面については地形の崩落を踏まえ、上段の地区に含めた。



第156図　柏尾廃寺跡地区分類（S ＝ 1 /3,200）

3．遺物の分類について

今回の測量調査で確認できた遺物は、須恵器、灰釉陶器、土師器、瓦質土器、山茶碗、古瀬戸、瓷器系陶器（常滑産、猿投産、美濃須衛産、産地不明）、瀬戸・美濃製品（以下瀬戸美濃とする）、中国製陶磁器、近世陶器、石製品、瓦であり、それらの器種分類については、用途を重視し、貯蔵具（壺・瓶子・甕）、食膳具（椀、皿類）、調理具（鉢類、擂鉢、卸皿、ホウロク、石臼）、喫茶具類（天目茶碗・茶入・茶臼）、仏具（花瓶・燭台・香炉・筒形の容器）、その他（桶・合子・火鉢）に細別した（第15表）。なお、判断のつかないものは不明として一括している。また、瓦については組成分析の対象とはせず、個別に分析を行った。計量については宇野の示した破片数計測法を用いる*。



第157図　凡例

第15表　柏尾廃寺跡測量調査採集遺物組成

種類	用途	破片数	
土師器	食膳具	9	(64.3%)
	調理具	2	(14.3%)
	不明	3	(21.4%)
	小計	14	[1.1%]
国産陶器			
須恵器	貯蔵具	9	(90.0%)
	食膳具	1	(10.0%)
	小計	10	[0.8%]
灰釉陶器	食膳具	6	(100%)
	小計	6	[0.5%]
山茶碗	食膳具	65	(71.4%)
	調理具	26	(28.6%)
	小計	91	[7.4%]
古瀬戸	貯蔵具	297	(80.1%)
	食膳具	24	(6.5%)
	調理具	12	(3.2%)
	喫茶具類	6	(1.6%)
	仏具	6	(1.6%)
	その他	5	(1.3%)
	不明	21	(5.7%)
	小計	371	[30.0%]
瓷器系陶器	貯蔵具	555	(97.4%)
	調理具	4	(0.7%)
	仏具	5	(0.9%)
	不明	6	(1.1%)
	小計	570	[46.1%]
瓦質土器	その他	1	(100%)
	小計	1	[0.1%]
瀬戸美濃	食膳具	2	(5.0%)
	調理具	36	(90.0%)
	喫茶具類	2	(5.0%)
	小計	40	[3.2%]
近世陶器	貯蔵具	18	(39.1%)
	食膳具	2	(4.3%)
	調理具	12	(26.1%)
	喫茶具類	1	(2.2%)
	不明	13	(28.3%)
	小計	46	[3.7%]
中国製陶磁器			
青磁	貯蔵具	1	(33.3%)
	食膳具	2	(66.7%)
	小計	3	[0.2%]
白磁	貯蔵具	8	(88.9%)
	食膳具	1	(11.1%)
	小計	9	[0.7%]
磁器	食膳具	1	(100%)
	小計	1	[0.1%]
石製品	調理具	2	(66.7%)
	喫茶具類	1	(33.3%)
	小計	3	[0.2%]
不明	貯蔵具	18	(25.4%)
	食膳具	4	(5.6%)
	調理具	1	(1.4%)
	喫茶具類	3	(4.2%)
	不明	45	(63.4%)
	小計	71	[5.7%]
総計		1236	

＊　宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集

4．採集遺物の時期別組成と分布（第158～160図）

１期　（８世紀）

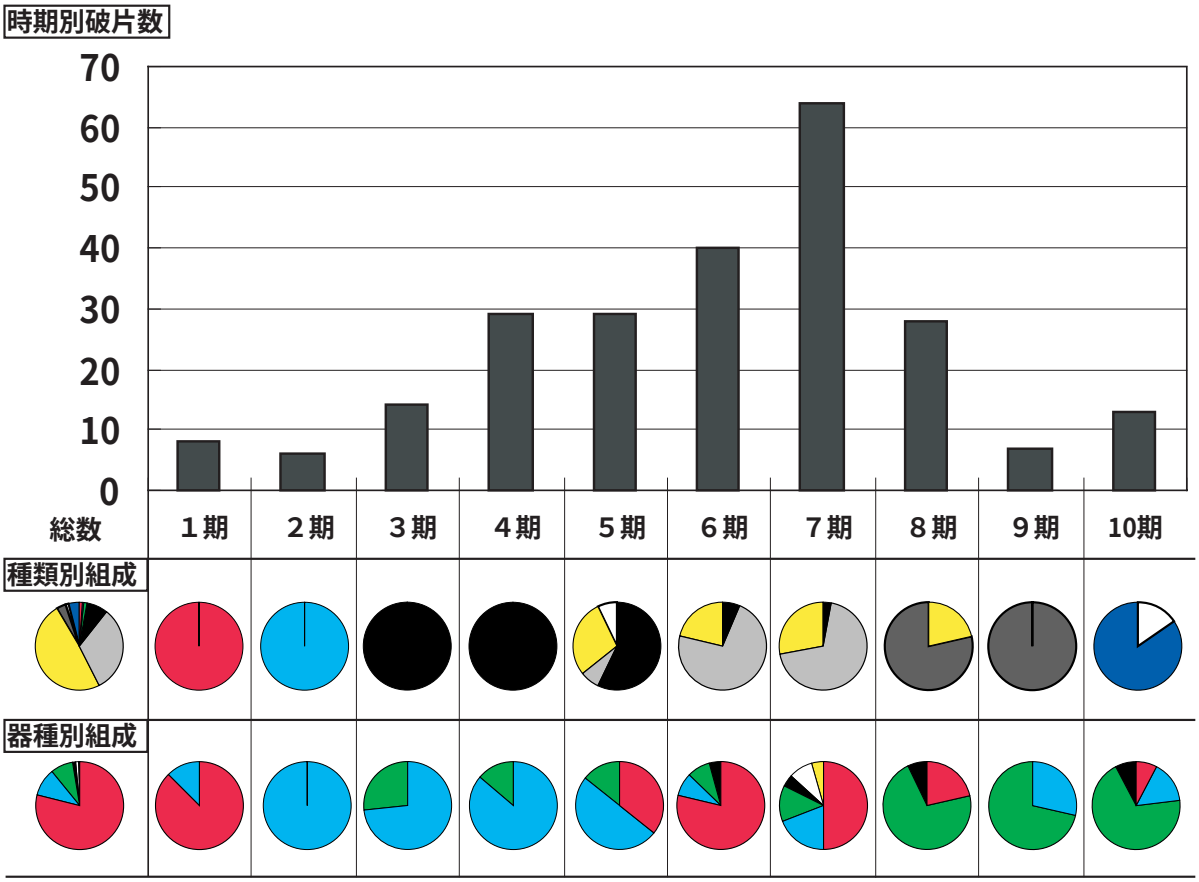
採集できた遺物片の総数は８片であり、全て須恵器である。器種別の組成では、貯蔵具が87.5%（７片）、食膳具12.5%（１片）で一見貯蔵具が多くを占めているが、個体として考えればそれほどの差はないだろう。遺物の分布する地区は３区、４区、12区、13区であり、遺物数は少ないものの堂塔地区を中心として採集されている。

２期　（９世紀から11世紀後半）

６片の遺物が採集できており、全て灰釉陶器の食膳具である。１期と同様、堂塔地区で集中して採集されており、当地区が古代において既に継続的に利用されていることが分かる。

３期　（11世紀末から12世紀後半）

採集できた遺物片の総数は15片であり、全て山茶碗である。器種別組成は食膳具73.3%（11片）、調理具26.7%（４片）であり、４区、８区、10区、12区、13区、14区、15区、30区、36区で採集できている。４区は前段階に引き続き使用されているが、１・２期に比べ、遺物の分布範囲が広く、採集地点の中心は堂塔地区よりやや低い院坊地区の上段に移る。



第158図　柏尾廃寺跡採集遺物の時期別組成

４期　（12世紀末から13世紀前半）

採集できた遺物の総数は29片に上る。これは１～３期の採集片の総数と同じであり、その存続期間を考えれば、当期において遺物数が一気に増加したことがわかる。しかし、遺物の分布は前段階と大きな変化はなく、墓域である１区や行場である２区での遺物の採集はみられない。採集できた遺物が全て山茶碗であることや、器種別の組成が食膳具86.2%（25片）、調理具13.8%（４片）と食膳具の比率が高い点も３期と同様である。

５期　（13世紀後半）

採集できた遺物数は４期とほぼ同じ28片であるが、種類別組成は山茶碗57.1%（16片）、古瀬戸7.1%（２片）、瓷器系陶器28.6%（８片）、中国製陶磁器7.1%（２片）と多様であり、器種別組成においても、貯蔵具35.7%（10片）、食膳具50.0%（14片）、調理具14.3%（４片）と中世においてはじめて貯蔵具が一定量を占める。遺物の分布する地区数も７期に次いで広く、１区と２区で初めて遺物が確認できるのも当期である。そのため、５期は柏尾廃寺跡の主要部分全体に遺物が分布する時期と評価できるだろう。

６期　（13世紀末から14世紀後半）

採集できた遺物の総数は47片に上り、遺物片数では７期に次いで多い。種類別組成は山茶碗6.4%（３片）、古瀬戸72.3%（34片）、瓷器系陶器21.3%（10片）であり、古瀬戸の比率が高く、器種別組成では貯蔵具78.7%（37片）、食膳具8.5%（４片）、調理具8.5%（４片）、喫茶具類4.3%（２片）であり、中世において貯蔵具が最も高い比率を示す時期である。採集遺物の半数近くが墓域である１区に集中したことがその原因であろう。また、当期より喫茶具類が一定量確認できるようになる。

一方、遺物の分布する地区は、１～４区、12区、14区、15区、23区、30区と５期に比べやや少ない。５期より６期のほうが期間は長く、遺跡南側での一時的な採集遺物の減少と墓域周辺に遺物採集地点が集中することが当期の大きな特徴である。垂井町の栗原九十九坊跡や海津市の行基寺など周辺に位置する中世寺院には、南北朝時代に消失したとされている記録もみられ、当期における遺物分布の縮小化は当遺跡にとどまらず、周辺の複数の中世寺院を含めた動向と連動したものである可能性を考えておきたい*。なお、こうした中でも30区が３期以降10期に至るまで継続的に遺物が採集できていることは注目できる。

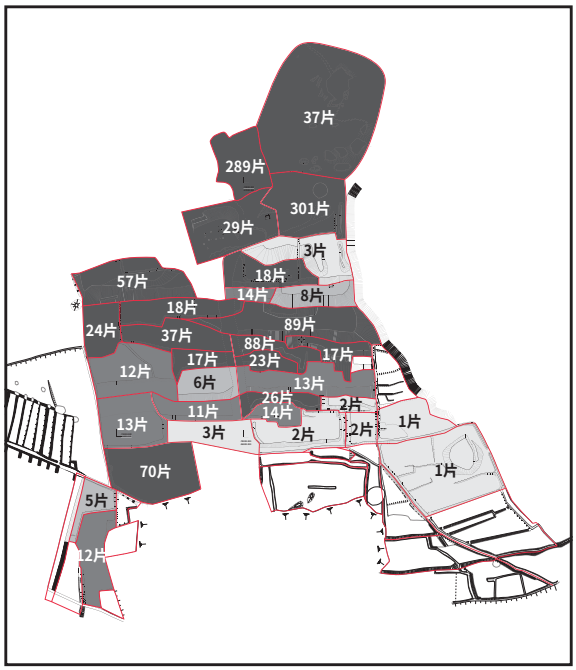
７期　（14世紀末から15世紀後半）

採集遺物数が68片、遺物が採集できた地区数は19に上り、遺物量とその分布範囲が全時期を通じてピークを迎える時期である。種類別組成は、山茶碗2.9%（２片）、古瀬戸69.1%（47片）、瓷器系陶器27.9%（19片）と６期に変わらず古瀬戸の比率が高いものの、器種別組成では、貯蔵具50.0%（34片）、食膳具19.1%（13片）、調理具13.2%（９片）、喫茶具類4.4%（３片）、仏具8.8%（５片）、その他4.4%（４片）と最も器種構成が多様であるという結果が得られている。貯蔵具の比率が減少し、代わって食膳具の比率が増加しており、喫茶具類や仏具も全体の１割程度を占めている。墓域の遺物量はやや少なくなっているが、当期が柏尾廃寺跡の最盛期であっただろう。なお、紀年銘が確認できる最も古い石仏の年号は應永９年（1402）であり、石仏が出現するのも当期からであると考える**。

---

*　垂井町1996『新修垂井町史通史編』
　南濃町1982『南濃町史』

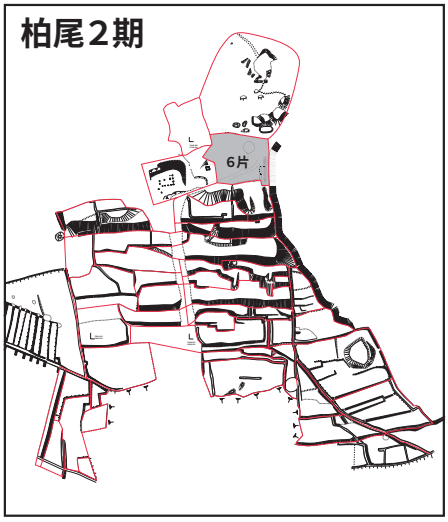
**　小川栄一1939「柏尾廢寺阯」『岐阜県史蹟名勝天然記念物報告書』第八輯

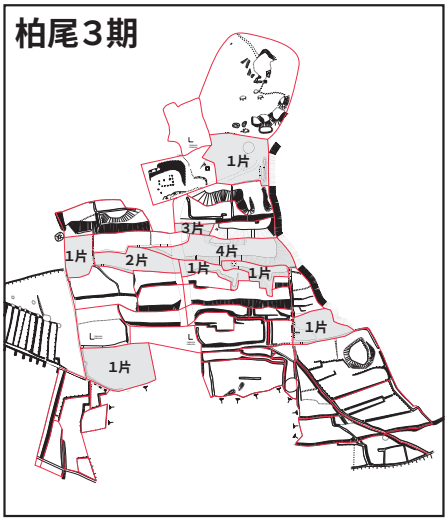


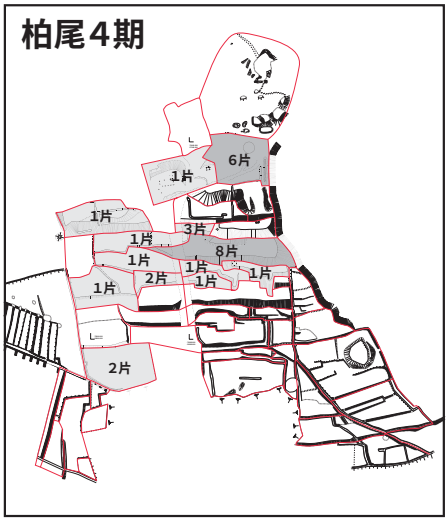
全体

	柏尾1期	柏尾2期	柏尾3期	柏尾4期	柏尾5期	柏尾6期	柏尾7期	柏尾8期	柏尾9期	柏尾10期
1区					4	22	7	1		
2区					1	1	1	1		
3区	1			1		2	2	1	1	
4区	5	6	1	6	4	16	13	3		3
5区				1	1		4	1		
6区					1					
8区			3	3	1					
9区					1					
10区			1				1		1	1
11区				1	1		1			
12区	1		4	8	2	1	8	9		1
13区	1		2	1	3		4	1		
14区			1	1	2	1	10	4	1	
15区			1	1	1	1				
16区				1						
17区				2	1					
18区				1			2	3	1	
20区										1
21区							3	1	1	
22区							1			1
23区						1	2	2		
24区										1
25区					2		2			
26区										2
28区							1			1
29区									1	
30区			1	2	1	1	2	1	1	2
31区							1			
32区							1			
36区			1							

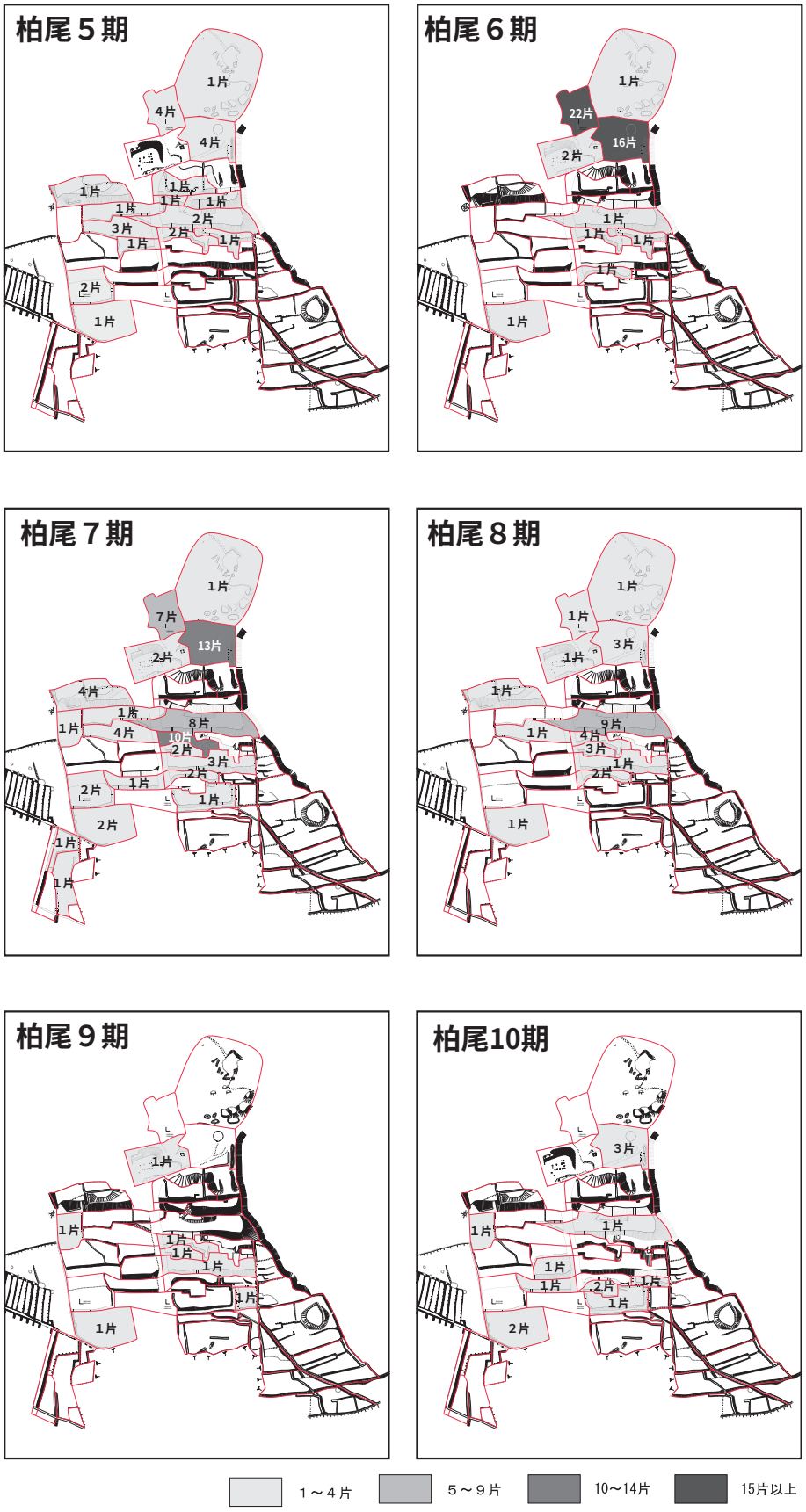
一覧







第159図　柏尾廃寺跡時期別遺物分布１



第160図　柏尾廃寺跡時期別遺物分布２

８期　（15世紀末から16世紀前半）

採集できた遺物の総数は28片であり、その種類別組成は瓷器系陶器21.4%（６片）、瀬戸美濃78.6%（22片）である。器種別組成では貯蔵具21.4%（６片）、調理具71.4%（20片）、喫茶具類7.1%（２片）であり、急激に調理具の比率が増加する。紀年銘資料が最も多く確認できている時期でもあり、永禄２年（1559）の柏尾寺の記載をもつ棟札や竜潭寺所蔵の天文23年（1554）濃州多藝庄柏尾寺の墨書をもつ阿弥陀如来像は８期から９期への過渡期の中でつくられたものであろう*。墓域で遺物が採集できる最後の時期であり、遺跡の主要部分において遺物が採集できるのは当期までである。

９期　（16世紀後半）

７片の遺物を採集できているが、墓域をはじめ、寺の中心をなした地区においてほとんど遺物が確認できなくなっている。柏尾廃寺跡をはじめとした養老山地に林立する中世山岳寺院が廃絶したとされる時期も16世紀後半であり、測量調査の成果と整合する（第２章参照）。

採集遺物は全て瀬戸美濃であり、器種別組成は食膳具28.6%（２片）、調理具71.4%（５片）で８期同様調理具が多い。

10期　（17世紀以降）

当期の遺物片数は13片で、種類別組成は中国製陶磁器15.4%（２片）、近世陶器84.6%（11片）で器種別組成は貯蔵具7.7%（１片）、食膳具15.4%（２片）、調理具69.2%（９片）、喫茶具類7.7%（１片）である。９期同様遺跡の主要部分に遺物は分布しない。

5．小結

以上から柏尾廃寺跡の遺跡としての出現は８世紀にまで遡り、１～２期にあたる古代において既に堂塔地区を中心に遺物が分布している。そして中世になると採集遺物数は急激に増加し、その分布も広範にわたる。ただし、遺物の種類や器種組成が多様化するのは５期からであり、現在確かなところでは墓域から遺物が確認できるのも５期からである。以降ほぼ８期まで、柏尾廃寺跡の主要部分から遺物を継続的に採集できるが、９期になって遺物数は急激に減少する。

なお、今回の遺跡詳細分布調査では養老山地での古代の遺物散布はほとんど確認できておらず、当遺跡の古代における様相は養老町の古代遺跡の一般的傾向とは異なっている。

そのため、柏尾廃寺跡は古代には既に養老山麓の奥まった場所に山林修行場を思わせる場所をもっていたと考えておきたい。そして、12世紀末以降その一帯を中心として周囲に諸施設を増加させていっただろう。しかし、柏尾廃寺跡が諸施設を体系的に整備し、中世山岳寺院としての機能を本格的に発揮したのは遺物の種類や器種組成が多様化し、墓域が形成される13世紀後半からであったと考える。その後、遺跡は14世紀末から15世紀後半に最盛期をもち、16世紀中頃まで継続するが、16世紀後半になって急激に衰退していく。

ただ、それぞれの区をみれば遺跡の出現から廃絶まで一貫して存続した区はなく、それぞれの時期毎に空間的な様相がある程度変化していることがわかる。

---

*　小川栄一1939「柏尾廢寺阯」『岐阜県史蹟名勝天然記念物報告書』第八輯
　養老町文化財保護協会1990「旅をした“ほとけ”」『養老町の文化財』第75号

（４）柏尾廃寺跡内の採集遺物にみる多様性

1．主要地区での採集遺物の組成

中世寺院跡において出土する遺物は、仏具や喫茶関連遺物、瓦など寺院を特徴づける特殊なものを除けば領主館等の他の中世遺跡と大きな変化がないことが指摘されているが、一方で寺院内の諸施設は、墓域や仏像や経典を祀る堂塔地区、寺院経営の施設が置かれる院坊地区、防御施設、山岳修行を実践する行場など多様な機能と目的をもっていることが明らかにされている*。そのため、ここでは採集遺物片数の多かった地区を中心に、柏尾廃寺跡内のそれぞれの地形的なまとまりの遺物組成にどのような相違があるのかについて分析してみたい。

分析については前項と同様の方法を採り、瓦と鉄滓の散布状況については別に図示した（第161～164図）。

１区

雛壇状の地形に山石を配置し、地区全体に蔵骨器と推測できる遺物片や石仏、五輪塔、宝篋印塔などの石造物が散乱している地区である。墓域と考えている地区であり、その構造は滋賀県の敏満寺遺跡石仏谷墓跡とよく似ている**。

289片の遺物を採集できており、時期別にみれば６期にピークをもつ。種類別組成では、土師器0.7%（２片）、山茶碗0.7%（２片）、古瀬戸50.5%（145片）、瓷器系陶器46.7%（134片）、中国製陶磁器1.4%（４片）であり、そのほとんどを古瀬戸と瓷器系陶器が占める。器種別の組成では貯蔵具96.9%（278片）、食膳具1.4%（４片）、調理具1.7%（５片）であり、そのほとんどが貯蔵具である。蔵骨器として使用されたものが多いだろう。また、中国製陶磁器の中には白磁の壺が含まれている。

この結果は墓域の性格をよく裏付けていると考えるが、古瀬戸と瓷器系陶器の比率がほぼ同じであることは他の岐阜県内の清水経塚や長福寺遺跡、不破一色遺跡、日野不動洞遺跡のように古瀬戸がほとんどを占める中世墓とは異なる様相である***。なお、紀年銘をもつ石造物のピークは８期であり、７期以降１区が衰退するかどうかの評価についても慎重に判断する必要があるだろう（第２章参照）。

２区

基壇跡及び墓域の背後に位置し、小規模の平坦面と切り立った露石に囲まれた中規模の平坦面、さらに洞穴をもつ地区である。養老山地への登山道の入口でもあり、行場と考えている。

採集遺物片数は37片で、種類別組成では、山茶碗2.9%（１片）、古瀬戸32.4%（11片）、瓷器系陶器58.8%（21片）、中国製陶磁器2.9%（１片）、近世陶器2.9%（１片）であり、１区と同様に古瀬戸と瓷器系陶器が組成の中心を占める。器種別組成でも貯蔵具82.9%（29片）、調理具2.9%（１片）、仏具14.3%（５片）であり、やはり１区同様貯蔵具の比率が高い。１区に隣接し、遺物の採集地点が１区に近いものが多いことが組成に大きく影響しているだろう。

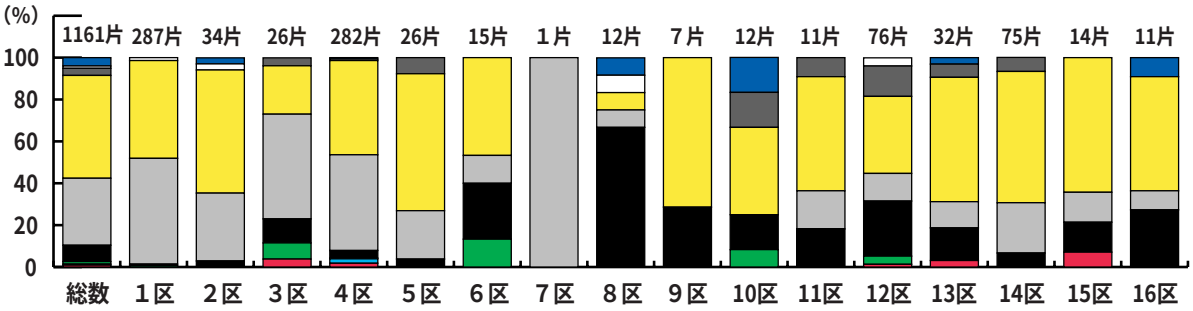
ただし、採集片数は少ないものの洞穴に近い養老山地への登山道入口付近でも遺物は採集できてお

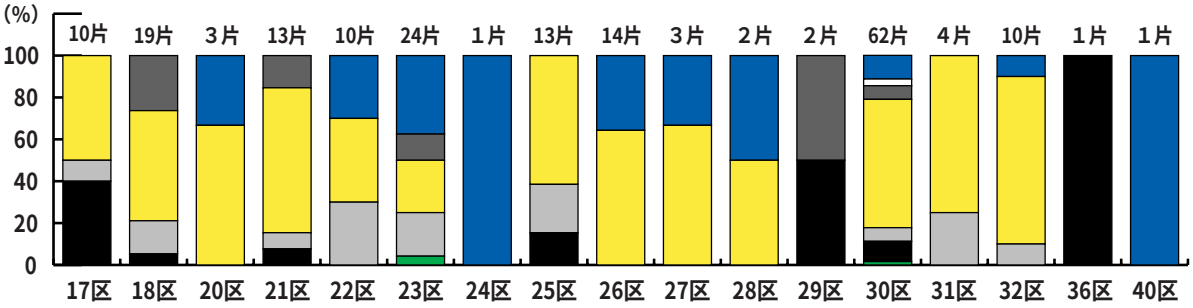
---

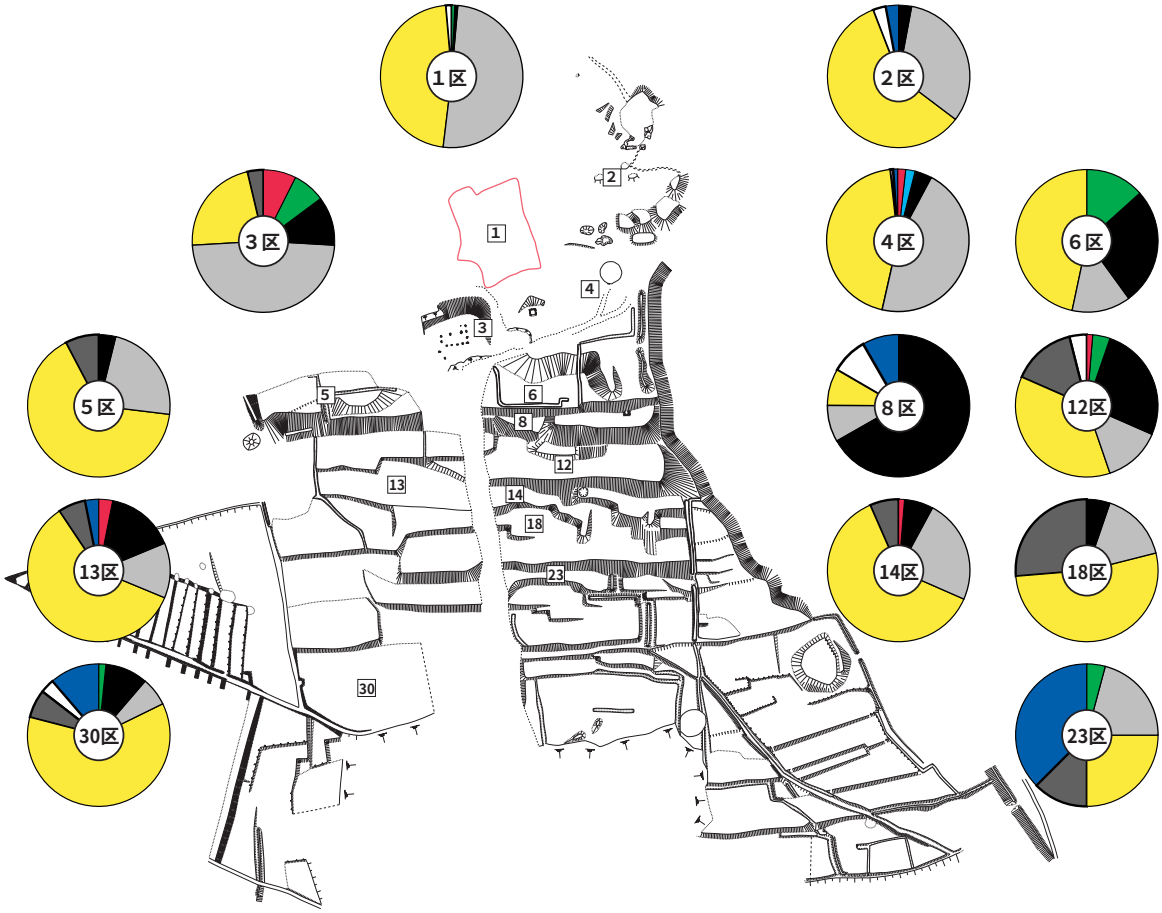
*　水澤幸一2006「土器と陶磁器」『中世寺院の多様性』季刊考古学第97号
　時枝　務2006「中世寺院の諸問題」『中世寺院の多様性』季刊考古学第97号
　坂井秀弥2006「中世寺院関連遺跡の調査とその保護－特集にあたって－」『月刊文化財』11月号（518号）

**　多賀町教育委員会2005『敏満寺遺跡石仏谷墓跡』

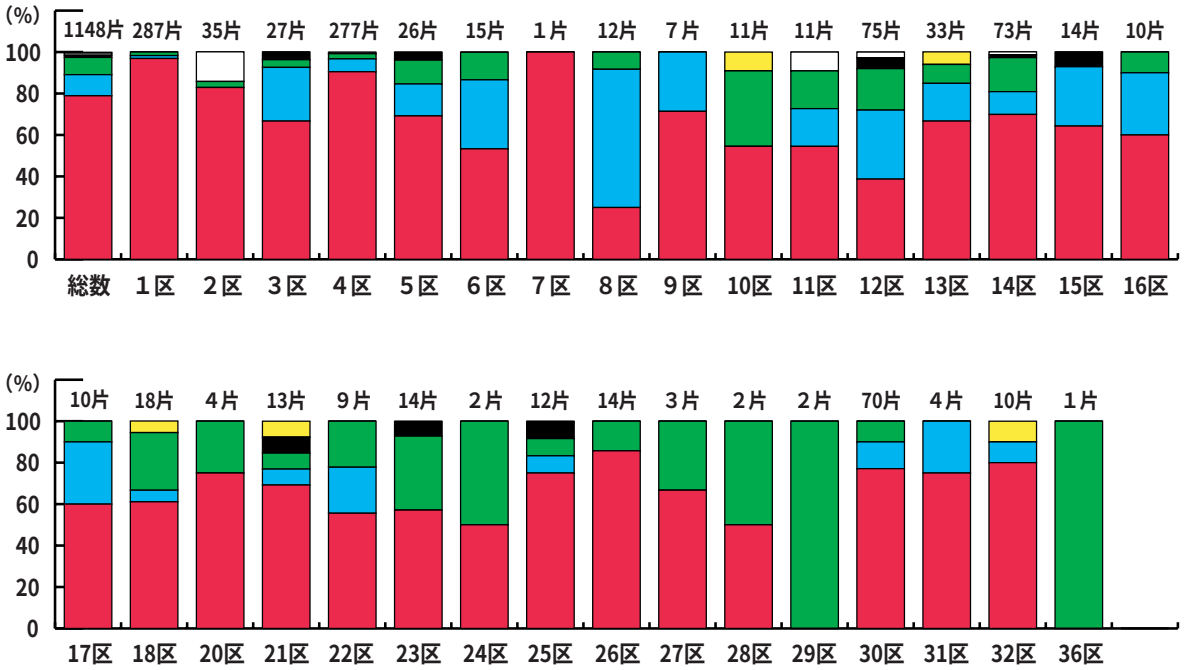
***　藤澤良祐2001「埋納された古瀬戸製品－特に大型壺・瓶類を中心として－」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要ⅩⅧ』
　小野木学2006「岐阜県の中世墓」『墓場の考古学』

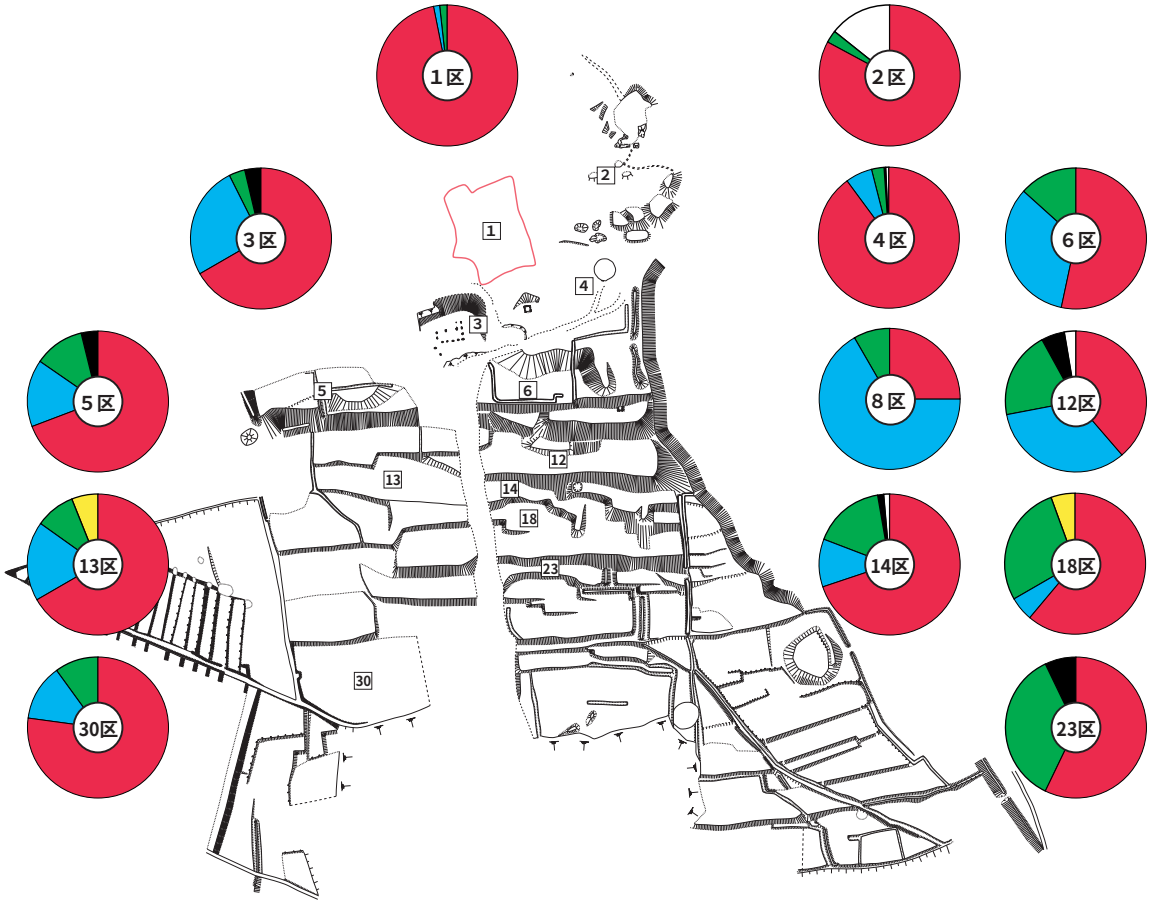






第161図　柏尾廃寺跡採集遺物の地区別種類組成





第162図　柏尾廃寺跡採集遺物の地区別器種組成

第163図　柏尾廃寺跡の瓦の分布（S ＝１/5,000）

第164図　柏尾廃寺跡の鉄滓の分布（S ＝１/5,000）

り、中には美濃須衛産の筒型の容器（経筒？）も確認できている。その景観とともに当地区が寺院の中にあって特殊な役割を果たしたことを示しているだろう。

３区

規模の大きい平坦面の中でも最高所に位置しており、礎石群や基壇跡をもつ地区である。堂塔地区と評価し、遺跡の中心的役割を果たしたと考えている。ただ、瓦は採集できていない。

採集できた遺物の破片数は29片で、種類別組成では須恵器3.8%（１片）、土師器7.7%（２片）、山茶碗11.5%（３片）、古瀬戸50.0%（13片）、瓷器系陶器21.3%（６片）、瀬戸美濃3.8%（１片）である。器種別組成では、貯蔵具66.7%（18片）、食膳具25.9%（７片）、調理具3.7%（１片）、喫茶具類3.7%（１片）であり、２区同様１区に接しているため、少なからずその影響を受けているだろう。しかし、比較的多様な種類をもち、古瀬戸の比率が高く、喫茶具類が確認できていることは注目できる。

４区

墓域、行場、堂塔地区に隣接する地区で、西から東へ緩やかな斜面になっている。柏尾廃寺跡で最も継続的に利用された地区である。山地と中位段丘面の境に立地しており、その北側は深い谷になっているにも関わらず、谷の手前には土塁を形成している。地区内には主に墓域から発掘した石仏、石塔を集めて造った千体仏があり当地区の組成にも少なからず墓域の影響が想定できるだろう。

採集遺物の総破片数は301片に上り、種類別組成では須恵器1.8%（５片）、灰釉陶器2.1%（６片）、土師器0.4%（１片）、山茶碗3.5%（10片）、古瀬戸45.7%（129片）、瓷器系陶器44.7%（126片）、中国製陶磁器0.7%（２片）、近世陶器1.1%（３片）と種類は豊富であるが、これまでと同様に古瀬戸と瓷器系陶器の比率が高い。器種別組成は貯蔵具89.9%（249片）、食膳具6.1%（17片）、調理具2.9%（８片）、喫茶具類0.4%（１片）、仏具0.7%（２片）と多器種にわたり、喫茶具類や仏具が確認できるものの貯蔵具の比率が約９割を占めている。

５区

院坊地区南側の最高所に位置し、平坦面や土塁、溝などの地形が残された地区である。東側斜面の勾配はきつく、東側の低い平坦面からは隔絶されている。

57片の遺物を採集できており、種類別組成は山茶碗3.8%（１片）、古瀬戸23.1%（６片）、瓷器系陶器65.4%（17片）、瀬戸美濃7.7%（２片）で古瀬戸の比率がやや低く、器種別組成では貯蔵具69.2%（18片）、食膳具15.4%（４片）、調理具11.5%（３片）、喫茶具類3.8%（１片）という結果が得られている。やはり貯蔵具が多いが、食膳具と調理具が一定量確認でき、喫茶具類もある。器種組成からは北側に隣接する３区によく似ているだろう。しかし、当区では軒丸瓦、軒平瓦を含む29片に上る瓦が採集できており、３区とは異なり瓦葺きの建物があった可能性がある。

６区

西側に堂塔地区、南側では５区に隣接する地区で、平坦面や土塁、溝のほか８・９区との境を決定している斜面に石積みが残存している。また少数であるが石仏や石塔も確認できた。

採集できた遺物の総破片数は18片で、種類別組成は土師器13.3%（２片）、山茶碗26.7%（４片）、古瀬戸13.3%（２片）、瓷器系陶器46.7%（７片）で、その器種別組成は貯蔵具53.3%（８片）、食膳具33.3%（５片）、調理具13.3%（２片）である。土師器と山茶碗の比率が高く、古瀬戸の比率が低い。その結果、食膳具の比率が高くなっている。また、瓦が２片採集できている。

８区

６区の東に隣接した、小規模な三角形の平坦面をもつ区画である。９区とは一連の地形である可能性があるが、周囲は急な斜面で囲まれており、比較的広い平坦面をもつ地区が多い中でやや異質な地形である。

採集できた遺物は14片であるが、面積に比べればその採集遺物数は多いと評価できるだろう。種類別組成は山茶碗66.7%（８片）、古瀬戸8.3%（１片）、瓷器系陶器8.3%（１片）、中国製陶磁器8.3%（１片）、近世陶器8.3%（１片）であり、山茶碗の比率が高く、中国製陶磁器も少量確認できている。器種別組成では、貯蔵具25.0%（３片）、食膳具66.7%（８片）、調理具8.3%（１片）という結果が得られた。

他の地区に比べ、種類が多様で古瀬戸や瓷器系陶器の比率が低く、用途では食膳具の比率が非常に高い。さらに瓦が２片採集できているが、その地形からは僧坊など通常の施設が配置された地区とは考えにくく、瓦葺きの建物を配置するにも平坦面の規模が小さい。周囲の規模の大きい平坦面とは性格を異にした地区であろう。

12区

院坊地区のほぼ中央に位置し、規模の大きい平坦面をもつ地区である。地区の中心の一段高い部分に小規模の平坦面をもつが、本考察ではこの平坦面を区別していない。集石や数点の五輪塔が確認できており、北端には図化はできていないが、小規模な土塁状の高まりがある。

採集できた遺物の総破片数は89片で、種類別組成では、須恵器1.3%（１片）、土師器3.9%（３片）、山茶碗26.3%（20片）、古瀬戸13.2%（10片）、瓷器系陶器36.8%（28片）、瀬戸美濃14.5%（11片）、中国製陶磁器3.9%（３片）という結果が得られている。器種別組成では貯蔵具38.7%（29片）、食膳具33.3%（25片）、調理具20.0%（15片）、喫茶具類5.3%（４片）、仏具2.7%（２片）である。４区に次いで継続的に利用された地区であり、種類及び器種の組成では最も多様な結果を示す地区である。中でも食膳具、調理具の比率が高く、喫茶具類と仏具が確認されていることは重視しておきたい。さらに当区では５片の瓦が採集できており、瓦葺きの建物があった可能性がある。

13区

12区に隣接し、院坊地区の中央に位置する地区であるが、周囲の地区との境を成す斜面が低いことが目をひく。なお上段に位置する11区との境の斜面には石積みが良好に残存している。

採集できた遺物の総破片数は37片で、種類別組成では須恵器3.1%（１片）、山茶碗15.6%（５片）、古瀬戸12.5%（４片）、瓷器系陶器59.4%（19片）、瀬戸美濃6.3%（２片）、近世陶器3.1%（１片）で、器種別組成では貯蔵具66.7%（22片）、食膳具18.2%（６片）、調理具9.1%（３片）、その他6.1%（２片）という結果が得られた。食膳具が一定の割合を占め、古瀬戸の比率がやや低い。瓦も１片採集できており他の院坊地区の上部に位置する区と類似した傾向を示している。

14区

13区と現在の道路を挟んで接する地区であり、13区と一連の地形で捉えられる可能性のある地区である。21区とも地形的なつながりをもっており、当地区一帯はそれぞれの平坦面の紐帯が強いと評価できるだろう。

採集できた総破片数は88片に上り、種類別組成は山茶碗6.7%（５片）、古瀬戸24.0%（18片）、瓷器系陶器62.7%（47片）、瀬戸美濃6.7%（５片）である。器種別組成は貯蔵具69.9%（51片）、食膳具11.0%

（８片）、調理具16.4%（12片）、喫茶具類1.4%（１片）、仏具1.4%（１片）である。種類も器種もおおよそ13区と類似した結果を示しているが、喫茶具類と仏具が確認できている点が相違している。瓦についても11片が採集できており、瓦葺きの建物があった可能性がある。

18区

院坊地区の中央付近に位置する地区でやはり周囲の平坦面との境が低く、一部はつながっている。採集遺物の総破片数は23片で、種類別組成では山茶碗5.3%（１片）、古瀬戸15.8%（３片）、瓷器系陶器52.6%（10片）、瀬戸美濃26.3%（５片）で、器種別組成では貯蔵具61.1%（11片）、食膳具5.6%（１片）、調理具27.8%（５片）、その他5.6%（１片）という結果が得られている。なお、その他の遺物は合子である。調理具の比率が高いのは瀬戸美濃の比率がやや高いことによるものだろう。

23区

院坊地区でもやや低い場所に位置する地区で、小規模の南北に伸びる細長い平坦面をもっている。北側に隣接する24区の境には土塁と堀をもつ一方、南側の地区とは境が明瞭でない。

採集できた遺物の総破片数は26片で、種類別組成は土師器4.2%（１片）、古瀬戸20.8%（５片）、瓷器系陶器25.0%（６片）、瀬戸美濃12.5%（３片）、近世陶器37.5%（９片）である。器種別組成では貯蔵具57.1%（８片）、調理具35.7%（５片）、喫茶具類7.1%（１片）という結果が得られており、食膳具が確認できていない。

30区

遺跡中心部からやや南東に外れた地点に位置している地区で、規模の大きい平坦面をもっている。採集片数は70片を数え、柏尾廃寺跡の中でも利用期間は長い。種類別組成では、土師器1.6%（１片）、山茶碗9.7%（６片）、古瀬戸6.5%（４片）、瓷器系陶器61.3%（38片）、瀬戸美濃6.5%（４片）、中国製陶磁器3.2%（２片）、近世陶器11.3%（７片）で、器種別組成では、貯蔵具77.1%（54片）、食膳具12.9%（９片）、調理具10.0%（７片）である。寺院を特徴づけるような遺物は確認できていないが、柏尾廃寺跡の存続期間のほとんどで利用されていることには注意が必要であろう。なお、南東約60mの付近では鉄滓が集中して採集できており、所属時期が明らかでないが、周囲一帯に手工業生産を行う地区があった可能性がある。

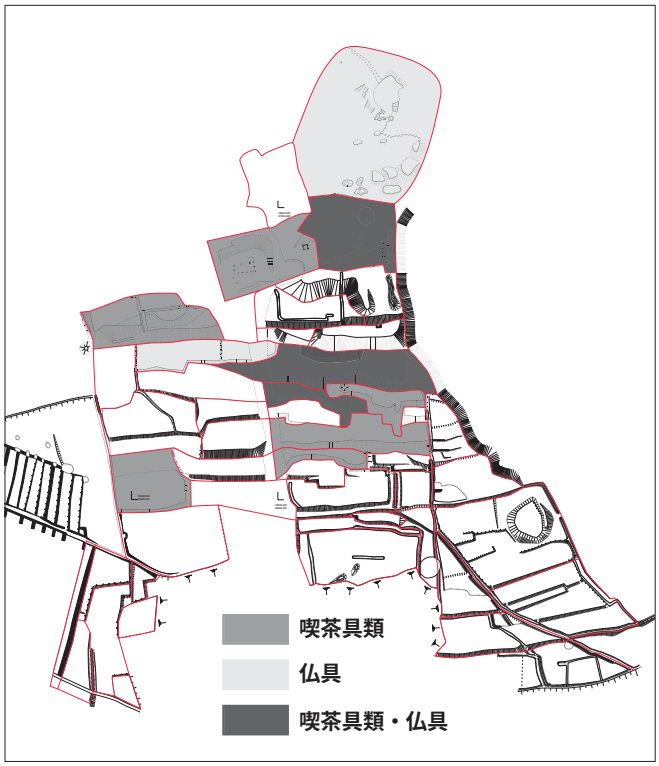
2．小結

以上のように各地区の採集遺物の組成は一様ではなく、寺院内においても地形のまとまり毎に多様な性格をもつ施設が配置されていたことが伺える。

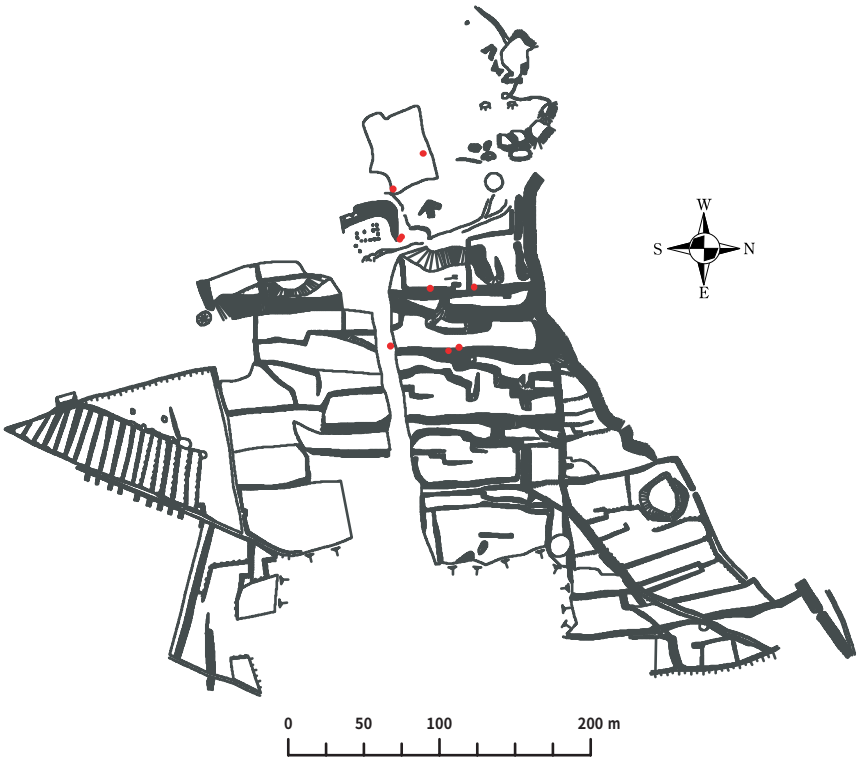
中でも特に注目しておきたいものは、平坦面を中心とする地区での仏具や喫茶具類、瓦の散布状況である（第165図）。これらは寺院の中でも中枢の地区で多く用いられたとみられるが、そのうち仏具及び喫茶具類の分布は堂塔地区に含まれる４区と院坊地区の中でも高位の位置にある12・14区の２つの中心をもつ。瓦についても12・14区の範囲に多数分布している。ただし、堂塔地区には瓦は分布していない。なお、14区より低い地区では仏具や瓦は分布しない。

また、堂塔地区では古瀬戸の比率が高く、食膳具が一定量の比率を占めているが、瓦の分布する院坊地区は遺物の種類が多様で古瀬戸の比率がやや低く、食膳具の比率が高い。一方、瓦が分布せず、喫茶具類のみが確認できる院坊地区の下部では採集遺物数も少なく、古瀬戸の比率が著しく低いことが指摘できる。

このような結果から、柏尾廃寺跡は１区に墓域、２区及び背後の養老山地に行場と防御施設、３・４区に堂塔、５～29区に寺院経営の施設である院坊、30区周辺に鉄製産に関わる手工業施設があったと考えておきたい。そして、院坊地区はおおよそ上部と下部で採集遺物の様相が大きく異なる。



第165図　柏尾廃寺跡の喫茶具類と仏具の分布



第166図　柏尾廃寺跡の土師器皿の分布

土師器皿の散布状態についても墓域や堂塔地区、院坊地区の上段に分布が限られており、これらの地区が遺跡内においても特別な場所であったことがわかるだろう（第166図）。

（５）採集遺物にみる柏尾廃寺跡の形成過程と施設配置

中世寺院の空間は、堂塔地区や寺院経営のための院坊地区、墓域、防御施設、行場、さらにこうした施設の周囲に広がる寺院の領域など多様な性格をもつ場を包括して形成される*。また、院坊地区でも宿泊機能をもつものや商業施設が配置されるものがあるように、それぞれの施設においても単純には割り切れない多様性があることが明らかになってきている**。そのため、中世寺院の形成過程や諸施設の配置については最終的には発掘調査により詳細に確認していく必要があるが、本例のような発掘調査を伴わない測量調査からもかなりの推測が可能であろう。

柏尾廃寺跡はおおよそ８世紀に堂塔地区を中心とした狭い範囲に遺跡として出現するが、13世紀以降、堂塔・院坊・防御施設・墓・行場など急速に寺院としての施設を整え、その規模を拡げていく。そうした中において、標高が高くなるにしたがって古瀬戸の比率が高く、また土師器皿についても高い地区で多く採集されていることは柏尾廃寺跡の施設配置を考える上で大きな手がかりになるだろう。宇野は中世の食器様式の研究から、地域の中枢的な遺跡や場ほど古瀬戸や土師器の比率が高いことを明らかにしており、柏尾廃寺跡においても高い場所に設置された平坦面ほど、遺跡の中で中枢的な役割を果たした施設があったと考える***。平坦面群の一番奥まった場所やその背後は、防御施設や墓域、行場、堂塔地区であり、これらに次いで標高の高い５～６区周辺と喫茶具類や仏具、瓦が多数分布する12・14区周辺の２ヶ所が高僧の居住した僧坊の候補にあがるだろう。なお、このうち５・６区は下段に位置する平坦面との境が明瞭である一方、礎石群をもつ平坦面との境があまり明瞭でなく堂塔地区と一連の性格をもつ可能性がある。そのため、現段階では12・14区が格の高い僧侶が居住した地区であり、この地区を中心として院坊地区の施設が配置されていたと考えておきたい。なお、当遺跡は西から東へと低くなる傾斜面に立地しているが、同程度の高さをもつ平坦面については北側の平坦面に区画の明瞭なものが多い。地形の傾斜に沿った東西方向だけでなく、南北方向も意識されていた可能性があるだろう。そして、柏尾廃寺跡の高僧は12・14区において瓦葺きの建物に居住したか瓦を用いる何らかの施設を設けた可能性が高いと考える。一方、堂塔地区では瓦を葺かない建物が主体であっただろう。

また、寺院に付属する中世墓のなかには、開祖など高僧の墓所を核として付近に一般民衆の共同墓地である惣墓を形成する事例がある****。柏尾廃寺跡の墓域についても大型の石塔類は確認できていないが、その規模は大きく本遺跡の僧侶のみの墓にとどまらない可能性が高い。さらに、当遺跡の墓域では古瀬戸と瓷器系陶器がほぼ同じ割合を占めている。このことは、他の県内の中世墓の一般的傾向と異なる様相であり、墓域に埋葬される対象が当遺跡の僧侶のみならず、多数の民衆までを含んでいたことによるかもしれない。ただ、蔵骨器の種類が階層差を示す可能性は低いと推察している。

なお、宇野は山岳宗教と山の資源管理や手工業生産が深く関わったことを指摘しているが、鉄滓が

---

*　時枝　務2006「中世寺社の考古学」『月刊文化財』11月号（518号）
**　時枝　務2006「中世寺院の諸問題」『中世寺院の多様性』季刊考古学第97号
***　宇野隆夫1997「中世陶器の生産と流通について」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第５輯』
****　白石太一郎2005「中世墓地としての敏満寺石仏谷墓地」『敏満寺遺跡石仏谷墓跡』

集中し、寺院の存続期間を通じて、継続的に利用された30区周辺をこうした手工業生産に携わった地区と考えておきたい*。

そして、こうした遺跡の中心的役割を果たした地区において遺物がほとんど採集できなくなる16世紀後半には寺院としての性格は失われていただろう。

（6）おわりに

養老町の中世の幕開けには平地においても多数の遺跡が出現した。そうした時代の画期に養老山麓に多数の寺院跡が出現することは、平地の集落の増加とも深く関わっていただろう。山岳寺院は規模が大きく、複雑な構造をもつため、その性格を明らかにするためには、個々の遺跡を詳細に分析することが必要である。本考察では、養老山地の寺院跡の中でも重要な位置を占めたであろう柏尾廃寺跡において主に測量調査と採集遺物の成果から分析を行った。これにより柏尾廃寺跡は古代に起源をもち、中世を中心として体系的に整備された山岳寺院跡であると考えた。さらにその内容については、防御施設や行場、墓域、堂塔、院坊、生産域からなる構造を明らかにし、それぞれに用いられた道具類の相違についても情報を得ることができた。

測量調査や遺物採集で得られた情報は発掘調査ほど詳細な分析を行うことは困難である反面、広い範囲に及ぶ遺跡の動向を知る上では有効である。今後これらを基礎資料としつつ、発掘調査などによってさらに検討を加えていくことが次の課題であろう。

4　養老町における中世前期の遺跡の様相

（1）　はじめに

西濃地方に所在する養老町は、主に養老山地、南宮山の一部とその麓に形成された扇状地、揖斐川や各小中河川などが形成した沖積低地からなる。また、これらの河川は、中世において海岸部と内陸部をつなぐ重要な交通路であっただろう。

このような環境をもつ当地域において、今回の分布調査では多くの中世遺跡を確認することができている。本考察では、その中でも採集遺物数の比較的多い６ヶ所の遺跡を対象として、その採集遺物の種類別組成と山茶碗の胎土分析から養老町の各中世遺跡の様相を明らかにすることを目的とする（第167図、第16表）。

中世遺跡の性格を探るうえで、遺物組成の研究が有効であることが先学によって指摘されているが、その中でも食膳具において同一の地域・時期であれば、格上の遺跡あるいは地区の方が土器食膳具の比率が高く、また、遺跡によっては格の高い建物域ほど出土遺物量が多く、土師器皿、中国製陶磁器の比率の高い事例があることも指摘されている**。

また、東海地方では、灰釉陶器の系譜をひく無釉の陶器である山茶碗が多く流通している。この山

---

*　宇野隆夫2001『荘園の考古学』

**　宇野隆夫1997「中世食文化の諸相　中世食器様式の意味するもの－計量分析による使用法の復元－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
小野木学2005「中世の建物域と遺物組成」『柿田遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第92集
川井啓介1994「中世集落遺跡の分析方法の一事例」『室遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第49集
川井啓介2000「三河地域の中世集落」『研究紀要』第１号　愛知県埋蔵文化センター

第167図　養老町の中世遺跡の位置

第16表　分析対象の中世遺跡と灰釉陶器・山茶碗の消長

番号	遺跡名	立地	性格	灰釉陶器・山茶碗の消長					
				1,2	3,4	5	6,7	8,9	10,11
1	日吉遺跡	扇状地	散布地	●	△	○	△	●	
2	室原東遺跡	沖積低地	散布地	●	◎	◎	◎	△	
3	仲田遺跡	沖積低地	散布地			△	○	●	●
4	下笠遺跡	沖積低地	散布地			●	●		●
5	柏尾廃寺跡	山地、中位段丘面、下位段丘面	寺院跡		△	△	△	●	●
6	鷲巣東遺跡	扇状地、沖積低地	散布地			●	●		

（個体数）
●～1
△1～4
○5～9
◎10以上

茶碗は東海地方の各地の古窯で、11世紀末ごろより生産されており、胎土の違いにより荒肌手山茶碗と均質手山茶碗の２系統に分類でき、主に荒肌手山茶碗は知多窯、猿投窯、瀬戸窯で、均質手山茶碗は東濃の諸窯や一部の瀬戸窯で生産されている。この２系統の山茶碗は地域や時期によって主体となる系統が異なるが、荒肌手山茶碗と均質手山茶碗が互いに競合関係にあり、多くの地域では荒肌手山茶碗から均質手山茶碗に主体を移行することが明らかにされている*。

そのため、それぞれの中世遺跡において分布調査で得られた採集遺物を基とし、山茶碗の消長や種類別組成の分析を行えば各遺跡の様相の一端を明らかにすることができると考える。また採集遺物の多い室原東遺跡においては遺跡内における遺物組成の分析から内部の様相についても検討する。こうして得られた情報は、養老町における中世前期社会のあり方を明らかにするうえでも役立つと考える。

＊　藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター

（２） 養老町における中世遺跡の種類別組成と山茶碗の消長及び競合関係

前述したように遺物組成から様々な遺跡の性格が明らかにされている。ここでは、採集遺物の種類別組成から各遺跡の様相を明らかにしていく。また、各遺跡において採集されている山茶碗についてもその消長と荒肌手山茶碗と均質手山茶碗の比率の変遷を明らかにする。

1. 分析方法

分析対象となる遺物は、分布調査で採集されたものであり、種類・器種は、土師器、灰釉陶器、山茶碗（椀・小椀・小皿）、古瀬戸、瓷器系陶器、中国製陶磁器である。時期別組成では、山茶碗及び中世前期の山茶碗の様相をより明らかにすることを目的として第1，2型式の灰釉陶器についても分析対象としている。時期設定については、藤澤の分類に従い、第１型式から第11型式を大きく第1，2型式、第3，4型式、第５型式、第6，7型式、第8，9型式、第10，11型式の６つに分けた*。編年は各生産地の研究に従い、その併行関係については柴垣の研究に依った**。

本稿の時期別計量による比較は時期判別が容易な底部を扱い、底部計測法を用いた***。また、種類別組成については、破片数を基にした。なお、日吉遺跡と室原東遺跡についての山茶碗の分析は、全ての破片を対象としておらず、採集地点を無作為に選び計量をおこなった。

2. 対象遺跡の分析結果（第168～170図）

１　日吉遺跡

日吉遺跡の種類別組成では、土師器11.3%（62片）、山茶碗79.2%（434片）、古瀬戸4.7%（26片）、瓷器系陶器4.4%（24片）、中国製陶磁器0.4%（２片）であった。

分析対象の山茶碗の総個体数は13.8個体であり、灰釉陶器である第1，2型式の遺物及び第３型式の山茶碗が少量確認できる。個体数のピークは第５型式であり、次いで第４型式となる。第６型式以降は個体数が激減し、第８型式以降にはほとんど確認できない。競合関係においては、第3，4型式から第6，7型式までは荒肌手山茶碗が90%以上占めるが、第8，9型式においては、均質手山茶碗が約60%を占め主体が移行している。

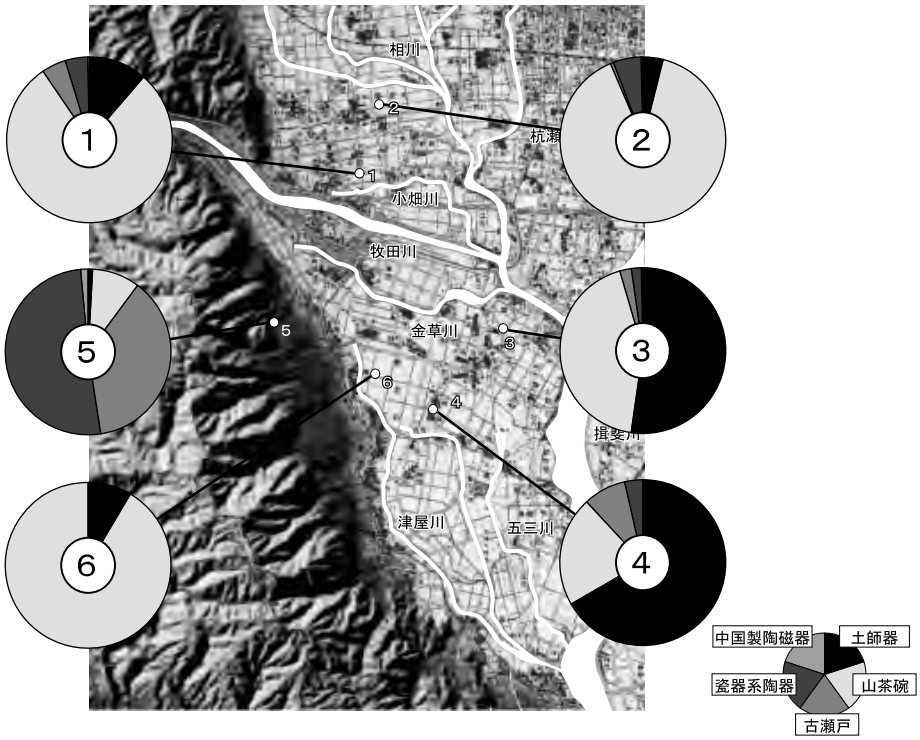
２　室原東遺跡

室原東遺跡の種類別組成では、土師器4.1%（60片）、山茶碗88.9%（1300片）、古瀬戸0.7%（10片）、瓷器系陶器5.7%（84片）、中国製陶磁器0.6%（９片）であり、その他に須恵器系陶器１片が採集できた。

分析対象の山茶碗の総個体数は、112.6個体であり、灰釉陶器である第1，2型式の遺物が少量確認できる。第３型式より個体数は増加しており、ピークは第５型式である。第６型式より個体数は減少し、第７型式以降にはほとんど確認できない。競合関係においては、日吉遺跡と同様に第8，9型式より均質手山茶碗が主体となっていく。

---

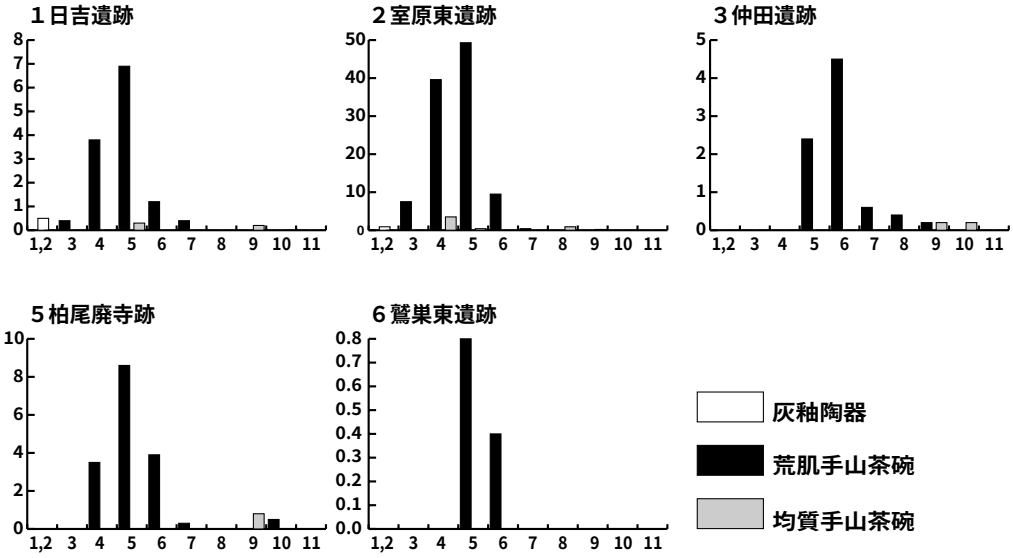
*　藤澤良祐1990『尾呂－愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
　藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター
**　柴垣勇夫2004「まとめ」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』
***　宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集



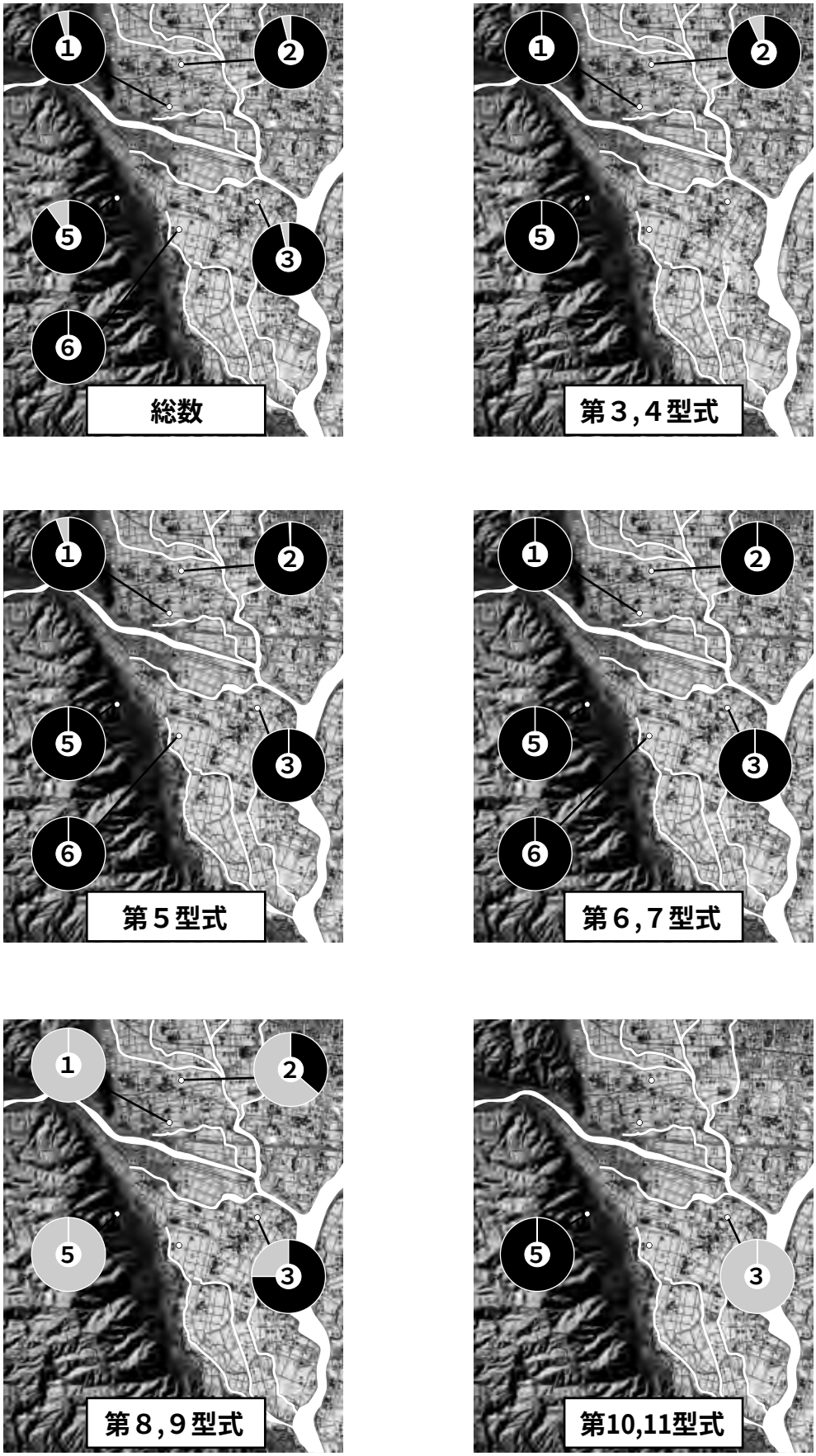
	土師器	山茶碗	古瀬戸	瓷器系陶器	中国製陶磁器	総数
1 日吉遺跡	62 (11.3%)	434 (79.2%)	26 (4.7%)	24 (4.4%)	2 (0.4%)	548 (100%)
2 室原東遺跡	60 (4.1%)	1300 (88.9%)	10 (0.7%)	84 (5.7%)	9 (0.6%)	1463 (100%)
3 仲田遺跡	162 (52.3%)	134 (43.2%)	7 (2.3%)	6 (1.9%)	1 (0.3%)	310 (100%)
4 下笠遺跡	56 (66.7%)	18 (21.4%)	7 (8.3%)	3 (3.6%)		84 (100%)
5 柏尾廃寺跡	12 (1.0%)	110 (9.3%)	439 (37.1%)	607 (51.3%)	15 (1.3%)	1183 (100%)
6 鷲巣東遺跡	4 (8.5%)	43 (91.5%)				47 (100%)

破片数（総数比）

第168図　各遺跡の種類別組成



第169図　各遺跡の灰釉陶器・山茶碗の消長



第170図　型式別山茶碗の競合関係

3　仲田遺跡

仲田遺跡の種類別組成では土師器52.3%（162片）、山茶碗43.2%（134片）、古瀬戸2.3%（７片）、瓷器系陶器1.9%（６片）、中国製陶磁器0.3%（１片）であり、土師器の比率の高さが注目できる。

山茶碗の総個体数は、8.5個体であり、第５型式より遺物が確認できる。個体数のピークは第６型式であり、第７型式以降減少していく。なお、第７、８型式には、瀬戸産の山茶碗が確認できている。競合関係においては、第５型式から第6，7型式まではすべて荒肌手山茶碗であるが、第8，9型式に均質手山茶碗が確認でき、第10，11型式にはすべて均質手山茶碗となる。

4　下笠遺跡

下笠遺跡の種類別組成では、土師器66.7%（56片）、山茶碗21.4%（18片）、古瀬戸8.3%、（７片）、瓷器系陶器3.6%（３片）であり、土師器の比率の高さが注目できる。

山茶碗については、採集できた破片が少量のため詳細な分析を行えなかったが、第５、６型式の荒肌手山茶碗と第10型式の均質手山茶碗が確認できている。

5　柏尾廃寺跡

柏尾廃寺跡の種類別組成では、土師器1.0%（12片）、山茶碗9.3%（110片）、古瀬戸37.1%（439片）、瓷器系陶器51.3%（607片）、中国製陶磁器1.3%（15片）であった。

山茶碗の総個体数は8.1個体であり、第４型式より確認でき、個体数のピークは第５型式となる。第６型式より減少し、第７型式以降はほとんど確認できない。競合関係においては、第3，4型式から第6，7型式まではすべて荒肌手山茶碗であり、第8，9型式に均質手山茶碗に主体を移行している。

6　鷲巣東遺跡

鷲巣東遺跡の種類別組成では、土師器8.5%（４片）、山茶碗91.5%（43片）であった。

山茶碗の総個体数は、1.3個体であり、第５型式より確認でき、当型式が個体数のピークとなる。第６型式には減少し、第７型式以降には確認できない。なお、採集できた山茶碗はすべて荒肌手山茶碗である。

3．小結

種類別組成では、土師器はどの遺跡においても確認できるが、仲田遺跡、下笠遺跡では５割以上の比率を占めている。室原東遺跡では、古瀬戸の比率が低い一方、瓷器系陶器の比率が高い。また、柏尾廃寺跡では、古瀬戸、瓷器系陶器、中国製陶磁器の比率が他の遺跡と比べ高く、時期的な差を考慮する必要もあるが、遺跡の性格の違いが表れていると考える。

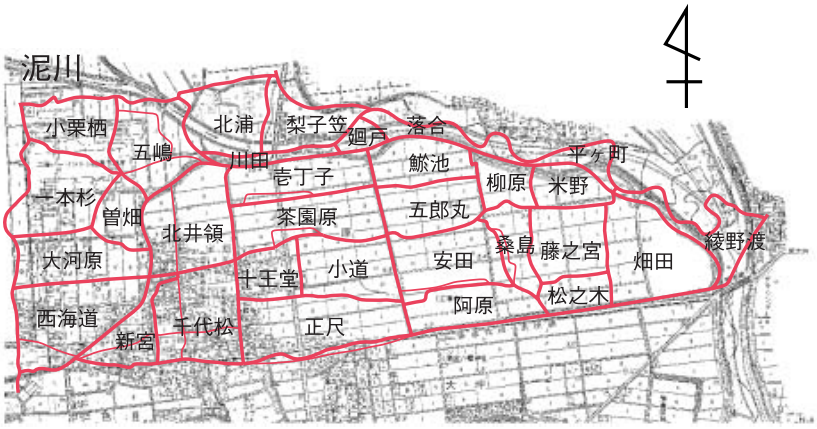
各遺跡の山茶碗の消長では、第５型式に個体数のピークとなり、第７型式以降山茶碗がほとんど確認できなくなる遺跡が多い。競合関係においては、仲田遺跡を除き8，9型式に荒肌手山茶碗から均質手山茶碗に主体を移行している。また、灰釉陶器である第1，2型式が確認できる日吉遺跡、室原東遺跡では、第３型式より山茶碗が確認でき、第４型式、第５型式と山茶碗の個体数が増加する。一方、仲田遺跡、下笠遺跡、鷲巣東遺跡では、第５型式より山茶碗が確認できる。仲田遺跡では、個体数のピークが第６型式であり、第７、８型式の瀬戸産の山茶碗が確認できた。

なお、西濃地域における山茶碗の競合関係は、第３型式から第７型式までは荒肌手山茶碗が主体であり、均質手山茶碗はほとんど分布しない。第８型式以降は荒肌手山茶碗が姿を消し、均質手山茶碗

が少量分布することが明らかにされており、養老町の中世遺跡もほぼ同様の傾向を示す*。

（3） 採集遺物からみる中世における室原東遺跡の動向

室原東遺跡では、古墳時代から中世の採集遺物が多く、中世の特殊な遺物が採集されている。中でも陶硯、転用硯が確認できたことは、文字を使用する有力層が存在していたことを示しており、焼台が癒着した瓷器系陶器の甕、須恵器系陶器は、当遺跡が生産地と消費地を結ぶ物流の重要な拠点であったことを示している。具体的には集散地遺跡としての性格を考えたい遺跡である**。また、当遺跡の位置する地区の旧小字図には、五郎丸という小字があり、室原の人の言い伝えでは昔、城があったという（第171図）***。しかし現在では土地改良工事がおこなわれているため、その面影はみられない。ここではそれらの資料をもとに、採集遺物の分布と種類別組成からみた室原東遺跡内における古代末から中世の様相を明らかにする。



第171図　室原地区の旧小字図

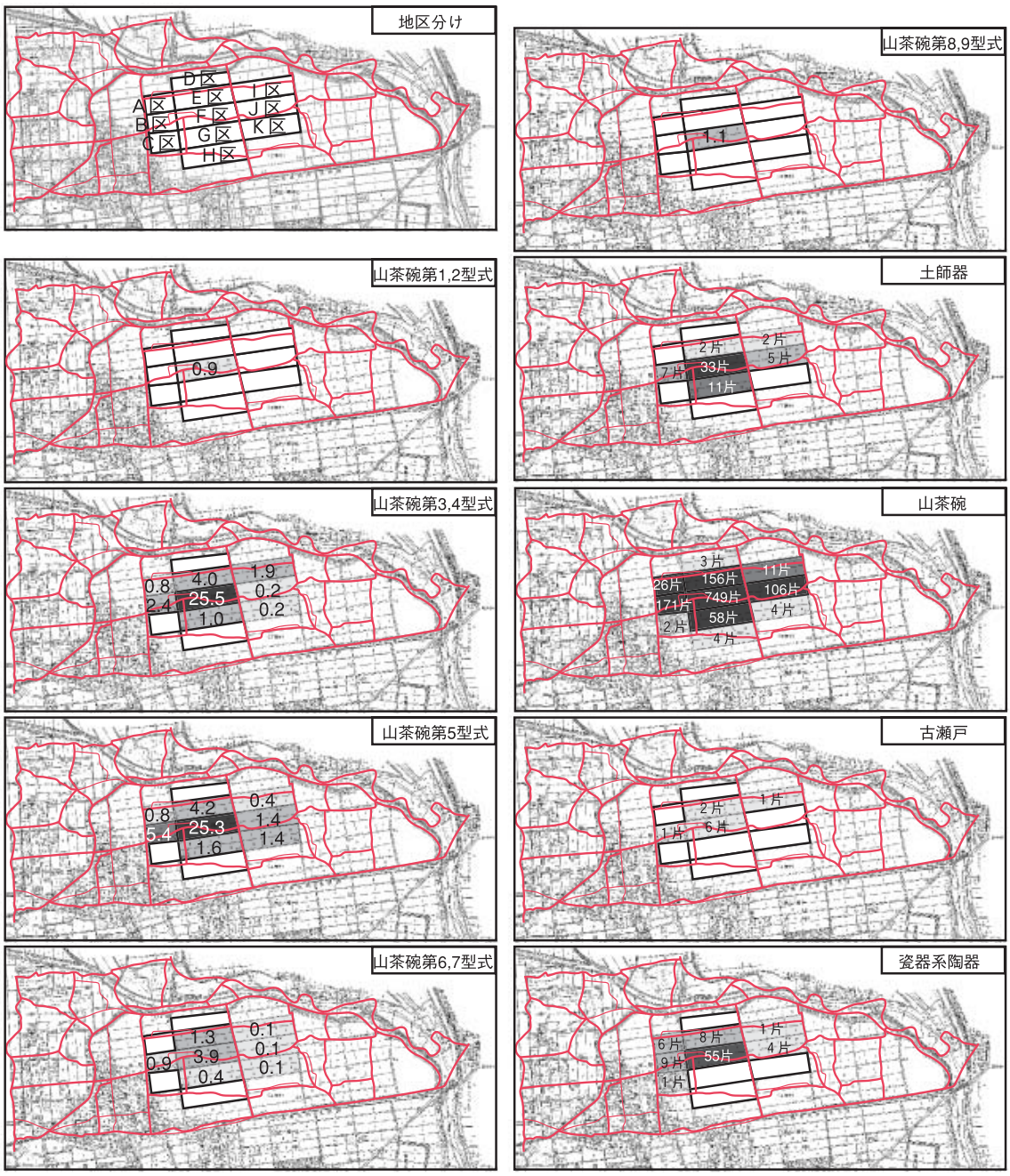
1．分析方法

土地改良以後の現在の地割りを基にＡ～Ｋ区の地区分類をおこなった（第172図）。その地区ごとに種類別組成及び灰釉陶器、山茶碗の時期別遺物分布を明らかにしていく。計量は、前項と同じ方法を用いた。なお、遺跡内で採集地点が明確でない過去に寄贈された採集遺物については計量をおこなっていない。

2．室原東遺跡の各地区の種類別・山茶碗時期別遺物分布と種類別組成（第173図、第17・18表）

時期別にみる古代末から中世の遺物の消長は、第1，2型式ではＦ区にのみ確認できる。第3，4型式より山茶碗の分布が広範囲となり、Ｆ区、Ｉ区では第４型式に個体数のピークとなる。第５型式には、Ｆ区、Ｉ区を除く各地区で個体数のピークとなる。なお、室原東遺跡全体の山茶碗の個体数のピークもこの型式期にあたる。第6，7型式には、山茶碗の分布範囲は、第５型式とほぼ変わらないものの各地区ともに個体数が激減する。第8，9型式では、分布範囲も狭くなりＦ区のみに分布する。その中でＦ区は第1，2型式から第8，9型式まで継続的に遺物が確認できる。種類別組成では、どの区画においても

*　小野木学2003「岐阜県における山茶碗分布と流通」『美濃の考古学』第６号
**　伊藤裕偉2001「中世における集散地遺跡の分析」『考古学ジャーナル478』
***　安福彦七1974『養老町室原の歴史』室原区



第172図　室原東遺跡の遺物分布（時期別：個体数、種類別：破片数）

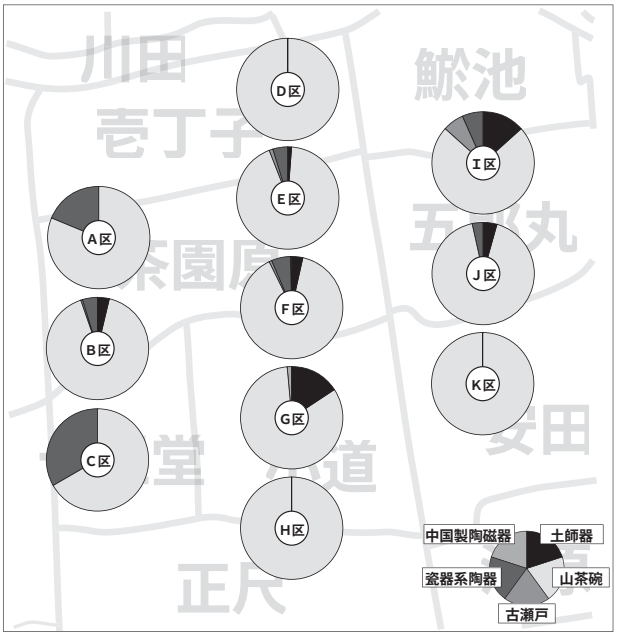
第17表　室原東遺跡の地区別遺物組成

	灰釉陶器・山茶碗個体数							破片数（総数）				
	第1,2型式	第3,4型式	第5型式	第6,7型式	第8,9型式	第10,11型式	総数	土師器皿	山茶碗	古瀬戸	瓷器系陶器	中国製陶磁器
A区		0.4	0.8				1.2		26		6	
B区		2.4	5.4	0.9			8.7	7	171	1	9	
C区									2		1	
D区									3			
E区		4.0	4.2	1.3			9.5	2	156	2	8	
F区	0.9	25.5	25.3	3.9	1.1		56.7	33	749	6	55	5
G区		1.0	1.6	0.4			3.0	11	58			1
H区									4			
I区		1.9	0.4	0.1			2.4	2	11	1	1	
J区		0.2	1.4	0.1			1.7	5	106		4	
K区		0.2	1.4	0.1			1.7		4			

～0.9個体　1～4.9個体　5～9.9個体　10～個体

1～4片　5～9片　10～15片　16～片

山茶碗の比率が高いが、土師器はＧ区で15.7%、Ｊ区で13.3%と他の区画よりも比率が高い。古瀬戸の比率は、Ｉ区が高く、瓷器系陶器の比率は、Ｃ区が最も高く、Ａ区、Ｉ区、Ｆ区の順で高い。中国製陶磁器の比率は、総じて低いがＦ区とＧ区で確認できる。



第173図　室原東遺跡の各地区の種類別組成

第18表　室原東遺跡の各地区の種類別組成比

	土師器	山茶碗	古瀬戸	瓷器系陶器	中国製陶磁器
A区		81.3%		18.8%	
B区	3.7%	91.0%	0.5%	4.8%	
C区		66.7%		33.3%	
D区		100.0%			
E区	1.2%	92.9%	1.2%	4.8%	
F区	3.9%	88.3%	0.7%	6.5%	0.6%
G区	15.7%	82.9%			1.4%
H区		100.0%			
I区	13.3%	73.3%	6.7%	6.7%	
J区	4.3%	92.2%		3.5%	
K区		100.0%			

3．中世における室原東遺跡の動向

室原東遺跡の古代末の第1，2型式では、遺物分布範囲は狭く、Ｆ区にのみ分布する。第3，4型式では、個体数が増加し、その分布が広範囲となり、第５型式ではＩ区で遺物数が減少するが多くの地区で個体数のピークとなる。第6，7型式においては、第５型式とほぼ変わらない遺物分布を示すものの個体数が激減しており、第8，9型式にはほとんど確認できない。しかし、文書及び古瀬戸の分布から14世紀、15世紀と遺跡は存続していただろう*。

次に各地区の種類別組成の傾向では、遺跡全体の土師器の比率は低いが、地区別ではＧ区、Ｊ区で土師器の比率が高い。食膳具において同一の地域・時期であれば、格上の遺跡あるいは地区の方が土器食膳具の比率が高いことが指摘されている**。本考察の土師器のそのほとんどは土師器皿である。Ｇ区、Ｊ区においては、他の地区とは性格が異なる可能性が高い。

各地区の特殊遺物の分布は、Ｆ区で耳皿、焼台の癒着した瓷器系陶器、須恵器系陶器、瓦、転用硯が、Ｇ区で瓦が分布する。Ｊ区では陶硯が採集できた。Ｆ区では、特殊遺物が多く採集されているが、土師器の比率は低く、隣り合う土師器の比率が高いＧ区とあわせて今後注意しておきたい。

*　児玉　充1989「養老郡」『岐阜県の地名』日本歴史地名大系第21巻

**　宇野隆夫1997「中世食文化の諸相　中世食器様式の意味するもの－計量分析による使用法の復元－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

（4） 養老町内における採集遺物からみる各中世遺跡の動向

中世の地域社会では、村や町、都市、寺院などが農業にとどまらない様々な利害関係の下で、そのそれぞれの多彩で多様な再生産原理によって維持されるが、地域全体としては相互に経済的、社会的な関係など適切な役割を果たすことにより成立していた*。その中で、養老町という一地域内における中世遺跡の遺物組成の相違性と共通性は、養老町の中世前期社会を考えるうえで大きな手がかりになると考える。

本考察では、養老町の中世遺跡ではそれぞれの遺物組成が一様でないことを明らかにすることができた。具体的には、灰釉陶器、山茶碗の消長から日吉遺跡、室原東遺跡では第1，2型式より、仲田遺跡、下笠遺跡、鷲巣東遺跡では第５型式より山茶碗が確認でき、大きく古代より継続して遺物が確認できる遺跡と中世より遺物が確認できる遺跡に分かれる。

これらの遺跡の種類別組成では、前者に属し、物流の重要な拠点であったと考えられる室原東遺跡では、拠点的に土師器の比率が高い地区が確認できるものの遺跡全体では土師器の比率が低い。また、日吉遺跡でも同様の傾向を示す。一方、後者である仲田遺跡、下笠遺跡では土師器の比率が山茶碗の比率より高く、鷲巣東遺跡では土師器の比率が低い。仲田遺跡、下笠遺跡の所在する笠郷地区は、遺跡の出現が第５型式に集中しており、中世より新たに集落が築かれる地区である。

土師器皿の比率が高いことについては、土師器皿が一回限りの使用であり、非日常的な饗宴・儀礼に用いられることが多かった**。このことから、裕福な居住者がいたために饗宴・儀礼の機会が多かった可能性が考えられている***。また、格上の遺跡あるいは地区の方が土器食膳具の比率が高いことが明らかにされている****。本考察の土師器のほとんどは土師器皿である。

そのため中世より遺物が確認できる仲田遺跡、下笠遺跡で土師器の比率が高いことは、両遺跡が他の遺跡と比べ格上の遺跡であったと考える。また、古代より継続して遺物が確認できる室原東遺跡においては、転用硯、陶硯が確認でき、文字を使用する有力層の姿が考えられ、古代から続く在地勢力が大きな役割を果たした可能性がある。しかし、古代より継続して遺物が確認できる遺跡が必ずしも土師器の比率が高いわけではなく、中世より新たな場所で出現する遺跡に土師器の比率が高い遺跡が確認できている。宇野は西日本において12世紀中頃～13世紀中頃以後14世紀に至るまで、長期型拠点集落を軸として多くの集落が増加していくことに村落中核層の役割を重視し、これを中世的（農民）集落の始まりと考えている*****。仲田遺跡、下笠遺跡においてもこうした側面が強く、また新たな土地の開発に際しては、力を持った層も重要な役割を果たしたと推察する。養老町において古代から中世への社会的変化に土師器皿が深く関わっていることを考えたい。

また、仲田遺跡においては、第７、８型式の瀬戸産の荒肌手山茶碗が確認できており、他の遺跡に比べ均質手山茶碗に主体を移行する型式が遅れる。養老町で大きくは同じ流通経路をもつと考えられ

---

* 鋤柄俊夫2002「考古学からみた中世村落研究の可能性－日置荘と富田荘」『東海の中世集落を考える』第９回東海考古学フォーラム

** 藤原良章1988「中世の食器・考〈かわらけ〉ノート」『列島の文化史』５

*** 尾野喜裕1996「東海地方の尾張地域を中心とした中世の土器・陶磁器組成について」『中近世土器の基礎研究ＸＩ』日本中世土器研究会
川井啓介2000「三河地域の中世集落」『研究紀要』第１号　愛知県埋蔵文化センター

**** 宇野隆夫1997「中世食文化の諸相　中世食器様式の意味するもの－計量分析による使用法の復元－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

***** 宇野隆夫1991『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』
宇野隆夫2001『荘園の考古学』

る各遺跡において第8，9型式に均質手山茶碗へ主体を移行する中、当遺跡においては荒肌手山茶碗を主体的に需要していた可能性が高い。

柏尾廃寺跡では、他の遺跡と比べ古瀬戸、瓷器系陶器、中国製陶磁器の比率が高く、遺跡の性格の違いが表れていると考える。また、養老町において遺物が確認できづらくなる14世紀から15世紀にかけて最盛期を迎える当遺跡についても今後課題として考えていきたい。

このような中世遺跡の遺物組成が多様である反面、山茶碗の動向は各遺跡ともに共通性を持つ。具体的には、養老町内の中世遺跡における山茶碗の消長では、第５型式にピークを向かえ、第６型式より減少し、第７型式以降ほとんど確認できなくなる。山茶碗の競合関係においてはおおよそ第8，9型式に荒肌手山茶碗から均質手山茶碗へ主体を移行する。この動向は地域全体と共通するものであり、地域全体の需要と山茶碗が階層性に関係無く使用されていたことに起因していたと考える。なお、尾張地方においては山茶碗の椀の摩滅痕の分析から第６型式段階を境として、内面の摩滅痕が減少傾向にあり、それまでの使用法と異なる可能性が指摘されている*。養老町では、第６型式以降山茶碗は減少傾向にあり、尾張地方で第６型式段階を境に増加する山茶碗での新たな使用法が当地域において定着しなかった可能性を考えておきたい。

以上より養老町の中世前期社会においては多様な機能、性格をもつ各遺跡が経済的、社会的関係を持ちつつ地域を形成していたと考える。14世紀以降の当地域においては、柏尾廃寺跡を含む中世寺院の動向が大きく関わってくると考えるが今後の課題としておきたい。

（５） おわりに

以上、養老町における中世遺跡の遺物組成及び山茶碗の動向から同一地域においてもその組成は、一様でないことを明らかにしてきた。その中で、土師器の比率に注目し、同一地域内にあっても種類別組成が多様であることを示し、古代から継続して遺物の確認できる遺跡と中世より遺物の確認できる遺跡について土師器の比率の高低を明らかにしてきた。また、山茶碗についても地域全体で大きくは共通性を持つ一方、遺跡間では、若干の差異を見出せており、社会的、政治的な影響が強いと考えた。今後、養老山地に展開する中世寺院を含め、中世の地域社会を考えていきたい。

＊　武部真木2006「山茶碗の用途をめぐって」『研究紀要』第７号　愛知県埋蔵文化財センター

第４章　おわりに

遺跡詳細分布調査の主な目的は遺跡を確認・周知し、その保存・活用を図る基礎資料として遺跡地図を作成することであるが、本調査ではそれにとどまらず得られた結果をできる限り分析し、今後の養老町の歴史を調査・研究する基盤を作成することに努めた。その成果については主に前章までに述べたが、ここでは遺跡詳細分布調査の成果が今後養老町の埋蔵文化財を保護し活用していく上で、さらにどのような役割を果たすのかを示して結びとしたい。

埋蔵文化財の調査には発掘調査をはじめとして様々な方法があるが、その中でも遺跡詳細分布調査の成果は発掘調査で得られる成果ほど詳細な分析を行うことが困難な反面、発掘調査に比べ広い範囲についての動向の大勢を知ることができる。そして、遺跡詳細分布調査は遺跡の破壊を伴わない点がその長所としてあげられるだろう。

発掘調査には、遺跡の計画的な保存や整備を目的としたもの、学術目的のもの、開発に伴う記録保存など様々な原因があるが、いずれもその実施にあたっては大きな労力が掛かり、一旦発掘調査を行い遺跡を破壊すれば、二度と再現することはできない。そのため、多くの発掘調査では対象となる範囲をなるべく小さくして遺跡の破壊を最小限にとどめ、調査対象となった地点においてはより多くの成果を得ることが重視される。そしてこれを実現するためには、事前に対象となった遺跡に関わる情報を広く収集・分析して発掘調査に臨むことが必要になるだろう。

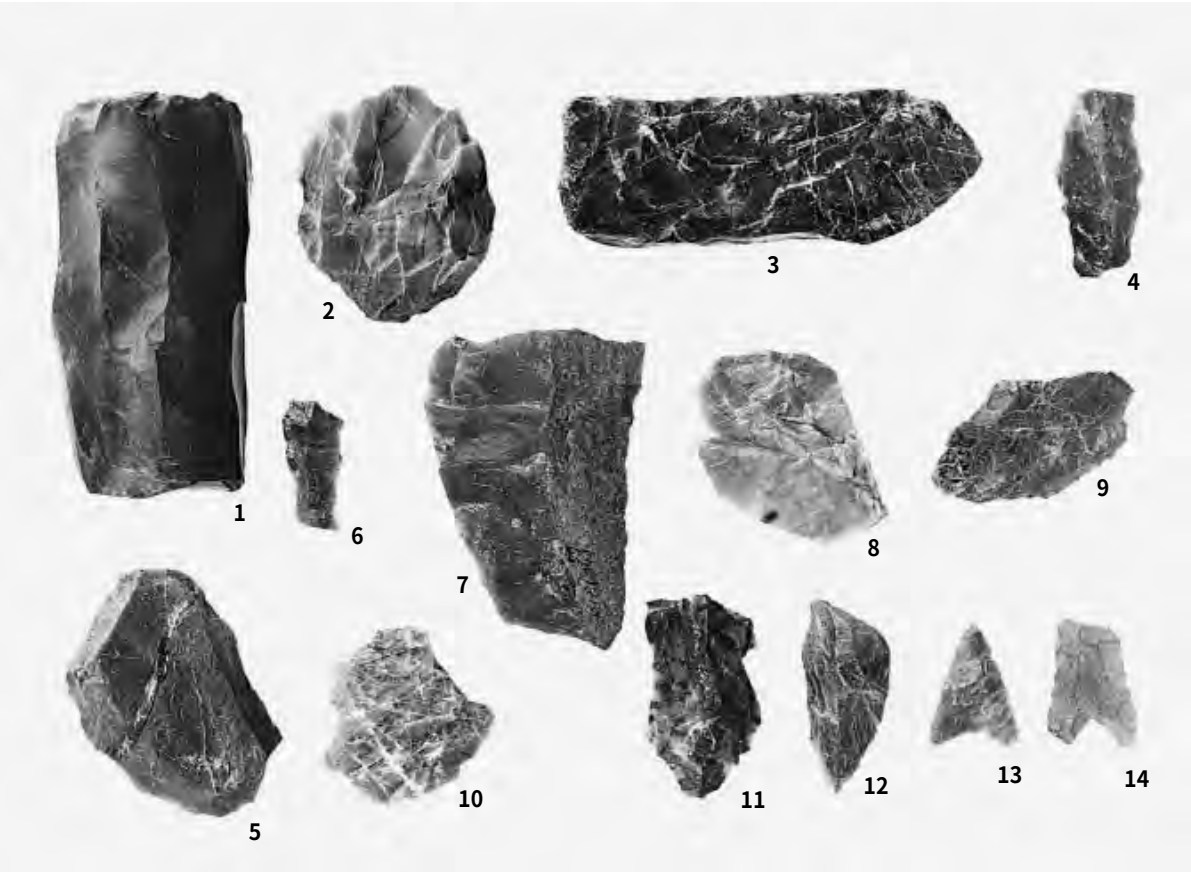
遺跡詳細分布調査では調査対象地域を踏査し、遺物を採集し、その採集地点と遺物がもつ情報から遺跡の位置や範囲、時期を推定することができる。そして調査を精密に実施して得られた資料を詳細に検討すれば、さらに遺跡の性格や周囲の遺跡との関わり、遺跡をとりまく環境についても考察を深めることが可能である。そして、そうした成果はそれぞれの発掘調査においてどのような調査方法が有効であるかを教えてくれるだろう。また、古墳や寺院跡、山城跡など山地や丘陵、段丘面に立地し、地表面の観察から多くの情報が得られる遺跡については今後を見据えた現況の記録の蓄積も有効であると考える。

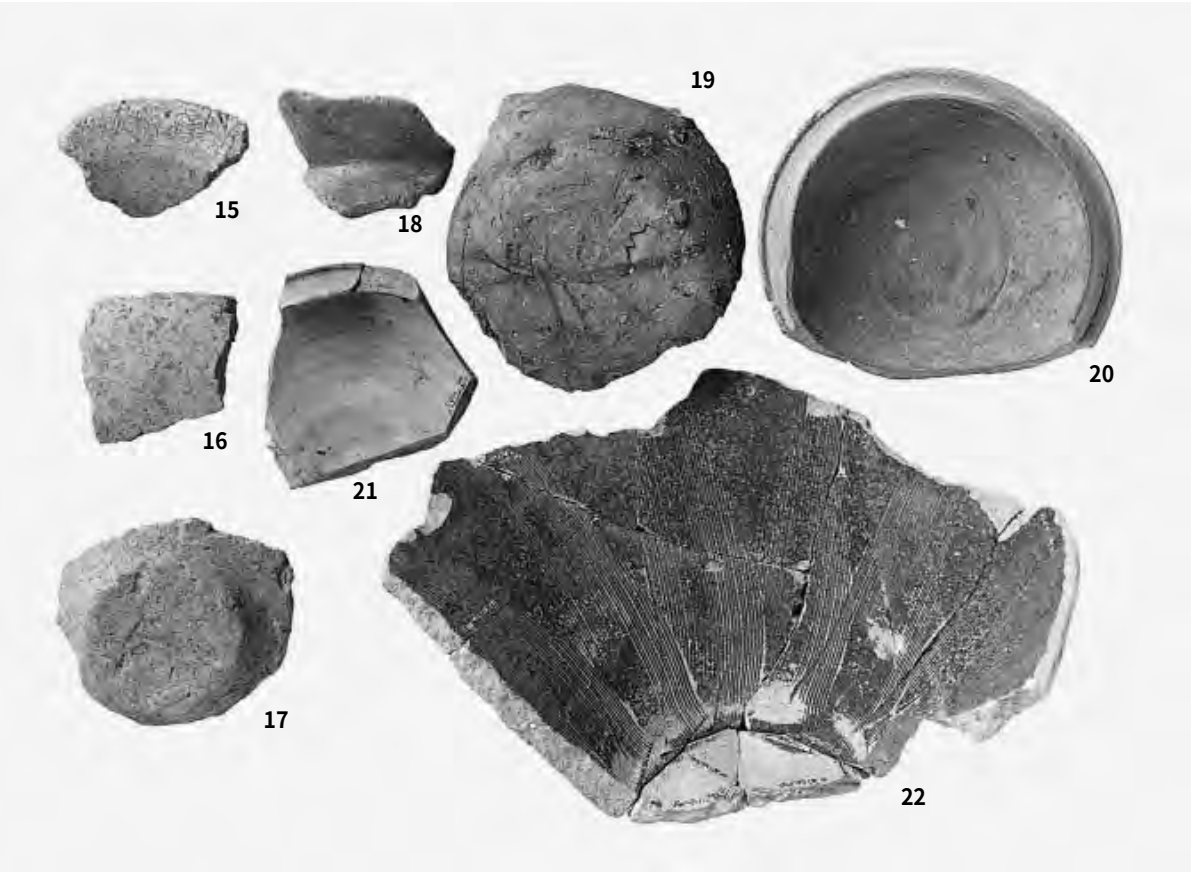
今回はこうした遺跡詳細分布調査に対する姿勢から、遺物の採集だけでなく、遺物採集地点の分析や遺跡の消長表の作成、象鼻山古墳群の地形測量、柏尾廃寺跡の平面図作成や遺物採集地点の座標化、中世遺跡で採集した遺物の組成分析など、遺跡の破壊を伴わない様々な調査・研究を遺跡詳細分布調査の一環として実施した。そしてその結果、養老町内の多くの遺跡について今後の調査・研究の基礎となる資料が充実しつつある。

養老町では、現段階においても新発見の遺跡が多く、調査事例が乏しいため研究の蓄積は未だ十分ではないが、今回の遺跡詳細分布調査で得られた成果から養老町内に所在する多くの遺跡についてその内容を明らかにすることができた。今後はこれらの成果を基に発掘調査を想定した準備を進めておくことが埋蔵文化財の計画的な保護と活用に結びつくだろう。

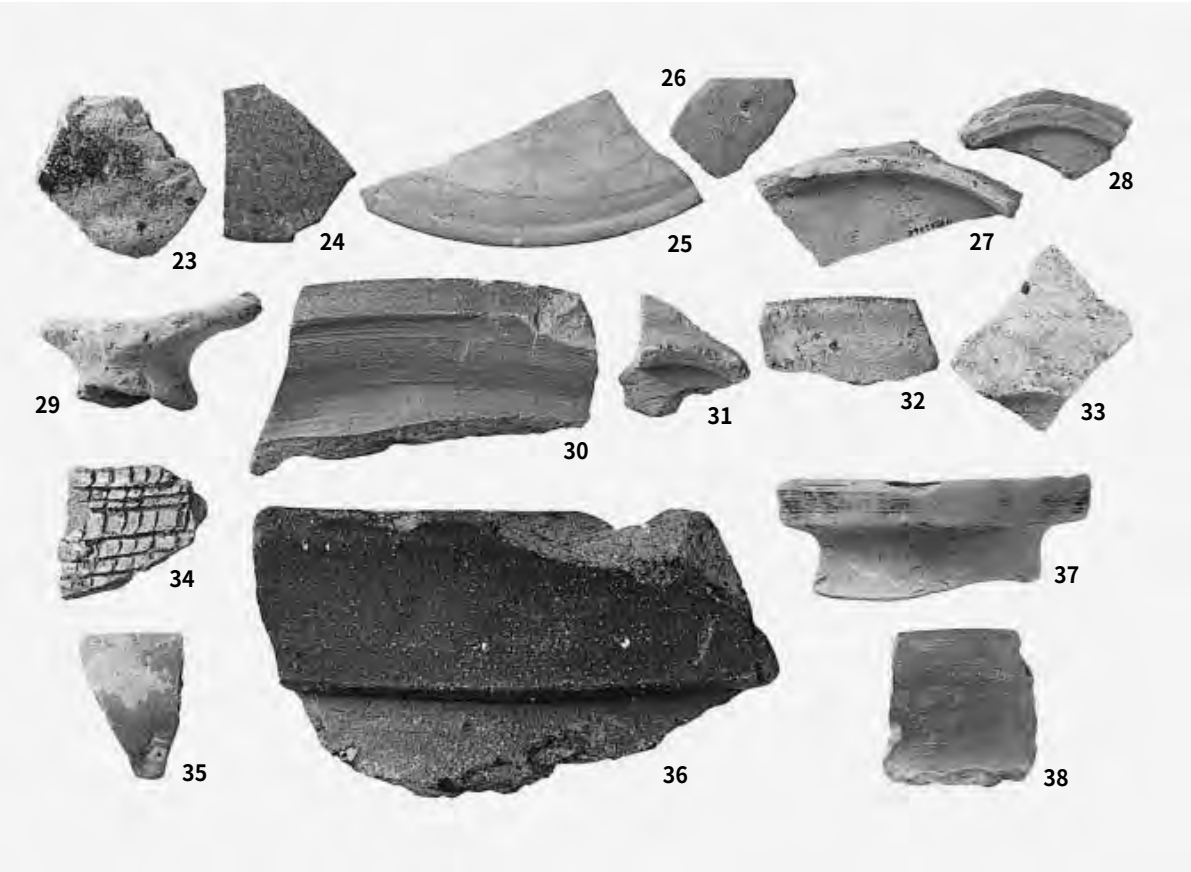
次への課題は多いが、現在において本報告書をまとめることができたのは地元の皆様や日本考古学を専攻する学生諸氏、大学で共に考古学を学んだ友人や先輩、後輩の調査協力と宇野隆夫先生や岐阜県教育委員会のご指導に依るところが大きい。記して感謝申し上げるとともに今後もご助力をお願い

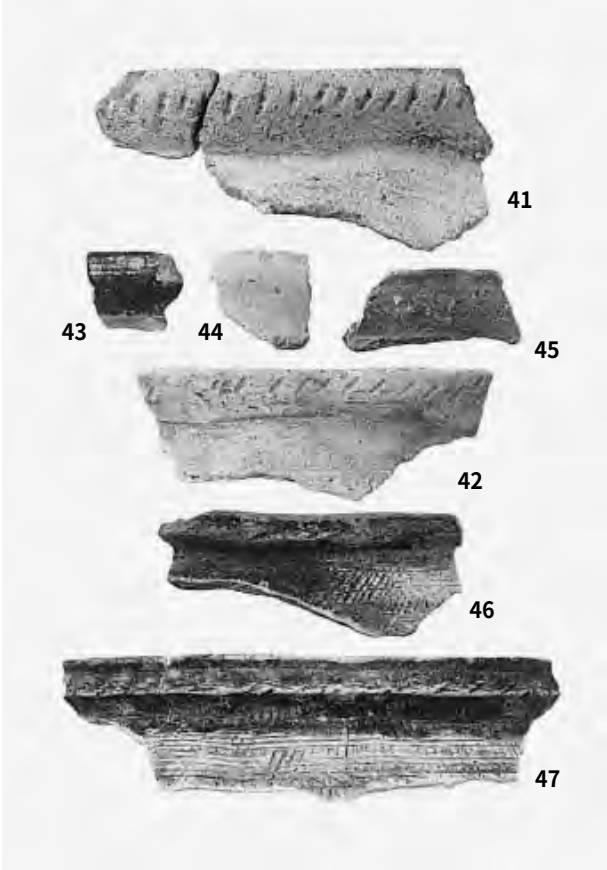
したい。



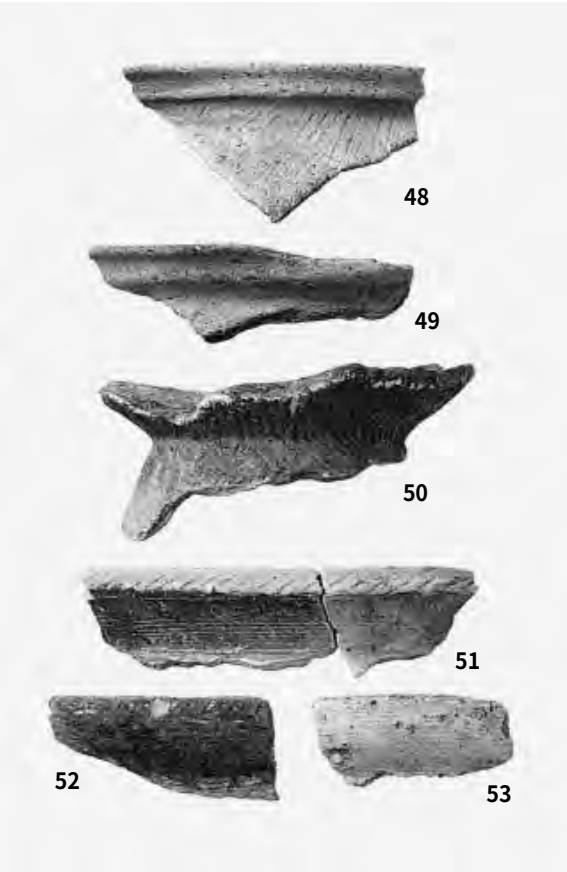


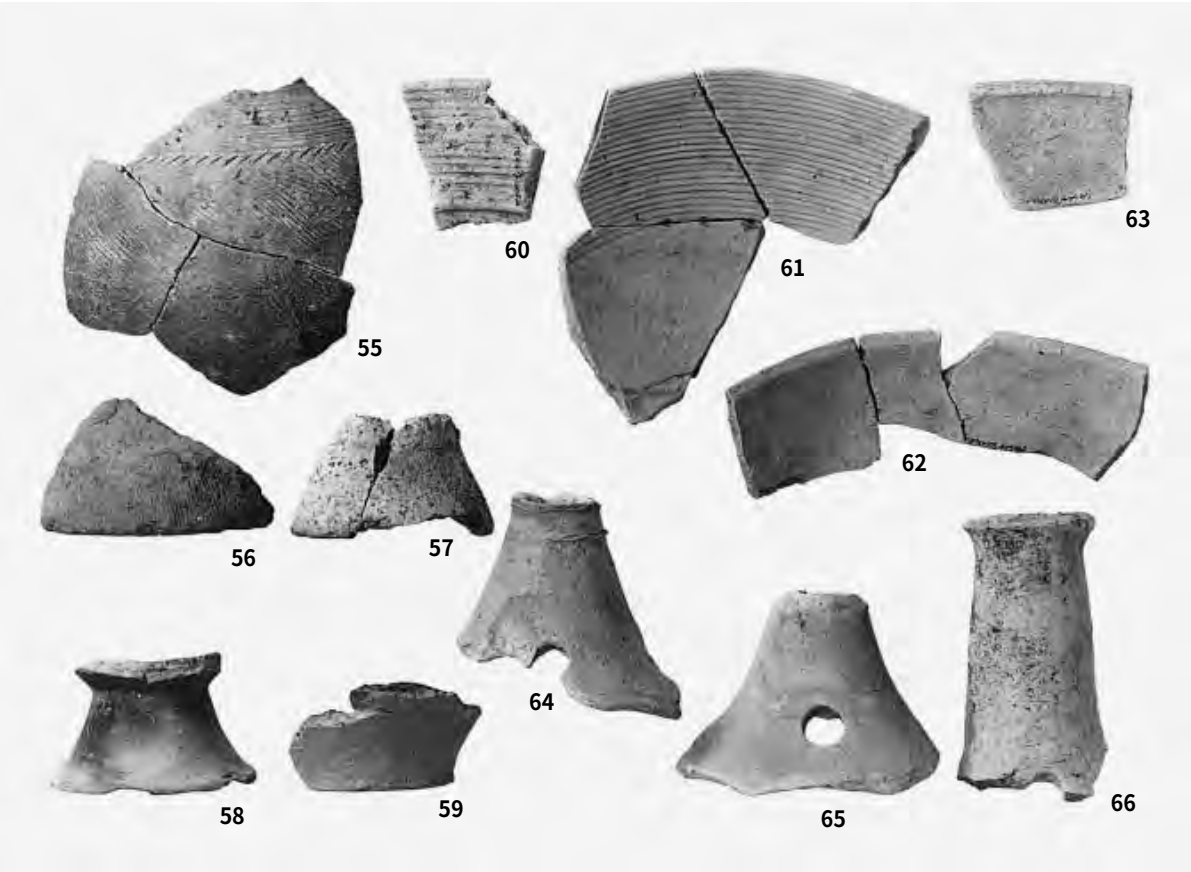
第174図　分布調査採集遺物写真１



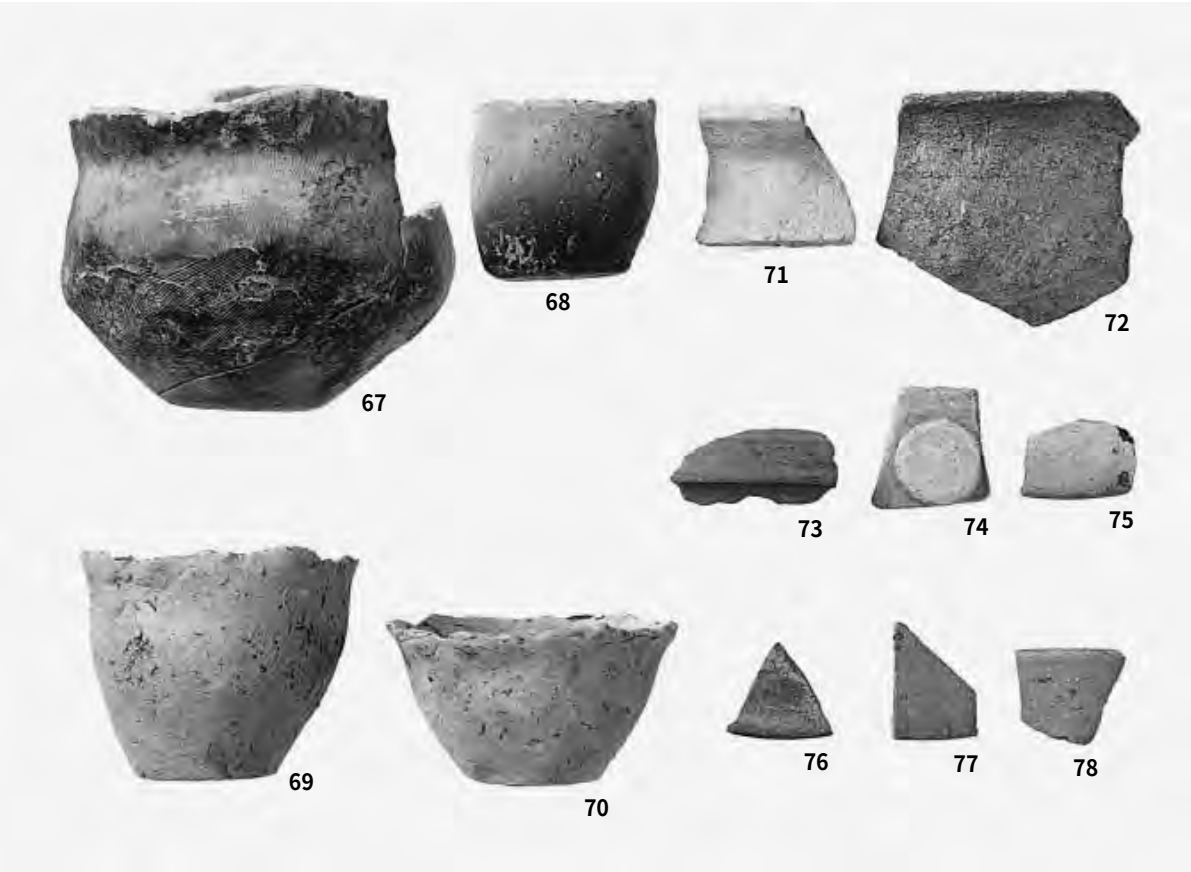


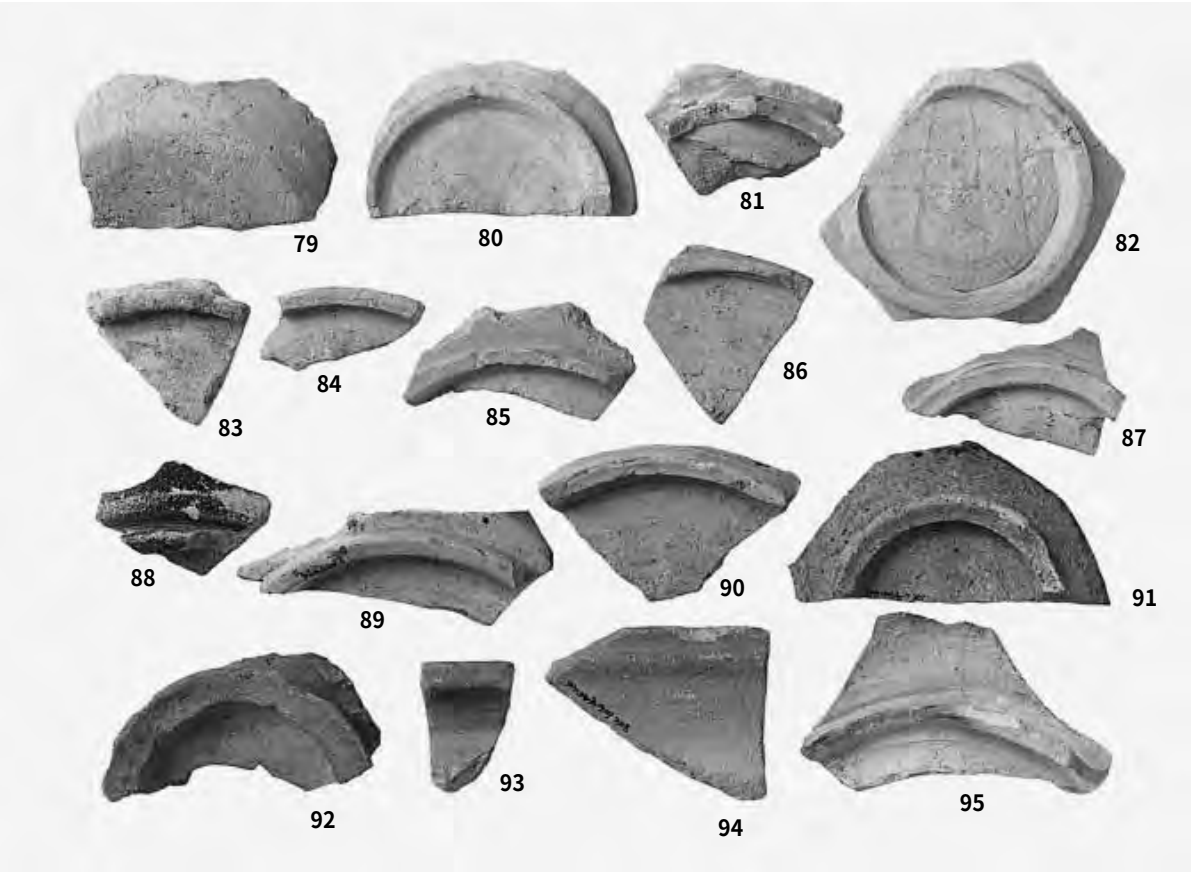
第175図　分布調査採集遺物写真２



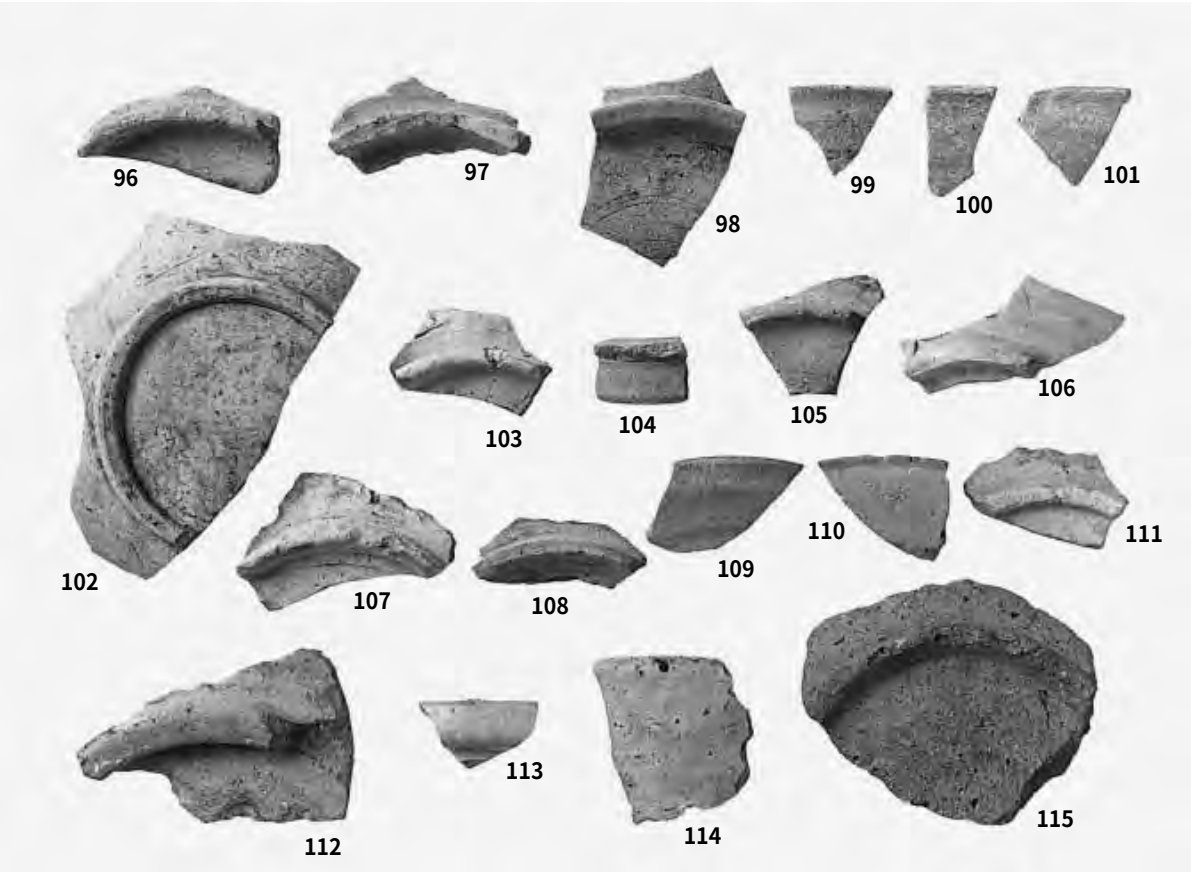


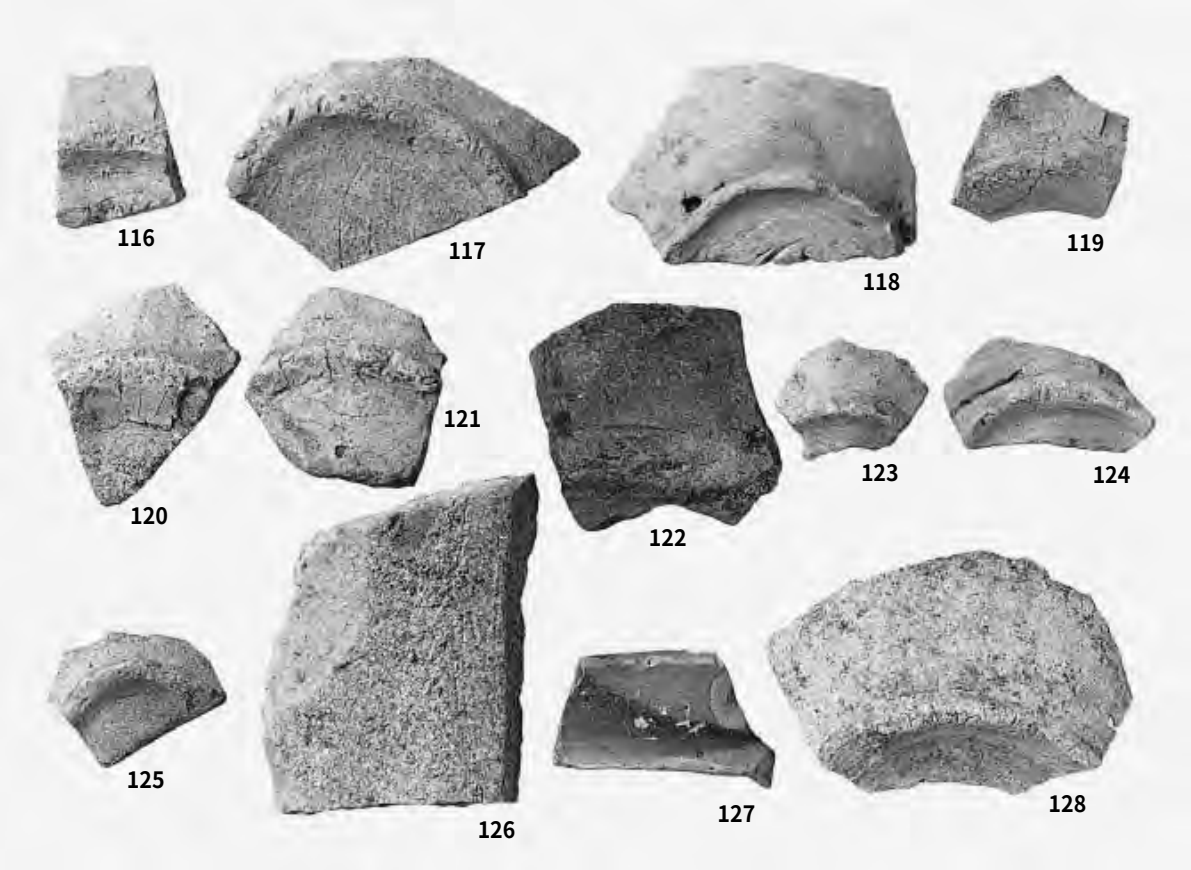
第176図　分布調査採集遺物写真３



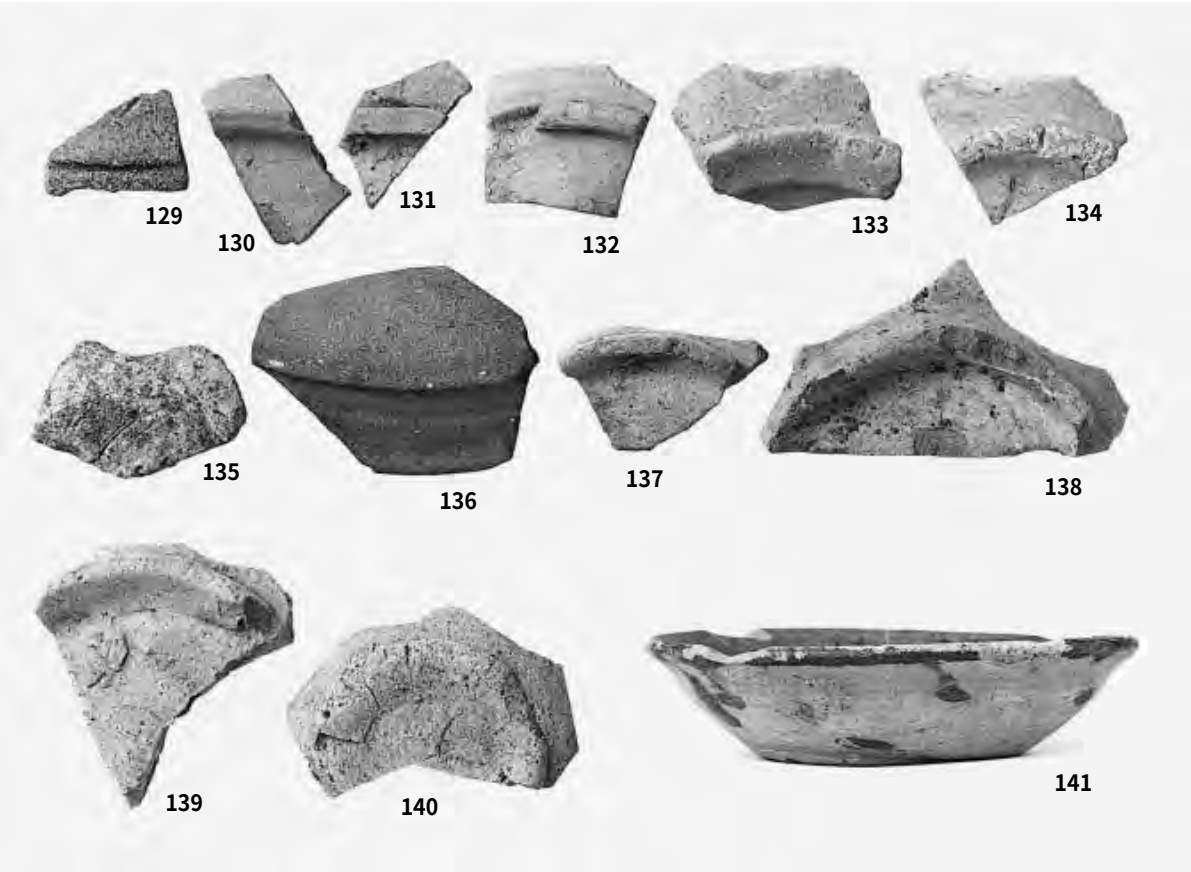


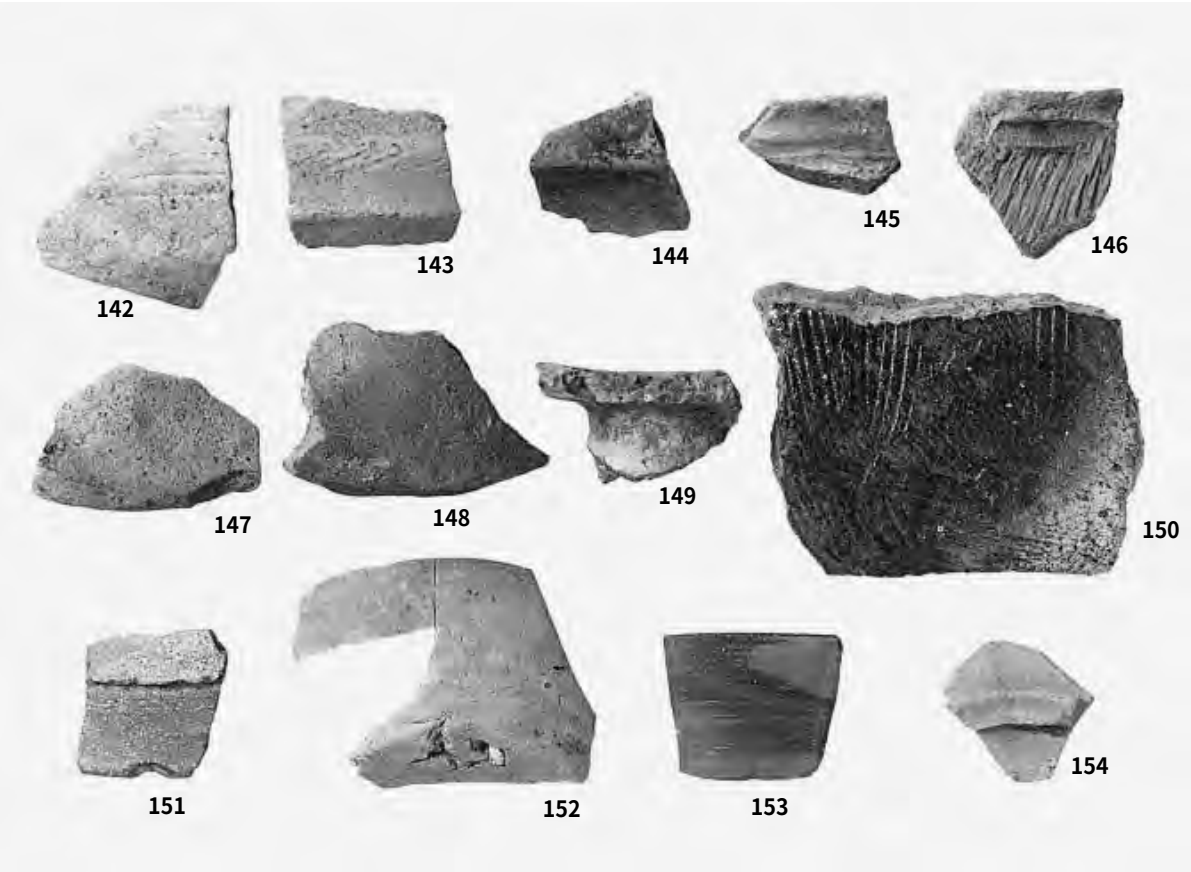
第177図　分布調査採集遺物写真４



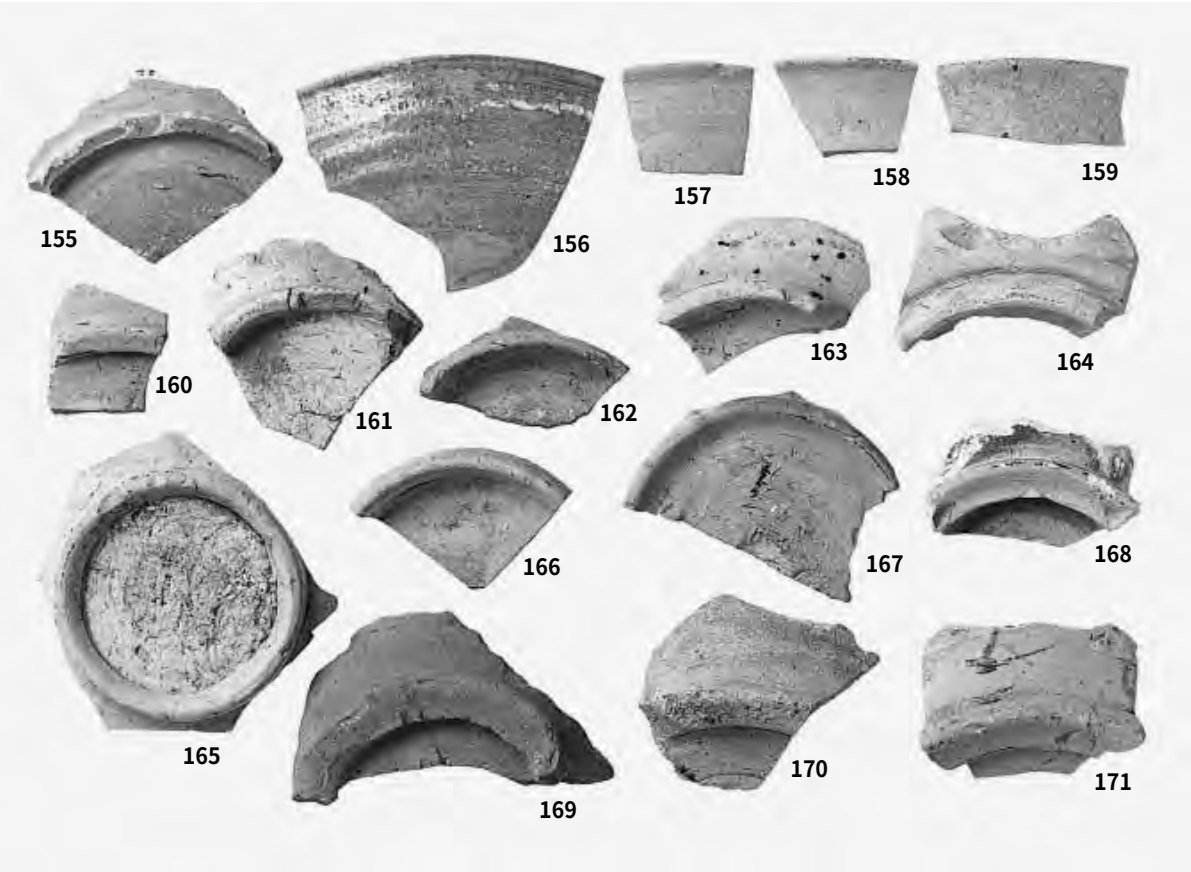


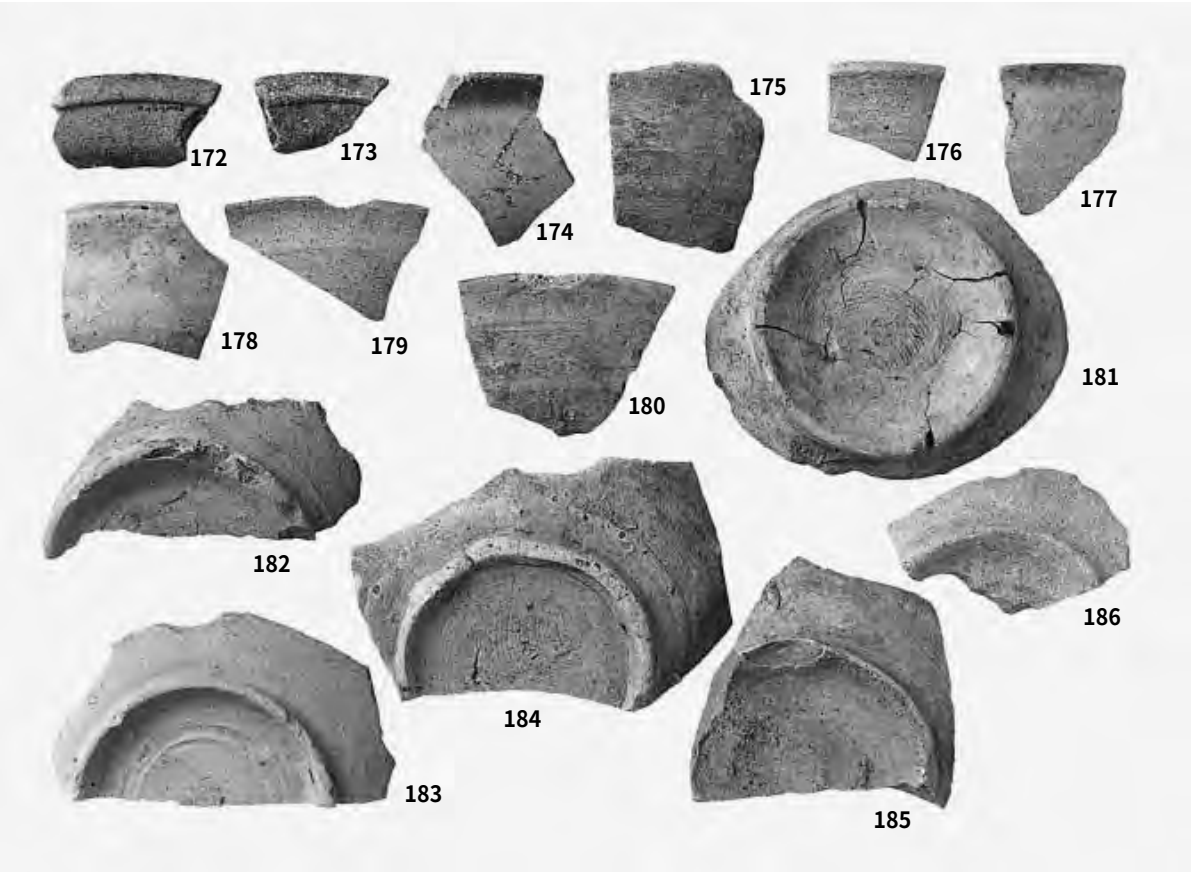
第178図　分布調査採集遺物写真５



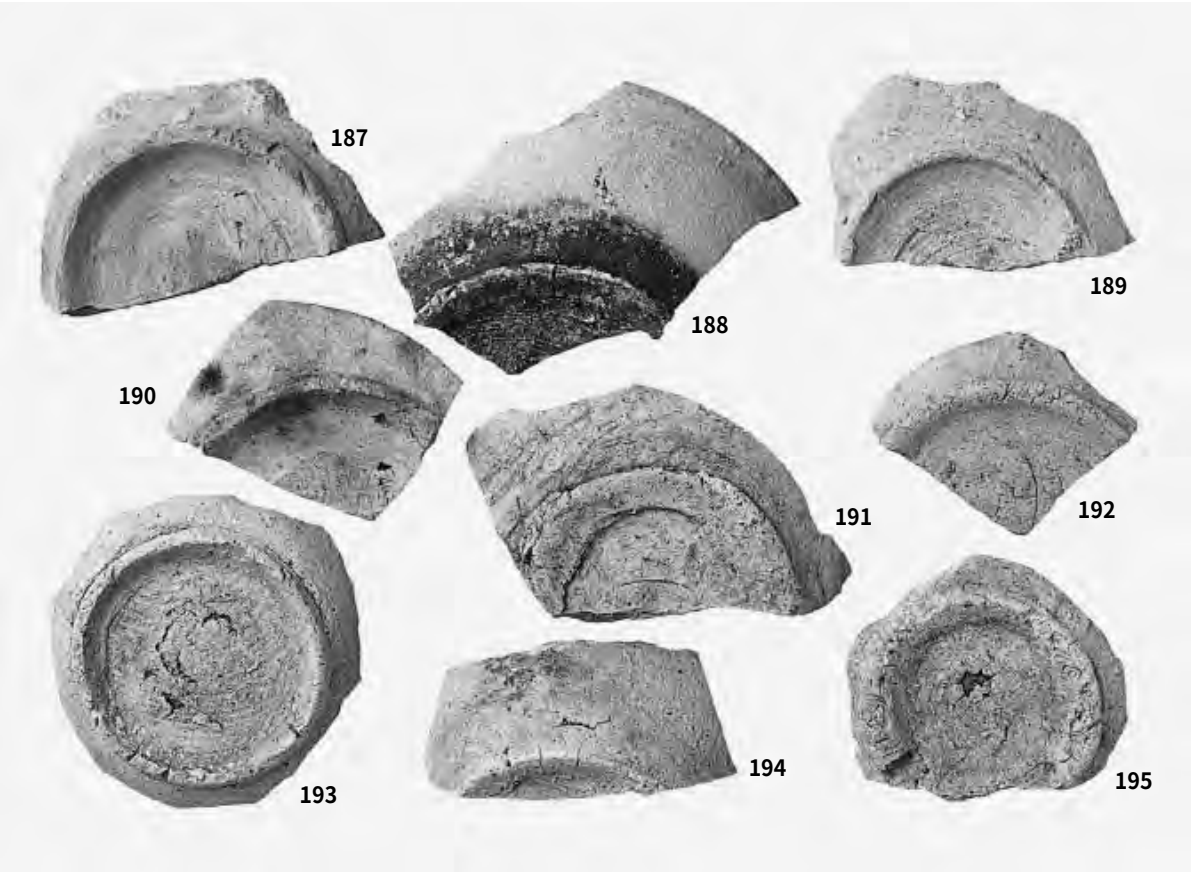


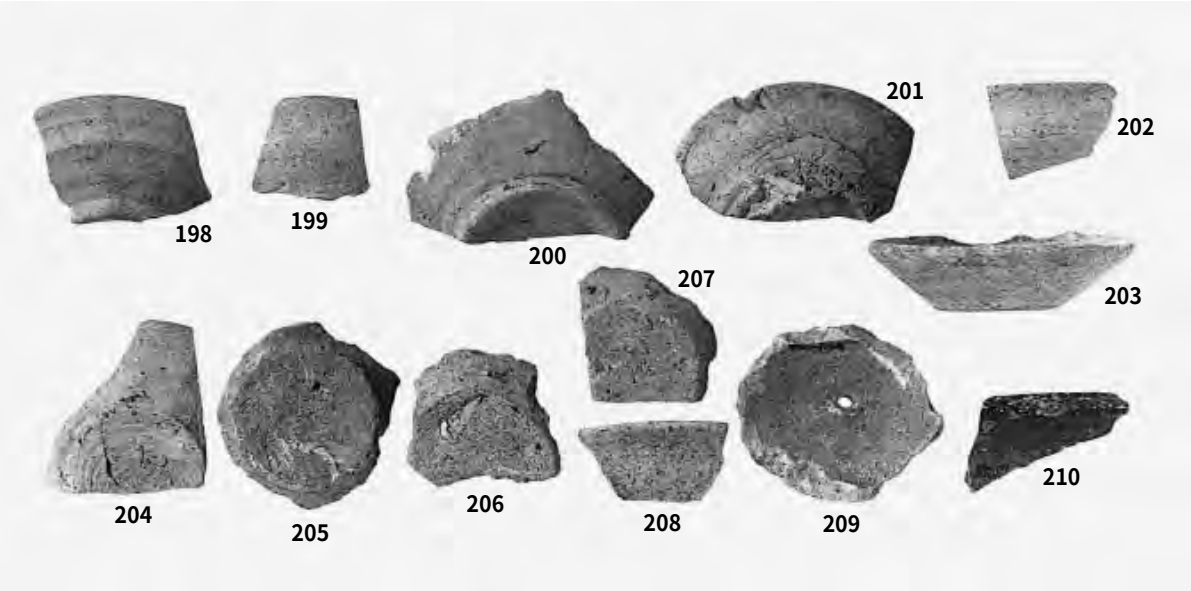
第179図　分布調査採集遺物写真６



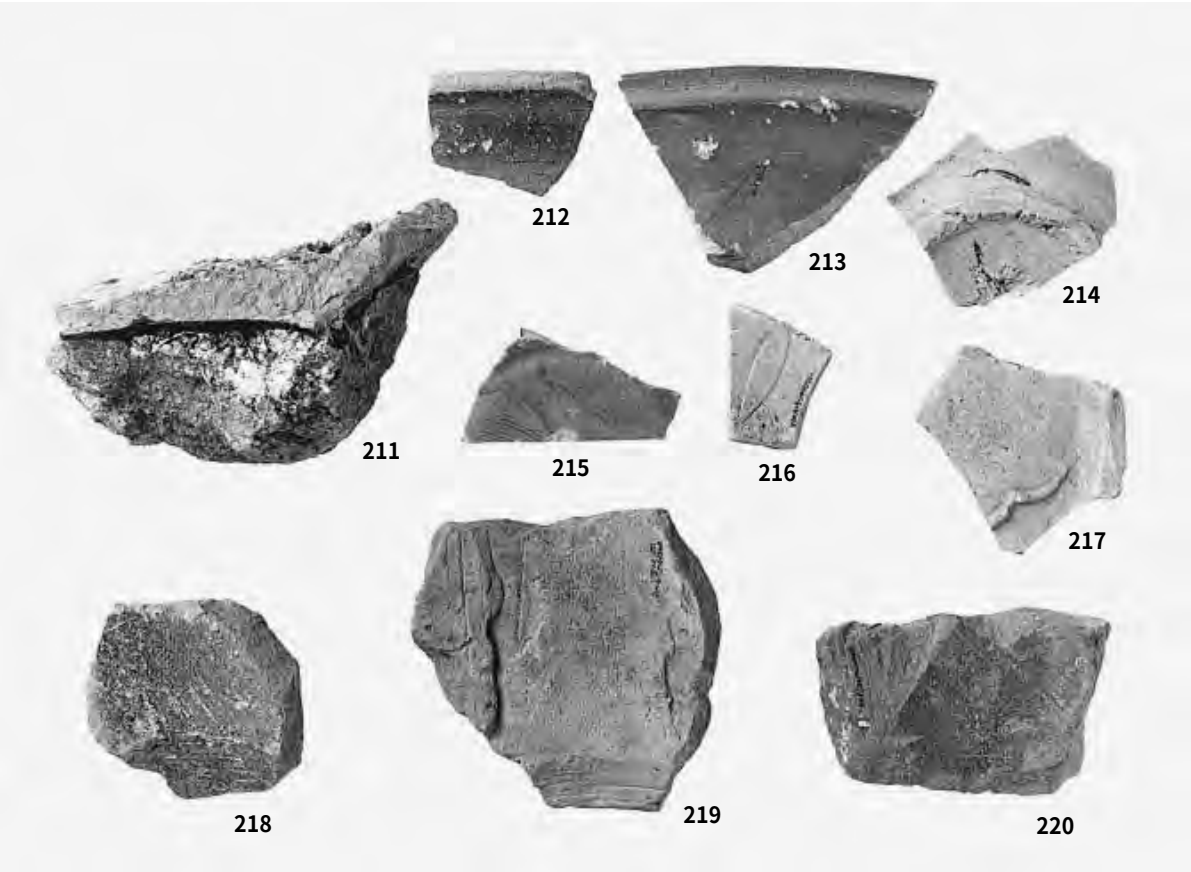


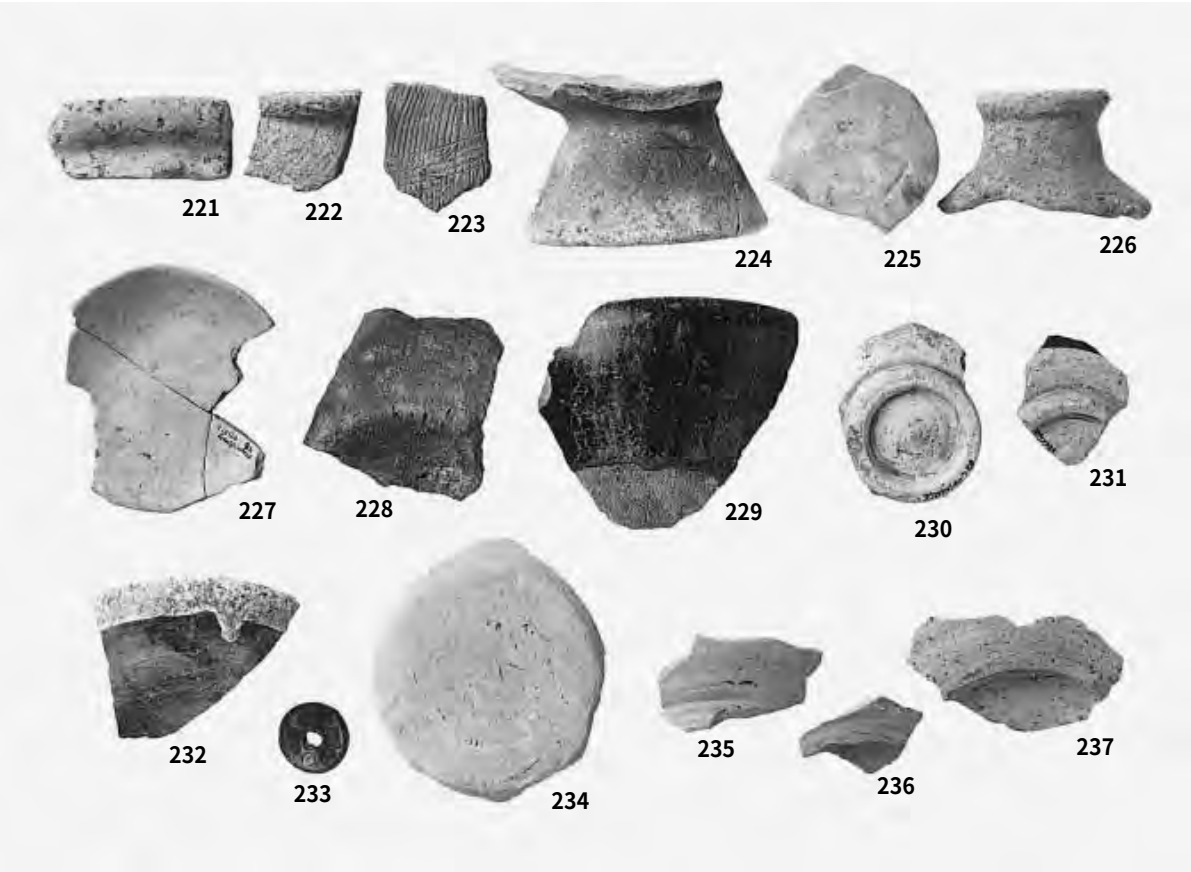
第180図　分布調査採集遺物写真７



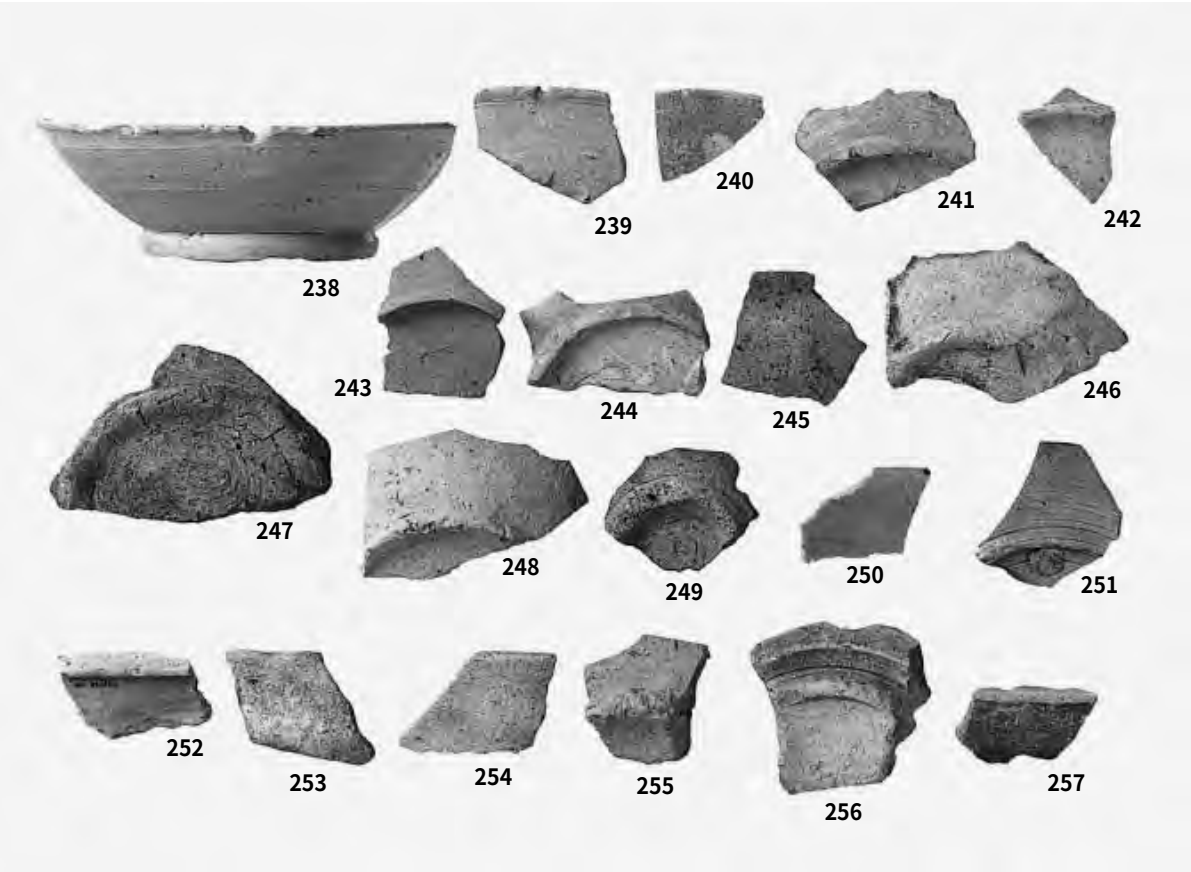


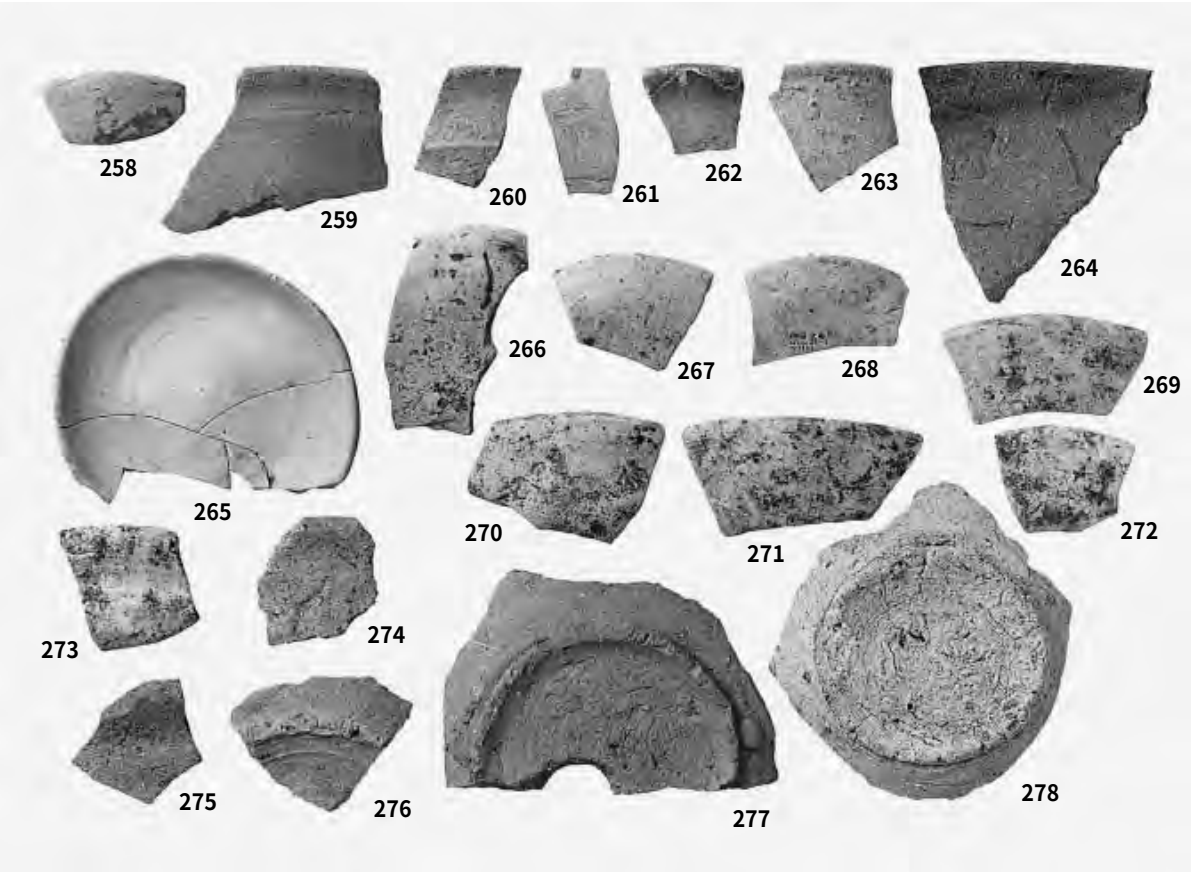
第181図　分布調査採集遺物写真８



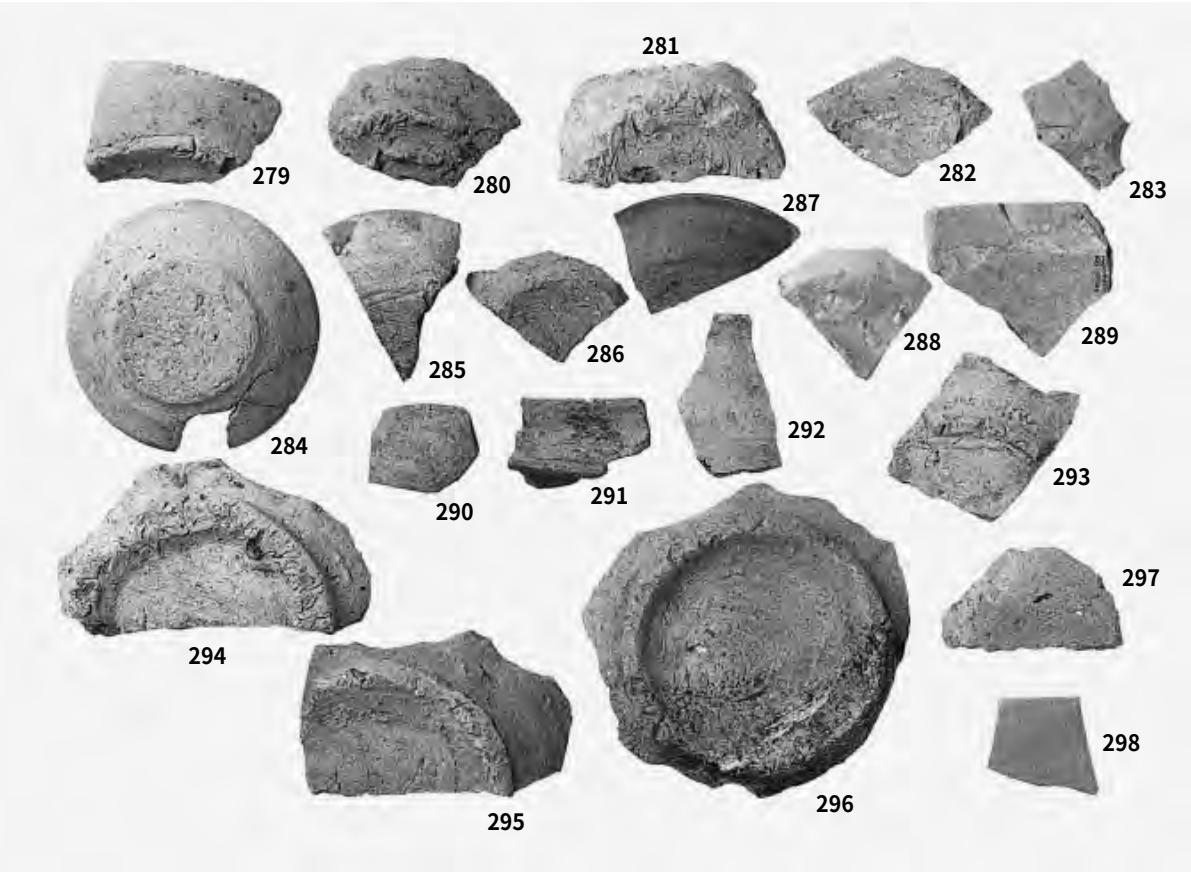


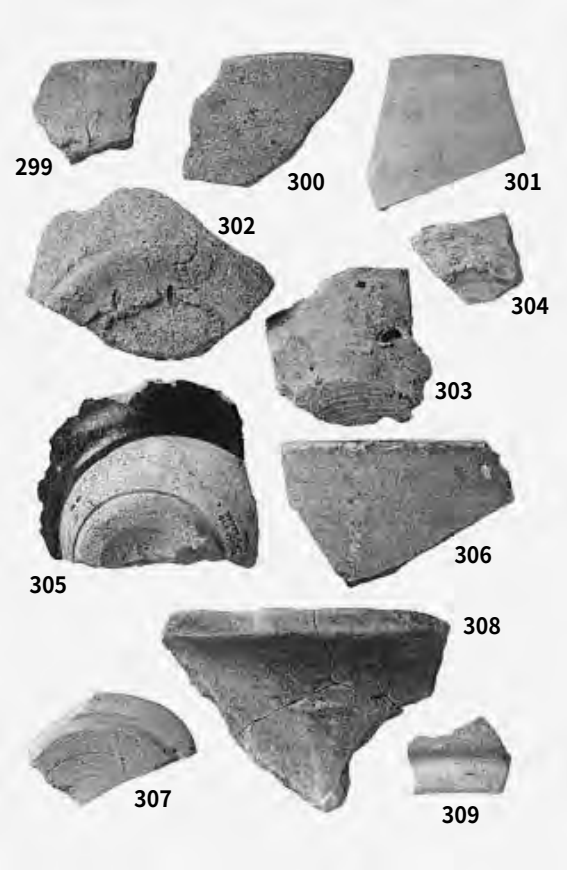
第182図　分布調査採集遺物写真９



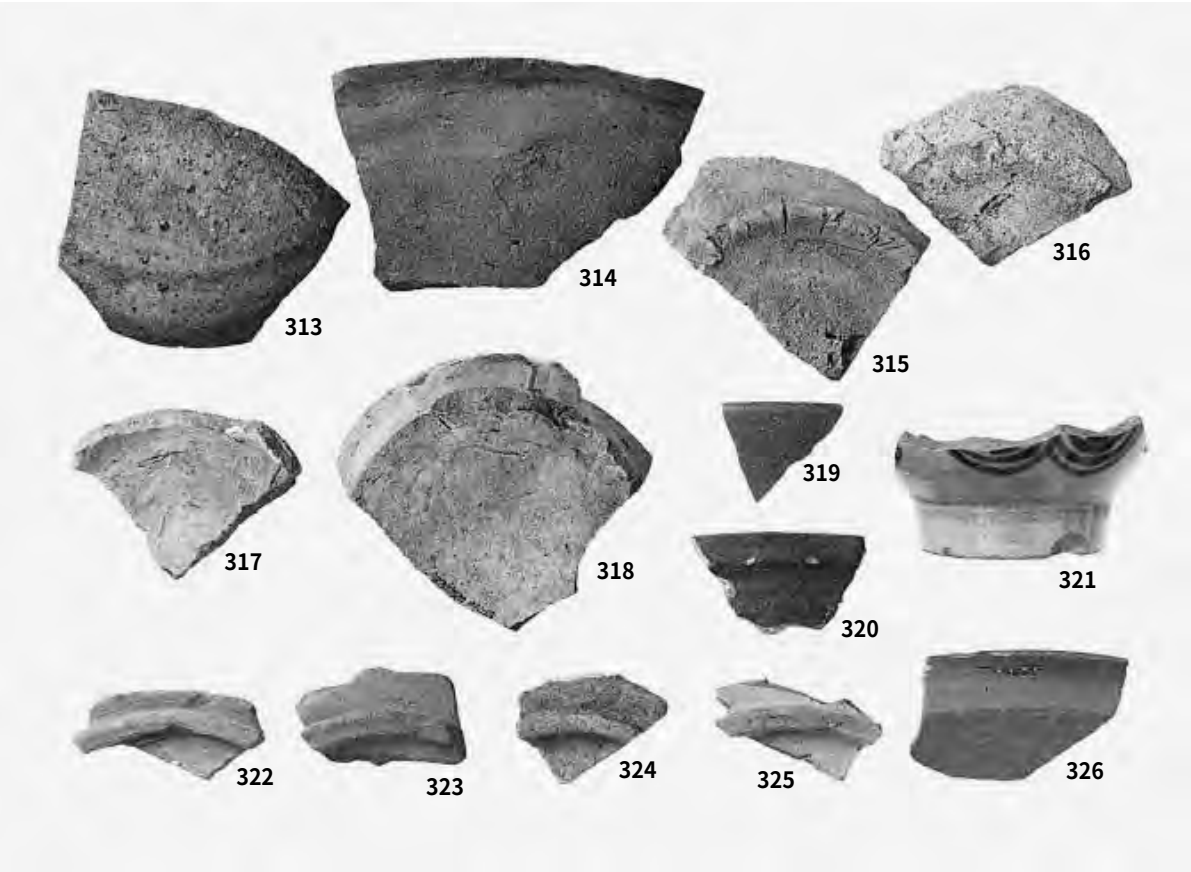


第183図　分布調査採集遺物写真10

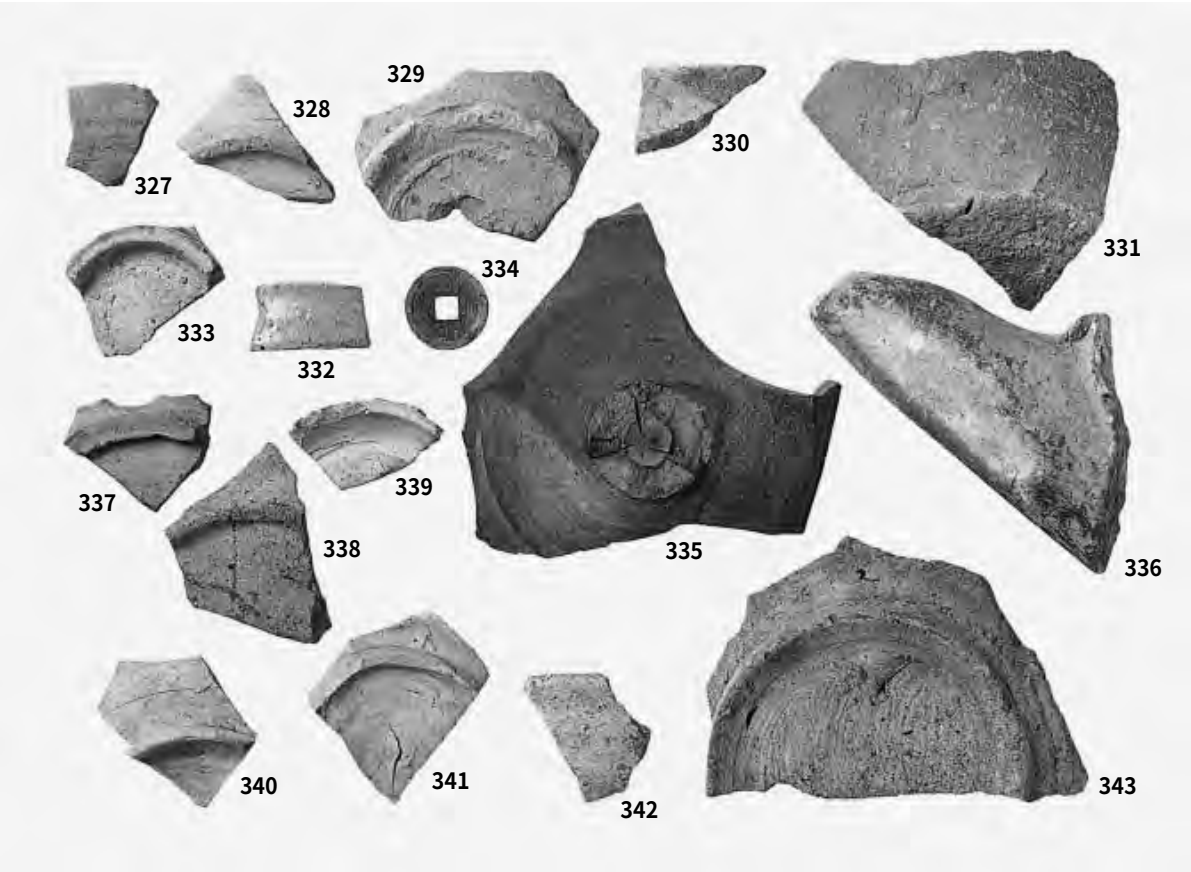


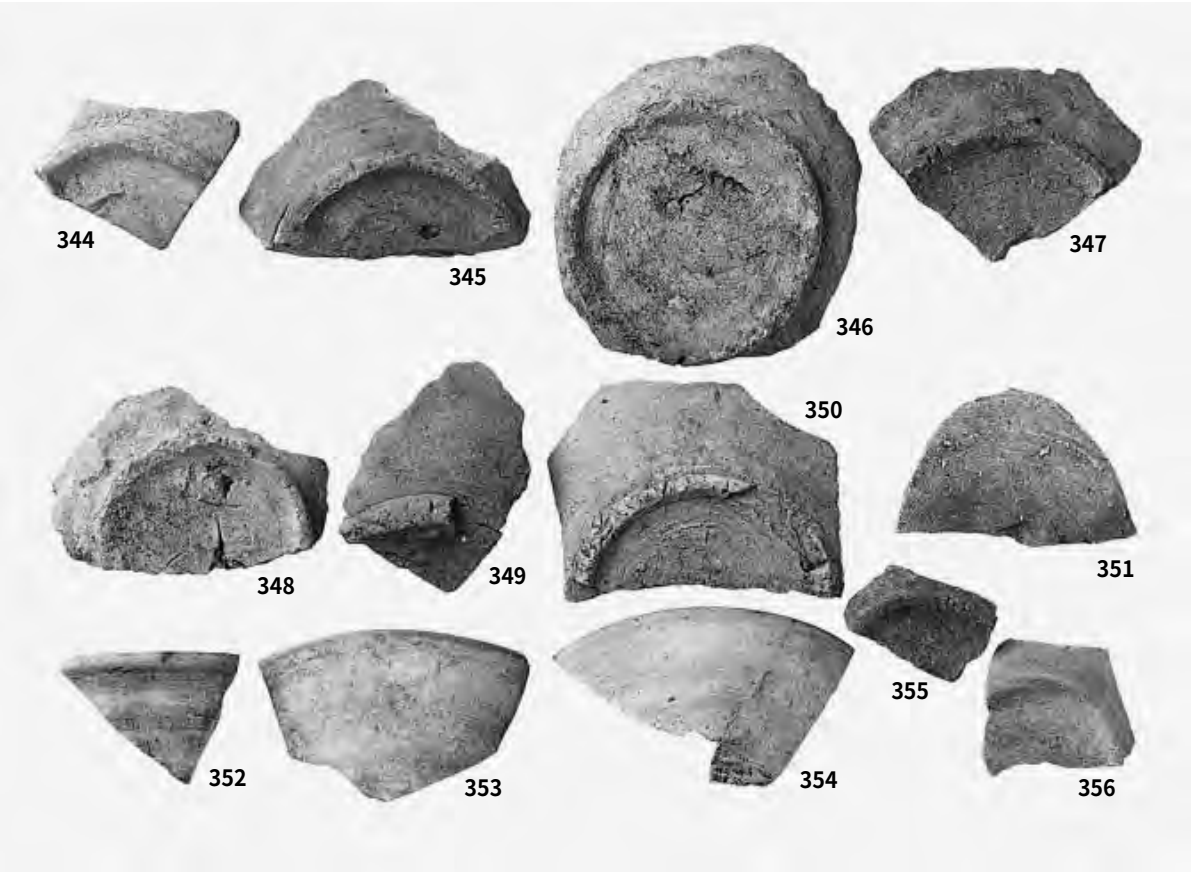


第184図　分布調査採集遺物写真11

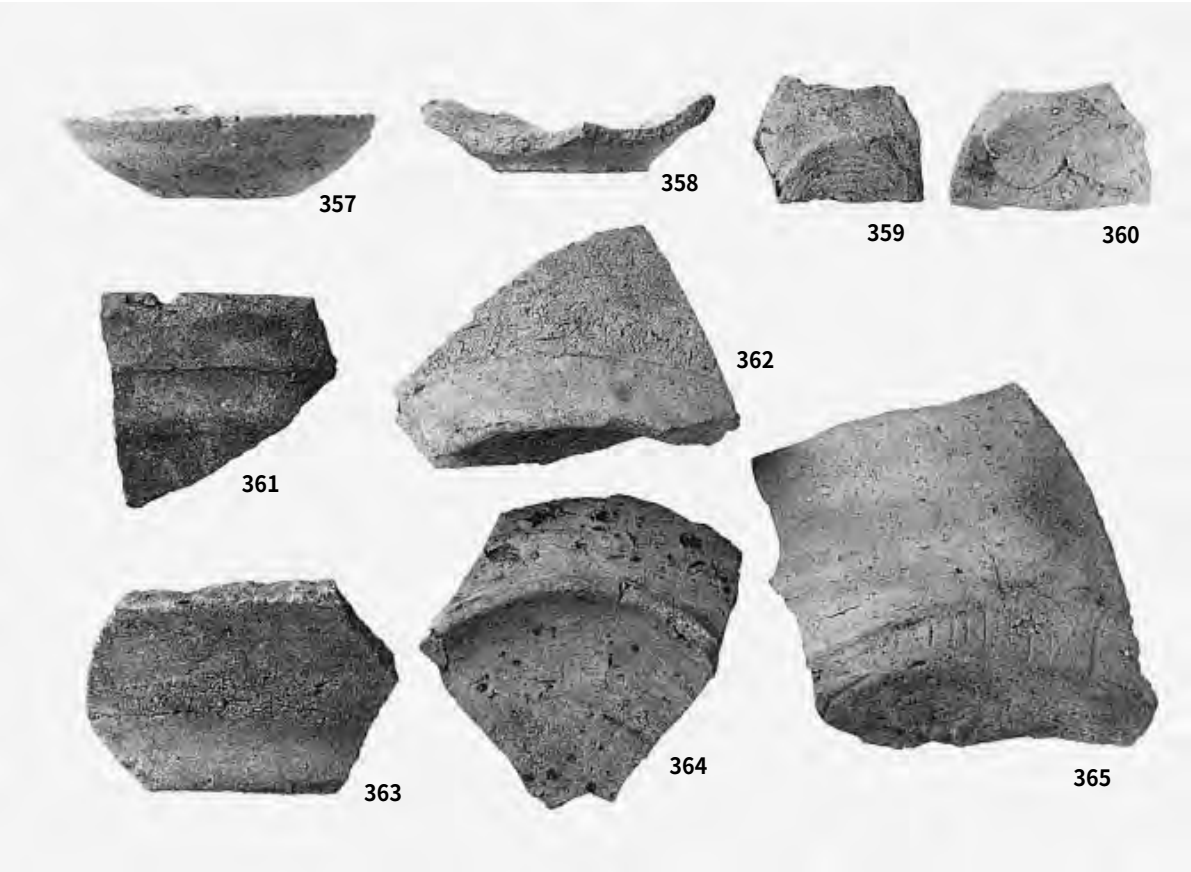


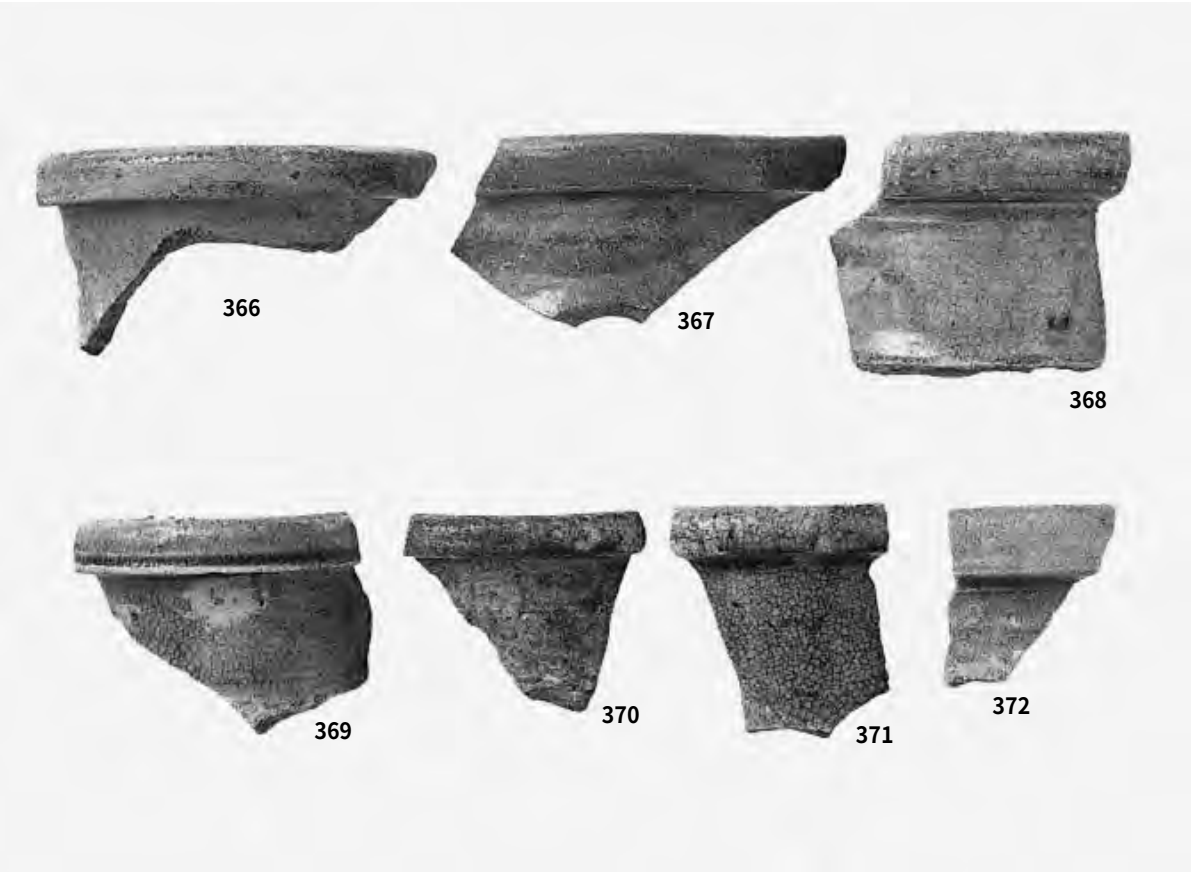
第185図　分布調査採集遺物写真12



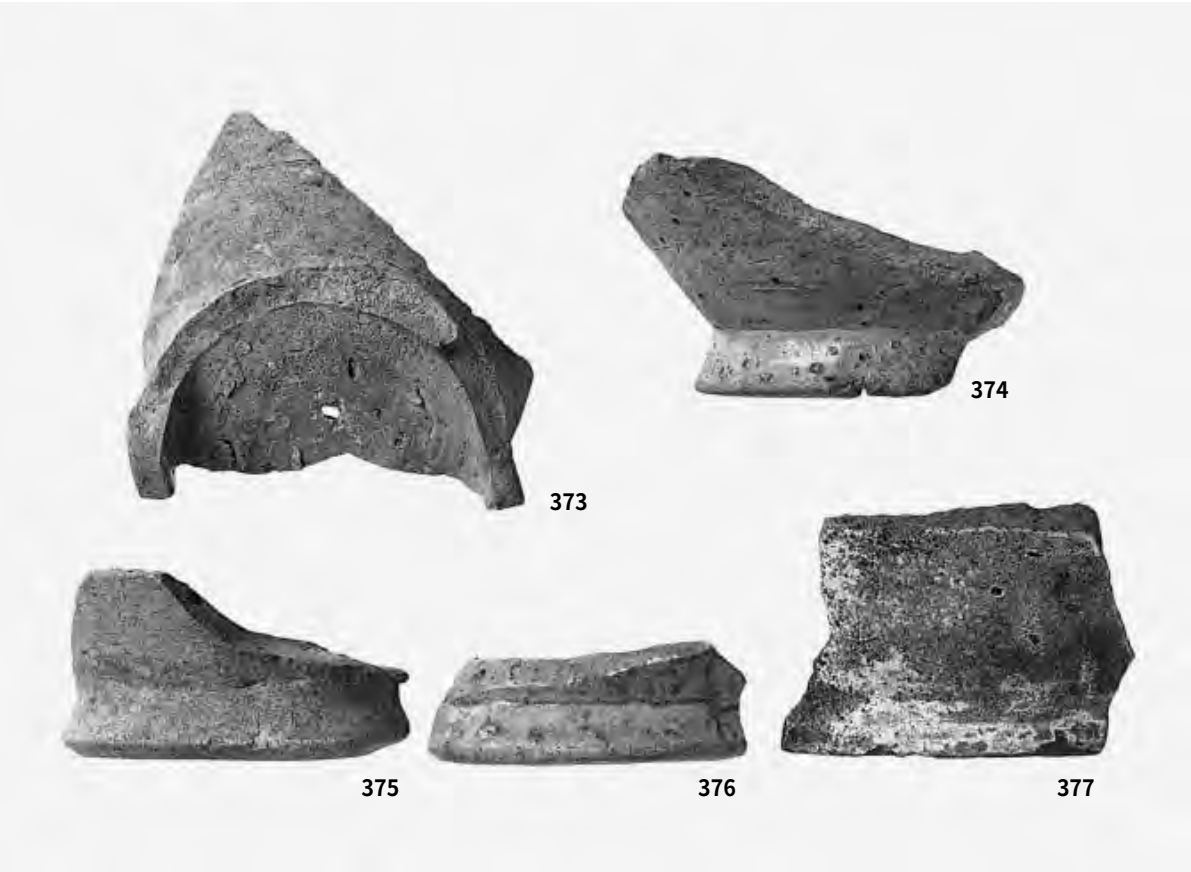


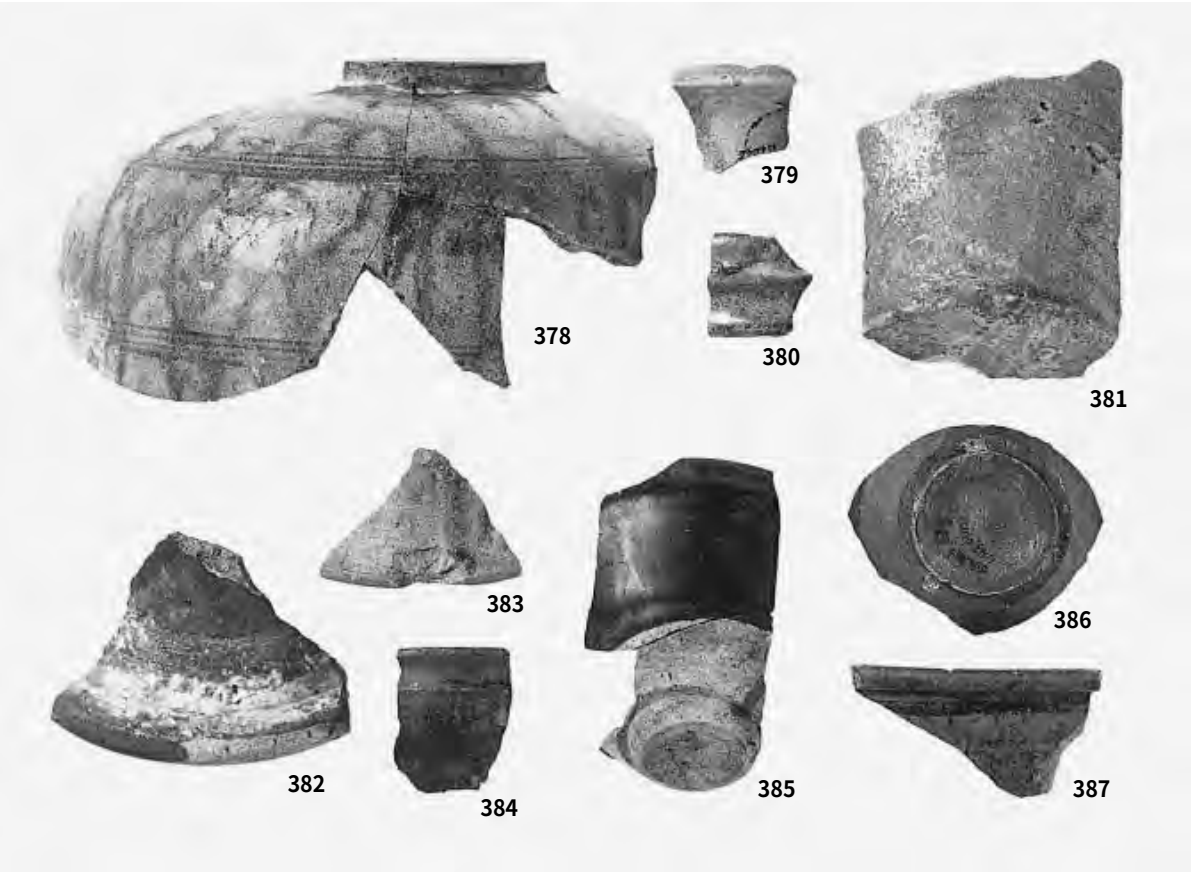
第186図　分布調査採集遺物写真13



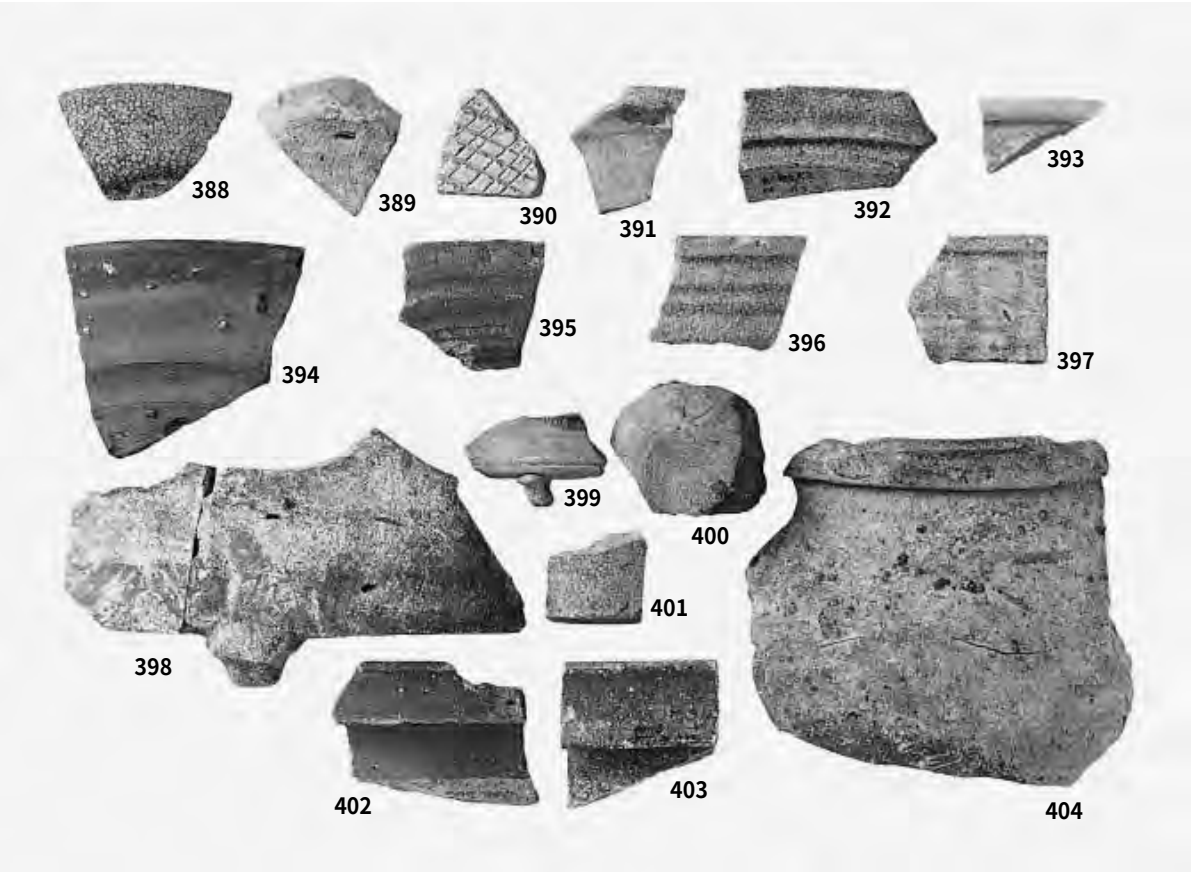


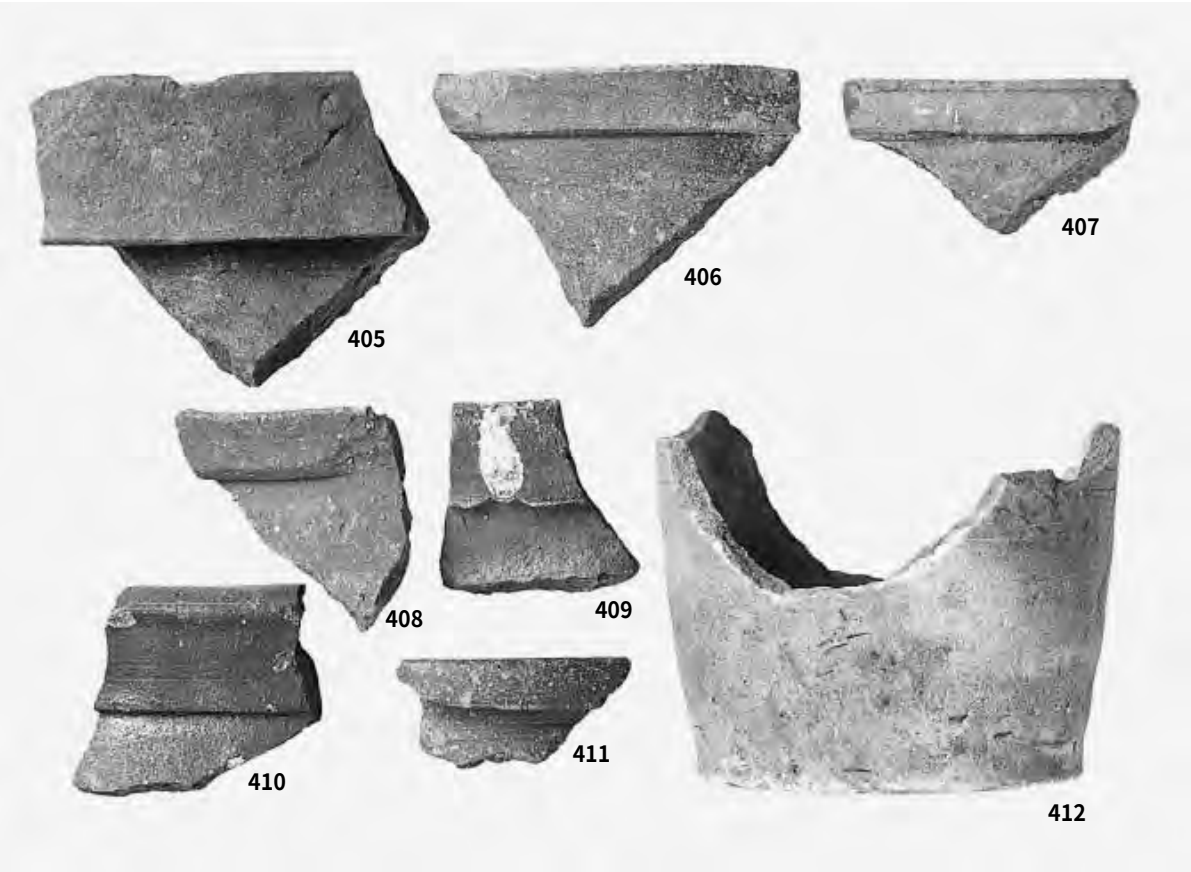
第187図　分布調査採集遺物写真14



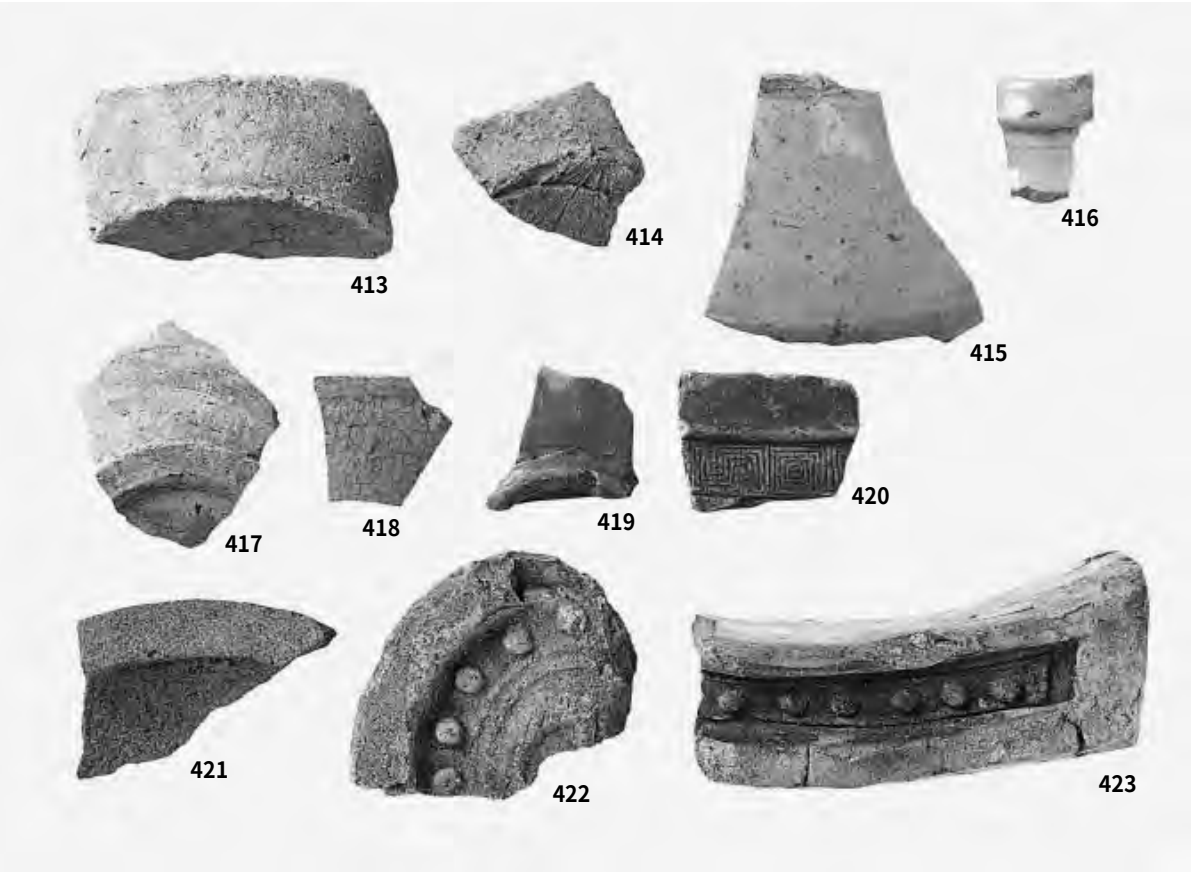


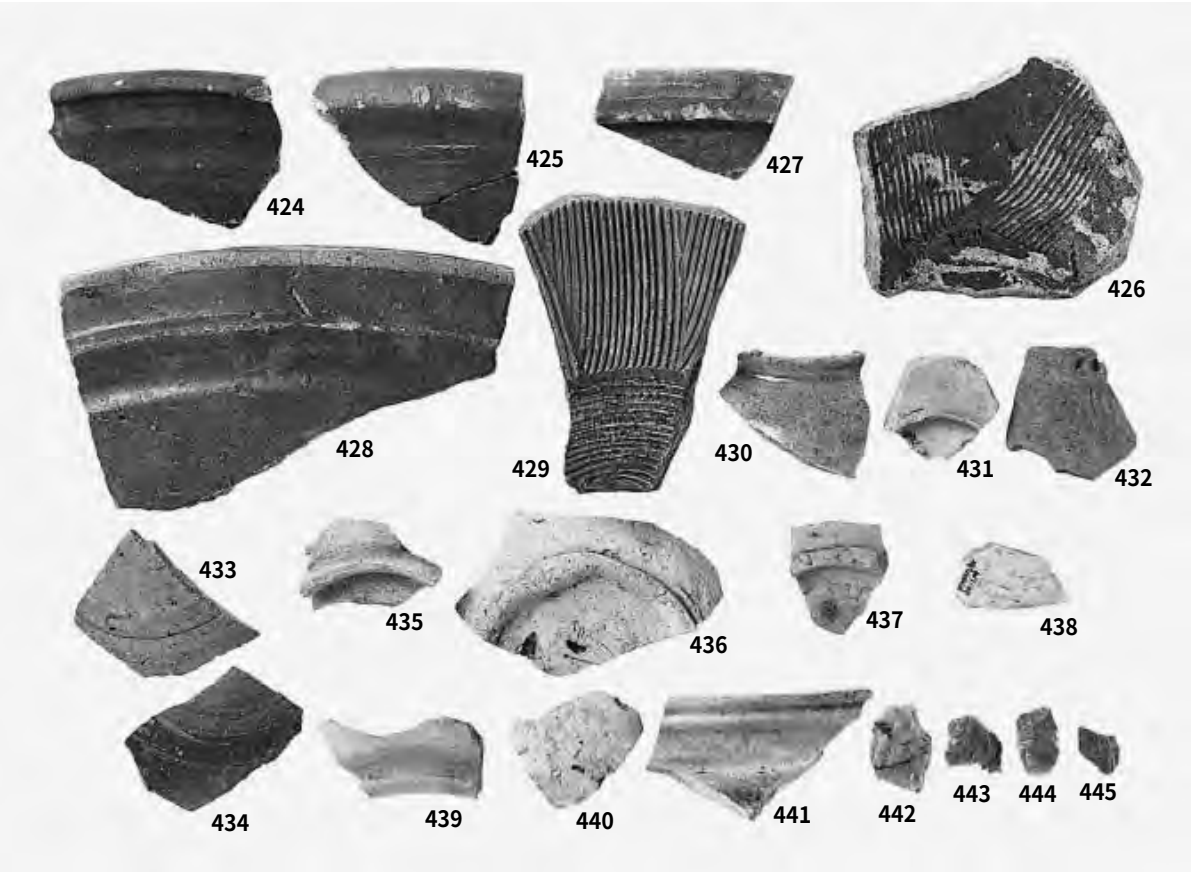
第188図　分布調査採集遺物写真15





第189図　分布調査採集遺物写真16





第190図　分布調査採集遺物写真17

第191図　分布調査採集遺物写真18

養老町埋蔵文化財調査報告書　第４集

養老町遺跡詳細分布調査報告書

2007年３月

編集発行　養老町教育委員会

印　　刷　西濃印刷株式会社